# 中央自動車道長野線
# 埋蔵文化財発掘調査報告書 10

—松本市内　その7・豊科町内—

**南 中 遺 跡**

**北 中 遺 跡**

**北 方 遺 跡**

**上手木戸遺跡**

1989

日本道路公団名古屋建設局
長 野 県 教 育 委 員 会
㈶長野県埋蔵文化財センター

比較文化論研究室

# 中央自動車道長野線
# 埋蔵文化財発掘調査報告書 10

―松本市内　その7・豊科町内―

**南 中 遺 跡**

**北 中 遺 跡**

**北 方 遺 跡**

**上手木戸遺跡**

1989

日本道路公団名古屋建設局
長 野 県 教 育 委 員 会
㈶長野県埋蔵文化財センター

# 序

昭和59年度より62年度にかけて発掘調査を続けてまいりました、中央自動車道長野線用地内松本市内及び豊科町内12遺跡のうち、松本市内南中・北中・北方遺跡と、豊科町内上手木戸遺跡分を、「松本市内その7、豊科町内」として収録し、発刊することになりました。

遺跡は、南の木曽谷との分水嶺から北へ向かい、松本平を縦貫してきた奈良井川と、西の北アルプスに源を発した梓川が合流し、川幅を広げて犀川となる、比較的新しい時期に形成された沖積地帯に立地することになります。中央自動車道長野線に重ね合わせると、松本インターから豊科インターの間に相当します。

松本市内の3遺跡は、合流間近の奈良井川と梓川に挟まれたかたちになりますが、この付近一帯は、特に梓川の流路変更や土砂堆積の影響が大きく、地形形成過程の観察結果からみますと、平安時代の頃まで梓川の流路は網状流となっていて、網目の間に中洲を形成しており、河道が安定するのは、中世末頃ではなかったかと考えられております。このように、比較的不安定な沖積地帯の開発は、網目の間の中洲から始められ、やがて離水の終了する地帯へと広がっていったことが、平安時代の竪穴住居址群や、中世の掘立柱建物址群・火葬墓・柵址・溝、川辺に近づく低地に水田址等を残した北方遺跡で、また、中世後半から近世にかかる墓群や水田址が発見された、北中遺跡の調査からわかってきました。

豊科町内の上手木戸遺跡は、豊科インターの位置に当たり、ここも新しい沖積地帯の一角になります。梓川を境にして広がる前記遺跡群と同様に、ここの開発が中世後半より始められたことが、竪穴住居址・掘立柱建物址・畠址等の発見からわかります。

上記のように、本書で収録した各遺跡は、松本平の新しい沖積地帯開発の状況を、居住域・墓域・生産域のあり方等を通して語りかけており、とかく不足がちな中・近世村落跡資料の補いに資するのではないかと思っております。

最後になりましたが、調査開始より本書発刊に至るまで、記録保存の遂行に深い御理解と御協力を賜りました、日本道路公団名古屋建設局・同松本工事事務所・同豊科工事事務所・長野県高速道局・同松本高速道事務所・同豊科高速道事務所・松本市並びに豊科町当局・松本平農業協同組合・地区被買収組合(者)等の関係各機関、現場や整理作業に従事された多くの方々、発掘調査の指導・助言をいただいた長野県教育委員会文化課並びに、現場調査から本書発刊にこぎつけた埋文センター職員の努力に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成元年3月20日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長　樋口太郎

# 例　言

1　本書は、中央自動車道長野線建設工事に係わる、松本市内・豊科町内12遺跡の内、南中遺跡（EMN）・北中遺跡（EKT）・北方遺跡（EKG）・上手木戸遺跡（EWK）の発掘調査報告書である。

2　本書は、松本市内にかかる遺跡を、古代から中・近世にかけての一連の遺跡群としてとらえ発掘調査を実施した関係から、全遺跡に係わる内容と考察編を1冊に、各遺跡編を6冊に分けて編集し、以下の構成をとる。松本市内その1－総論、松本市内その2－神戸遺跡・上二子遺跡・中二子遺跡、松本市内その3－下神遺跡、松本市内その4－南栗遺跡、松本市内その5－北栗遺跡、松本市内その6－三の宮遺跡、松本市内その7・豊科町内－南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上手木戸遺跡。

3　本書で使用した航空写真は、建設省国土地理院の許可を得て複製したものである。

4　本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図（1：1000）、松本市発行の松本市都市計画図（1：2500）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の2万5千分の1、5万分の1地形図を複製した。

5　本書及び松本市内遺跡報告書に掲載した、実測図の縮尺・表現方法、時代・時期区分、遺物写真縮尺、遺構・遺物の分類基準等は全分冊で統一してあり、その要点は凡例に示してある。

6　本書および松本市内・豊科町内遺跡報告書では、以下の遺構記号を使用している。竪穴住居址－SB、掘立柱建物址－ST、柵址－SA、溝址－SD、土坑－SK、井戸址－SE、鍛冶址－SI、水田址－SL、畑・畠址－SN、自然流路－NR、不明遺構－SX。

7　本書で報告する4遺跡については、既に、当埋文センター発行の『長野県埋蔵文化財ニュース』、『長野県埋蔵文化財センター年報』2～4に調査概要を報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本報告をもって最終的な報告とする。

8　発掘調査、報告書作成にあたり、次の各項目について、各氏に終始ご指導いただいた。
古代集落関係－小笠原好彦、中世集落関係－石井進、竪穴住居址・掘立柱建物址－宮本長二郎、プラントオパール分析－藤原宏志、水田土壌－梅村弘、古代集落・土器－吉岡康暢・桐原健、人骨・獣骨鑑定－西沢寿晃、炭化材鑑定・同定－中島豊志、灰釉陶器－斎藤孝正、美濃須衛窯産須恵器－渡辺博人、条里遺構－井原今朝男・小穴芳実・小穴喜一、輸入陶磁器－森田勉、古瀬戸系陶器－藤澤良祐、近世陶磁器－仲野泰裕、協力機関－松本市教育委員会・松本平農業協同組合・豊科町教育委員会（順不同、敬称略）。

9　発掘調査及び文責等本書刊行に関する分担は巻末に一括掲載してある。

10　参考文献は巻末に一括した。

11　本書で報告した各遺跡の記録及び出土遺物は、㈶長野県埋蔵文化財センターが保管している。

# 凡　　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は、特に断りのある場合を除いて下記のように統一してある。

(1)　遺構実測図

本文挿図　竪穴住居址・掘立柱建物址　1：60　住居址内施設・墓址・土坑　1：40

図　　版　遺構図　1：120

(2)　遺物実測図等

土器・陶磁器　1：4　　文字関係資料　1：3　　墨書文字　1：2　　土器拓影　1：3

金属製品　1：2　　石器・石製品　1：6～2：3　　銭貨拓影　2：3

(3)　遺物写真

土器・陶磁器　2：5　　内耳鍋・常滑系甕　1：4　　中世土器・陶磁器破片　1：2

鉄製品　1：2　　銅製品・銭貨　1：1　　石器・石製品　1：6～2：3

2　遺物実測図の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。

(1)　縄文・弥生土器、石器・・1から通し番号　　(4)　文字関係資料・・・・1から通し番号

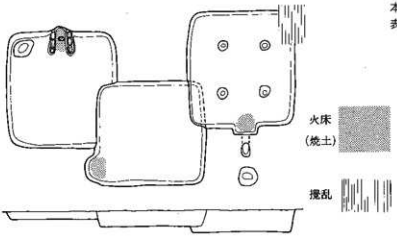
(2)　古代土器・・・・・・・・各遺構毎の通し番号　　(5)　金属製品・・・・・・1から通し番号

(3)　中・近世土器・陶磁器・・1から通し番号　　(6)　古代以降の石製品・・1から通し番号

3　実測図中のスクリントーン等は以下の事項を表わしている。

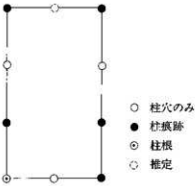
(1)　遺構

ア、竪穴住居址




イ、掘立柱建物址

本文中の模式図は、約1：200で以下の事項を表わしている。




(2)　遺物

ア　古代土器

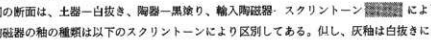
①　実測図の断面は、黒色土器・赤彩土器を含む土師器―白抜き、須恵器・施釉陶器―黒塗りによって区別した。黒色処理・赤彩を施したものはその処理された器面の範囲に、漆・炭化物の付着については以下のスクリントーンにより表現してある。

②　施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

イ　中・近世土器・陶磁器

①　実測図の断面は、土器―白抜き、陶器―黒塗り、輸入陶磁器- スクリントーン　により区別してある。

②　国産陶磁器の釉の種類は以下のスクリントーンにより区別してある。似し、灰釉は白抜きにした。



③ 施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

ウ 金属製品

① 金属製品の形状はX線等の観察にもとづいており、錆・付着物によるふくらみは線の太さをおとして表現してある。

② 断面図は、平面形状観察にさしさわりのない範囲で平面図に組み入れてある。

エ 石器・石製品

① 打製石斧・磨石等の磨耗範囲は ▒▒ で示し、砥石の使用面は、断面図に⟷で示した。

オ 土製品

① 羽口のタール付着・ガラス状発泡範囲を ▒▒▒ 、被熱により変色した範囲を ▒▒ で示した。

4 本書を含む松本市内・豊科町内遺跡報告書における遺構・遺物の分類、時期区分の要点は以下のように統一してあり、ここで扱っていないものについては、各報文中で説明してある。詳細は「松本市内その1」第3章に記述してある。

(1) 時代・時期区分

時代区分は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世、近・現代とし、古代を1～15期、中世を1～2期に時期区分した。

(2) 遺構

ア 竪穴住居址

① 主軸は、カマドの中心を通る竪穴住居址の中軸線をあて、それと直交する中軸線を直交軸とした。ただし、住居址の隅にカマドを有するものや、カマドの見られない住居址については、東西方向の中軸線を主軸とした。住居址の規模は主軸と直交軸方向での床面の差渡しで測り、床面積はその二者の積をあてた。

② 平面形は「方形」「隅丸方形」「長方形1」「隅丸長方形1」「長方形2」「隅丸長方形2」及び「不整形」に分けた。(隅丸)方形は主軸と直交軸方向の長さの差が10パーセント未満のもの、その差が10パーセント以上15パーセント未満のものを(隅丸)長方形1、15パーセント以上のもの(隅丸)長方形2とした。

③ 古代住居址の規模については、時期別に、一辺の長さで以下のような6つの種類に分けた。

| 型 ＼ 時期 | 小 型 | 中 型 1 | 中 型 2 | 大型1 | 大型2 | 超 大 型 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1～4期 | 3m強 | 4m強 | 5m位 | 6m位 | 7m位 | 8m以上 |
| 5～15期 | 3m以下 | 3m～4m弱 | 4m～5m弱 | 5m強 | 6m位 | 7m～8m以上 |

イ 掘立柱建物址

① 棟方向は、南北棟、東西棟と記してあるが、不明なものについては南北棟として記した。

② 規模は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を基本として推定復元し、面積は両者の積により求めた。

③ 柱間寸法は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を求め、最大と最小値について表示した。

④ 掘り方では、平面形については方形、円形に分類し、「方」「円」と表記し、両者の混在するものは「方・円」とした。規模については、長軸の最大値と最小値を表示した。

(3) 遺物

ア 古代土器の器種分類について

① 次ページに示す古代土器器種分類表は、本報告書における土器の器種の呼称を示したものである。報告をおこなう土器のうち、土器の器種分類に当たって出土例が少なく、将来、周辺遺跡の資料をも含め、資料の増加を待って細別名を決定すべきと判断したものについては、ここではあえて細別を行わず、通例の呼称に従っている。

② 器種分類の詳細、器種内の法量等による細別については、総論編で明らかにしている。

**食器**

土師器

杯D
杯E
杯F
椀C
高杯
鉢
椀

杯A
杯C
椀
盤B
皿A
耳皿
鉢A
皿
段皿

黒色土器A

杯A
椀
皿B
蓋
鉢A
盤A
鉢A
耳皿
段皿

黒色土器B

椀
皿B
耳皿
赤彩土器
皿B

軟質須恵器

杯A

須恵器

杯蓋A
杯A
杯C
杯D
椀A
高杯
鉢A

椀蓋
杯身B
杯B
盤
皿B
皿A
鉢B
鉢C

**煮炊具**

土師器

甕A
甕C
甕F

甕B
甕D
甕G

小型甕A
小型甕C

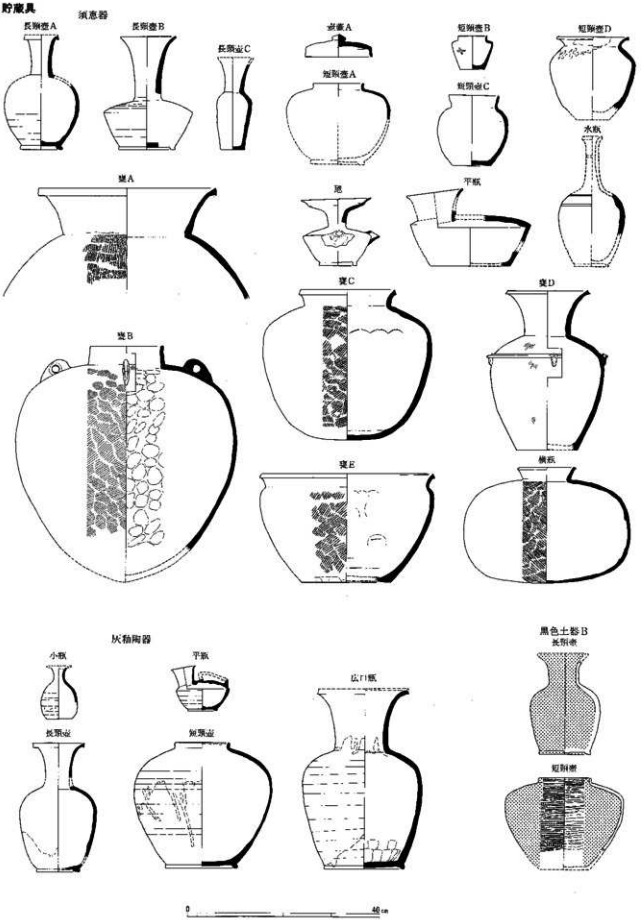
小型甕B
小型甕D
甑A
甑B
甑C

羽釜A
羽釜B
甑D

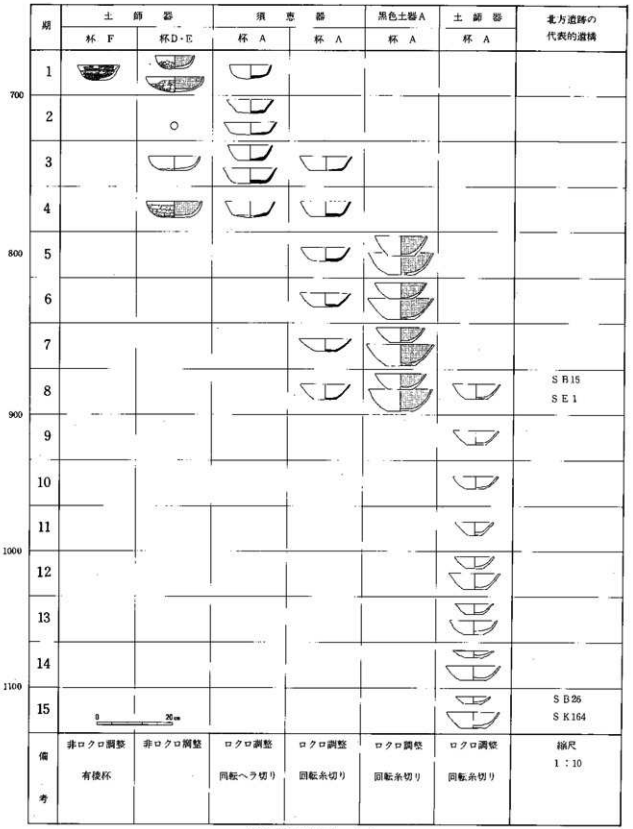
羽恵器
甑

0 40cm

古代土器の器種分類(1)食器・煮炊具




古代土器の器種分類(2)貯蔵具




古代土器時期区分の大略

イ　中世土器・陶磁器の分類

神戸遺跡から上手木戸遺跡を通して、出土した土器・陶磁器の主な器種内の分類と消長表を以下に示した。詳細は総論編で明らかにしている。

①　土師器皿

＜手捏ね成形＝Ⅰ類＞

ⅠＡ１－口径約12.5cm以上、器高約2.5～3.5cmのもの。

２－口径約11.0～12.5cm未満、器高約2.0～3.5cmのもの。

３－口径約10.0～11.0cm未満、器高約2.5～3.5cmのもの。

Ｂ１－口径約9.0～11.0cm、器高約1.5～2.5cm未満のもの。

２－口径約9.0cm以下、器高約1.0～2.0cmのもの。

＜ロクロ成形＝Ⅱ類＞

ⅡＡ　－法量が口径約10.0～12.0cm、器高約2.0cm以上のもの。

Ｂ　－法量が口径約7.0～10.0cm未満、器高約1.0～2.5cmのもの。

②　内耳鍋

Ⅰ　－口縁部を強く「く」状に外反させるもの。

ⅡＡ－口縁部内面に明瞭な１条の工具痕を残すもの。

ⅡＢ－口縁部内面に明瞭な２条の工具痕を残すもの。

ⅡＣ－口縁部内面に明瞭な３条の工具痕を残すもの。

Ⅲ　－口縁部の断面がクランク状に外へ張り出すもの。

③　常滑系の壺・甕類

Ⅰ－頸部を緩く「く」状に反らせ、口縁端部を丸くおさめるもの。

Ⅱ－口縁部断面が「L」状の受口状を呈するもの。

Ⅲ－口縁部断面を「L」状あるいは「N」状をなし、縁帯が頸部に接着しないもの。

Ⅳ－口縁部断面を「N」状をなし、縁帯を頸部に接着させようとしているもの。

Ⅴ－口縁部断面を「N」状をなし、縁帯を頸部に完全に接着させているもの。

④　捏　鉢

Ⅰ－口縁端部をやや細く挽き出し、端部を面取りするもの。

Ⅱ－器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部外面を面取りして尖らせるもの。

Ⅲ－器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部を隅丸方形及び丸くまとめるもの。

Ⅳ－口縁端部から１～４cmくらい下をナデて器壁を薄くし、端部は丸くおさめているもの。

Ⅴ－口縁端部から１～４cmくらい下をナデて器壁を薄くし、端部を角状にして端部中央に浅い溝を入れるもの。

Ⅵ－口縁端部から１～４cmくらい下を強くナデて器壁を薄くし、端部を丸くおさめて中央に溝を入れるもの。

⑤　輸入陶磁器

横田賢次郎・森田勉氏の成果（1978）に負うところが大きく、特に青磁碗についてはそれに従って以下のように分類した。

Ａ－同安窯系碗Ⅰ類。　　Ｇ－龍泉窯系碗Ⅰ－６ａ・ｂ類。

Ｂ－同安窯系碗Ⅱ類。　　Ｈ－龍泉窯系碗Ⅲ－２類。

Ｃ－龍泉窯系碗Ⅰ－１・２・３類。　Ⅰ－龍泉窯系碗Ⅰ－１およびⅢ－１類。

Ｄ－龍泉窯系碗Ⅰ－４類。　　Ｊ－明代の所産で、外面上半に雷文施文のもの。

Ｅ－龍泉窯系碗Ⅰ－５ａ類。　　Ｋ－明代の所産で、外面に片切彫りによる細蓮弁文施文のもの。

Ｆ－龍泉窯系碗Ⅰ－５ｂ・ｃ類。　　Ｌ－明代の所産で、外面に線刻によって細蓮弁文を施すもの。

⑥　古瀬戸系陶器と大窯製品の分類は、藤澤良祐氏(1982･1984、1986)に従い、出茶碗の分類は、斎藤孝正氏(1988)・出口昭二氏（1983）による。

**各形態　消長表**

| | 古代 | 中世1期 | | | 中世2期 | | 近世 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年代 | 12 C | 13 C | 14 C | 15 C | 16 C | 17 C | |
| 土師器 Ⅲ | ⅠA1・2？<br>Ⅰ B1？<br>Ⅰ B 2 | Ⅰ A 3 | | ⅡA<br>ⅡB | ？<br>？ | | |
| 内耳鍋 | | | Ⅰ | ⅡC<br>ⅡB | Ⅲ | | |
| 捏鉢 | Ⅰ | Ⅱ<br>Ⅲ | Ⅳ<br>Ⅴ<br>Ⅵ | | | | |
| 常滑系甕 | Ⅰ<br>Ⅱ | | Ⅲ<br>Ⅳ | Ⅴ | | | |

# 本 文 目 次

序
例言　凡例

**第1章　南中遺跡（EMN）**……1
第1節　遺跡の概観と調査の概要……1
1　遺跡の概観……1
2　調査の概要……1
3　調査の経過……3
第2節　基本層序と微地形……4
1　基本層序……4
2　土層対比……5
3　小地域の地形形成過程……5
第3節　小結……6

**第2章　北中遺跡（EKT）**……7
第1節　遺跡の概観と調査の概要……7
1　遺跡の概観……7
2　調査の概要……7
3　調査の経過……12
第2節　基本層序と微地形……12
1　基本層序……12
2　遺構切込面の微地形……13
第3節　遺構と遺物……14
1　遺構……14
(1)　中世の遺構……14
ア　掘立柱建物址　イ　溝址　ウ　柵址　エ　墓址　オ　土坑　カ　水田址
(2)　近世以降の遺構……23
ア　掘立柱建物址　イ　柵址　ウ　土坑
2　遺物……27
(1)　中世の遺物……27
ア　土器・陶磁器　イ　金属製品　ウ　石製品
(2)　近世以降の遺物……29
ア　土器・陶磁器　イ　金属製品　ウ　石製品　エ　漆器・漆製品
第4節　小結……33

**第3章　北方遺跡（EKG）**……34
第1節　遺跡の概観と調査の概要……34

1　遺跡の概観……34
2　調査の概要……34
3　調査の経過……39
第2節　基本層序と微地形……39
1　基本層序……39
2　遺構切込面の微地形……40
第3節　遺構と遺物……41
1　遺構……41
(1)　古代の遺構……41
ア　竪穴住居址　イ　溝址　ウ　井戸址　エ　墓址　オ　土坑　カ　水田址
キ　小鍛冶址
(2)　中世の遺構……62
ア　掘立柱建物址　イ　溝址　ウ　柵址　エ　墓址　オ　土坑　カ　水田址
2　遺物……74
(1)　古代の遺物……74
ア　土器　イ　文字関係資料　ウ　金属製品　エ　石製品　オ　漆器
(2)　中世の遺物……86
ア　土器・陶磁器　イ　金属製品　ウ　石製品　エ　漆器
(3)　遺構外の遺物……89
ア　金属製品　イ　土製品
第4節　成果と課題……89
1　竪穴住居址の変遷……89
第5節　小結……100

**第4章　上手木戸遺跡（EWK）**……102
第1節　遺跡の概観と調査の概要……102
1　遺跡の概観……102
2　調査の概要……102
3　調査の経過……105
第2節　基本層序と微地形……107
1　基本層序……107
2　遺構切込面の微地形……108
第3節　遺構と遺物……108
1　遺構……108
(1)　中世の遺構……108
ア　竪穴住居址　イ　溝址　ウ　土坑
(2)　近世の遺構……112
ア　掘立柱建物址　イ　溝址　ウ　土坑　エ　畠址　オ　その他の遺構
2　遺物……114
(1)　中世の遺物……114

ア　土器・陶磁器　　イ　金属製品　　ウ　石製品
(2)　近世の遺物……116
ア　土器・陶磁器　　イ　金属製品　　ウ　石製品
第4節　成果と課題……117
1　竪穴住居址について……117
第5節　小結……118

**第5章　結語**……120

参考文献一覧
発掘調査及び執筆等の分担一覧
付表
図版
写真図版（ＰＬ）

## 挿　図　目　次

第1図　松本市北部遺跡分布図
第2図　南中遺跡発掘範囲及びトレンチ配置図
第3図　南中遺跡土層模式図
第4図　北中遺跡発掘範囲及びトレンチ配置図
第5図　北中遺跡グリット配置図
第6図　北中遺跡中世遺構分布図
第7図　北中遺跡近世遺構分布図
第8図　北中遺跡土層概念図
第9図　北中遺跡中世土葬墓（ＳＫ255）
第10図　北中遺跡中世火葬墓
第11図　北中遺跡中世土坑長軸と単軸の関係
第12図　北中遺跡中世土坑
第13図　北中遺跡中世土坑
第14図　北中遺跡中世水田址
第15図　北中遺跡近世土坑長軸と単軸の関係
第16図　北中遺跡近世土坑
第17図　北中遺跡近世土坑
第18図　北方遺跡発掘範囲及びトレンチ配置図
第19図　北方遺跡グリット配置図
第20図　北方遺跡古代遺構分布図
第21図　北方遺跡中世・近世遺構分布図
第22図　北方遺跡土層概念図
第23図　北方遺跡ＳＢ３・30カマド
第24図　北方遺跡ＳＢ４
第25図　北方遺跡ＳＢ11
第26図　北方遺跡ＳＢ12
第27図　北方遺跡ＳＢ14カマド
第28図　北方遺跡ＳＢ15
第29図　北方遺跡ＳＢ15内諸施設
第30図　北方遺跡ＳＢ18
第31図　北方遺跡ＳＢ26
第32図　北方遺跡ＳＢ28カマド
第33図　北方遺跡ＳＢ32カマド
第34図　北方遺跡ＳＥ１
第35図　北方遺跡古代墓址
第36図　北方遺跡古代土坑長軸と単軸の関係
第37図　北方遺跡古代土坑
第38図　北方遺跡古代水田址
第39図　北方遺跡ＳＩ１
第40図　北方遺跡ＳＩ１遺物分布図
第41図　北方遺跡中世掘立柱建物址及び小ピット群分布図
第42図　北方遺跡ＳＤ１
第43図　北方遺跡ＳＤ５断面図
第44図　北方遺跡中世土葬墓
第45図　北方遺跡中世火葬墓
第46図　北方遺跡中世土坑長軸と単軸の関係
第47図　北方遺跡中世土坑
第48図　北方遺跡中世土坑
第49図　北方遺跡中世土坑
第50図　北方遺跡ＳＫ101
第51図　北方遺跡中世水田址
第52図　北方遺跡ＳＢ15出土土器法量分布図
第53図　北方遺跡８期の土師器甕Ｂ・小型甕Ｄの法量分布図
第54図　北方遺跡ＳＫ164出土土師器法量分布図
第55図　北方遺跡墨書文字集成
第56図　北方遺跡古代住居址分布図
第57図　北方遺跡８期の住居址分布図
第58図　北方遺跡８期住居址の規模・平面形
第59図　北方遺跡住居址の主軸模式図
第60図　北方遺跡８期住居址の主軸

第61図　北方遺跡８期住居址のカマド
第62図　北方遺跡諸施設を伴う８期の住居址
第63図　北方遺跡８期住居址出土の食器・煮炊具・貯蔵具の個体別構成比
第64図　北方遺跡８期住居址出土の杯ＡⅡの重量別構成比
第65図　北方遺跡文字関係資料を出土した８期の住居址
第66図　北方遺跡８期住居址出土土器の接合関係
第67図　北方遺跡金属製品・石製品を出土した８期の住居址
第68図　北方遺跡覆土に集石を伴う８期の住居址
第69図　北方遺跡８期第１段階の住居址
第70図　北方遺跡８期第２段階の住居址
第71図　北方遺跡８期第３段階の住居址
第72図　北方遺跡15期の住居址分布図
第73図　北方遺跡白磁・土師器出土分布図
第74図　北方遺跡15期住居址の規模・平面形
第75図　北方遺跡15期住居址の主軸
第76図　北方遺跡15期住居址のカマド
第77図　北方遺跡諸施設を伴う15期の住居址
第78図　北方遺跡金属製品・石製品を出土した15期の住居址
第79図　北方遺跡覆土に集石を伴う15期の住居址
第80図　豊科町内遺跡分布図
第81図　上手木戸遺跡発掘範囲及びトレンチ配置図
第82図　上手木戸遺跡グリット配置図
第83図　上手木戸遺跡中世・近世遺構分布図
第84図　上手木戸遺跡土層概念図
第85図　上手木戸遺跡土層概念図（確認調査部分）
第86図　上手木戸遺跡ＳＢ２
第87図　上手木戸遺跡ＳＢ３
第88図　上手木戸遺跡中世土坑長軸と単軸の関係
第89図　上手木戸遺跡中世土坑
第90図　上手木戸遺跡近世土坑長軸と単軸の関係
第91図　上手木戸遺跡ＳＸ１
第92図　上手木戸遺跡中世土器・陶磁器実測図
第93図　上手木戸遺跡金属製品・石製品実測図
第94図　上手木戸遺跡竪穴住居址周辺遺構分布図
第95図　上手木戸遺跡ＳＢ１
第96図　上手木戸遺跡ＳＢ２
第97図　上手木戸遺跡ＳＢ３

## 挿　表　目　次

第１表　北中遺跡中世土坑形態分類
第２表　北中遺跡ＳＬ１試料１ccあたりのプラント・オパール個数
第３表　北中遺跡ＳＬ１アゼ幅・走向
第４表　北中遺跡ＳＬ１田面の面積・標高・形状
第５表　北中遺跡近世土坑形態分類
第６表　北中遺跡銭貨一覧
第７表　北方遺跡古代土坑形態分類
第８表　北方遺跡ＳＬ１試料１ccあたりのプラント・オパール個数
第９表　北方遺跡ＳＬ１アゼ幅・走向
第10表　北方遺跡ＳＬ１田面の面積・標高・形状
第11表　北方遺跡中世土坑形態分類
第12表　北方遺跡ＳＬ２アゼ幅・走向
第13表　北方遺跡ＳＬ２田面の面積・標高・形状
第14表　北方遺跡ＳＢ４出土土器の構成
第15表　北方遺跡ＳＢ７出土土器の構成
第16表　北方遺跡ＳＢ８出土土器の構成
第17表　北方遺跡ＳＢ11出土土器の構成
第18表　北方遺跡ＳＢ14出土土器の構成
第19表　北方遺跡ＳＢ15出土土器の構成
第20表　北方遺跡ＳＢ28出土土器の構成
第21表　北方遺跡銭貨一覧
第22表　上手木戸遺跡中世土坑形態分類
第23表　上手木戸遺跡近世土坑形態分類

## 付　表　目　次

付表１　北中遺跡掘立柱建物址一覧表
付表２　北中遺跡中・近世土器・陶磁器一覧表
付表３　北方遺跡竪穴住居址一覧表
付表４　北方遺跡掘立柱建物址一覧表
付表５　北方遺跡遺構別古代土器一覧表
付表６　北方遺跡墨書土器・刻書土器一覧表
付表７　北方遺跡転用硯一覧表
付表８　北方遺跡中・近世土器・陶磁器一覧表
付表９　上手木戸遺跡掘立柱建物址一覧表
付表10　上手木戸遺跡中・近世土器・陶磁器一覧表

## 図 版 目 次


図版1　北中遺跡　遺構図割付図
図版2　北中遺跡　遺構図
図版3　北中遺跡　遺構図
図版4　北中遺跡　遺構図
図版5　北中遺跡　遺構図
図版6　北中遺跡　遺構図
図版7　北中遺跡　遺構図
図版8　北中遺跡　中世土器・陶磁器実測図
金属製品実測図
図版9　北中遺跡　中世石製品実測図
図版10　北中遺跡　近世土器・陶磁器実測図
図版11　北中遺跡　近世土器・陶磁器実測図
図版12　北中遺跡　近世金属製品・石製品実測図
図版13　北方遺跡　遺構図割付図
図版14　北方遺跡　古代遺構図
図版15　北方遺跡　古代遺構図
図版16　北方遺跡　古代遺構図
図版17　北方遺跡　古代遺構図
図版18　北方遺跡　古代遺構図
図版19　北方遺跡　古代遺構図
図版20　北方遺跡　中世遺構図
図版21　北方遺跡　中世遺構図
図版22　北方遺跡　中世遺構図
図版23　北方遺跡　中世遺構図
図版24　北方遺跡　中世遺構図
図版25　北方遺跡　中世遺構図
図版26　北方遺跡　中世遺構図
図版27　北方遺跡　中世遺構図
図版28　北方遺跡　中世遺構図
図版29　北方遺跡　中世遺構図
図版30　北方遺跡　中世遺構図
図版31　北方遺跡　中世遺構図
図版32　北方遺跡　古代土器実測図
図版33　北方遺跡　古代土器実測図
図版34　北方遺跡　古代土器実測図
図版35　北方遺跡　古代土器実測図
図版36　北方遺跡　古代土器実測図
図版37　北方遺跡　古代土器実測図
図版38　北方遺跡　古代土器実測図
図版39　北方遺跡　古代土器実測図
図版40　北方遺跡　古代土器実測図
図版41　北方遺跡　古代土器実測図
図版42　北方遺跡　古代土器実測図
図版43　北方遺跡　古代土器実測図
図版44　北方遺跡　古代土器実測図
図版45　北方遺跡　古代土器実測図
図版46　北方遺跡　古代土器実測図
図版47　北方遺跡　古代土器実測図
図版48　北方遺跡　古代土器実測図
図版49　北方遺跡　古代土器実測図
図版50　北方遺跡　古代文字関係資料
図版51　北方遺跡　古代文字関係資料
図版52　北方遺跡　古代金属製品実測図
図版53　北方遺跡　古代金属製品，石製品実測図
図版54　北方遺跡　古代石製品，土製品実測図
図版55　北方遺跡　中世土器・陶磁器実測図
図版56　北方遺跡　中世及び遺構外金属製品・石製品・土製品実測図
図版57　上手木戸遺跡　遺構図割付図
図版58　上手木戸遺跡　遺構図
図版59　上手木戸遺跡　遺構図
図版60　上手木戸遺跡　遺構図


## 写 真 図 版 目 次


PL1　松本市北部・豊科町航空写真
PL2　南中遺跡近景・トレンチ
PL3　北中遺跡遠景・中世小ピット群・土葬墓
PL4　北中遺跡中世火葬墓・土坑
PL5　北中遺跡中世土坑・水田址
PL6　北中遺跡近世掘立柱建物址・小ピット群・柵址
PL7　北中遺跡近世土坑
PL8　北中遺跡中世土器・陶磁器
PL9　北中遺跡中世金属製品・石製品
PL10　北中遺跡近世土器・陶磁器・土製品
PL11　北中遺跡近世土器・陶磁器
PL12　北中遺跡近世土器・陶磁器・金属製品・石製品

PL13　北方遺跡遠景・古代住居址群
PL14　北方遺跡古代住居址
PL15　北方遺跡古代住居址のカマド・カマドのない住居址
PL16　北方遺跡古代住居址遺物出土状況
PL17　北方遺跡古代住居址 SB15及び諸施設
PL18　北方遺跡古代住居址・溝址・井戸址
PL19　北方遺跡古代墓址・土坑・小鍛冶址
PL20　北方遺跡中世掘立柱建物址
PL21　北方遺跡中世墓址・土坑
PL22　北方遺跡古代・中世水田址
PL23　北方遺跡古代土器 SB 4
PL24　北方遺跡古代土器 SB 7
PL25　北方遺跡古代土器 SB11
PL26　北方遺跡古代土器 SB11・13
PL27　北方遺跡古代土器 SB14
PL28　北方遺跡古代土器 SB15
PL29　北方遺跡古代土器 SB15
PL30　北方遺跡古代土器 SB26・28
PL31　北方遺跡古代土器 SB32・SK133・SK136
PL32　北方遺跡古代土器 SK164
PL33　北方遺跡古代土器
PL34　北方遺跡白磁・墨書土器
PL35　北方遺跡古代金属製品
PL36　北方遺跡古代金属製品・石製品・土製品
PL37　北方遺跡中世土器・陶磁器
PL38　北方遺跡中世・遺構外金属製品・石製品・土製品
PL39　上手木戸遺跡遠景・近景・中世竪穴住居址
PL40　上手木戸遺跡中世竪穴住居址
PL41　上手木戸遺跡中世溝址・土坑・近世掘立柱建物址・溝址・鼻址
PL42　上手木戸遺跡中世土器・陶磁器
PL43　上手木戸遺跡中世・近世金属製品・石製品

# 第１章　南中遺跡

## 第１節　遺跡の概観と調査の概要

### １　遺跡の概観

本遺跡は松本市の北端部、島内南中及び広田地籍に所在し、国道147号線、JR大糸線を含む一帯が遺跡の範囲である。北東流する梓川、北流する奈良井川、東流する薄木川に挟まれた三角地帯にあり、本遺跡は古梓川によって形成された氾濫原上に位置する。標高は584m～590m（中央自動車道長野線本線内では584～587m）である。

また、本遺跡は島内遺跡群の一つとして知られており、以前から水田等の耕作中に土師器、須恵器などの出土が確認されていた。なお、島内遺跡群には、本書に掲載されている北中、北方遺跡の他、高松遺跡、上平瀬遺跡がある。いずれも古代、中世を中心とする遺跡とされているが、発掘調査によってその詳細が明らかになっているのは北中、北方、上平瀬遺跡の三遺跡である。

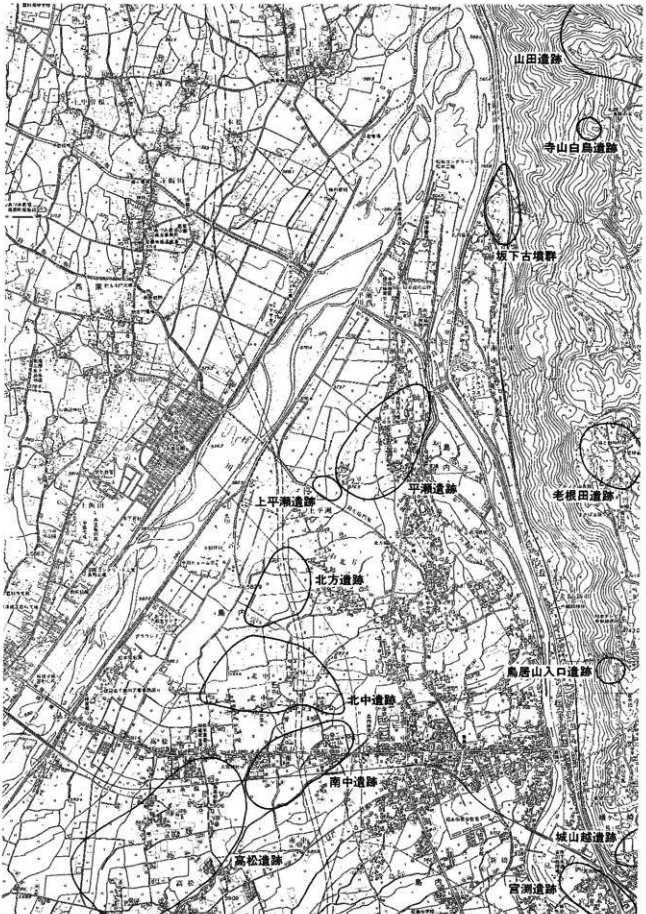
本遺跡は、昭和58年に遺跡東部が、昭和59年には遺跡の南西部が県営圃場整備事業に伴って松本市教育委員会（以下松本市教委）によって調査が実施されている（第２図）。そのうち、昭和59年度の調査では古代、中世の遺物とともに「溝」、「土壙状の落ち込み」が検出されている。しかしながら、いずれも生活に即したものではないことが報告されており、本遺跡の詳細が把握されたわけではなかった。したがって、広範囲にわたる面積を対象とする今回の調査に期待するところは大であった。

### ２　調査の概要

調査は用地未買収の部分が残っていたため２年次にわたり、調査期間は昭和60年11月８～15日、昭和61年６月４・５日である。

昭和60年度の調査は、11,500㎡を対象として調査研究員２名があたった。松本市教委の調査成果をもとに、まず第一に、遺構の有無及び土層の堆積状況を確認する目的で、中央自動車道長野線（以下中央道）の路線方向及びそれに直交する方向に、幅２ｍのトレンチを計11本、延べ520mにわたり設定した（第２図）。基盤と思われる砂礫層まで掘り下げたが、遺構は検出されず、遺物も３トレンチから土師器片（ＩＡ層）が１点、９トレンチから土師器片（ＩＢ層）、青磁片（ＩＡ層）が１点出土しただけである。これらの遺物はいずれもローリングを受けて著しく磨滅しており、当地区内で使用されたものとは考えられないものであった。したがって、昭和60年度の調査区においては、遺構の存在はみられず、単なる遺物散布地としてしか捉えられなかったため、トレンチ調査のみで調査を終了した。

昭和61年度の調査は、JR大糸線と国道147号線に挟まれた前年度の残り2,300㎡を対象として、調査研究員２名があたった。前年度に引き続き遺構の有無、土層の堆積状況の確認を目的として、中央道の路線方向及びそれに直交する方向に、幅２ｍのトレンチを計６本、延べ112.5mにわたり設定した（第２図）。前年度同様、基底の礫層まで掘り下げたが、遺構、遺物とも検出されなかった。したがって、中央道本線内には遺構の存在は認められず、単なる、それも極めて希薄な遺物散布地としてしか捉えられない結果に終わった。

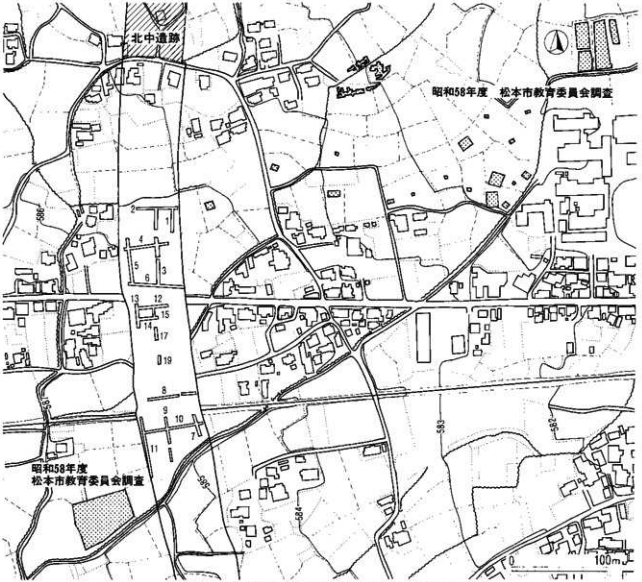



第1図　松本市北部遺跡分布図(1：20,000)

なお、測量は、トレンチ配置と土層図のみのため、測量基準点からの距離と方向の計測で十分と判断した。測量基準点及びレベル原点はトレンチに近い工事用センター杭を使用した。使用した杭は以下のとおりである。

STA268＋00（　X＝27162.5012　Y＝－50369.6931　標高　586.596m　）
STA268＋80（　X＝27241.6308　Y＝－50381.3971　標高　586.029m　）
STA269＋60（　X＝27321.2719　Y＝－50388.8662　標高　585.662m　）

整理は、昭和60年12月より断続的に行った。この間、『㈶長野県埋蔵文化財センター年報』2に昭和60年度調査分を、『同年報』3に61年度調査分の概要を報告した。本格的な整理とまとめは昭和63年7月より行い、本報告に至った。




第2図　南中遺跡発掘範囲及びトレンチ配置図(1：4,000)

## 3　調査の経過

**昭和60年度**

11月8日　大糸線以南にトレンチを設定して調査開始。基盤の礫層まで掘り下げ(重機使用)。9トレンチからローリングを受けた土師器片、青磁片（各1点）が出土。

11月11日　ＪＲ大糸線、国道147号線の中間部にトレンチを設定。基盤の礫層まで掘り下げ(重機使用)。

11月13日　土層図作成。写真撮影。

11月15日　調査終了。

12月　図面、写真、所見の整理。

2月　年報２の原稿執筆。

**昭和61年度**

6月4日　12～15トレンチを設定して調査を開始。
　　基底の礫層まで掘り下げ（重機使用）。

6月5日　17～19トレンチを設定。基底の礫層まで掘り下げ（重機使用）。土層図作成、写真撮影、調査終了。

6月　図面、写真、所見の整理。

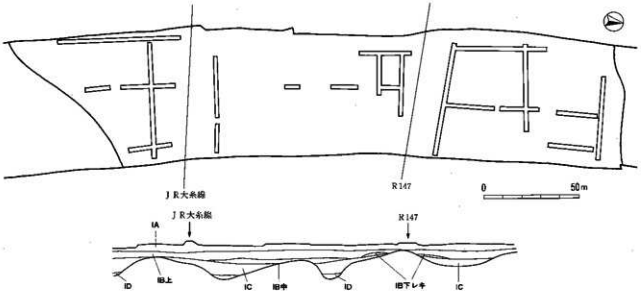
2月　年報３の原稿執筆。

**昭和63年度**

7月　報告書に向けての所見整理、図版作成、原稿執筆。

## 第２節　基本層序と地形形成

### １.基本層序




第３図　南中遺跡　上層模式図

**ＩＡ層**　淡黄色含礫泥層。南中遺跡に見られる自然堆積土層の最上位にあり、しばしば盛土や水田客土を上位にのせる。全面に分布し、層厚は20～30cm、南東側へ傾斜して堆積している。小礫・風化礫を塊状に含み、基質は細砂から成り粘性がほとんどない。礫の含有率は地点によって若干の変化が見られ、北西側へ高く南東側へ低くなる傾向にある。

上部は、南東部の低い一帯を除いて水田土壌化しており、下部が鉄の集積層となっている。

**ＩＢ層**　ＩＣ層の全面をおおい、ＩＡ層におおわれる。３枚の泥流ユニットが識別でき、これらを単層扱いとして以下に記す。

上部層は、灰黄褐色の含礫泥層で、小礫・風化礫を塊状に含みシルトの基質から成る。基質の淘汰は悪く、細砂を不規則に混入し、風化した黒雲母を散点させる。ＩＡ層直下のほぼ全面にわたって認めることができ、層厚は０～40cm、北西側のＩＣ層が高い地点では欠如し、南東側の低い地点では厚く堆積するが一部ではＩＡ層に削られて薄くなっている。

中部層は、にぶい黄色の含礫泥層で、小礫・風化礫を塊状に含みシルトの基質から成る。基質は粘質で可塑性がある。南東側の地表下80～90cmの低い地点で上部層直下に認められ、高い地点では欠如する。層厚は15～20cmである。

下部層は、にぶい黄橙色の含礫泥層で、少量の小礫を塊状に含みシルトの基質から成る。基質には、ＩＣ層からとりこんだと思われる明黄褐色の細砂を混入する。層厚は10～20cmで、直上の中部層と同様に南

東側の低い地点のみ分布する。

**ＩＣ層**　明黄褐色細砂層。Ⅱ層による凹地を埋積し、上面は波長の長い起状を持つ。流路内堆積物で淘汰がよく、礫は混入しない。ほぼ全面にわたって分布し、北西側のⅡ層の高い地点付近ではレンズ状の砂礫層を挟む。レンズ状の砂礫層は扁平でほとんどは南東側へ傾斜している。層厚は０～30cmで、Ⅱ層凸部では欠如し凹部では厚く堆積する。

上面は部分的に暗褐色に腐植化しており、こうした箇所はⅡ層凸部周辺に限定される。

**ＩＤ層**　灰黄褐色シルト層。淘汰がきわめて良く、Ⅱ層凹部の底に層厚10～20cmで堆積している。全体に黒泥土化しており、後背湿地様の環境下にあったことを暗示している。

**Ⅱ層**　礫層。本遺跡の基底を構成し、上面は振幅の大きい波状の凹凸を持つ。分級の程度の低い大～小礫から成り、基質は泥・細砂・極粗砂と変化に富む。Ⅱ層頂部の軸方向は北東から南西方向と推定され、斜面の傾斜は他の遺跡に比べてかなり急である。

## ２.土層対比

本遺跡は、南西から北東方向に延びる微高地の南東斜面に位置し、北中遺跡南部付近にある基底の礫層の高まりを境に、北西側（北中・北方遺跡）と土層の堆積状況が大きく異なっている。したがって、被覆土層を連続性によって北西側と直接対比することが不可能で、かつ、遺構・遺物による年代対比も不可能であるので、以下に堆積環境の推定から北西側と対比した経緯を述べる。

①本遺跡南側は落差１ｍを越える沖積段丘崖となっており、若い地形であることを示している。

②上部の含礫泥層の各ユニットは風化礫を含む泥流堆積物で、北中・北方遺跡のＩＣ層以上の各層がやはり風化礫を含み泥流堆積物であることから、ほぼ対比が可能と思われる。また、本遺跡の泥流ユニット中の最上位のユニットの基質が粗粒で広く分布し、以下のユニットの基質が細粒でより狭く分布する傾向が、北中・北方遺跡のＩＡ層からＩＣ層にかけてのあり方に一致しており、両者の対比が層相・分布から支持される。

③基底の礫層直上のシルト層は、黒泥土化していることから後背湿地様の静寂な環境下に長期間あったことを示している。これに対し、上位の細砂層はレンズ状の砂礫層を挟む流路内堆積物で、本遺跡が静寂な環境から水位の上昇により、河岸または河道内に転じたことを物語っている。北中・北方遺跡では、ＩＤ層上面が離水してしばらく植生があったり集落が営まれたりした安定期間があり、その後ＩＣ層が厚く堆積する河川活動の活発な段階を迎えており、古梓川の水面上昇も予想されている。ここで、Ⅱ層を含めた河川の活動状況を整理すると、きわめて活発→長期の静寂（水位低下）→活発（水位上昇）の傾向が双方の下位堆積物からうかがえる。そしてこの傾向は、その地点の河川に対する位置―河川の流路変化―にかかわる要因ではなく、よりグローバルな地形・気候変化に関する要因に支配されたものと理解される（総論編参照）。

以上の考察から、本遺跡の堆積物を北中・北方遺跡の層序と対比し、基底の礫層＝Ⅱ層、シルト層＝ＩＤ層、細砂層＝ＩＣ層、細粒基質の含礫泥質＝ＩＢ層、粗粒基質の含礫泥層＝ＩＡ層とした。したがって推定される堆積期間は、Ⅱ層とＩＤ層が平安時代中頃以前、ＩＣ層が中世初頭から中頃、ＩＢ層とＩＡ層が中世末以降と思われる（本書第２章第２節、第３章第２節参照）。

## ３.小地域の地形形成過程

**平安時代末期まで**　古梓川の膨大な流速と運搬量を背景に網状流が流下し、幅広い流路内に多数の礫堆が形成された。礫堆はしばしば位置や規模を変え一定していなかったと思われるが、やがて河床勾配が緩や

かになるにつれて流速が減衰し、礫堆群の中央にあたる北中遺跡南部付近を中心に島が出現した。流速の減衰はさらに進行し、島の両側にシルトを堆積して次第に島を拡大させていった。

島の北西半（北中・北方遺跡）では広い範囲がほぼ完全に離水し、居住可能な安定地域が出現したのに対し、南東側（南中遺跡）では後背湿地様の静寂な環境下にあったものの、多雨期にはしばしば水をかぶる居住には適さない地域であったろうと思われる。これは、古梓川の分流のうち大型なもののひとつが本遺跡南方300m付近を流れていたこと（総論編参照）と、基底の礫層の上面は落差の大きい凸凹をもち、その間隔が短かったことに起因すると考えられる。

**中世初頭から中頃**　中世に入る頃から水位が上昇を始め、河川活動が活発化した。南方の分流は拡大し、本遺跡は再び流路内に位置することとなった。細砂が前地形の凹地を埋め、増水時には砂礫を残し、中世の中頃には河道が本遺跡南側に固定したと考えられる。河道の固定に伴い、増水に対して安全な高い箇所に植生が現れ始め（ＩＣ層上面の腐植層形成）、全面が離水傾向にあった。沖積段丘崖形成の初源はこの時期に求められると思われる。

**中世末期以降**　この時期、本遺跡は多くの泥流に見舞われている。堆積したものだけで４ユニットが識別され、それぞれ前地形の凹地を堆積してある。つまり、他の地域がほとんど安定していたのに対し、本遺跡ではまだ地形形成過程にあることが大きな特徴である。これは南側に流れる古梓川の分流、さらには、南方約1.5kmを東流する樽木川が、ごく新しい時代まで流速と運搬量が膨大であったことを暗示している。

## 第3節　小　　結

中央道にかかる今回の調査区からは、遺構は全く検出されず、遺物もローリングを受けた土師器、青磁の小破片のみの出土であった。また、松本市教育委員会の昭和59年度の調査区では、「溝」、「土壙状の落ち込み」が検出され、遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器、中世陶磁器の小破片の出土が報告され、さらに、「その溝も自然の流れで遺物も流されてきたものと思われる」という考察に及んでいる。

これらのことは、今回試みた土層の堆積状況からの地形形成過程の復元によって裏付けられたといえよう。即ち、中世末期またはそれ以降まで、まだ、この地が地形形成の途上であり、居住可能な安定した地形になることはなかったと考察されるからである。

今回の調査によって、地形復元の貴重なデーターが得られたことは評価に値する。それによって、樽木川を中心とした古梓川の氾濫原の北限を、ある程度おさえることができたと考えられる。また、本遺跡についていえば、中央道にかかる調査区及びその周辺には、居住域である集落などの存在はなく、単なる遺物散布地として捉えられる。さらに、南中遺跡に対する評価も単なる遺物散布地とするか、あるいは遺跡の中心部が他に存在するか、今後の調査研究に期待するところである。

# 第２章　北中遺跡

## 第１節　遺跡の概観と調査の概要

### １　遺跡の概観

本遺跡は松本市の北端、島内北中地籍ほかに所在する。遺跡の範囲は、現北中集落を含む水田地帯である。前掲南中遺跡の北隣にあり、古梓川によって形成された中洲性の微高地上に位置し、標高は582～587ｍ（中央道本線内では583～584ｍ）である。

また、島内遺跡群の一つであり、昭和58年には遺跡東部が、昭和61年には遺跡の北西部が県営圃場整備事業に伴って、松本市教育委員会によって調査が実施されている（第４図）。昭和58年度の調査では、約60×30ｍにおよぶ「集石」と墓址が検出されている。いずれも近世の所産と考えられ、「集石」については「堂の敷地の範囲を示すために積まれたもの」と解釈されている。その「集石」に囲まれた部分は、現在でも墓地として利用されている。昭和61年度の調査では、中世以降の遺構と遺物が中心となり、遺構では、掘立柱建物址５棟、溝址１条、多数の土坑・ピットの他、竪穴住居址２軒が検出されている。土坑の中には、墓址と思われるものが数多くみられる。遺物は、土器・陶磁器では青磁・白磁・中世陶器が主体であり、金属製品の中には、副葬品として鉄などが検出されている。

中央道建設に伴う今回の調査は、昭和61年度の松本市教委の調査よりも先行するもので、調査以前に充分な情報を得られるという状態ではなかった。遺跡の範囲（調査範囲）についても、本遺跡の北隣に位置する北方遺跡の調査所見（当埋文センター）から、北側にさらに広がることが指摘されていた。そこで、県教育委員会文化課が試掘調査を行ったところ、北方遺跡と同様な水田土壌が耕土下約50cmのところで検出され、遺跡の範囲が北へ広がることが確認された。このような状況の中で、松本平南西部から連綿と続く古代・中世集落群内での北中遺跡の性格を含めた位置づけを明確にすること、周辺遺跡との関係から沖積地における古代・中世の開発状況を復元することなどを課題として、調査に臨んだ。

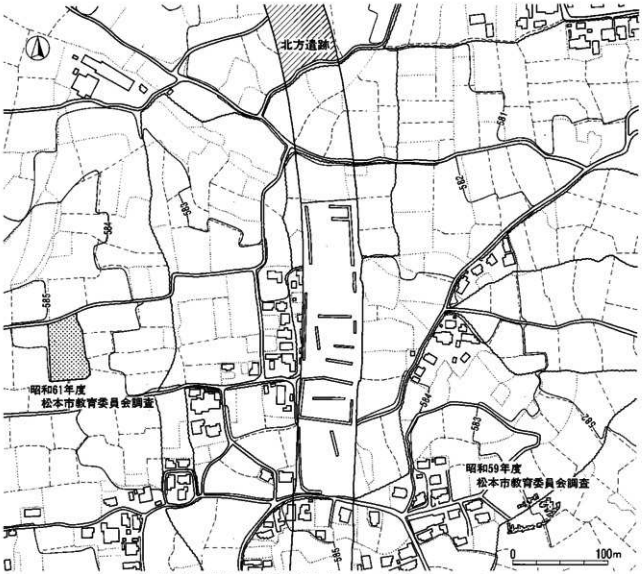
### ２　調査の概要

調査は16,760㎡を対象とし、昭和61年度中に調査終了という計画であったが、調査範囲内にある大日堂の移築が進まなかったため、２年次にわたることとなった。調査期間は昭和61年９月11日～同年12月２日、昭和62年４月６日～同月20日である。

昭和61年度の調査面積は11,865㎡で、調査研究員５名、調査員１名がそれにあたった。道路、家屋の移転などといった残件の関係から、南からＡ～Ｅ地区と６地区に分割・仮称し、調査を進めた。遺構・遺物包含層の有無、土層の堆積状況を確認する目的で、各地区とも初めにトレンチ調査を行い、遺構が検出された場合、あるいはその可能性が高いと思われる場合は随時拡張し、本格的な調査を進めた。

Ａ地区：最も遺構数の多い地区で、中世、近世～近代の二つの時期の遺構・遺物が検出された。ただし、同一面の調査だったため、遺構の時期判定は困難を極め、判別しきれない遺構も数多く存在した。遺構では土坑が主体を占め、他に中世の火葬墓等がある。

Ｂ地区：トレンチ調査の際に遺構の存在が予想されたため拡張したが、遺構は検出されなかった。




第4図　北中遺跡発掘範囲及びトレンチ配置図(1：4,000)

C地区：トレンチ調査のみで調査を終了した。断面観察によって、数条の自然流路を確認した。

D地区：トレンチ拡張後、火葬墓2基、土坑1基等が検出された。極めて遺構分布の希薄な地区である。

E地区：水田土壌が畦畔を伴って検出され、水田址と認定した。また、プラント・オパール分析の試料採取も行い、その結果からも水田址の蓋然性はさらに高まった。

以上、昭和61年度の調査では、遺構空白域を挟んで南に遺構の集中域、北に生産址域というように区分され、それぞれが微地形の状況、即ち離水域、冠水域というような、水面との比高差などに大きく規制されていることが理解される。

昭和62年度の調査面積は895m²で、調査研究員2名がそれにあたった。前年度の調査結果から、土層堆積状況確認のためのトレンチを入れた後に全面調査へと移行した。遺構・遺物の時期、在り方等は前年度と同様な傾向を示すものであった。

2年次にわたる調査で検出された遺構は以下のとおりである。なお、遺構の時期を判断するにあたっては、遺構から時期を認定できる遺物の出土が少ないため、整理作業の段階で、『新版　標準土色帖』を用いて遺構の覆土を分類し、出土遺物・基調となる土層・遺構の位置関係等を考え合わせ、遺構の時期を充てていった。

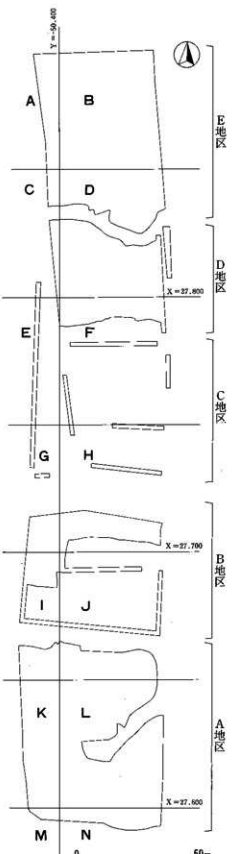
中世：掘立柱建物址（小ピット群）2ケ所、溝址1条、柵址1条、墓址9基、土坑84基、水田址1ケ所

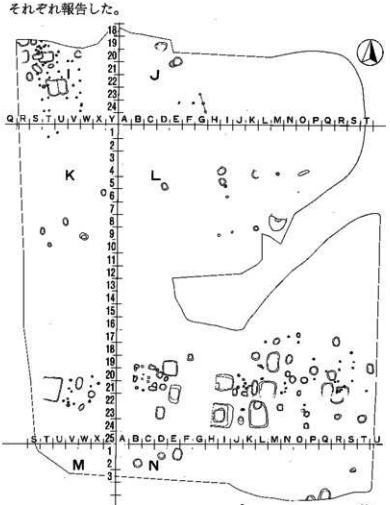
近世：掘立柱建物址１基、柵址１条、土坑110基

遺物は、中世の土器・陶磁器では古瀬戸系陶器が主体を占め、近世の土器・陶磁器では産地不明を除いて、５割が瀬戸・美濃系陶器である。金属製品では、基址が多いこともあって銭貨の出土が多いほか、銅製の簪なども出土している。

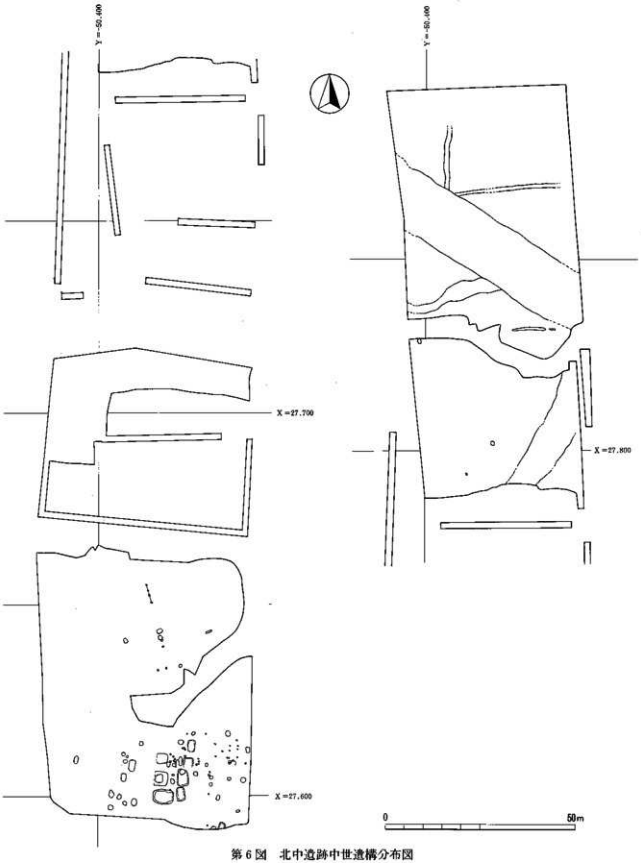
測量は、北方遺跡（当埋文センター調査）の測量基準点（X＝28,000、Y＝−50,400）を基準として、50m区画の大地区の設定を業者に委託した。トレンチを拡張して面的な調査を実施した地区では、さらに８×８m及び８×２mの中地区を基本として、遺構の実測、遺物の取り上げを行った。遺構の測量は遺り方測量を行い、遺物の取り上げは遺構ごと・層位ごとに取り上げた。水田址・包含層出土の遺物は、中地区ごと・層位ごとに取り上げた。

図面・写真・遺物・所見などの整理は、一部発掘作業と並行しながら昭和61年11月から、断続的に開始された。報告書に向けての図版作成・原稿執筆などを含めた本格的な整理とまとめは、昭和62年５月から行い、本報告に至った。この間、昭和61年度調査の概要を『勝長野県埋蔵文化財センター年報』３、『長野県埋蔵文化財ニュース』No.19に、昭和62年度調査の概要を『同年報』４に、それぞれ報告した。

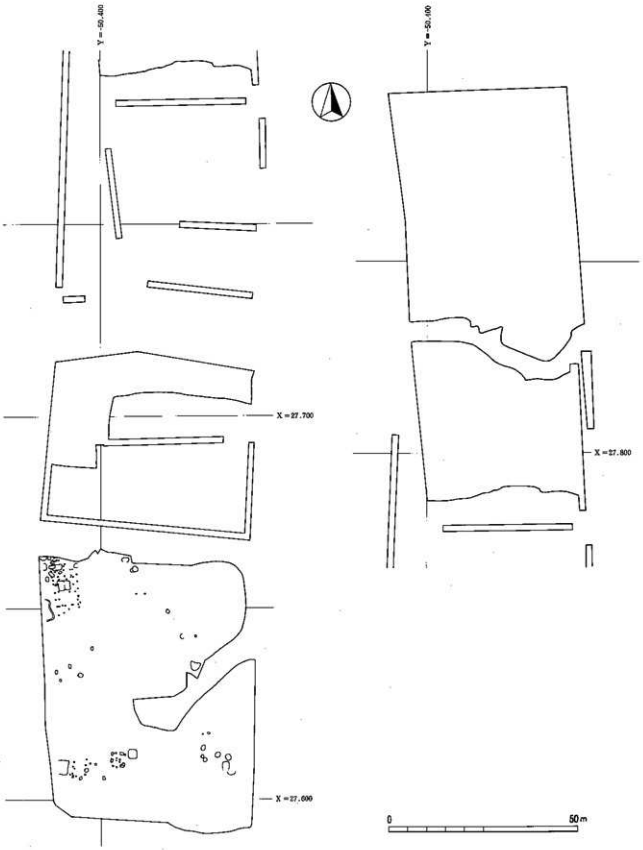



第５図　北中遺跡グリッド配置図（１：600）




第6図　北中遺跡中世遺構分布図




第７図　北中遺跡　近世遺構分布図

## 3　調査の経過

**昭和61年度**

9月2日　県教育委員会文化課による遺跡範囲北側の試掘調査。水田土壌が検出され遺跡の範囲が拡大される。
9月11日　遺跡の範囲が拡大した部分（E地区）の土層検討及び、重機による表土除去・掘り下げ。
9月18日　約40名の作業員とともに本格的な調査開始。A地区：トレンチ設定後、掘り下げ。重機による表土除去。E地区：水田面（ＩＤ層上面）の検出開始。
9月22日　D地区：トレンチ設定後、掘り下げ。重機による表土除去。E地区：水田畝の畦畔を確認。
9月25日　A・D地区：遺構検出を開始。SK３等検出。
9月26日　A地区：南西部を人力で遺構検出面まで掘り下げ。D・E地区：水田面の検出作業。
10月２日　B地区：トレンチ設定後、重機により掘り下げ。
10月３日　D・E地区：水田面のプラント・オパール分析試料採取。A地区：道祖神碑の移転。
10月４日　B地区：重機による表土除去。E地区：水田面の調査終了。
10月６日　E地区：ＩＣ層上面にてグリッド設定及び遺構検出。
10月９日　D地区：ＩＣ層上面にてトレンチ設定。
10月24日　A地区：遺構完掘、調査終了。B・D地区：土層図作成。調査終了。
11月６日　一部、図面整理等開始。
11月10日　C地区：トレンチ設定後、重機により掘り下げ。
11月19日　A地区：市道部分の表土除去（重機）。
11月26日　A地区：市道部分を重機により遺構検出面まで掘り下げ。遺構検出。C地区：調査終了。
11月28日　A地区：市道部分が業者の不注意により水没する。（復旧作業は12月１日より）。
12月２日　A地区：調査終了。これをもって、昭和61年度の発掘調査をすべて終了する。
12月　図面・写真・遺物・所見等の整理。
２月　「年報」３の原稿執筆。

**昭和62年度**

４月６日　発掘資材搬入。A地区（大日堂部分）：重機による表土除去・遺構検出面まで掘り下げ。
４月８日　17名の作業員とともに発掘調査開始。遺構検出。
４月13日　北西隅拡張。
４月20日　発掘調査のすべてを終了する。
５月　報告書に向けての本格的整理作業開始。
２月　「年報」４の原稿執筆。

# 第２節　基本層序と微地形

## １．基本層序

**ＩＡ層**　オリーブ褐色含礫泥層。本遺跡で見られる土層の中で最上位を占め、全面を広く覆い現地形を形成する。層厚は20～50cmで、上部は現水田耕作土となっている。小礫を含み、細砂～シルトの基質から成る。小礫は主として風化した砂岩などで、波田礫層（松本盆地団体研究グループ　1977）上限付近に由来すると推定される（総論編参照）。礫の含有率は南方へ高く、それに従って基質も粗粒となる傾向にある。

**ＩＢ層**　オリーブ褐色含礫泥層。南部東半を除く全面に分布し、層厚は０～50cmで一般に約25cmである。上部は水田土壌化している。ＩＡ層より粗粒の基質（主として細砂）から成り、小～中礫を含む。中部のＩＤ層が高い地点では細粒物質を混入して粘性が高くなる。中部では河成砂や小礫を多く混入し、全体に粗粒となる。北部には、ＩＡ層耕作土下面とＩＢ層上層を切り込む埋没自然流路が見られる。これらの流路は重複して北西から南東方向に流走し、中～大礫が密集する。

**ＩＣ層**　黄褐色含礫泥層。ほぼ全面に分布し、層厚は０～45cmで北部へ厚く堆積する。南部では東半でＩＣ層を欠如し、層厚20cmほどで薄く堆積する。淘汰の悪いシルトの基質に砂礫を塊状に含み、上位層に比べて粘性が高い。中部では基質が粗粒となり、河成砂を含む。中部のＩＤ層上面の条溝部では下部に河成砂層を伴い、舟底状に垂れ下がる。北部では上・下部層に区分でき、それぞれ上限付近が水田土壌化している。上部層は全体としてシルトの基質に小礫を含むが、正級化し、下部層との境界面にはしばしば小礫が密集する。下部層は淘汰の良いシルトの基質に小礫を含み、上部層より全体に細粒である。

**ＩＤ層**　褐色シルト層。中・北部に分布し、層厚は０～120cm、中部地区で20～120cm、北部地区で０～40cmと中部地区で最も厚く、上限が北方へ緩く傾斜しながらほぼ平坦であるのに対し下限は著しい凹凸を持つ。

II層　礫層。全面に分布し、本遺跡に見られる土層の基底を構成する。円磨された中～大礫から成り、基質は河成の中～細砂である。弱い斜層理が観察され、ときに河成砂をレンズ状に挟む。上面は波状の凹凸を持ち、頂部の延びは西南西から東北東方向である。最も高い頂部は南部にあり、しばしば上位層を欠如する。この他、南・中部間・中部北側、中・南部間に頂部が見られ、北方へ高度を下げている。

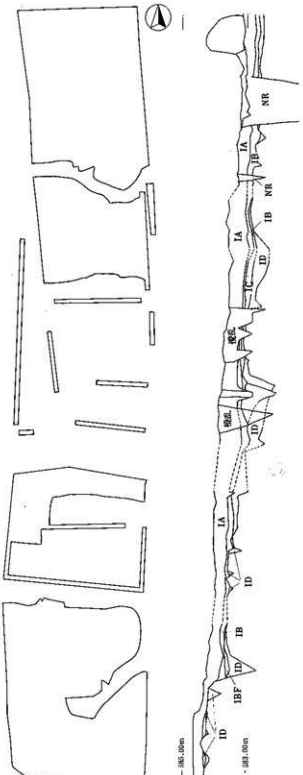
## ２．遺構切込面の微地形

遺構の覆土と検出状況から、近世末期の遺構切込面はＩＡ現耕作土下面で、中世ではＩＣ層上面が遺構切込面と推定される。

ＩＤ層上面は北方へ緩く傾斜するほぼ平坦な地形で、中部地区を中心に、深さ40～100cmの条溝が南西から北東、西から北東方向にいくつか走っていたと考えられる。ＩＣ層はこれらを埋めながら北に厚く堆積しており、上面は北方へのかなり緩やかな平坦地が展開していたと推測される。北縁には北方遺跡との境に中規模な河川が北東流し、そのすぐ南側の低地には水田址が立地する。

南部は、北縁の河川の水面が中世に水田址と同程度の高さにあったとすると、そこから約1.5mほど高いきわめて安定した一帯であったろう。このことはＩＢ層、ＩＣ層あるいはＩＤ層が薄層であるか欠如していることからも支持される。この安定した一帯に土坑群が立地する。

中世以降、本遺跡では、ＩＢ層・ＩＡ層の堆積を経て、さらに平坦化し、南・北部の高低差は小さくなり、ほぼ全面が水田化された。北端にあった河川は、ＩＢ層堆積後（近世）に北部の中央を横断するように流路が変化したと考えられる。この流路は後に現水田耕作土下に埋没するが、充塡する礫の状況から比較的勢いのある流れであったことが想像される。



第８図　北中遺跡　土層概念図

したがって、近世～近代には平坦な土地に水田が広がり、北部には比較的水量の豊富な河川が小さく蛇行して流れ、ここよりやや高い南部に、集落の一部をなす土坑や建物址が立地する景観が展開したと思われる。

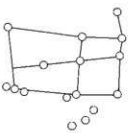
# 第3節　遺構と遺物

## 1　遺構

### (1)　中世の遺構

ア　掘立柱建物址

本遺跡では、整然とした柱穴配置をもった遺構はみられなかった。ただし、同様な規模・形態・覆土をもった小土坑群が十数基まとまって群をなし、個々が一定の間隔を保って分布するなどといった、特徴をもった土坑が幾つか確認された。それらは、何等かの建造物を構成していた可能性が非常に高いと考えられる。以下、それらを小ピット群と称して扱うことにする。



小ピット群A（SK34～47,184）　　位置：南部南半東部　　図版4

規模・形状：右図のように柱列を仮定すれば、柱間は桁行2.0～2.2m，梁行0.9～2.1mを測り、推定面積26.4㎡を有する東西棟となる。柱穴：掘り方は円・方形を基本形とするものが混在している。柱痕跡及び遺物の出土はみられなかった。時期：覆土分類などから中世2期の所産と判断した。

イ　溝址

**ＳＤ１**　　位置：北部　　図版7

ＩＣ層上面にて検出。規模・形状：長さ9m，幅約0.5mで、東西方向（N89°E）にほぼ直線的に走る。深さは0.15～0.09mで西に高く東に低い。断面形はすり鉢状を呈する。本址の東延長上に、長さ15m，幅約0.28mの東西に長い落ち込みがあり、本来は、本址に連続していたものと思われる。覆土は単一層で、溶脱した灰色を呈し、礫などは含まない。出土遺物：なし。所見：本址の走る方向と覆土の状況から、SL 1の ℓ 2と何等かの関連があった可能性があるが、レベル差が約25cmあり、両者が同一時期に使用されたか否かは判断しかねる。

ウ　柵址

**ＳＡ２**　　位置：南部北半　　図版7

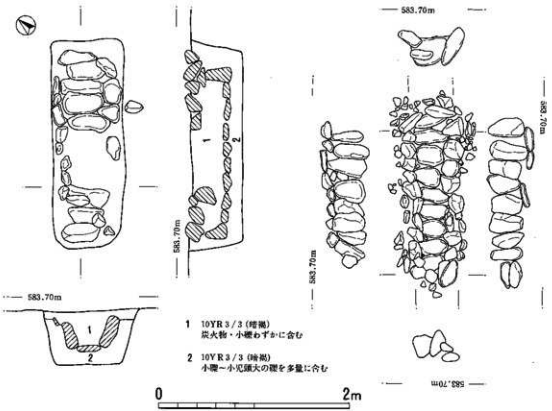
規模・形状：3間の柱間で、長さ4.8m、南南西（N19°W）に主軸をもつ。覆土はいずれも同様な単一層である。柱穴：柱間は、北から1.95m，1.29m，1.56mを測る。柱痕跡等は検出されず、掘り方の平面形はいずれも円形である。また、深さ・断面形もほぼ同じである。

エ　墓址

本遺跡では、土葬墓1基、火葬墓8基が検出されている。ほとんどが遺構の集中する調査区南部に分布するが、2基の火葬墓は生産域が広がる調査区北部で検出された。いずれも、出土遺物や覆土分類などから中世2期の所産と判断される。土葬墓は石棺墓と想定され、火葬墓には幾つかのバラエティーがみられる。また、火葬墓は検出面で、焼痕・焼土堆積・炭化物などが壁に沿って巡っており、検出時にそれとわかるものであった。

(ア)　土葬墓　（第9図）

**ＳＫ２５５**　　位置：南部北半東部　　図版6




第９図　北中遺跡　中世土葬墓（SK255）

検出：ＩＣ層上面にて、長径50cm程の偏平な巨礫が直線状に一部空白部をもちながらも北東部に５点、南西部に３点並んでいるのが検出された。礫の空白部を中心に十字にトレンチを入れたところ、底面・壁面にも同様な巨礫が配されていることが確認された。構造：石棺は200×70cmで、高さ（深さ）は40cmを測る。蓋石は、北東部に５，南西部に４の計９点で構成されている。いずれも平坦面を下にして、また、礫の長軸を石棺の長軸方向と直交するように並べている。長軸の側石は、南側が10，北側が８点の巨礫で構成されている。南側の西端部を除いて、すべて礫の長軸を垂直方向に向けて並べられている。短軸の側石は、東側が偏平な巨礫が主となって構成されるのに対して、西側はやや小形の礫が比較的不規則に並べられている。底石は８点の巨礫で構成されている。いずれも平坦面を上に向けており、東端部の１点と西端部の２点は他の底石よりも２cm程高く配されている。また、底石の隙間には小礫が埋められている。使用されている礫の総数は64点で、石質は砂岩が75パーセントを占めるほか、花崗岩，安山岩，頁岩，チャート，ホルンフェルス，礫岩がみられた。掘り方の規模は、220×100×60cmであった。覆土は単一の土層であり、遺物の出土はみられなかった。所見：整然とした組石の状況から、石棺墓と判断した。主軸方向がN55°Eであり、石の組方，短軸の側石の在り方などから、頭位方向は北東と考えられる。

（イ）火葬墓（第10図）

**ＳＫ２５１**　　位置：北部南半　　図版７

規模・形状：115×75cmの長方形プランを呈し、深さは15cmを測る。底面には敷石が施されている。また、底面から壁面にかけて焼痕が認められた。出土遺物：焼骨片以外出土していない。焼骨片で、部位のわかるものとして頭骨片が数点みられる。これらは、敷石直上部から、焼土粒・炭化物(生焼け状態のものも含む)と混在しながら出土している。所見：敷石に利用されている礫は拳大の礫が主であり、これらは一様に焼礫となっている。また、底面・壁面の焼痕や遺物の出土状況を考え合わせれば、本址は火葬施設であったと考えられる。

**ＳＫ２５２**　　位置：南部南半　　図版３

規模・形状：90×65cmの楕円形プランを呈し、深さは14cmを測る。底面の形態から、東側に張り出し部をもっていた可能性がある。また、壁面には焼痕がみられた。出土遺物：銭貨が、２層から多数の焼骨片とともに３点、３層（炭化物・灰層）から１点出土している。焼骨片で、部位のわかるものとしては、頭骨，下顎骨，橈骨，肋骨，手指骨がある。これらは、２層を中心として出土している。所見：壁面の焼痕や炭化物・灰層があることなどから、坑内で火が焚かれたことは明らかである。さらに、炭化物層の中から銭貨とともに多数の焼骨が出土したことから、本址は火葬施設であったと考えられる。

**ＳＫ２５３**　　位置：南部南半　　図版３

規模・形状：136×90cmの楕円形プランを呈し、深さは20cmを測る。土坑中央部に焼骨片の分布があり、それを挟むかのように、底面の北部・南部に集石（組石）がみられる。出土遺物：多数の焼骨片・灰を含む炭化物層（２層）中から、銭貨が３点出土している。焼骨片はいずれも小破片で、部位のわかるものはなかった。所見：炭化物層を中央に挟み、底面に集石がみられることから、北部・南部の集石は、燃焼面をより上位に上げる意図のもとに施された可能性も考えられる。しかし、壁面・底面に焼痕はみられず、坑内で火が焚かれた痕跡は見い出し難い。むしろ、本址は他所で火葬された骨を集め埋納した施設とした方がよいかと思われる。

**ＳＫ２５４**　　位置：南部南半　　図版３・４

規模・形状：100×100cmの隅丸方形プランを呈し、深さは42cmを測る。壁面の上端部すべてに焼痕がみられた。また、覆土中に集石をともなう。出土遺物：釘11点が多数の焼骨片とともに３層から出土している。焼骨片は部位がわかるものに、頭骨，上・下顎骨，脊椎骨，肋骨，肩甲骨，指骨の他、切歯がある。所見：壁面上端部の焼痕と覆土最下層に焼土・炭化物・灰が多量に含まれていることなどから、坑内で火が焚かれたことは明らかであり、加えて、焼骨片が炭化物などともに多量に出土していることから、本址は火葬施設であったとすることができる。また、釘が多数出土していることから、遺体を木棺に入れたまま火葬したことが想定され、さらに、土坑の規模から、棺は座棺であったことが予想される。遺存する火葬骨の部位が豊富であること、１層下半部にみられる集石を境に炭化物や火葬骨の分布がまったく異なることなどから、火葬→（拾骨）→集石→１層堆積という過程が想定され、本址は火葬施設であるとともに、拾骨後も墓と同様な意義をもつ施設であったといえるだろう。

**ＳＫ２５６**　　位置：南部南半　　図版２

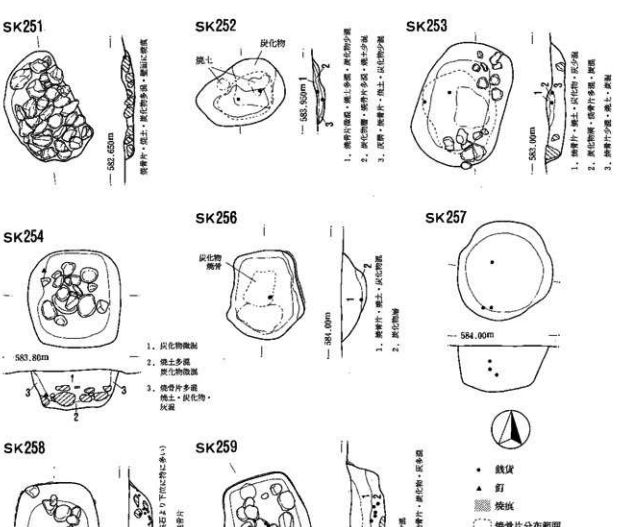
規模・形状：96×68cmの長方形プランを呈し、深さは24cmを測る。壁面には焼痕がみられた。出土遺物：銭貨が２点、焼骨片とともに炭化物層上部から出土している。所見：壁面の焼痕や炭化物層がみられることから、坑内で火が焚かれたことは明らかであり、遺物の出土状況を考え合わせれば、本址は火葬施設と捉えられる。さらに、極端に少ない火葬骨と銭貨の上を土で覆っている（１層）ことから、拾骨後も墓と同様な意義をもつ施設であったと考えられる。

**ＳＫ２５７**　　位置：南部南半　　図版２

規模・形状：径100cmの円形プランを呈し、深さは50cmを測る。出土遺物：底部近くから焼骨片が出土しており、覆土上部からは銭貨が３点出土している。所見：覆土は炭化物をわずかに含む単一層であり、壁面，底面に火を受けた痕跡もみられないことから、坑内で火が焚かれたとは言い難く、別の場所で焼かれた骨を拾骨し、本址に埋納した可能性が高い。また、焼骨を含めた遺物の出土状況や覆土の状況から、火葬骨を有機質の容器（蔵骨器）に収めたとは考えられない。

**ＳＫ２５８**　　位置：北部南半　　図版７

規模・形状：115×90cmの長方形プランを呈し、深さは42cmを測る。主として西側の壁面上端部に焼痕がみ




第10図　北中遺跡　中世火葬墓

られた。また、覆土中に集石を伴う。出土遺物：覆土は単一層であるが、中位に広がる集石の面より下位から、多数の焼骨片と銭貨が１点出土している。焼骨片は、上腕骨と考えられる破片以外は焼損が著しく、部位のわかるものはなかった。所見：壁面に焼痕がみられること、集石下位から炭化物と焼骨片が多数出土していることなどから、本址は火葬施設であったと捉えられる。また、炭化物が攪乱されていないこと、遺存する火葬骨のほとんどが細片であること、覆土中位の集石を境に炭化物・火葬骨の分布がまったく異なることなどから、火葬→（拾骨）→埋め戻し（集石含む）という過程が想定される。したがって、本址は火葬施設であるばかりでなく、拾骨後も墓と同様な意義をもつ施設であったといえるだろう。

**ＳＫ２５９**　　位置：南部北半　　図版６

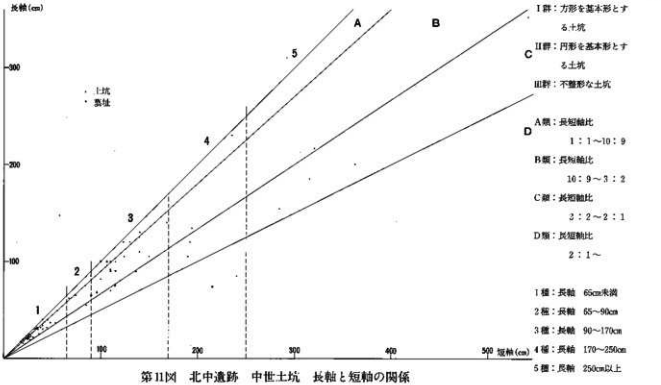
規模・形状：110×90cmの長方形プランを呈し、深さは25cmを測る。底面には敷石が施されており、構成礫は拳～小児頭大の礫で、いずれも礫の平坦面が上を向くように配されている。また、土坑北半部の壁面には焼痕が顕著にみられた。出土遺物：銭貨が６点と焼骨片が３層中、特に敷石上面に集中して出土している。焼骨片で、部位のわかるものに頭骨がある。平面的には、頭骨片が北壁寄り、銭貨が土坑中央部にま

とまって出土している。所見：壁面の焼痕，遺物の出土状況，敷石，炭化物・灰層の存在などから、本址は火葬施設であったと考えられる。

オ　土杭

**概観**

分類：本遺跡で検出された中世の土杭は以下のように分類される。




第11図　北中遺跡　中世土坑　長軸と短軸の関係

| | A | | | 小計 | B | | | | | 小計 | C | | | | 小計 | D | | 小計 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | 1 | 2 | 3 | 5 | | 1 | 4 | | |
| Ⅰ | 7 | － | － | 7 | 8 | 1 | 3 | 1 | 1 | 14 | 1 | 1 | 2 | 3 | 7 | － | － | － | 28 |
| Ⅱ | 12 | 2 | 7 | 21 | 19 | 1 | 5 | － | － | 25 | － | － | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 | 50 |
| 計 | 19 | 2 | 7 | 28 | 27 | 2 | 8 | 1 | 1 | 39 | 1 | 1 | 3 | 4 | 9 | 1 | 1 | 2 | 78 |

| | |
|---|---|
| Ⅲ群 | 1 |
| 不明 | 5 |
| 総計 | 84 |

第１表　北中遺跡　中世土坑形態分類

本遺跡では、Ⅰ・Ⅱ群ともD類の土坑が少ないことが特徴といえる。また、以下のような属性をもつ土坑がみられる。

集石・組石を伴う土坑：SK17・18（Ⅰ群B類３種），SK25（Ⅰ群C類５種），SK7・191（Ⅱ群A類３種），SK56・210・212（Ⅱ群B類１種）

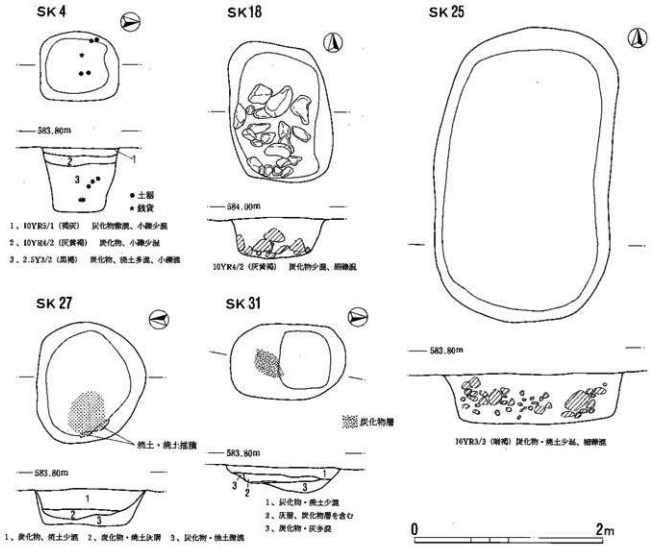
焼痕・焼土等を伴う土坑：SK 4（Ⅰ群B類２種），SK31・54（Ⅰ群C類３種），SK27（Ⅱ群A類３種）

土器・陶磁器・金属製品を伴う大形の土坑：SK107（Ⅰ群B類４種），SK234（Ⅰ群B類５種），SK106・231・241（Ⅰ群C類５種）

時期：近世の土坑も含めて、遺構の時期を判断するような遺物が出土した土坑は極めて少なく、また、遺構の掘り込み面がしっかりとおさえられた遺構も数少ないため、遺構の時期判断は整理段階での『土色帖』による覆土分類にその多くが基づいている。中世土坑の場合、出土遺物は中世２期が主体であり、また、本遺跡の中世遺物は中世２期が中心になることなどから、いずれも中世２期の所産と判断した。

(ア)　Ⅰ群の土坑

分布：南部南半の西部に主として分布し、同規模の土坑が群をなす傾向が窺える。B・C類の４・５種の




第12図　北中遺跡　中世土坑

土坑は群在し、Ａ・Ｂ類の１種は、Ⅱ群のＡ・Ｂ類の１・２種とともに小ピット群を形成している。また、Ａ類では長軸65cm以上の２種以降の土坑が検出されていないのも本遺跡の特徴の一つである。

**ＳＫ４**（Ⅰ群Ｂ類２種）　　位置：南部　　図版３・４

規模・形状：84×75cmの長方形プランを呈し、深さは70cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は３層に分層され、最下層では、上部に焼土・炭化物が層状に混入し、下部では焼土・炭化物がブロック状に混入している。出土遺物：３層上部から内耳鍋片・不明鉄製品が、３層下部から内耳鍋片・銭貨が出土している。所見：焼骨（火葬骨）が出土していないことから、火葬墓からははずしたが、土坑の形態、覆土の状況，出土遺物の種類などは、火葬骨を埋納した火葬墓に類似する。

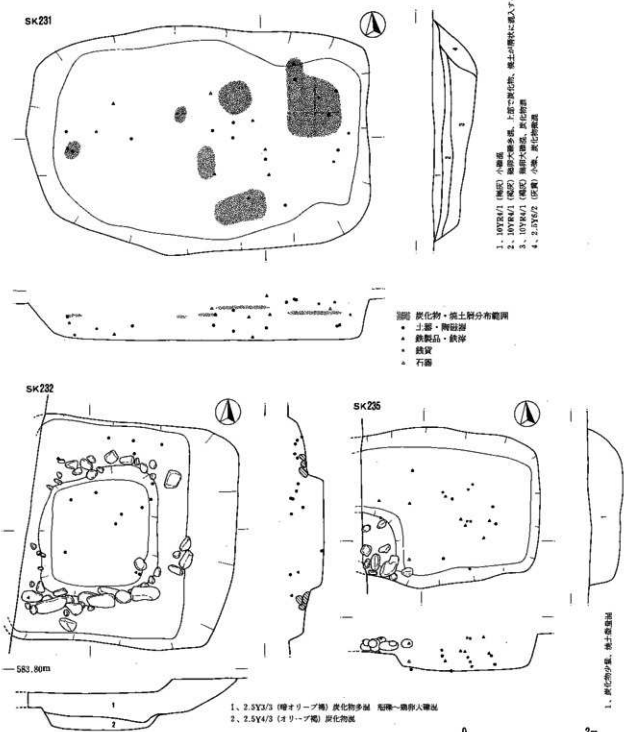
**ＳＫ１８**（Ⅰ群Ｂ類３種）　　位置：南部　　図版４

規模・形状：150×105cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは33cmを測る。断面形は鍋底状を呈する。覆土は単一層で、南半の下部には集石を伴う。集石は拳大～人頭大の礫によって構成されている。

出土遺物：なし。

**ＳＫ２５**（Ⅱ群Ｃ類５種）　　位置：南部　　図版４

規模・形状：315×185cmの楕円形プランを呈し、深さは53cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。壁に沿うようにして一部河原石が石垣状に組まれており、土坑中央部は集石の状態で




第13図　北中遺跡中世土坑

拳大の河原石が分布している。出土遺物：凹石２点が組石の一部として出土した。棒状の鉄製品が１点覆土中から出土した(保存状態が悪く取り上げ不能)。所見：整然とした組石は一部にみられただけであるが、土坑の形態，単一の覆土などから、石棺墓の可能性も考えられる。

**ＳＫ３１**（Ⅱ群Ｃ類３種）　　位置：南部　　図版３・４

規模・形状：120×80cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは30cmを測る。断面形は北側が深いすり鉢状を呈する。出土遺物：検出面から、青磁片・砥石が各１点出土している。所見：SK251などの火葬施設と規模・形状，覆土の状況などが類似することから、本址は火葬施設であった可能性がある。ただし、焼骨(火葬骨)

の出土がみられなかったことから、土坑として扱った。

**ＳＫ２３１**（Ⅰ群Ｃ類５種）　位置：南部　図版３

規模・形状：540×352cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは55cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、北東方向に傾斜する。東壁を除いて、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は４層に分層され、２層下限付近に炭化物・焼土の堆積層（最大厚５cm）がみられる。出土遺物：内耳鍋片・天目茶碗片・釘・銭貨（６点）・砥石（１点）が出土しており、これらの遺物は３層を中心として、平面的には東半部に多く、西半部に少ないという分布状況を示している。類例：SK106・107・232～235・241がある。これらは、遺構の規模・平面形・断面形，出土遺物の内容などがほぼ等質である。ただし、SK232は底面中央が１段低くなっており、その周囲には拳大～人頭大の礫が配されているほか、SK235では南西部にテラス状の掘り残し部があるなど、個々には相違がみられる。また、いずれも近接して分布し、特にSK232～235・241は本址とともに群を形成しており、注目される。所見：火を使用した痕跡・底面に対する造作（貼床等）がみられないこと、上屋の想定が困難なことなどから、遺構自体から居住機能を想定することはできない。ただし、土器・陶磁器片や砥石などの生活遺物が出土していることから、一概にそれを否定することは問題があるだろう。また、火葬墓や墓址の可能性が強い土坑が周囲に分布し、そのほぼ中央に本址を含めた大形の土坑群が位置しており、一定の空間が有する機能から遺構の性格等を類推するならば、葬制等に係わる祭祀的な性格を持つ施設であった可能性も考えられよう。

(イ)　Ⅱ群の土坑

分布：北部・南部に分布するが、中心となるのは南部である。Ａ・Ｂ類の３種は群在する傾向がみられ、Ａ・Ｂ類の１・２種は、Ⅰ群のＡ・Ｂ類の１種とともに小ピット群を形成している。また、Ｄ類の土坑がみられることも本遺跡の特徴の一つである。

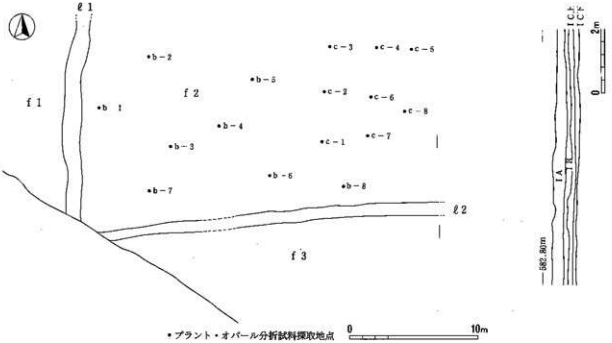
**ＳＫ２７**（Ⅱ群Ａ類３種）　位置：南部　図版４

規模・形状：130×120cmの楕円形プランを呈し、深さは40cmを測る。断面形は鍋底状を呈する。覆土は２層に分層され、下層は焼土・炭化物・灰のレンズ状堆積土である。西部では、底面から壁面にかけて焼痕が認められ、坑内で火が焚かれたことは明らかである。出土遺物：なし。所見：SK31と同様に、本址は火葬施設であった可能性がある。ただし、焼骨（火葬骨）の出土がみられなかったことから、土坑として扱った。

カ　水田址

**ＳＬ１**　位置：北部　（第12図）

検出：トレンチでＩＣ上部層上部に水田土壌とアゼを確認した。土壌断面は、酸化鉄の集積の程度によって３層に細分できる。１層は酸化鉄がほとんど集積しない、いわゆる溶脱層でＩＣ上部層上限を構成する。２層は酸化鉄が微弱に集積するもので、アゼ部断面に特徴的に認められる。３層は酸化鉄が顕著に集積するもので、１層の直下に水平に認められる。それぞれＩＣ上部１層・ＩＣ上部２層・ＩＣ上部３層とした。ちなみに、ＩＣ上部２層の下限は船底状に垂下し、ＩＣ上部３層はアゼ部で消滅するか、希薄になって集積幅が減少する。アゼの方向と田面の規模を知ることを目的に、ＩＣ上部３層上面で平面調査を行った。ＩＣ上部３層上面としたのは、上位層であるＩＢ層のほぼ全体も灰色化しており、平面的にＩＣ上部１層との境界が識別しにくいのに対し、ＩＣ上部３層上面は田面と平行で、さらに、平面的な検出の際に顕著に集積する三価の鉄の識別が容易であり、これを指標とするためである。水田土壌とアゼの存在で水田址認定の必要条件は満たされているが、合わせてプラント・オパール分析を古環境研究所（埼玉県大宮市）に依頼して行った。結果を第２表に示す。ＩＣ上部層より7,000個／ccと多量のイネのプラント・オパー




第14図　北中遺跡　中世水田址

ルが検出され、肉眼観察の結果が補強された。しかし、田面部では1,500～2,900個／ccといずれも少量である。この原因として、検出面が旧耕作土よりかなり低かったため、単位体積土中に含まれるプラント・オパール量が減少したと解釈する。検出の結果、黄色の色調の田面と、これを区画する淡黄色の色調のアゼ部が観察され、アゼ２、田面３を確認した。それぞれℓ１～２、ｆ１～３とする。

検出層位・時期：ＩＣ上部３層上面より検出した。上位のＩＡ・ＩＢ層にも明瞭な水田土壌が観察されたが、ＩＡ層は攪乱が著しく、ＩＢ層は水田址以外の遺構との関連を調査目的としたため検出しなかった。また、下位のＩＣ下部層にも逆グライ化土壌が観察されたが、断面・平面ともにアゼを認めることができなかったこと、プラント・オパール分析の結果でも1,000～3,400個/cc(第２表）と少量の検出に留まったことから水田址とは認定しなかった。本址の営まれた時期は、隣接する北方遺跡の発掘所見から、中世１期から中世２期初頭までと推定される。本遺跡南部の土坑群の時期は出土遺物などから中世２期とされており、本址の推定時期と重なる部分は少ない。一方、北方遺跡では中世１・２期とも掘立柱建物址群を中心に集落が構成されており、位置的にも、古梓川の分流一本を隔てるだけなので、北方中世集落の住人達が本址を営んだ可能性が高いといえるだろう。

№２地点

| 試料名 | イネ | キビ族 | ヨシ属 | タケ亜科 | ウシクサ族 |
|---|---|---|---|---|---|
| a | 1,451 | 0 | 0 | 2,902 | 0 |
| b | 7,002 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| c | 2,920 | 0 | 0 | 1,460 | 0 |

| 試料名 | イネ | キビ族 | ヨシ属 | タケ亜科 | ウシクサ族 |
|---|---|---|---|---|---|
| b-1 | 2,837 | 0 | 0 | 1,418 | 0 |
| b-2 | 2,761 | 0 | 1,381 | 1,381 | 0 |
| b-3 | 2,835 | 0 | 0 | 2,835 | 0 |
| b-4 | 1,409 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| b-5 | 2,753 | 0 | 0 | 1,376 | 0 |
| b-6 | 1,449 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| b-7 | 2,888 | 0 | 0 | 1,444 | 0 |
| b-8 | 2,815 | 0 | 0 | 1,408 | 0 |

| 試料名 | イネ | キビ族 | ヨシ属 | タケ亜科 | ウシクサ族 |
|---|---|---|---|---|---|
| c-1 | 2,792 | 0 | 0 | 2,792 | 0 |
| c-2 | 2,685 | 0 | 0 | 4,028 | 0 |
| c-3 | 3,368 | 0 | 0 | 1,123 | 0 |
| c-4 | 1,343 | 0 | 0 | 1,343 | 0 |
| c-5 | 1,311 | 0 | 0 | 1,311 | 0 |
| c-6 | 1,236 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| c-7 | 1,012 | 0 | 0 | 1,012 | 0 |
| c-8 | 1,272 | 0 | 0 | 0 | 0 |

№３地点

| 試料名 | イネ | キビ族 | ヨシ属 | タケ亜科 | ウシクサ族 |
|---|---|---|---|---|---|
| a | 1,632 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| b | 4,537 | 0 | 0 | 3,024 | 0 |
| c | 1,513 | 0 | 0 | 7,563 | 0 |
| d | 0 | 0 | 0 | 2,500 | 0 |

第２表　北中遺跡ＳＬ１試料１ccあたりのプラントオパール個数

地形環境：本址北方約40m付近に古梓川の分流が北東流していたと推定され、現在も同位置を同方位に微低地が帯状に連続し、農業用水路が流れる。これが、本遺跡の立地する小微高地と北方遺跡の立地する小微高地を境していたと考えられる。本址の南縁は、ＩＢ層堆積後に移動した分流に切られて明らかではないが、この新しい流路の南側にはＩＣ上部層上部の水田土壌は認められない。また、新流路南側は一般に標高より20～30cm高く、上面は緩やかな起伏を持っている。したがって、本址は本遺跡と北方遺跡の小微高地を境した分流の河岸か、または、この分流による第２沖積段丘上に立地したものと考えられる。本址が立地する箇所と同様の地形面の広がりは明確に捉えることはできないが、原地形を判読すると、本址の位置を含む微低地が本址南西100m付近から北東へ約300m、最大幅約70mで紡錘形に広がる。該期にも同様の範囲に河岸、または、第２沖積段丘面が連続し、そこに水田が広がっていたと推定される。

アゼの規模・走向：各アゼ幅と走向を第３表に示す。ただし、アゼ幅としたのは酸化鉄が微弱に集積した部分の幅であり、正確な値ではない。走向は、現水田のアゼがN60°WとN30°Ｅで地形に調和するのに対し、東西・南北の方角を意識しているようにみえる。ℓ１（南北）・ℓ２（東西）とも直線的で、走向も考え合わせると、地形を無視したかなりの規制があったことを暗示している。

| アゼ | ℓ1 | ℓ2 |
|---|---|---|
| 推定アゼ幅(m) | 1.2～1.8m | 0.8～1.3 |
| 走向 | N3°E | N85°E |

第３表　北中遺跡　ＳＬ１アゼ幅・走向

田面の規模・形状：田面の推定面積と形状を第４表に示す。形状はいずれも詳細が不明である。面積は本来1,000m²近くあったのではないかと予想される。田面の推定標高から導かれることとして、高い順にｆ１、ｆ３、ｆ２で、ｆ１と他の２枚は別の潅水系が推定できることが挙げられる。このことは、ℓ１がℓ２より大形のアゼであった可能性が高いことからも支持される。

| 田圃 | f1 | f2 | f3 |
|---|---|---|---|
| 面積(㎡) | 100以上 | 670以上 | 230以上 |
| 標高(m) | 582.19 | 581.99 | 582.04 |
| 形状 | 台形または長方形 | (長方形) | —— |

第４表　北中遺跡　ＳＬ１田圃の面積・標高・形状

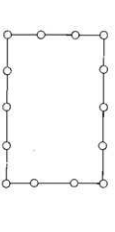
諸施設：上記のアゼと田面に関する情報から、用水は南側から導かれたとみてよいだろう。しかし、該期に、南側に自然流路があったとは考え難く、人工的な用水路の存在を想定しないと本址の潅水系を理解できない。そこで、分流による第１沖積段丘崖下－後の流路変更に伴って攪乱を受けている－に東西方向の幹線水路が走っていたと想像されるのである。幹線水路は微低地先端で分流から取水され、水田域の南・東縁を迂回して、再び分流に排水されていたと考えられる。後の分流の流路変更時に、新しい流路が幹線水路に沿って、これを破壊しながら流れたと想像することもできる。

(2)　近世以降の遺構

ア　掘立柱建物址

**ＳＴ１**　　位置：南部北半　　図版５

規模・形状：４×３間の南北棟。SK243, 244がプラン内の北西隅付近に構築されている。しかし、P14がSK243を切ることから、本址に伴う施設ではないと判断した。柱穴：桁行方向では、西側南端のP11と12の柱間が狭くなる以外は、ほぼ等間隔に柱穴が並ぶ。梁行方向では、北側東端部のP3とP4、南側両端部のP8とP9、P10とP11の柱間が狭くなっている。掘り方の平面形・規模はほぼ同様であるが、P5・14は他に比べて深い。柱根、柱痕跡は検出されなかった。時期：遺構検出面・覆土分類などから近世の所産と判断した。



イ　柵址

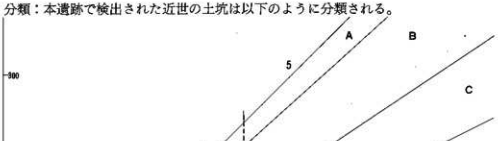
**ＳＡ１**　　位置：南部北半　　図版 5

検出：ST1検出の際にＩＡ下部層上面にて、ST1の柱穴と同一の規模・覆土をもつ小ピット群が検出された。その中にST1の柱筋と軸方向を異にし、「コ」字状に並ぶ土坑群が確認された。建物址とするには柱間の長さがまちまちで、コーナー部分の角度も直角からはずれており柵址として扱った。ST1の柱穴と直接切り合うものはないが、プランは重複する。新旧関係は不明。規模・形状：南側に開口した「コ」字状に柱穴が配置されており、東辺9.9m、西辺11.5m、北辺9.9mの規模をもつ。柱穴：柱根・柱痕跡は検出されなかった。掘り方の平面形は円形を基本としており、規模では、P1・P5がやや大きいほかはほぼ同様である。深さでは、とび抜けて深いものはない。出土遺物：なし。時期：遺構検出面・覆土分類などから近世の所産と判断した。所見：５×３間、あるいは６×３間の掘立柱建物址になる可能性も考えられるが、そうした場合、プランは西辺の長い台形となる。また、ST1の付属施設を構成する柱穴になる可能性もあり、本址を柵址として捉えない方が適切かもしれない。

ウ　土坑

**概観**

分類：本遺跡で検出された近世の土坑は以下のように分類される。




第15図　北中遺跡　近世土坑　長軸と短軸の関係

| | A | | | 小計 | B | | | | 小計 | C | | | 小計 | D | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | | 1 | 2 | 3 | 4 | | 1 | 2 | 3 | 4 | | |
| Ⅰ | 2 | － | － | 2 | 2 | 1 | － | 1 | 4 | － | 2 | 1 | 3 | 1 | 10 |
| Ⅱ | 36 | 1 | 5 | 42 | 27 | 2 | 7 | － | 36 | 2 | 4 | 1 | 7 | － | 85 |
| 計 | 38 | 1 | 5 | 44 | 29 | 3 | 7 | 1 | 40 | 2 | 6 | 2 | 10 | 1 | 95 |

| | |
|---|---|
| Ⅲ群 | 7 |
| 不明 | 8 |

| | |
|---|---|
| 総計 | 110 |

第５表　北中遺跡　近世土坑形態分類

本遺跡では、Ⅰ群の土坑が極めて少なく、Ⅰ・Ⅱ群ともＤ類の土坑が少ない。Ⅱ群ではＡ・Ｂ類の土坑が９割以上を占めている。また、以下のような属性をもつ土坑がみられる。

集石を伴う土坑：SK24（Ⅱ群Ａ類２種），SK132・175・216（Ⅱ群Ａ類３種），SK23・26（Ⅱ群Ｂ類３種）

時期：遺構の時期を判断するような遺物が出土した土坑は限られており、出土遺物がないものがほとんどといえる。また、遺構の掘り込み面がしっかりとおさえられた土坑も数少ないため、遺構の時期判断は整理段階での『標準土色帖』による覆土分類にその多くが基づいている。近世土坑の場合、出土遺物は19世紀前葉から中葉のものが主体である。したがって、近世以降の土坑としたものは、ほぼその時期の所産と判断している。

(ｱ)　Ⅰ群の土坑

分布：南部の北端と南半に分布し、規模の異なる土坑が群をなす傾向が窺える。

**ＳＫ６９**（Ⅰ群Ｃ類４種）　　位置：南部北端　　図版５

規模・形状：235×143cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは９cmを測る。底面はほぼ平坦で、中央部に向かい若干の傾斜をもつ。覆土は単一層であり、炭化物が少量混入する。出土遺物：錆釉のすり鉢片が２点覆土上部から出土している。

**ＳＫ１０５**（Ⅰ群Ａ類４種）　　位置：南部南半　　図版２

規模・形状：235×230cmの隅丸方形プランを呈し、深さは15cmを測る。底面はほぼ平坦で、南側に向かい若干の傾斜をもつ。壁はなだらかに立ち上がる。覆土は単一層である。出土遺物：底面からやや浮いた状態で、鉄製の楔・釘・砥石が各１点出土している。所見：土坑の規模・形状，出土遺物から、居住に係わる機能を備えた施設であった可能性が考えられる。

(ｲ)　Ⅱ群の土坑

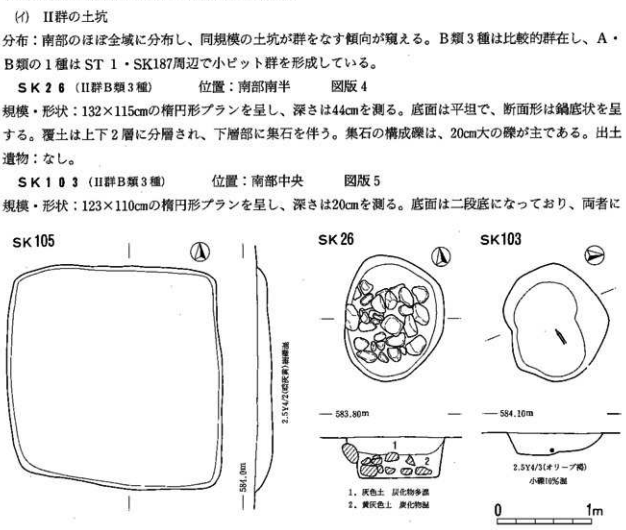
分布：南部のほぼ全域に分布し、同規模の土坑が群をなす傾向が窺える。Ｂ類３種は比較的群在し、Ａ・Ｂ類の１種はＳＴ１・SK187周辺で小ピット群を形成している。

**ＳＫ２６**（Ⅱ群Ｂ類３種）　　位置：南部南半　　図版４

規模・形状：132×115cmの楕円形プランを呈し、深さは44cmを測る。底面は平坦で、断面形は鍋底状を呈する。覆土は上下２層に分層され、下層部に集石を伴う。集石の構成礫は、20cm大の礫が主である。出土遺物：なし。

**ＳＫ１０３**（Ⅱ群Ｂ類３種）　　位置：南部中央　　図版５

規模・形状：123×110cmの楕円形プランを呈し、深さは20cmを測る。底面は二段底になっており、両者に

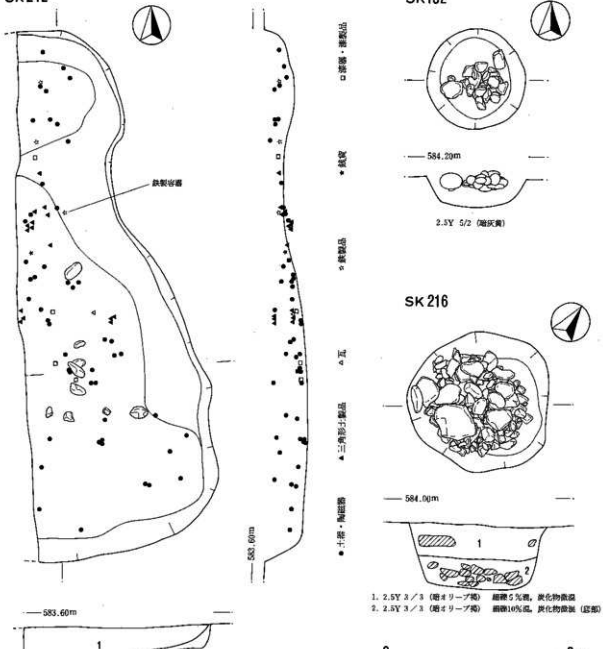



第16図　北中遺跡　近世土坑

若干の凹凸がみられる。覆土は単一層である。出土遺物：底面から浮いた状態で、銅製の簪が１点出土している。所見：南部北半・南半の遺構集中区から離れて、本址と同規模の土坑が近接して構築されており、これらの土坑群は、簪を副葬品とするならば、墓址群と捉えられよう。

**ＳＫ２１６**（Ⅱ群Ａ類３種）　　位置：南部北半　　図版７

規模・形状：150×150cmの円形プランを呈し、深さは70cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は鍋底状を呈する。覆土は上下２層に分層され、下層部に主として集石を伴う。集石は、約120点の拳大～人頭大の礫で構成されており、上部に大形の礫が集中する傾向が窺える。出土遺物：検出面付近で灰釉の丸碗片が３点、集石の中から錆釉のすり鉢片・鉢片が各３点出土している。




第17図　北中遺跡　近世土坑

(ｳ) Ⅲ群の土坑

分布：南部北半に集中する傾向が窺える。また、極端に不整な形状を呈するものは少なく、方・円形に比較的近いものが多い。

**ＳＫ２４２**　　位置：南部北半　　図版５

規模・形状：西部をトレンチ調査の際に破壊してしまった上、さらに調査区外に遺構が延びていたため、遺構の全容はつかめないが、最大長568cm、最大幅200cm以上の不整形プランで、深さは最深部で42cmを測る。覆土は上下２層に分層される。出土遺物：遺物量は豊富で、土器・陶磁器はそのほとんどが幕末から明治時代初頭頃の所産である。他に、釘・鉄製容器片（鉄鍋か）・ヤスリと思われる鉄製品・銭貨・瓦・用途不明な三角形の土製品・漆器・漆製品が出土している。土器・陶磁器はほぼ全面から、土製品は３か所にまとまって出土している。銭貨を含めた金属製品は遺構北半部から、漆器・漆製品はほぼ中央部から出土している。いずれも底面から検出面近くまでのレベルからの出土であるが、覆土下半が主体となる。所見：土坑の規模・形状からは上屋等の想定は不可能であり、また、墓址とも考えられない。本来の機能に関しては不明と言わざるを得ないが、遺物の出土状況から、廃棄の場として活用されたものと考えられる。また、事実関係は判然としないが、地元の人の話によると、大日堂は明治元年に建立されたもので、それ以前にはこの地に寺があり、火災にあって消失したとのことである。本址の出土遺物は、仏具に関連するものが多いように思われることから、その寺と何等かの関連をもつ施設であった可能性も考えられよう。

## ２．遺　物

### (1)　中世の遺物

ア　土器・陶磁器（図版８-1～14・付表２・ＰＬ8）

**概観**

遺構からの出土は、土坑16基から総数94点がみられる。そのほかは包含層からの出土であり、層位的にはＩＡ層からＩＤ層より検出されているが、遺物の年代と層位の上下関係は必ずしも対応していない。出土地点は、発掘域の南端に集中する土坑群に多い。出土している陶器は、古瀬戸系（34点）の天目茶碗・平碗・卸皿・緑釉皿・折縁深皿・茶入、また常滑系の甕（3点）・東海系の捏鉢（8点）・須恵質擂鉢（1点）がみられる。在地系の土器としては土師器皿（14点）・内耳鍋（84点）があり、輸入陶磁器では青磁碗（5点）が出土した。時期的には青磁が先行するほかは、おおよそ15世紀代に属するものが多い。

(ｱ)　土　器

ａ．在地系土器（1～5）

**皿**　小破片のうえ磨滅が著しいため、法量や調整の判明するものは限られる。そのなかでSK234から出土したものを図示した。ほとんどが手捏ね成形によるものであるが、SK232・235から出土した２点はロクロ成形であった。１は橙色、２は黄橙色で、両者ともＩＢ2類に分類される。

**内耳鍋**　破片数は多いが、形態を知れるものは少なく、Ｉ類・ＩＩＢ類の2種類がある。Ｉ類は5に掲げた1点のみで、口縁部が「く」状に外反する。ＩＩＢ類に分類されるものは、ナデが弱く、くぼみは明瞭でない。ＩＩＡ類に分類される可能性もある。4はSK232とSK241から同一個体の破片が出ている。

(ｲ)　陶　器

ａ．古瀬戸系陶器（6～12）

**天目茶碗**　6は鉄釉が掛けられ、下半は鉄化粧を施さず、露胎となる。釉の発色は不安定で、透明感・光沢のある茶色や黒色を呈する。SK231とSK232から出土した破片が接合している。7は釉調が透明感・光沢のある濃い茶色でムラが目立つ。6は15世紀代、7は15世紀後半くらいに考えられる。

**平碗**　図示できないが、L-J24区から出土している。灰釉を施すもので、後期様式に属すであろう。

**鉢皿**　SK106から出土した9は口縁端部が二叉風になり、15世紀前半から中葉の特徴をもつ。釉は灰釉が薄く掛けられ、白色を呈している。SK232出土の10とL-J24区の11は、残存部が露胎となり、また粗雑なつくりである。9と同時期に比定できよう。

**折縁深皿**　SK59出土の12のみ図示できた。口縁端部を肥厚させ、内側に段を付ける形となり、14世紀中葉から後葉の特徴をもつ。灰釉を掛け、透明感のある薄い緑色となる。このほかに出土した折縁深皿は15世紀代の所産と考えられる。

**茶入**　8は透明感のある緑色を呈し、外面下半は露胎となる。焼きは良く、丁寧につくられている。

b．東海系無釉陶器

**常滑系甕**　粗粒質の灰赤色を呈するもので、小破片が出土している。

**擂鉢**　L-J24区出土のものがVI類に分類できるほかは、形態は分類できない。色調は明るい淡黄色と灰白色となるものがあり、ともに緻密な胎土である。

c．産地不明の陶器（13）

**須恵質擂鉢**　色調は灰色、内面は良く磨滅している。底部近くは板状工具でナデを行っている。

(ウ)　磁　器

a．青磁（14）

**碗**　F類とH類の2種類が出土している。F類は鎬蓮弁文をもつもので図版　16・17に示した。H類は14に示したもので、細かい蓮弁文を削り出し、高台断面は三角形で高台径は小さめである。

イ　金属製品

(ア)　鉄製品（図版8、PL9）

本遺跡で中世遺構から出土した鉄製品は43点を数える。その内訳は釘が24点と多く、他に刀子3点、楔、鏃が各1点、用途不明品14点であった。釘は、その半数近くの11点がSK254からまとまって出土している。以下、器種ごとの記述を行なう。

**刀子**　SK231より2点、SK59より1点出土した。1は刃部破片である。

**釘**　SK254より11点、SK231・234より各4点、SK233・235より各2点、SK112より1点出土し、うち5点を図示した（2～6）。頭部の大きさには個々バラエティーがあるが、作り出し方法は折り曲げによっている。すべて鍛造品である。

**楔**　7はSK235から出土したもので、先端になるにつれ薄くなってゆく形態から楔と認定した。

**鏃**　8はSK231から出土したもので、鏃身は比較的小さいが、そのわりに篦被（ののこぶ）は太くしっかりとしてしる。茎部先端を欠く。

**用途不明品**　棒状品は5点で、断面正方形のI類は3点（SK108・231・235）、断面円形のII類は1点（SK235）、断面長方形のIII類も1点（SK235）であった。また、板状品は5点（SK4・231・232・234・235）であった。その他に図示した2点のうち、9は、断面正方形の棒状品を8の字状に曲げたものである。ピンセット状の鉄製品になろうか。10は一端が肥厚する扁平な棒状を呈する鉄製品である。その他に小鉄片がSK21・232より各1点出土している。

(イ)　銅製品（図版8、PL9）

本遺跡の中世遺構から出土した銅製品はすべて銭貨で、45点であった。判読不能の7点を除く38点の内訳は、唐銭4点、北宋銭22点、元銭1点、明銭11点であった。個々の銭貨については、遺構別に第6表に示した。

| 遺構名 | 銭貨名 | 初鋳年 | 国名 | 書体 | 図No. |
|---|---|---|---|---|---|
| SK 4 | 永楽通寶 | 1408 | 明 | | 23 |
| SK 107 | 至道元寶 | 995 | 北宋 | 真書 | 12 |
| SK 110 | 開元通寶<br>天聖元寶 | 621<br>1023 | 唐<br>北宋 | 篆書 | 11 |
| SK 111 | 開元通寶<br>不　明 | 621 | 唐 | | |
| SK 185 | 紹聖元寶 | 1094 | 北宋 | 真書 | 18 |
| SK 231 | 皇宋通寶<br>皇宋通寶<br>皇宋通寶<br>元豊通寶<br>洪武通寶<br>不　明 | 1039<br>1039<br>1039<br>1078<br>1368 | 北宋<br>北宋<br>北宋<br>北宋<br>明 | 真書<br>真書<br>真書<br>真書 | 14<br>16<br>22 |
| SK 234 | 熙寧元寶<br>元祐通寶<br>洪武通寶<br>洪武通寶<br>洪武通寶 | 1068<br>1086<br>1368<br>1368<br>1368 | 北宋<br>北宋<br>明<br>明<br>明 | 篆書<br>真書 | 20<br>21 |
| SK 235 | 開元通寶<br>天禧通寶<br>皇宋通寶<br>熙寧元寶<br>熙寧元寶<br>元豊通寶<br>至大通寶 | 621<br>1017<br>1039<br>1068<br>1068<br>1078<br>1310 | 唐<br>北宋<br>北宋<br>北宋<br>北宋<br>北宋<br>元 | 篆書<br>真書<br>真書<br>真書 | 15<br>19 |

| 遺構名 | 銭貨名 | 初鋳年 | 国名 | 書体 | 図No. |
|---|---|---|---|---|---|
| SK 241 | 元豊通寶 | 1078 | 北宋 | 真書 | |
| SK 252 | 元豊通寶<br>洪武通寶<br>永楽通寶<br>不　明 | 1078<br>1368<br>1408 | 北宋<br>明<br>明 | 篆書 | 17 |
| SK 253 | 嘉祐元寶<br>永楽通寶<br>永楽通寶 | 1056<br>1408<br>1408 | 北宋<br>明<br>明 | 真書 | 13 |
| SK 256 | 至道元寶<br>宣和通寶 | 995<br>1119 | 北宋<br>北宋 | 真書<br>篆書 | |
| SK 257 | 皇宋通寶<br>永楽通寶<br>永楽通寶 | 1039<br>1408<br>1408 | 北宋<br>明<br>明 | 篆書 | 24 |
| SK 258 | 開元通寶 | 621 | 唐 | | |
| SK 259 | 皇宋通寶<br>元豊通寶<br>不　明<br>不　明<br>不　明<br>不　明 | 1039<br>1078 | 北宋<br>北宋 | 篆書<br>真書 | |

初鋳年は、松原典明 1983「古銭一覧表」『日本考古学小辞典』ニュー・サイエンス社による。

第6表　北中遺跡　銭貨一覧表

ウ　石製品　(図版9、PL.9)

本遺跡で中世遺構から出土した石製品は砥石2点、凹石3点、環状石製品2点であった。1・2は凝灰岩製の砥石で、4面の作業面をもつものである。3・4は安山岩製の凹石である。片面にのみ凹部をもつタイプで、凹部は半球状を呈し、敲打→研磨によって整形されている。凹部が使用により形成されたのか、意図的に作り出したのかは不明である。凹部以外の他の部分には、調整の痕跡は認められなかった。5・6は安山岩製の環状石製品である。表裏両面から縦断面V字状の穿孔が認められる。穿孔の方法は敲打→研磨によることが観察されるが、孔の小さい面（実測図正面）のほうが敲打痕をよくとどめている。孔部以外の全面とも研磨痕が認められ、少々歪みがあるものの算盤玉状に整形している。また、6は孔の縁辺部に接して浅い溝が切ってある（正面に1箇所、裏面に2箇所）。この環状石製品及び、凹石の用途は不明である。

(2)　近世以降の遺物

ア　土器・陶磁器・土製品（図版10－1～35・図版11－36～72・付表2・PL10～12）

**概観**

量が多く、内容は豊富である。陶器は多器種に及び、碗（18点）・皿（23点）・燈火具（25点）・擂鉢（13点）・片口鉢（25点）・土鍋（41点）・土瓶（16点）・徳利（3点）・甕（6点）・壺（1点）・油壺（8点）・蓋（3点）が確認され、また、磁器は碗（20点）・皿（7点）・徳利（8点）が確認でき、碗を中心にして器種が限られている。土器は少なく火鉢（2点）・七輪？（1点）がある。そのほか瓦が1点、用途不明の土製品が16点ある。

器種構成別にまとめてみると、食生活用具31％：21点(食卓容器類22％：14点、調理・煮沸容器類9％：6点)、嗜好用具13％：8点(喫茶容器類6.5％：4点、飲酒容器類6.5％：4点)、燈火具28％：18点、化粧用具2％：1点、その

他3％：2点(火鉢・蓋)、不明23％：15点に分類（仲野1987・88）することができる。この中で燈火具の多いのが目立つが、燈明皿と受皿が約半数ずつみられるので、実際には比率は半減する。

これらの生産地は、図示し得た64点中（七輪・瓦を除く）、瀬戸・美濃系30％：19点、在地産26％：17点、肥前系3％：2点があり、そのほか41％：26点が不明である。不明のなかには信楽系かと思われるものが6％：4点含まれているが、確実なことは言えない。在地産としたものも研究の立ち遅れから、産地が限定できるわけではなく、また不明とした遺物のなかには在地産の製品も多く含まれていると考えられる。同じ松本市内の松本城二の丸御殿跡（松本市教委　1985）、秋葉原遺跡（松本市教委　1983）と比較すると、北中遺跡は時期が新しくなるため、肥前系製品の数量が減るが、瀬戸・美濃系、在地諸窯を中心とすることは共通する（仲野　1985）。

時期的には、17世紀に属するものが1個体あるほかは、19世紀前葉から中葉に属するものが中心を占め、その連続として18世紀に遡り得るもの や、19世紀後葉（近代）といえる遺物も確認されており、磁器碗2点・皿1点・仏飯器2点、陶器の汁次1点がそれにあたる。

以上は土坑から出土しているほか、ＩＡ層からＩＣ層より出土している。特に土坑のうち、SK242とSK245からはまとまって多くの遺物が出土しており、以下の報告では、この2遺構を中心に記述をすすめていくことにする。

(ｳ)　ＳＫ242・ＳＫ245出土の遺物

ａ．ＳＫ242（1～35）

ほとんどの遺物は、幕末から明治時代初頭頃の所産である。1・2は同じ文様で、外面を3単位に割り付け、見込みには「寿」を意匠化した文様をいれる。3も筆描きによって文様が描かれている。4は杯、5・6は小碗で、同一文様を描き、7は丸碗で素地は白く、茶色となる鉄釉が掛けられている。天目茶碗の可能性もある。17世紀代の所産と考えられ、混入したものであろう。8は菊皿、9は小鳥（雀？）をかたどった皿で、型押しでつくられる。10は鉢で、素地は赤色となり、釉は透明感のない灰オリーブ色となるが均一な色調ではない。鉄釉か灰釉かは不明である。在地窯の製品と考えられ、おそらく佐久市の川越石焼か飯田市の富田焼のいずれかであろう。現段階では両者の製品の識別は難しい。11は肥前系の皿で呉須による草花文様が描かれていて、素地は白色となる。12から17は燈火具で、12・13は燈明皿、ほかは燈明受皿である。14が口径6.8cmで小さめのほかは10cm前後に集中する。いずれも透明感のない灰釉で乳白色を呈し、貫入が多い。器形的には12・13が底部から口縁部にかけて丸みをもって上がり、15・16は直線気味、14・17は外へ反るような形となり、12・13が先行しそうで、18世紀になろう。18・19は同じ文様・形態の仏飯器である。赤と青を使用した上絵で、脚部の内側を奥まで抉っている。明治時代にくだるものであろう。20はタタラづくりによる桟瓦で、表を丁寧に磨き、裏はナデ調整が行われている。21から35は用途不明のもので、ほぼ同じ地点から出土している。図示し得なかった1片を含め、16個体があり、小型のためか欠損率は低い。陶器で、大抵は最大幅のある位置から下は露胎となり、釉は灰釉か鉄釉かは不明で、透明感のある濃い緑色を呈す。胎土は灰白色で焼きは硬い。在地系と考えたが、焼成・胎土からみると類例は求め難い。文様は一面に施され、外形に沿う沈線とその内側の三角文が同時に型押しされている。三角形の粗密の差により2種類の型がある。中央よりやや上に両側から開けられた穴が通り、底面は平坦となる。大きさには差がなく、最大幅3.75～3.9cm、最大厚0.85～1.0cm、高さ2.65～2.8cm、重量9.2～10.7ｇに集中する。1・2・3・4・5・6・7・8・14は瀬戸・美濃系と考えられる。

ｂ．ＳＫ245（36～61）

36はだみ筆によって文様を描いている。幕末から明治時代初頭にかけてのもので、以下に示す遺物も断りのない限りこの時期に入る。37・38は小碗である。37は素地が灰色を帯び、陶器質に近い。38はワンポ

イントの文様を4ないし2面に配すのであろう。同一文様の別個体の破片がほかにある。39は無文の杯、40・41は皿で、40は表面が黄味を帯びた色調となるが、素地は白色で18世紀に遡る肥前系の製品である。41は素地・表面ともに白色で、底部は高台内側を輪禿とする。40より新しい所産である。42・43は燭徳利で、後者は呉須釉と鉄釉の掛け分けである。44～51は燈火具である。44～47が燈明皿、48～51が燈明受皿である。44・49・50・51は錆釉で、44・49はこげ茶色、50は黒色、51は茶色を呈す。45は錆釉に近いような鉄釉で光沢の鈍い濃い茶色となる。46・47・48は灰釉で、46・48は透明感のない黄味を帯びた色調で、貫入が多く、47は乳白色で貫入はみられない。47は信楽系の可能性もある。47は外形に膨らみをもって立ち上がることから18世紀に遡る要素をもち、49も内側の桟が口唇部より高位にあるため、ほかの燈明受皿より先行するものであろう。52は火鉢で、外面は型押しによる文様があり、内面には布目痕がみえる。53は素焼きの土器で、七輪の内側に入れるものと考えた。時期は不明である。54は蓋で、つまみはなく、裏面に低い脚が付く。釉は灰釉で透明感のある緑色を呈し、素地は灰色で焼きは非常に良い。55は汁次で、正円柱状をしている。蓋と接する部分が露胎のほかはムラなく施釉され、内側は緑色、外側は白色で、灰釉であろう。外面は銅緑釉によって施文している。胎土は灰色で焼成は良く、54と似ている。近代に属するものであろう。56・57は土瓶で、56の釉調は灰オリーブ色を呈し、胎土はやや赤味を帯びる。SK242出土の10と釉調・胎土とも似るが、それに比べて胎土の赤味は弱く、釉調にムラがない。いっちん掛けによる施文がある。57は備前写しで、錆釉を施釉し明るい茶色を呈す。胎土は白色である。蓋の内側は露胎となり、図示したような墨書が観察される。57は18世紀後半頃のものである。58は擂鉢で、光沢のある黒色を呈し、胎土は白色である。これも18世紀後半へ遡る可能性もある。59・60・61は土鍋である。59はSK242出土の10と色調・胎土とも酷似し、同じ生産地と考えられる。60は錆釉で茶色の色調となる。61は光沢のある茶色を呈する鉄釉である。60は把手の形状が他と相違して3次を有するもので、59・61は粘土紐を口唇部に貼付した形状となる。以上のうち瀬戸・美濃系といえるものは36・37・39・41・42・43・57・61、肥前系が40、在地産が59、ほかは限定できない。

(イ)　その他の遺物

a．土　器

4点あるが、器種はわからない。灰黄褐色を呈し、把手が付く。

b．陶　器（62・64・65・69～72）

**碗**　瀬戸・美濃系－64の丸碗は素地が白色で、釉は灰釉が掛けられ、貫入が多く入る。18世紀後半から19世紀くらいのものであろう。ほかにいわゆる御深井碗が4点ある。

**皿**　瀬戸・美濃系－69は器壁が厚い小型の燈明皿で、当遺跡では類例がない。内側に灰釉を掛け、胎土は緻密で灰色をしている。底部には回転糸切り痕が残っている。

**皿**　産地不明－70は貫入の多い透明感のない乳白色となり、SK245の47と似る。18世紀に遡るだろう。71・72は燈明受皿で、前者は濃い茶色の錆釉、後者は黄白色の灰釉で貫入が多い。72は外形が外へ反ること、桟が低いことから71より時間的に新しいかもしれない。ほかに、燈明皿の破片2点と丸皿2点が確認されている。

**鉢**　瀬戸・美濃系－65の鉢は素地が白く、光沢のある茶色を呈する鉄釉が掛かる。おそらく片口が付くであろう。同じような破片が4点ある。また擂鉢も2点みられ、光沢のない錆釉を刷毛塗りし、素地は軟質、白色を呈している。

**壺**　産地不明－62は図示できない口縁部の破片も出土しており、短く外へ反る形となっている。また体部は中程で折れる。呉須による文様が描かれ、灰釉が掛かる。18世紀後半に属するものとしておきたい。

c．磁　器（63・66～68）

**碗**　瀬戸・美濃系－自然流路から出土した66は呉須を使用した筆描きによる文様で、外面は縦に太い線を入れて区画とし、そのなかに草花文様が描かれている。区画の単位はわからない。体部下半の高台付け根の近くに雷文がみられる。口縁部内側上端にも1周する連続文がみられる。江戸時代天保年間頃の所産と考えられる。そのほかは明治時代に入るものが5点あり、うち63は銅版転写によるもの、67は摺絵技法を用いて鶴、松？、月？を表現している。

**皿**　瀬戸・美濃系－近代に入るものが2点出ている。68は銅版印刷をしているもので、クロム青磁を使用して、緑色を発色させている。20世紀初頭以降の製品であろう。

イ　金属製品

(ア)　鉄製品（図版12、PL12）

本遺跡で近世の所産と考えられる鉄製品は13点あり、そのうちの8点はSK242からの出土であった。

**釘**　SK242から3点、SK67から2点、SK71・103から各1点、計7点出土した。25は頭部の遺存状態が良くはないが、折り曲げて作り出したと考えられる角釘である。26・27は頭部が残っていないため全体の形態は不確定だが、下端が尖ることから釘として認定した。25に比べ細い一群であることが特徴である。

**容器**　全4点、SK242から一括出土した(29～32)。おそらく同一個体と考えられるが、破片同士は接合しなかった。31・32は部分的ではあるが、銅を被せている。器形は不明である。

**用途不明品**　28は両側縁が薄くなる板状品である。先端部を欠くため全体形状は不明である。基部？に孔があることがX線透過によって確認された。

(イ)　銅製品（図版12、PL12）

33は遺構外出土で、刀の鞘尾金具と思われる。帰属時期は不明である。34は簪（かんざし）で、全長17cmの完形品である。他に、図示しなかったが、SK242から「寛永通寶」が1点出土している。

ウ　石製品（図版12、PL12）

SK105・117から砥石が各1点出土した(7・8)。　ともに凝灰岩製で、中程度の目の粗さをもち、作業面は4面である。

エ　漆　器・漆製品

SK242から板状のもの3点、漆皿1点、供膳具かと思われるもの1点の計5点が出土している。そのうち板状のもの1点と、供膳具かと思われるもの1点は、木質部・漆ともに腐食が進み、詳細な観察と取り上げはできなかった。遺存状態の良好な2点の板状のものは、残存部で21.5×7.0cmと32.0×11.5cmをはかり、厚さは漆皮膜が残るだけで、木質部は損なわれているためわからない。黒漆を中塗りしたのち、両面に朱漆を上塗りしている。盆・膳・箱の一部とも考えられるが、限定はできない。漆皿は、口縁部の一部に木質部を残すほかは、黒漆だけが残存している。文様はないようであるが、表面の剝落がすすんでおり、細かい観察ができない。法量は、およそ口径10.0cm、器高1.4cm、高台径5.4cmをはかる。

# 第4節　小　結

今回の調査区で検出された遺構は、中世2期では墓址を含んだ土坑が主体を占め、近世では掘立柱建物址と土坑が主体である。

中世2期の遺構では、明らかに居住機能を備えたといえる遺構は皆無に等しく、したがって、居住域とは異なった空間としてこの地が利用されていたことが想定される。その中で、火葬蓋・土葬墓・方形に配置する大形の土坑群が注目される。そのうち火葬墓は、水田址が広がる北部を除いたすべての調査区に分布している。また、火葬墓とした多くの遺構は火葬施設として捉えられるものの、火葬後埋め戻した痕跡が窺えるほか、遺構の切り合い等後世の破壊の痕跡はみられず、不可侵の施設として存在していたものと思われる。一方、土葬墓については、SK255を石棺墓とするか否か若干問題が残る点であるが、類例の集成・分析を待って結論を下したい。SK231等の大形土坑については、生活遺物が出土しているものの、銭貨・釘などが出土しており、また、6基の大形土坑が方形に配置している点や周囲に分布する遺構の性格から、居住施設、あるいは工房址としては捉えにくい。以上のことから、中世2期の本遺跡(今回の調査区)は生産域と墓域で構成されていたといえよう。

近世の遺構は、掘立柱建物址及び方形の竪穴状の遺構（SK105・187）とそこに起居した人々が利用したであろう廃棄の場（SK242・245）とで構成されている。SK242の出土遺物は仏具に関連の深いものも多くみられることから、明治元年に建立されたという大日堂との関連が指摘されよう。なお、大日堂移転に伴って、付属する施設の痕跡も検出されているが、移転前の正確な図面などや大日堂建立にかかわる資料を入手することができず、残念であった。

今回調査した部分は、遺跡範囲のほぼ中央部にあたる地点で、松本市教委により既に調査・報告されている遺跡の東部・西部では時期・遺構の内容が異なっている。東部では、近世以降の堂宇が検出されており、一部は現在でも墓地として利用されている。西部では、遺物は古墳時代後期から中世にかけての土器・陶磁器が出土しているものの、遺構は古代以降の竪穴住居址，中世Ⅰ期以降の掘立柱建物址と墓址を含めた土坑群で構成されている。したがって、北中遺跡は少なくとも中世以降を中心とした遺跡であるといえる、また、このように一つの遺跡として捉えられながらも、地点によってその性格が異なるのは、地形環境に大きく起因するものと考えられる。古梓川の氾濫原に立地する本遺跡では、離水域となる中洲性の微高地を生活の場として占地するため、その範囲が古梓川の分流によって規制されているといえる。このことは、今回の調査で試みた微地形の復原からも明らかであろう。分流の方向は、多くが現梓川と平行する南西から北東方向であり、これによって微高地は分断され、ゆえに、遺跡を東西に切った場合、その内容が異なってくるものと考えられる。遺跡範囲の捉えが極めて困難な所以であろう。

遺跡範囲の確認や遺跡内の各地点の関連性の追究等、今後に残されている課題は少なくない。しかしながら、3地点の調査成果は、それらに対して重要な資料として生きてくるものと思われる。

# 第３章　北方遺跡

## 第１節　遺跡の概観と調査の概要

### １　遺跡の概観

本遺跡は松本市の北端部、島内釜海渡地籍他に所在する。現北方集落の西方に広がる水田地帯が遺跡の範囲である。古梓川によって形成された氾濫原上に位置し、標高は580～585m（中央道本線内では580～581m）である。

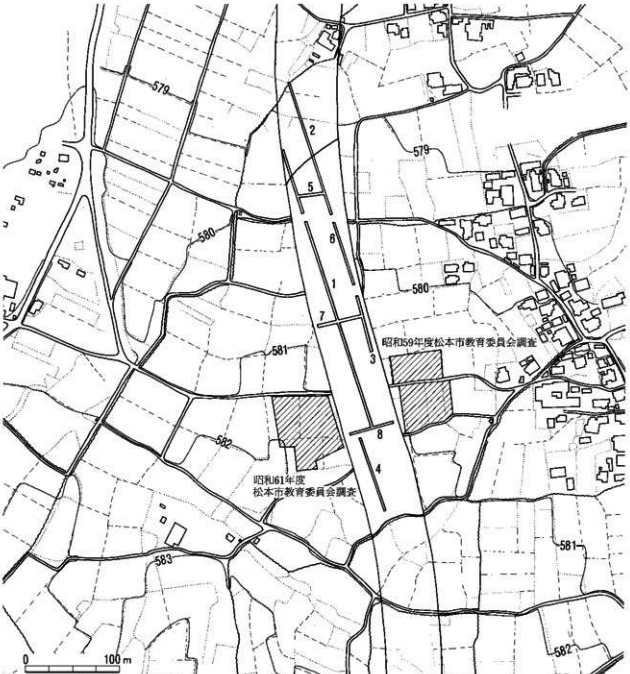
本遺跡は島内遺跡群の一つとして知られ、昭和59年度には県営圃場整備事業に伴って松本市教委によって調査が実施され、その結果、古代・中世の集落址であることが明らかとなった。島内遺跡群の中では発掘調査によって遺跡の時期及び全体像がつかめた初めての遺跡であるといってよいだろう。その後、北隣の上平瀬遺跡が昭和60年度に同じく松本市教委によって調査され、本遺跡よりも先行する時期（６～７期）の住居址２軒と墓址などが検出されている。昭和61年度７月から中央道建設に伴う今回報告分の調査が、同年８月からは県営圃場整備事業に伴う松本市教委による調査（昭和62年度報告）がそれぞれ実施された。これによって本遺跡は、古代集落のほぼ全域が調査された遺跡となった。昭和59年度の調査（遺跡東部）では、古代の竪穴住居址５軒、溝状遺構２条、中世の竪穴住居址１軒の他、数十基の土壙・ピットが検出されている。また、昭和61年度の松本市教委の調査（遺跡西部）では、古代の竪穴住居址17軒、大甕埋設遺構、中世の掘立柱建物址６棟、竪穴状遺構３基の他、百数十基の土壙・ピットが検出されている。今回報告分の調査（遺跡中央部）でも、同様な時期・種類の遺構・遺物が検出されている。

### ２　調査の概要

調査面積は、21,640㎡と広範囲にわたるため、調査研究員３名で遺構・遺物の包含層の有無、土層の堆積状況、面的調査の範囲等を確認するためにトレンチ調査を行った。その結果、遺物の集中区、水田土壌の堆積が各一ヶ所確認され、他のほとんどは砂礫層の上に現耕作土がのっているという状況であった。確認のため、後者の一部（Ｏ区）を面的に拡げたところ、住居址や柱穴と思われる落ち込みが多数検出され、松本市教委の調査成果も考慮し、調査対象範囲の全面発掘が必要と判断するに至った。また、遺跡の範囲については、トレンチの断面精査及び本遺跡の南に接するカルバート・ボックス工事の際の立ち会い調査などから、北限・南限を捉えた。北限は、１・２トレンチの土層堆積状況などから、Ｄ区以北は梓川の旧河道であることが確認された。南限については、カルバート・ボックス工事の際に土層の堆積状況を観察する機会を得、この部分が礫層のみで、４トレンチの土層堆積状況が礫層・砂層・土層がインターフィンガーの状態を示していることからも、カルバート・ボックス部分が古代以前から河道であったと判断され、北方遺跡の南限と捉えた。

本格的な調査は、確認調査の所見及び松本市教委の調査成果に基づき、古代の集落構造の復元、古代と中世の差異を明らかにするという調査方針のもとに、開始された。

遺構検出に際しては、トレンチ調査の際に遺物包含層が確認されたＬ・Ｍ区、遺構が検出されたＯ区では、重機による表土除去後、人力により遺構検出面まで掘り下げ、その間出土した遺物は２ｍグリットを




第18図　北方遺跡　発掘範囲及びトレンチ配置図

本に層位ごとに取り上げた。その他の地区では、遺構検出面まで重機による表土除去を行い、遺構の調査に取り掛かった。

遺構の調査、特に土坑の調査に関しては、覆土の類型化を試み、調査の簡便化を図った。覆土は、$\alpha$・$\beta$・$\gamma$・$\delta$の４種に分類し、$\alpha$・$\beta$は中世遺構の、$\gamma$・$\delta$は古代遺構の覆土となるものが主体である。本遺跡では、出土遺物のない遺構（掘立柱建物址・土坑）が多く、したがって、この覆土分類を時期判定の際の一手段として利用した。

今回の調査で検出された遺構は以下のとおりである。

古代：竪穴住居址32軒，溝址１条，井戸址１基，墓址５基，土坑10基，水田址１か所，小鍛冶址１基

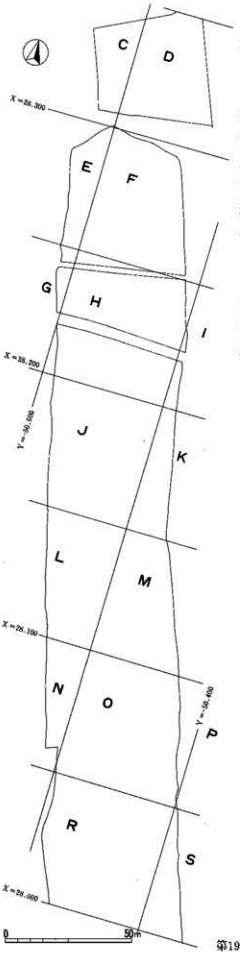
中世：掘立柱建物址10棟，溝址４条，柵址１条，墓址11基，土坑594基，水田址１か所

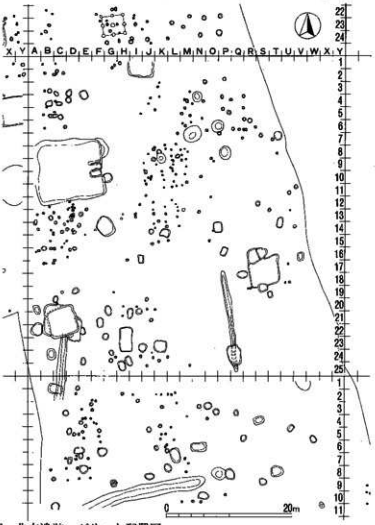
遺物は、古代では８・15期の土器群と金属製品・石製品・土製品があり、中世では中世１・２期の土器

・陶磁器と金属製品・石製品がある。なかでも、古代8期の土器群は、他時期の混入が少なく、単純な資料であることや、鋤鍬先が竪穴住居址から2点出土していることなどが注目される。

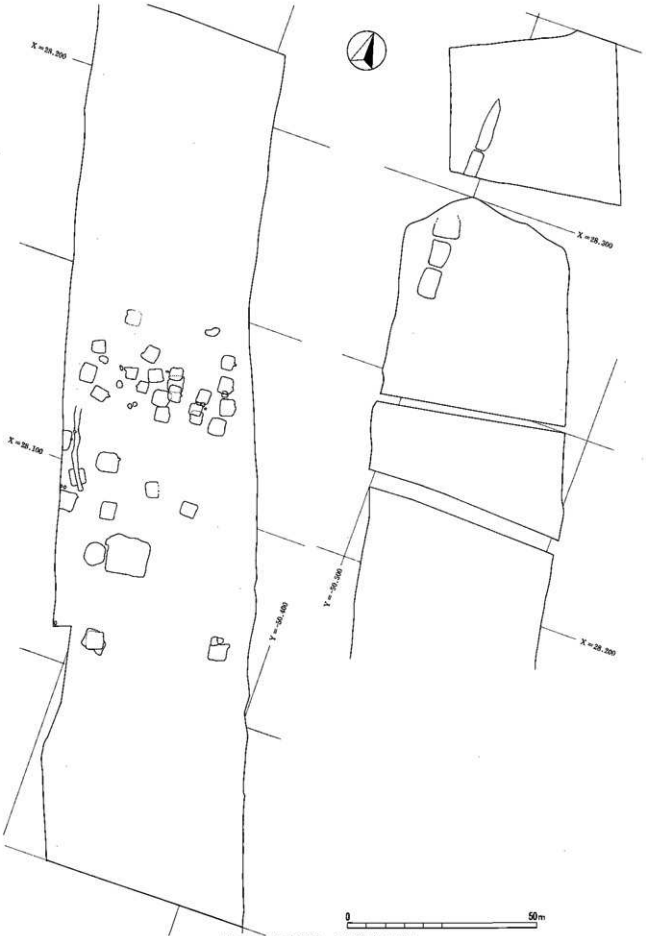
測量は、X軸・Y軸に沿った50m区画の大地区の設定を業者に委託した。測量基準点（NS＝0、WE＝0）の座標値は、X＝28,000、Y＝-50,400である。標高は、工事用センター杭の杭高を使用した。主に使用した杭は、STA277＋00(581.811m)、STA278＋00(581.495m)、STA280＋00(580.088m)である。遺構の実測・遺物の取り上げは、8×8m及び8×2mの中地区、2×2mの小地区を基本とした。遺構の実測は遣り方測量を用い、遺物の取り上げは遺構・地区、層位ごとに取り上げた。

整理作業では、昭和61年11月から図面・写真・遺物・所見などの整理が一部発掘作業と並行しながら開始され、報告書に向けての図版作成・原稿執筆などを含めた本格的な整理とまとめは、昭和62年4月から行い、本報告に至った。この間、発掘調査の概要を『㈶長野県埋蔵文化財センター年報』3、『長野県埋蔵文化財ニュース』№19にそれぞれ報告した。

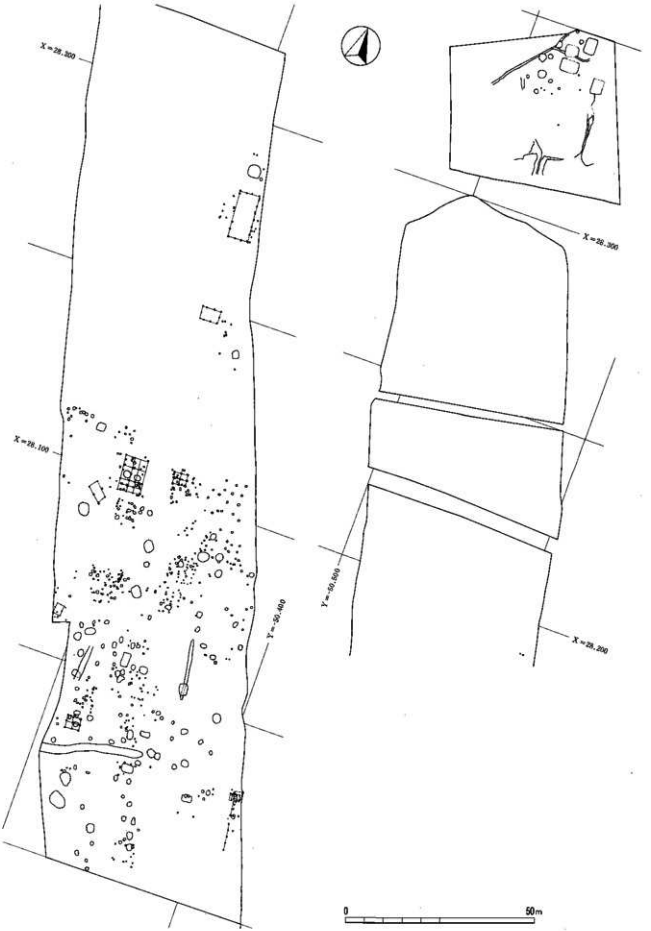



第19図　北方遺跡　グリット配置図




第20図　北方遺跡　古代遺構分布図




第21図　北方遺跡　中・近世遺構分布図

## 3　調査の経過

**昭和61年度**

7月7日　調査区全域にわたり、トレンチを設定して調査開始。

7月11日　現場プレハブ周辺（遺跡範囲外）の環境整備の際に土器片が出土したため、確認のためにトレンチを入れたところ、トレンチ内からも土器片・鉄器片の出土をみ、遺跡の範囲が南へ広がることが予想された。

7月12日　O区、重機による表土除去。住居址・土坑等と思われる落ち込みが検出される。

7月17日　作業員3名、調査に参加。L・M区、人力・重機により、表土除去、遺構検出開始。

7月21日　調査研究員・作業員を増員し、本格的に調査を開始する。

7月25日　B・D区、トレンチ断面精査。D区以北は古梓川の河道の礫層であることを確認。遺構調査開始。

7月31日　本遺跡の南に接するカルバート・ボックス工事の立ち会いと、6トレンチの土層堆積所見から、このカルバート・ボックスが建設される部分が本遺跡の南限にあたることを確認。

8月7日　県教委文化課・日本道路公団・当センターとにより、遺跡範囲変更のための協議。A・B区を遺跡範囲外とし、O区からSTA275+80のカルバート・ボックスまでを遺跡範囲内に組み入れ、E区とする。

8月11日　E～K区、重機により表土除去。遺構検出。L区、遺構調査開始。

8月21日　M・N・O区、遺構調査開始。

9月11日　松本市立島内小学校6年生、遺跡見学。D区、道路部分を残し調査終了。

9月13日　松本市立島内小学校6年2組、遺跡見学及び発掘作業を体験学習する。

9月24日　C区、古代の水田面を検出。

10月4日　C区、調査終了。

10月8日　K区、調査終了。

10月12日　現地説明会。

10月17日　L・M区道路取り外し、遺構検出・調査開始。

10月18日　松本市立島内小学校・鹿児島県小学校教員、遺跡見学。

10月22日　信濃史学会小穴芳実氏、遺跡見学。

10月23日　北中遺跡作業員の協力を得、遺物洗浄開始。

10月28日　三の宮遺跡作業員の協力を得、遺物注記開始。

10月31日　L区、調査終了。

11月7日　M区、調査終了。

11月10日　一部発掘作業と並行して図面整理・鉄製品の泥落とし等の整理作業開始。

11月12日　現地プレハブを撤去し（R・S区）、重機による表土除去。遺構検出・調査開始。

11月21日　R・S区、調査終了。これをもって本遺跡の発掘調査のすべてを終了する。

11月28日　図面・写真・所見等の整理開始。

2月　『年報』3の原稿執筆。

**昭和62年度**

4月　報告書作成に向けての本格的整理作業開始。

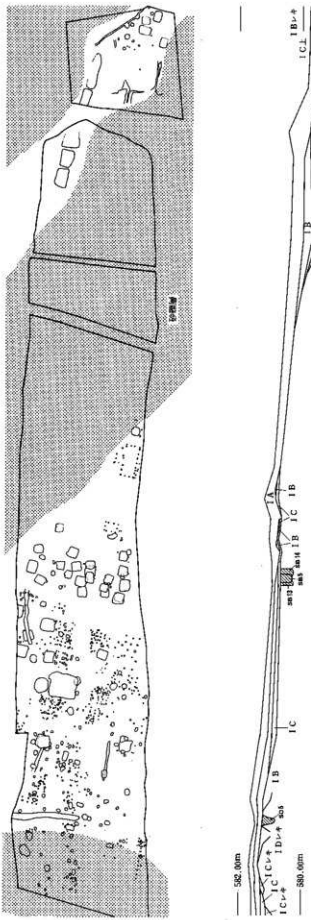
# 第2節　基本層序と微地形

## 1　基本層序

**ⅠA層**　明黄褐色含礫泥層。北方遺跡に見られる土層の最上位にあって、全面を広くおおい現地形を形成する。層厚は15～25cmで、北へ厚く堆積する。全体として小礫を塊状に含むが、北部(現棒川寄り)の低い一帯では大形の礫を増加させながら砂礫層に漸移し、級化層理が発達する。基質は淘汰の悪い中砂～シルトで、粘性はあまりない。上面の水田耕作などに伴って削平を受け、南部では部分的に失われたり、ⅠA層全体が耕作土となったりしている。また、酸化鉄が集積し、黄色味を帯びる。

**ⅠB層**　にぶい赤褐色含礫泥層。ⅠC層またはⅠD層上の全面を覆い、層厚は10～50cm強である。小礫を塊状に含み、ⅠA層より粗粒の基質から成る。礫の含有率は北部で高く南部で低くなる傾向にあり、北端では礫・基質ともに粗粒となった本層がⅠC層を深く切り込んでいる。北部を除くと上部の水田土壌化が顕著ではないが、中部では上限に厚さ数cmの溶脱層が認められる部分があり、地形的に高い一帯の耕作土がⅠA層堆積の際に削りとられた可能性が高い。

**ⅠC層**　にぶい褐色含礫泥層。中・南部と北部で層相が変化する。中・南部では小礫を混入し、基質は淘汰の悪い細砂～粘土である。層相の側方変化が著しく、西方へ粗粒となる。層厚は一般に10～20cmだが、中部では本層が欠如している。北部では上部層と下部層に区分できる。上部層は小礫を含む中砂～粘土で、




第27図　北方遺跡　土層断念図

基質の淘汰はきわめて悪い。層厚は20～30cmで北方へ厚くなる。下部層は、基質については上部層と共通するが、礫の含有率が上部層より低い。層厚は20～35cmで、ほぼ一定の厚さで堆積している。上・下部層の境界は顕著には認められないが、下部層には酸化鉄・酸化マンガンがセットで集積しており、上・下部層間に溶脱層が存在したことを示している。

**ＩＤ層**　明褐色シルト層。全面に分布し、上面は波長の長い凹凸を持ちながら北方へ緩く傾斜する。上面は本遺跡の遺構検出面である。中砂～シルトから構成され、シルトの範囲に中央値がある（5.5Ｍｄφ）。腐植化のためか上限付近に褐色を帯び、弱い可塑性があることを特徴とする。層厚は40～70cm以上である。一般に礫は含まないが、南端付近では小～中礫層をレンズ状に挟み、この頂部では砂層の被覆が見られない。

**Ⅱ層**　礫層。本遺跡の基底を構成し、上面は振幅の大きい波状の凹凸を持つ。主として円磨された大礫から成り、基質は河成の中～細砂である。礫種は飛騨山脈に由来する花崗岩・安山岩・閃緑岩・輝緑凝灰岩・粘板岩などで、古い梓川によって運搬されたと考えられる。上面の波状地形の頂部の軸方軸は南西から北東方向で、現在の梓川の流向と調和する。

## 2　遺構切込面の微地形

遺構切込面は、覆土からＩＣ層上面が中世、ＩＤ層上面が平安時代と推定されている。

ＩＤ層とＩＣ層の境界面は、南部で南西から北東方向の帯状の最高地点を持ち、南側へ急に、北側へ緩やかに傾斜する。ＩＤ層上面の離水後ＩＣ層堆積時まで、または、ＩＣ層堆積時に高地の削剝がなされたと考えられるので、平安時代後期には、ＩＤ層上面はより激しい起伏を持っていたと推測される。

上面に極端な凹凸を示すⅡ層は、網状流による産物と考えられ、本遺跡付近はⅡ層堆積中から中洲状の地形にあったと思われる。ＩＤ層はこの中洲状の高まりを足がかりに、上流部から

の土砂の供給と河川の営力とのプログラデーション（前進平衡作用）の過程で北方に離水域を広げ、その結果、北側へ緩やかに傾斜する地形が形成されたものと推定される。

最高地点頂部の南方には、ＩＣ層・ＩＢ層対比の礫層が船底状に堆積しており、最高地点から南側への急傾斜が河川の存在に由来していることを示している。したがって、最高地点の著しい南方への偏りは、この河川による自然堤防状の微高地が上乗せされたためと読み取ることもできる。

最高地点の北側40mから100mの間はテラス状の平坦な地形で、古代の集落はここに立地する。さらに北側は小規模な凹地と微高地を経て、北部で極端に高度を下げながら古い梓川に接続しており、北部の最も低い箇所からは水田址が検出されている。

集落の立地するテラス状平坦地は、当時の梓川とは距離にして約300mの隔たりを持ち、推定される水田から約1.7m高い。したがって、背後の河川とは自然堤防状の最高地点で隔し、前面の梓川とは距離も高度も離れた、きわめて安定した地点であるといえる。また、テラス状平坦地は礫の入らないＩＤ層から50～60cmと厚く堆積しており、掘削などには有益であったろうと推定される。

ＩＣ層上面の地形はＩＤ層上面の地形と同様に、最高地点を南部に持ち北側へ緩やかに傾斜するが、ＩＣ層が凹地を埋積したためになだらかな起伏を持つ。中世の遺構は南部の最高地点一帯に集中し、北部の古い梓川沿いの低地には上下２面の水田が展開した。その後、ＩＢ層・ＩＡ層によって低地はさらに埋積され、きわめて緩い傾斜の平坦面が形成された。この間に、南方の河川は消滅して、梓川は約300m北方に退いている。なお、周辺を流れる河川の位置は平安後期と大きな変化はないものと思われる。

## 第３節　遺構と遺物

### １　遺構

#### (1)　古代の遺構

#### ア　竪穴住居址

**概観**

分布：調査区の南半部に竪穴住居址が集中し、遺構空白部を挟んで、11軒の南群と21軒の北群に二分される。南群は超大型住居址を中心として、その周囲をめぐるような形で分布している。一方、北群はほぼ同一規模の住居址群が密集しており、中でも東半部では列をなすように住居址が並んでいる。

時期：ほとんどが8期に属し、他は15期のものである。15期の住居址は南群のみ（５軒）である。

検出：いずれの住居址も、ＩＤ層上面にて検出されており、検出面では、土器片や小礫、炭化物が方形あるいはそれに近い形で数多く分布していた。そのような部分は他所に比べ、土層の色が濃く、また、現水田の酸化鉄等の集積層が、ほぼ住居址規模の形状で欠落している部分もみられた。

構造・規模：床面積から、超大型、大型、中型、小型の四種に分類される。中型住居址はさらに細分されるが、小型住居址と合わせて本遺跡の９割近くを占める。北群の住居址はすべて中・小型住居址である。大型住居址は２軒検出されているが、いずれも15期に属するものである。超大型住居址は1軒であり、壁周囲に礎石を伴い、特異な構造をもつ。カマドは大別すると、石組カマドと粘土カマドがあり、前者が半数近くを占め最も多い。両者共に、燃焼部が壁を掘りこんでつくられるものがある。カマドをもたない住居址が２割近くあるのは、本遺跡の特徴といえる。また、焼痕、焼土堆積などが明確に捉えられるカマドが非常に少ないのも、一つの特徴といえるだろう。床は、地山をそのまま利用したものが半数近くある。また、部分的に竪穴の貼り床をほどこすものも多くみられる。柱穴が確認された住居址は２軒、周溝をもつ住居址は皆無である。なお、多数の大形の礫が、投げ込まれたような埋没状況を示す住居址が多くみられ注目される。

**ＳＢ１**　　位置：北群東半部，SB31のカマド煙道部を切る　　図版18

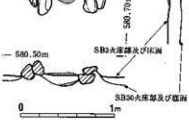
カマド：西壁中央部に想定。床面につきささる大形の礫の出土と、貯蔵穴と考えられるピットが近接することが根拠となる。床：中央部からカマド部にかけて堅緻な貼床（東西2.5m、南北1.5m、最大厚３cm）がみられ、他は地山の砂礫層である。その他の施設：貯蔵穴と考えられるピット１。覆土に焼土・炭化物の混入が少ないこと（各１%）、深いことが根拠となる。遺物の出土状況：平面分布では、住居址北東隅・貼床部上部・ピット周辺の三箇所に集中しており、この分布の在り方は、屋内の機能空間を考える上から興味深い事実である。遺物の接合関係は、SB２・３・５・８・11・15・30・32・SＩ１との間で認められ距離的にも広範囲にわたる。出土遺物：土器は、８期の様相を示す遺物が出土しており、他に、刀子・不明鉄製品・羽口がそれぞれ１点出土している。時期：８期。

**ＳＢ２**　　位置：北群東半部，SB31の南半部を切る　　図版18

カマド：西壁南端部に位置する石組カマドである。両袖の石組は平行に並び、袖部は一部に地山掘り残しがみられる。床：南壁中央部からピットにかけて堅緻な部分がある（長さ1.5m、幅0.5m）。その他の施設：一辺0.9mの方形プランで、すり鉢状の断面形を呈するピットがカマドの反対側の壁に接して検出された。覆土には焼土、炭化物を多く含む（７%）。遺物の出土状況：住居址中央部に大形の礫が投げ込まれた状態で、一定のレベル（床面やや上）をもって検出された。礫の中には、カマド天井石に用いられたと思われる焼損の著しい礫も含まれ、また、土器片等もそれらと同位、あるいは下位から出土している。これらは同時性が想定され、さらに、住居廃絶後の一括投棄と捉えられる。したがって、これらの遺物は本址の帰属時期に極めて近いものと捉えられる。他遺構との遺物の接合関係では、SB １・３・５・８・11・30と北群の住居址群のみにみられる。出土遺物：土器は、８期の様相を示す遺物が出土しており、他に、刀子1点、不明鉄製品２点と墨書土器が２点出土している。時期：８期。

**ＳＢ３**　　位置：北群南東隅，SB30を切る　　図版18

カマド：焼土堆積が２枚みられ、そのうち上位のものが本址の火床部で、下位の焼土堆積がSB30のものである。床面がそれぞれ同レベルで捉えられたことを根拠とする。したがって、本址のカマドはSB30のカマドの石組等を再利用したものといえる。煙道部と燃焼部の境には、大形の礫が崩落した状態で出土しており、本来はSB27のように煙道部の構造の一部として機能していた礫であろう。床：ほとんどがSB30の覆土上であるが、特に堅い部分等はなかった。その他の施設：床面中央やや南よりに径約１mのピットが１基検出された。ピット内からは10数個の礫とともに土師器片が出土したが、このピット及び礫の機能は不明である。



第23図　北方遺跡　SB3·30カマド

遺物の出土状況：床面直上からの出土が大半で、床面のほぼ全域から出土している。中でも、食器は比較的完形に近いものが多く、鎌は壁際床面直上からの出土であり、本址の帰属時期に近い遺物といえるだろう。また、土師器甕の個体数が多いのも本址の特徴である。南東部の床面付近では、多数の大形の礫が投げ込まれたかのように出土している。また、SB１・２・５・11・30と、SB２同様北群の住居址群内での遺物の接合関係がみられる。出土遺物：土器は８期の様相を示す遺物が出土しており、他に、鎌、不明鉄製品が各１点と炭化種子（堅果類）が１点出土している。時期：８期。

**ＳＢ４**　　位置：北群東端部　　図版18

カマド：石組のカマドで、両袖の石組は「ハ」の字状に住居址内部に向かい若干開いている。石組は粘土混じりの土によって整形されていた。支脚石は、燃焼部奥壁に近い部分にあり、その上面には磨耗痕がみられた。袖基部に地山（壁）が掘り残されている部分が利用され、荒掘り後石を組み、袖土を貼った状況が

観察された。また、カマド部付近、特に南側は床が全体に比べ10cm程高まっており、床を整形する際にもカマド部を意識していたことが窺える。これらのことは、本址構築の設計段階で、すでにカマドの設計見通しがあったことを推定させる。床：中央部に青灰色の粘性を帯びた土が混入する堅緻な部分（厚さ１cm）があり、そのまわり及び床面北半部には、中央部ほどではないが、小豆大の礫を含んだ堅い部分が広がる。それに対し、南半部は地山の砂礫層であった。遺物の出土状況：床面に近いところでは、東壁南部の床面が高まっている部分に遺物が集中している。ここからは、完形及び完形に近い状態で食器が数多く出土しており、中には、完形の黒色土器Ａ杯Ａが２枚重なった状態で出土しているものもみられた。これらの遺物は本址に伴う遺物、あるいは本址の帰属時期に極めて近い遺物として捉えられる。刀子や台石もここから出土している。また、住居址中央部では、多数の大形の礫が投げ込まれたかのように、床面からやや浮いた状態で一定のレベルを保って出土している。これらの礫の中には焼損を受けているものもみられた。遺物の接合関係は、住居址内ではみられるものの、他の遺構間ではみられなかった。出土遺物：土器では、８期の様相を示す遺物が出土しており、他に、刀子・砥石・台石が各１点、不明鉄製品が１点と墨書土器が１点出土している。時期：８期。

第24図　北方遺跡　ＳＢ４

**ＳＢ５**　　位置：北群中央部，SB13・14を切る　　図版18

カマド：石組のカマドで、支脚石をほぼ中央に挟み、両袖石は平行に並ぶ。この袖石の一部は、ＩＤ層上面での遺構検出の際にすでに露出していた。土師器甕の大形破片が、内面を袖石側に向け、貼りついた状態で出土していることから、これらの土器片が袖の補強材として使用されていたことが想定される。また、焼損の著しい大形の礫が割れた状態で焚口部から出土しており、カマド天井石の崩落かと思われる。床：SB13・14と重複している部分では、本址の床面の方が高いため、それぞれの覆土が本址の床面となり、重複していない他の部分（中央部）は、地山の砂礫層である。両者ともに、床を貼ったり、たたきしめているような状況はみられなかった。遺物の出土状況：カマド部に遺物の集中がみられる。カマド部の遺物は食器も完形に近いものが多く、煮炊具も大形破片が多い。それに対し、住居址全体から散漫に出土する遺物は、食器本来の機能を果たし得ない状態のものがほとんどである。このことから、前者の方がより本址の帰属時期に近い遺物として捉えられるだろう。なお、墨書土器は前者、刀子は後者からの出土である。他遺構との間には、SB１・２・３・11とに遺物の接合関係があり、北群の住居址群の中でも比較的近接する住居址間にみられる。出土遺物：土器は８期の様相を示す遺物が出土しており、他に刀子、不明鉄製品、砥石が各１点と墨書土器（「青」）が１点出土している。時期：８期。

**ＳＢ６**　　位置：北群北部　　図版17・18・19

カマド：西壁南端部を半円状に張り出して構築されている。袖部については、不明であるが、火床部に近接して径10～20cmの礫が数点出土しており、これらがカマドの石組であった可能性も考えられる。床：全

面が地山の砂礫層であり、貼り床、堅緻な部分等は検出されなかった。その他の施設：床面のほぼ中央部で、すり鉢状に掘り込まれた楕円形の火床が検出された。遺物の出土状況：遺物は、南西部(カマド周辺部)に集中する傾向がみられた。この遺物集中部を抱き込むかのように大形の礫が分布している。これらの礫は、いずれも床面から10cm浮いた状態で出土している。土器は床面直上からの出土も多くみられたが、その大部分が破片であった。また、遺構間での接合関係はみられなかった。出土遺物：土器は8期の様相を示す遺物が出土しており、他に刀子が2点と墨書土器が2点出土。時期：8期。

**ＳＢ７**　　位置：北群西端部　　図版17

カマド：北東隅に炭化物の集中がみられたが、焼土，袖石及びその抜き取り痕や地山の高まりなど、カマドの構築を暗示させるものは検出されなかった。遺物の出土状況：南西部に集中。食器は完形あるいは完形に近い状態のものが多く、鋤鍬先・鉄鏃もこの部分から出土している。これらの遺物は床面から3～10cm程浮いた状態で出土しており、本址の覆土の堆積状況は一気に埋没したことを示しており、これらの遺物が本址の帰属時期に極めて近いものと捉えられる。また、遺構間での接合関係はみられなかった。出土遺物：出土した遺物は、その種類、セット関係においても、カマドをもつ住居址と何等かわりはない。土器では、8期の様相を示す遺物が出土しており、他に鋤鍬先・鉄鏃が各1点出土している。時期：8期。

**ＳＢ８**　　位置：北群西端部　　図版17

カマド：なし。床：全面が地山の砂礫層であるが、北部は細・中礫を少量含む砂層であり、この部分にピットが穿たれている。その他の施設：北壁際中央部に76×54cmの楕円形プランを呈する深さ36cmのピットが1基検出された。覆土には炭化物を少量含む。用途は不明。また、東壁の中央部付近の床面から、径約30cmのロームブロックが検出された。本遺跡及び周囲にロームの供給源はなく、どこからか持ち込まれたものと思われる。土器・土製品などを製作する際の生地土にしたものか、あるいはカマドの袖の補強材として利用したものか、その用途は不明である。遺物の出土状況：覆土は単層であるのに対し遺物は東半部の覆土下部に集中する。土器は破片のものが多い。本址の東側には住居址群が展開していることから、東側からの投棄とも考えられる。他遺構との遺物の接合関係は、SB 1・2との間にみられる。出土遺物：土器は8期の様相を示す遺物が出土しており、他に不明鉄製品・墨書土器・転用硯が各1点出土している。時期：8期

**ＳＢ９**　　位置：北群西半部　　図版17

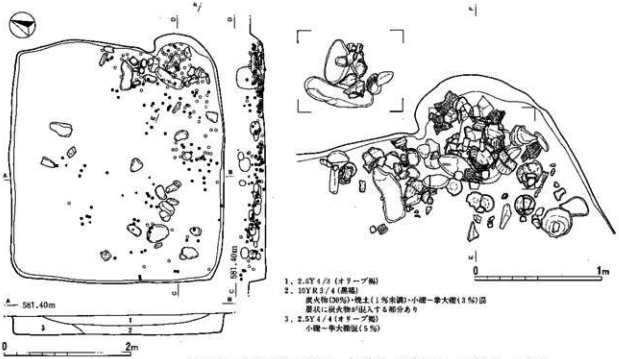
カマド：西壁北端部に壁を大きく掘り込んで構築されており、支脚石、袖石も壁のラインより外側に設置されている。床：全面が地山の砂礫層である。中央部に炭化物が集中する部分がみられたが、掘り込みなどの施設を想定させるものは検出されなかった。遺物の出土状況：カマド部左脇に集中する他、全体から散漫に出土している。出土遺物：土器は8期の様相を示すものが出土しており、他に刀子1点・不明鉄製品3点・羽口1点・転用硯1点が出土している。時期：8期。

**ＳＢ１０**　　位置：北群西半部　　図版17・18

カマド：壁への掘り込みは函形に近く、燃焼部に炭化物の集中がみられた。また、燃焼部の上面からは、小～中礫が30点余集中して出土しており、石組のカマドであった可能性もあるだろう。床：全面が地山の砂礫層である。遺物の出土状況：全体から散漫に出土する。出土遺物：土器の出土量は全体的に少ないが、8期の様相を示すものが出土している。土器以外の遺物は出土していない。時期：8期。

**ＳＢ１１**　　位置：北群中央部　　図版18

カマド：燃焼部を壁外へ掘り込む形態のもので、住居址のプランと合わせてSB 6と非常に似通っている。石組カマドで、袖石の残存状況は悪く、左側に1、右側に5点残存する他、抜き取り痕等はみられなかった。カマドの主軸は住居址の主軸方向とは異なり、床面中央に向けて開口している。支脚石は袖石とほぼ




第25図　北方遺跡　SB11　（●食器、○煮炊具、▲貯蔵具、★砥石）

平行に並んで、壁のラインより内側に１点、奥壁に近いところに１点の計２点あり、両者ともに被熱の痕跡が観察された。奥壁には、焼痕及び焼土堆積がみられるが、焚口部からみて奥壁の支脚石の影となる部分には、それがみられなかった。天井石については、使用時の形態で残っているものはないが、袖石最前部にかかっていた焼損の著しい細長い巨礫と、カマド部からはずれた部分にある扁平で被熱を受けた細長い巨礫の２点については、焼損状態、形状から天井石と捉えられる。前者については、焼損部の幅が袖石最前列の内のりとほぼ同様な点が指摘される。床：全面地山の砂礫層。埋没：覆土は３層に分層されるが、２層には多量の炭化物が混入しており(30%)、最大層厚30cmで、炭化物層と砂質土層が互層をなす部分もみられた。近隣の住居からのカマド内残滓の投棄も想定される。この２層の分布範囲は住居址南東部にかたよっており、この範囲は遺物の集中する範囲とほぼ合致する。遺物の出土状況：カマド部及びその周辺部と住居址南壁中央部に集中する。カマド部では、土師器甕の完形に近いものや大形破片が主体となって出土し、その状況は投棄されたかのようである。一方、カマド部右脇では、土師器・須恵器甕や黒色土器Ａなどが床面直上に置かれたかのように出土している。南壁中央部の遺物も床面直上のものがほとんどである。遺物集中部以外では破片が多いのに対し、これら集中部の遺物はほとんどが完形及び完形に近い状態で出土している。また、SB １・２・３・５との間に遺物の接合関係がみられた。出土遺物：土器は８期の様相を示すものが出土しており、その出土量は極めて豊富で、中でも土師器甕が多いのが特徴である。他に、砥石・墨書土器・転用硯が各２点出土している。時期：８期。

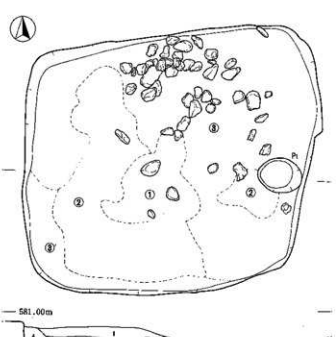
**ＳＢ１２**　　位置：北群中央部，SB13を切る（SB24との新旧関係は不明）　　図版18

カマド：Ｐ１がカマドの燃焼部あるいは掘り方であった可能性が強い。ピット内には焼土ブロック・炭化物が分布し、他の覆土に比べ粘質である。また、壁の立ち上がりの角度が鈍角であり、西側に住居址の掘り方が存在することなどによる。床：竪穴構築時の荒掘りの痕跡がみられ、第26図の①,②の部分はそれらを埋めた部分であり、①ではさらに堅緻にたたきしめられている。Ｐ１に接する②は、他の荒掘り痕と若干離れていることなどから、カマドの掘り方であった可能性がある。また、①の堅緻な部分はテーブル状に若干高まっている。遺物の出土状況：住居址北東部に集中する。土器はいずれも床面近くから出土しているが、破片のものが多い。大形の礫は北壁寄りで密に分布し、レベルも床面に近いものが多く、投げ込まれたか

のような状態で出土している。出土遺物：土器は8期の様相を示すものが出土しており、他に不明鉄製品3点と羽口・土錘が各1点出土している。時期：8期。

**SB13**　　位置：北群中央部，SB 5・12に切られる　　図版18

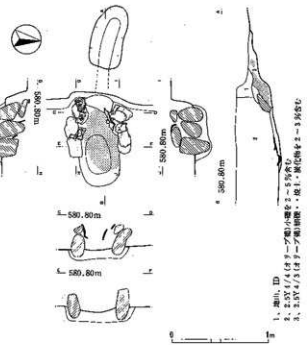
カマド：石組のカマドで、両袖石は床面中央にむけて「ハ」の字状に開いている。支脚石をほぼ中央に挟む。燃焼部と煙道部の境には小児頭大の礫が渡されている。袖石は掘り方内に据えられており、支脚石は地山まで達している。床：中央部に堅緻な部分（厚さ5cm）がみられ、その周囲にやや軟質の貼床（2～3cm）が施されている。遺物の出土状況：カマド部周辺に集中する。カマド内に土師器甕の大形破片が集中するほかは、ほとんどのものが小破片である。カマド周辺にみられる大形の礫は、焼損部や被熱の痕跡がみられるものが多く、カマドに何等かのかかちで関与していたものであろう。また、北壁の中央部には、壁に接して凹石が凹部を上に向けて床面直上から出土している。出土遺物：土器は8期の様相を示すものが出土しており、他に刀子・鎌・砥石・墨書土器が各1点出土している。時期：8期。




第26図　北方遺跡　SB12

**SB14**　　位置：北群中央部，SB 5に切られる　図版18

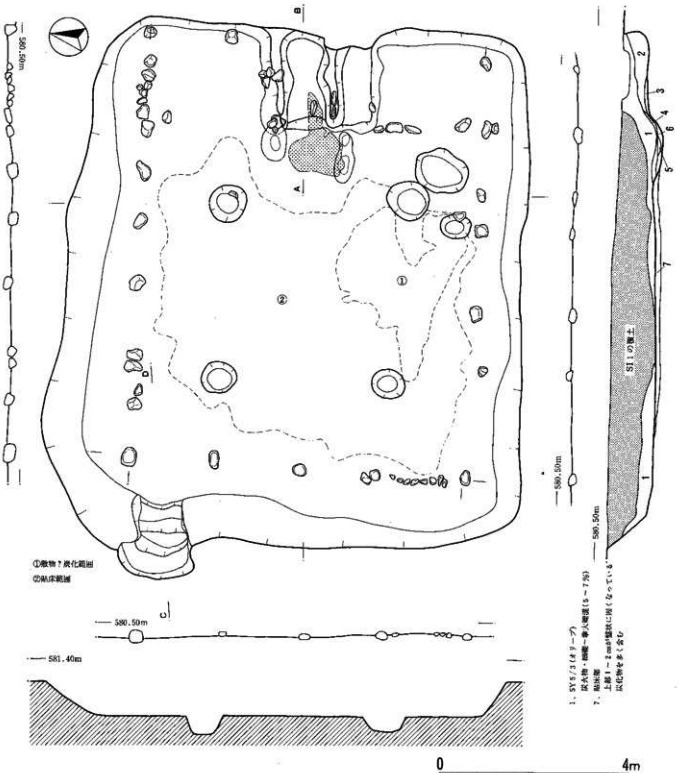
カマド：両袖石がほぼ平行に並ぶ石組カマド。掘り方内に埋設された袖石の上部に拳大の礫を載せ、さらに、土師器甕の大形破片が袖石を覆うように張り付けられている状況が観察された。支脚石及びその痕跡は検出されなかった。燃焼部と煙道部の境に小児頭大の礫が渡されている。煙道部はトンネル状に地山を掘り抜いており、石組カマドとしては本遺跡で唯一の例である。煙道部の主軸はカマド（住居址）の主軸から北へ11°ずれている。床：全面地山の砂礫層。その他の施設：床面の南西隅から、四つの細長い大形の礫からなる組石が検出された。石に囲まれた部分は若干凹んでおり、柱のおさえとして機能していた可能性が考えられよう。遺物の出土状況：完形に近い食器類が、カマド内・住居址東壁際にわずかにみられるが、土師器甕の大形破片などは住居址中央部の床面近くに集中する。また、土師器甕の個体数が多いのも本址の特徴である。出土遺物：土器は8期の様相を示すものが出土しており、他に鎌・墨書土器が各1点出土している。時期：8期。



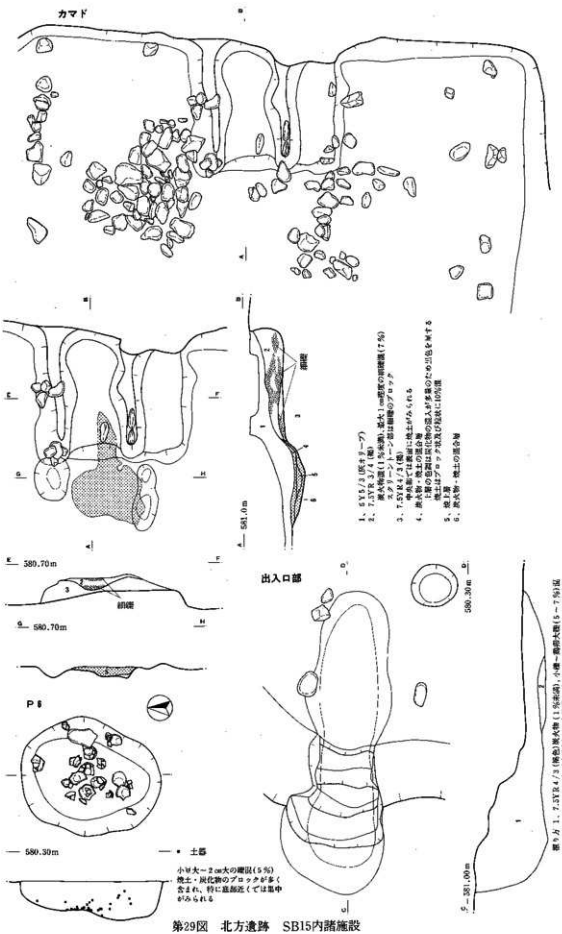

第27図　北方遺跡　SB14カマド実測図

**ＳＢ１５**　　位置：南群中央部，ＳＩ１に切られる　　図版15

検出：東西15m、南北10mにわたる範囲で灰褐色を呈する部分を検出。数軒の住居址の重複が予想され、平面精査を行ったが、プラン等の確認はできず、中央部に十字にベルトを残し、面的に掘り下げた結果、東側に約９ｍ四方の部分（本址）と、西側の部分（SE１）に分かれた。ベルトに沿ってトレンチを入れたところ、中央部で炭化物層と灰層が互層をなす部分が数枚みられ、さらに、その下から堅緻な部分が広がりをもって検出された。この時点では一つの遺構と判断し、層ごとに掘り下げを行った。しかし、断面精査




第28図　北方遺跡　SB15




第29図　北方遺跡　SB15内諸施設

の所見と出土する遺物の種類、出土状況などを検討した結果、炭化物層・灰層を境にその上（SI１）と下（本址）では性格的に異なる別遺構であると判断するに至った。カマド：石組カマドで、残存状況は非常に悪い。竪穴構築の際に、東壁中央部を約2.5×２m、高さ約0.2mの範囲で掘り残し、その部分を煙道部としている。煙道部では、長軸を横方向に据えた人頭大の礫による石組がみられた。この石組は、住居址覆土とは全く異なった土で覆われている。地山掘り残し部、石組、貼り土の三者によって煙道部は形成されており、煙道を新たに作り出している唯一の例である。燃焼部では、火床の左右に袖石の抜き取り痕がみられた。また、火床は床面を若干掘り凹めて作られており、焼土の堆積は最大で15cmにも及ぶ。火床と煙道の落差は約20cm。床・カマドの断面精査により、竪穴荒掘り後、床を貼ってからカマドを構築したと考えられる。床：中央部に非常に堅緻な貼床がみられ（厚さ１～２cm）、他は地山の砂礫層で、一部に礫間を埋めるように土が貼られている。貼床南半部の柱穴に挟まれたところでは、イネ科の植物が一定の方向で一面に並べられた状態で炭化していた。敷物であった可能性がある。柱穴：方形に配置された４本の主柱穴が検出された。柱間は3.8mを測り、柱痕跡は検出されなかった。また、東壁を除いた三方の壁際からは、ほぼ等間隔に、ほとんどが平坦面を上に向けた人頭大の礫が直線的に並び、加えて、北壁と南壁のものが対をなしていることなどから礎石と判断した。西壁－５点の石がほぼ等間隔（1.8m）に並ぶ。石の上面は平坦である。北壁－７点の石が並ぶが、間隔は一定でない（１～２m）。石の上面は平坦なものが多いが山形になるものもある。南壁－７点の石が並ぶ。間隔は一定ではないが、北壁の石の並びと対をなしている。石の上面についても北壁と同様である。その他の施設：Ｐ5からは、焼けた獣骨片が出土している。Ｐ6は、完形に近い食器の出土が多く、推定個体数は37個体に及ぶ。出入口部は、壁の精査中に約１mにわたって砂礫層が切れている部分に、１層が入っていることにより検出された。出入口部掘り方を含め、断面精査を行ったところ、１層下面が階段状になることが観察された。遺物の出土状況：住居址の規模に比して、遺物量はさほど多くない。土器では煮炊具が極めて少ないのが特徴である。食器でも完形の遺物が少なく、床面直上の遺物も少ない。その点でカマド内の土師器甕、Ｐ6の食器は注意される。鋤鍬先は、西壁際の床面直上からの出土である。ただし、礎石の外側である。また、カマド部及びその左右から大形の礫が多量に出土している。これらの礫はカマドの構造の一部であったと考えられる。SB1,SI１と遺物の接合関係がみられる。出土遺物：土器は８期の様相を示すものが出土しており、他に鋤鍬先１点・不明鉄製品３点・墨書土器７点（「青」２・「冂」２）・転用硯１点が出土している。時期：８期。

**ＳＢ１６**　　位置：南群北部　　図版16

カマド：燃焼部を壁外に掘り込む石組カマドで、石組は奥壁に近い部分で右袖のみ残存する。左袖では袖石の抜き取り痕が住居址壁際に一か所検出されている。床：床面は堅固で、やや東に傾斜する。遺物の出土状況：遺物の出土量は全体的に極めて少なく、住居址西半に散漫に分布する。また、大形の礫が床面に近いレベルで、散漫に出土している。出土遺物：土器は量的に少なく、15期の遺物がみられ、他に８期の遺物が出土している。土器以外の遺物は出土していない。時期：住居址の規模、カマドの形態及び遺物の様相から15期と判断した。

**ＳＢ１７**　　位置：南群北西部，大半が調査区外にかかる　　図版16

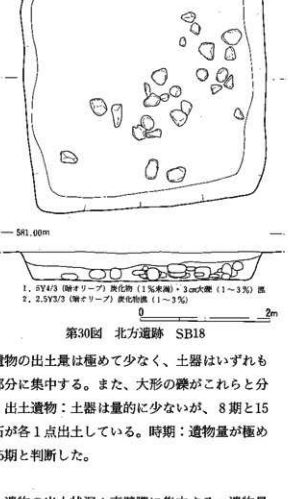
床：全面地山の砂礫層。その他の施設：調査区外にかかりながら、ピットが１基検出された。覆土は、住居址のそれとほぼ共通し、やや砂の混入度が高い。柱穴か否かは不明である。遺物の出土状況：遺物の出土量は全体的に極めて少なく、いずれも小破片であった。出土遺物：土器では８期と15期の遺物が混在する。土器以外の遺物は出土していない。時期：土器の全体量が少ないながらも、15期の遺物が多いこと、住居址の推定規模から、15期と判断した。

**ＳＢ１８**　　位置：南群北東部　　図版14

カマド：なし。床：全面地山の砂礫層。遺物の出土状況：住居址北東半部の床面及び床面近くに集中する。また、大形の礫がこれらと分布域を同じくして、投げ込まれたかのように出土している。埋没状況：覆土は２層に分層される。先の大形の礫は下部層のみにみられる。したがって、住居廃絶後、下部層の堆積とともに大形の礫が投入され、上部層が堆積したというプロセスが想定される。出土遺物：土器は量的に少ないが、８期の様相を示すものが出土している。土器以外の遺物は出土していない。時期：８期。

**ＳＢ１９**　　位置：南群北部　　図版16

カマド：燃焼部を半円形に壁を掘り込む。火床には炭化物・焼土ブロックが多量に含まれ、焼土の堆積もみられた。また、大形の礫が火床内、カマド部周辺から数点出土しており、これらは、カマドの一部であった可能性がある。床：竪穴荒掘り後、土を入れて、床面を平坦に整えている。堅緻な部分等はみられなかった。床面には多数の炭化物が散っていた。その他の施設：90×58cmの楕円形を呈し、深さ６cmの皿状のピットが１基検出された。遺物の出土状態：遺物の出土量は極めて少なく、土器はいずれも破片の状態である。これらは、住居址中央部の床面に近い部分に集中する。また、大形の礫がこれらと分布域を同じくして、投げ込まれたかのように出土している。出土遺物：土器は量的に少ないが、８期と15期の遺物が混在する。土器以外では、鉄製金具・鉄滓・砥石が各１点出土している。時期：遺物量が極めて少ないこと、15期の土器が出土していることなどから、15期と判断した。




第30図　北方遺跡　SB18

**ＳＢ２０**　　位置：南群北部　　図版15

カマド：なし。床：全面地山の砂礫層。若干の凹凸がある。遺物の出土状況：東壁際に集中する。遺物量は概して少ないものの、土器は比較的完形に近いものが多く、特に食器の占める割合が非常に高い。いずれも、床面あるいはやや浮いた状態で出土している。また、大形の礫がこれらと分布域を同じくして、投げ込まれたかのように出土している。出土遺物：土器は8期の様相を示すものが出土しており、他に刀子１点・鉄滓３点が出土している。時期：８期。

**ＳＢ２１**　　位置：南群北西部，一部調査区外にかかる　　図版15

カマド：袖石がほぼ平行に並ぶ石組カマドである。焚口は火床の幅に比べかなり広くなっており（80×50cm）、床面を若干掘り凹めている。灰・炭化物が多量に堆積している。火床及び煙道の一部に焼痕、焼土堆積がみられた。床：全面地山の砂礫層であるが、南北壁に沿って幅約１m、高さ５cmのテラスを作り出している。北側のテラスは、カマドの手前１mで切れている。その他の施設：カマド右脇に径70cm・深さ10cmのピットが検出された。覆土に炭化物を含み、刀子１点が出土している。遺物の出土状況：遺物の出土量は極めて少なく、カマド周辺部及び住居址西半部に散漫に分布する。土器はいずれも小破片である。また、住居址西半部には、床面から浮いた状態で大形の礫が数点出土している。出土遺物：土器は量的に少ないが、15期の様相を示すものが出土している。他に、刀子が１点出土している。時期：15期。

**ＳＢ２２**　　位置：南群北西部，ＳＤ２に切られる　　図版16

カマド：なし。床：竪穴荒掘り後、土を入れて、床面を平坦に整えている。堅緻な部分等はみられなかった。遺物の出土状況：遺物の出土量は少なく、北壁際に散漫に分布する。大形の礫も分布域を同じくする。

出土遺物：土器は量的に少ないが、８期の様相を示すものが出土している。土器以外の遺物は出土していない。時期：８期。

**ＳＢ２３**　位置：北群東端部，SK584・585を切る　図版18・19

カマド：両袖に石芯をもつ粘土カマドで、燃焼部を函形に壁を掘り込む。火床部は、焼土堆積もなく、床面を掘り凹めた様子もみられなかった。床：南半部に、焼土粒・炭化物を含む堅緻な部分が広がる（最大厚８㎝）。他は、地山の砂礫層。その他の施設：調査時には土坑として捉えていたが、断面図の検討、遺物の出土状況及び接合関係等から出入口部と判断した。遺物の出土状況：住居址南東隅で、カマドの右脇にあたる部分に集中する他、住居址全体に散漫に分布する。いずれも床面からやや浮いた位置から出土しており、土器は破片が多い。遺物集中部からは、完形の軟質須恵器、黒色土器Ａが２枚重なった状態で出土している。集中部の遺物は、本址の帰属時期に極めて近いものと考えられる。遺物集中部の南壁に接したところには、上面が平坦な人頭大の礫が床面から出土しており、何等かの意図のもとに設置されたものと考えられる。出土遺物：土器は８期の様相を示すものが出土しており、他に、刀子２点・不明鉄製品・鉄滓・砥石・墨書土器が各１点出土している。時期：８期。

**ＳＢ２４**　位置：北群中央南端部，SB12との新旧関係は不明　図版18

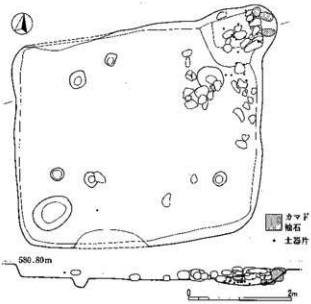
カマド：重機によって一部破壊されたため、不分明な部分が多い。右袖では、焼損の著しい大形の礫1点がカマド掘り方内に設置され、石芯となっていることや、他の袖石の抜き取り痕が検出されなかったことなどから、粘土カマドであった可能性が高い。ただし、石芯に接するように、焼損を受けた大形の礫が崩落した状態で出土している。また、燃焼部と煙道部の境には石（上面に焼痕）がはめこまれている。床：床面のほぼ中央部に、堅緻な貼床が東西に帯状にほどこされている。竪穴を掘る際に、床面を意識し、竪くする部分のみさらに掘り下げてから土を入れたと考えられる。その際、礫層の部分は掘らずに、上面の礫間に土を貼っていたことが観察された。遺物の出土状況：全体から出土しているが、特に住居址の南西隅及び南東隅に集中する。土器は完形に近いもの、あるいは大形破片が多く、床面や床面からやや浮いた状態で出土している。また、ＳＩ１と遺物の接合関係がみられる。出土遺物：土器は８期の様相を示すものが出土しており、他に砥石が１点出土。時期：８期。

**ＳＢ２５**　位置：南群南西部，SB32・中世土坑に切られる　図版14

検出：平面・断面精査の段階では、２軒の住居址が重複していることがわからず、壁を追っていった結果２軒の重複が捉えられた。カマド：不明。床：全面地山の砂礫層。遺物：なし。時期：SB32に切られること、本遺跡では古代の遺構は８期と15期に限られることから、８期と判断した。

**ＳＢ２６**　位置：南群南東部，SK164・中世土坑に切られる　図版14

カマド：燃焼部を壁外に掘り込む石組カマドで、石組は奥壁に残存する。北東隅に位置するが、その主軸は住居址のそれとほぼ同様である。奥壁に近い部分に支脚石が設




第31図　北方遺跡　SB26

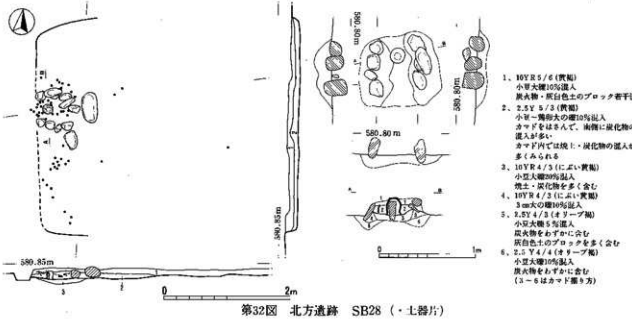
置されている。床：全面地山の砂礫層で、小刻みな凹凸がみられ、北東へ僅かに傾斜する。柱穴：４本の主柱穴は、東西に長い長方形に配置される。柱痕跡は検出されなかった。西側の主柱穴の周囲には、それぞれ深さ約５cmのピットがあり、支柱穴の可能性も考えられよう。その他の施設：南西隅に80×60cmの楕円形を呈する皿状のピットが検出されている。遺物の出土状況：遺物の出土量は少なく、そのほとんどがカマド部からの出土である。また、大形の礫がカマド部に集中しており、中には焼損を受けているものもあることから、これらは、カマドの構造の一部をなしていたと考えられる。出土遺物：土器は８期と15期のものが混在する。土器以外の遺物は出土していない。時期：カマドの形態及び15期の遺物の出土から、15期と判断した。

**ＳＢ２７**　　位置：北群北東隅，中世土坑に切られる　　図版19

カマド：燃焼部を若干奥壁に掘り込む粘土カマドで、石芯等の抜き取り痕はみられない。燃焼部と煙道部の境には石が渡されている（下面は煙道の幅で炭化物が付着）。床：中央部に堅緻な貼床とそれに接して、あまり堅固でない部分が検出された。他は地山の砂礫層。その他の施設：カマド右脇の壁が、約40cmにわたって若干張り出している。壁際からは大形の礫が３点重なって東西方向に列をなして出土しており、それはカマドの石組の状況に類似している。遺物の出土状況：出土量は少なく、覆土上部では全体に散在するが、床面に近い部分ではカマド部及び住居址北西隅に集中する。鉄は覆土上部からの出土である。カマド部周辺では食器、煮炊具の大形破片が、北西隅では煮炊具の大形破片が出土している。出土遺物：土器は量的に少ないが、８期の様相を示すものが出土しており、他に鉄・不明鉄製品が各１点出土している。時期：８期。

**ＳＢ２８**　　位置：北群北西隅　　図版19

検出：検出面で袖石と思われる石の一部が露出しており、周囲には土器片が分布していた。平面・断面精査の結果、カマド部のみが検出され、壁の立ち上がりや床面等は確認されなかった。そのため、カマドの構造から住居址プランを想定せざるを得なかった。カマド：両袖の石組が、住居址内部に向かって「ハ」の字状に若干開く。また、横断面でも「ハ」の字状に設置されている。支脚は奥壁近くに設置され、支脚石に土師器甕（第32図）を被せて用いている。床：地山の砂礫層で、カマド付近では、礫間に土を入れ平坦に仕上げている。遺物の出土状況：カマド部に集中する（特に奥壁、右袖部、カマド左脇）。完形及び完形に近い土器がほとんどである。出土遺物：土器は比較的少ないが、８期の様相を示すものが出土しており、




第32図　北方遺跡　SB28（・土器片）

他に墨書土器「冋」が１点出土している。時期：８期。

**ＳＢ２９**　　位置：北群南西隅　　図版17

カマド：燃焼部が壁外に掘り込まれる粘土カマドで、石芯が奥壁隅に左右各１点、火床と焚口の境（右）に１点設置されている。床：中央部に堅緻な貼床（1.5×1.3m）があり、これに接してカマド部までの範囲とピット周辺では掘り方がみられた。他は地山の砂礫層である。その他の施設：住居址南西隅に72×60cmの楕円形を呈する深さ10cm程の皿状のピットが検出された。遺物の出土状況：カマド部、ピット周辺に集中する。土器は完形に近いものが多く、みな床面近くから出土している。また、遺物の接合関係がSB32との間にみられ、距離的にかなり離れている。出土遺物：土器は８期の様相を示すものが出土している。土器以外の遺物は出土していない。時期：８期。

**ＳＢ３０**　　位置：北群南東隅，SB３に切られる　　図版18

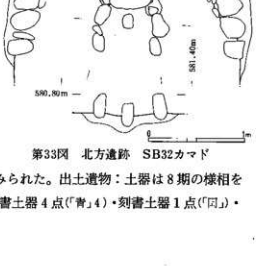
カマド：SB３で再利用される（SB3参照）。床：竪穴荒掘り後、土を入れて、床面を平坦に整えている。堅緻な部分はみられなかった。その他の施設：カマドの左側に、壁に接して大形の礫が５点、東西方向に列をなし、重なって出土している。遺物の出土状況：カマド部及びカマド右脇に集中する。カマド右脇と左脇の石組周辺からは、完形及び完形に近い土器が出土している。また、中央部では大形の礫が床面近くから出土している。SB１・２・３との間に遺物の接合関係がみられる。出土遺物：土器は８期の様相を示すものが出土しており、他に不明鉄製品が１点出土している。時期：８期。

**ＳＢ３１**　　位置：北群東半部，SB１・２に切られる　　図版18

カマド：北壁中央に位置する粘土カマドで、袖と住居址壁との接点には袖石及びその抜き取り痕が検出された。火床と煙道の落差が大きく、煙道はトンネル状に地山を掘り抜いている。床：全面地山の砂礫層。遺物の出土状況：出土量は少ないが、下部層ではやや大形の土器片が出土しており、それらのほとんどが土師器甕であった。また、住居址中央部の下部層からは、大形の礫が投げ込まれたかのように出土している。出土遺物：土器は量的に少ないが、８期の様相を示すものが出土している。土器以外の遺物は出土していない。時期：８期。

**ＳＢ３２**　　位置：南群南西部，SB25・SK619を切り、中世土坑に切られる　　図版14

カマド：両袖の石組が、住居址内部に向かって「ハ」の字状に若干開き、ほぼ中央に天井石がわたされている。石組は、他の住居址のカマドのそれよりも長いのが特徴といえる。支脚石は、燃焼部の中央より手前に設置されている。また、石組の補強材として拳大の礫が多用され、特に天井石がのる部分に多くみられた。床：地山の砂礫層を床とするが、礫間に土を貼り平坦面に仕上げている部分が多くみられた。その他の施設：床面南半のほぼ中央にピットが１基検出され、ピット内では大形の礫が直立する状態で出土した。遺物の出土状況：ほとんどが床面近くからの出土であり、特にカマド右脇に集中する。土器は完形に近いものが多い。また、床面中央部からは、大形の礫が投げ込まれたかのように出土している。



第33図　北方遺跡　SB32カマド

SB１・22・29と距離的にも離れた住居址間で遺物の接合関係がみられた。出土遺物：土器は８期の様相を象徴するものが出土しており、他に、釘１点・不明鉄製品２点・墨書土器４点（「青」４）・刻書土器１点（「冋」）・転用硯１点が出土している。時期：８期。

イ　溝址

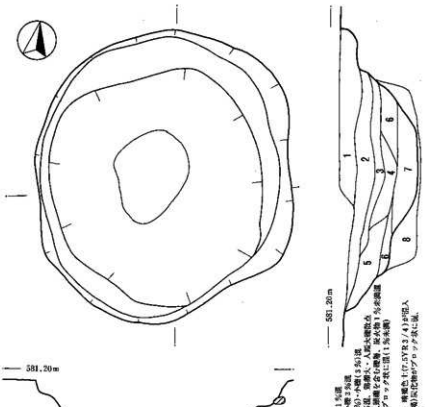
**ＳＤ２**　　位置：住居址南群北西部，SB22を切り、SK83に切られる　　図版16

規模・形状：長さ約22m、幅約１～1.5m、深さ約0.4mで、北西－南東方向に走る。断面形は船底状を呈する。覆土は単層である。遺物の出土状況：集中する箇所や、規則性などはみられず、混入と考えられる。出土遺物：土器はすべて破片で、８期と15期の遺物が混在している。時期：遺構の切り合い関係と８期の遺物量がはるかに優勢を占めることなどから８期と判断した。

ウ　井戸址

**ＳＥ１**　　位置：住居址南群中央部　　図版15

検出：ＩＤ層上面で、東西15m、南北10mにわたる範囲で灰褐色を呈する部分が検出され、一部はSB15として検出した。東西・南北にトレンチを入れ、再度プランを確認した。規模・形状：6.0×5.4mの南北に長い楕円形プランを呈し、深さは1.6mを測る。覆土の堆積状況：８層に分層される。８層上面では、中央部に炭化物の集中、南東部に一面に広がる人頭大の礫、西部にグライ化した土の堆積が検出されている。したがって８層上面が施設の底面であり、８層部分は掘り方に相当するものと判断した。１～７層は自然埋没と考えられる。１・２層上面にはＩＢ層（礫層）が堆積し、１・２層は隣接遺構の覆土と類似する。５・７層（礫層）では、礫が覆瓦構造を示している。遺物の出土状況：上層（１・２層）の遺物量は下層（３～７層）のそれに比べはるかに多い。しかし、両者とも完形に近い遺物はほとんどなく、遺物量も遺構の容量からすれば多いとはいえない。図版49－11は壁に密着するような状態で出土している。７層からは漆器片が出土している。出土遺物：土器は８期の様相を示すものが出土しており、他に不明鉄製品１点・墨書土器１点・転用砥２点・漆器１点が出土している。時期：８期。所見：底面（８層上面）にグライ化した土の堆積が検出され、本址使用時には、滞水があったことを示している。したがって、本址の機能としては、その規模からも井戸、あるいは貯水施設が想定される。また、底面から壁面にかけて一面に広がる人頭大の礫も南東部のみに限られることから、主にこの部分が水汲み等の際に使用されていたことが考えられる。根拠は薄いものの井戸址と捉えておきたい。



第34図　北方遺跡　SE１

エ　墓址

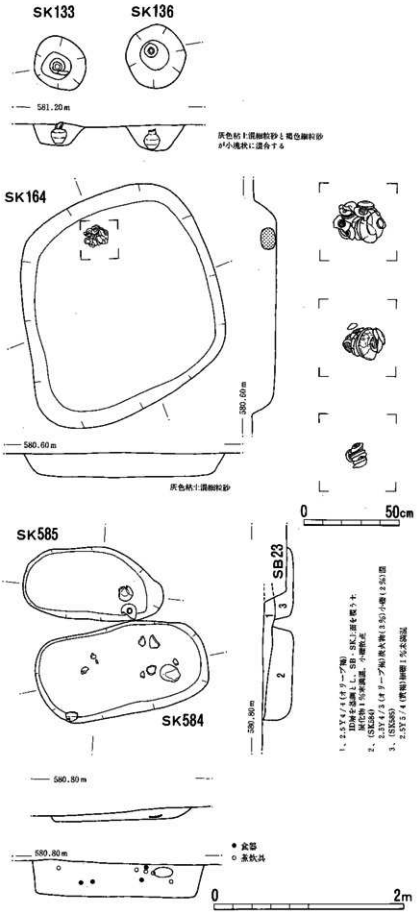
本遺跡で検出された古代の墓址は５基である。火葬墓として捉えられる墓址は検出されておらず、改葬墓と考えられる２基（SK133、136）を含め、土葬墓として把握される。出土遺物や遺構の切り合い関係から、８期に属するものが４基、15期に属するものが１基あり、改葬墓と捉えられる２基を除いてみなそれぞれの時期の住居址に接している。

**ＳＫ１３６**　　位置：住居址南群　　図版16

規模・形状：65×62cmの楕円形プランを呈し、深さは26cmを測る。ほぼ中央に須恵器長頸壺Ａ（図版48－１)が正位に据えられている。覆土は単一層である。同様の規模・形状で、同じく中央部に須恵器長頸壺Ａ（図版48－１）を正位に据えているSK133が隣接する。出土遺物：須恵器長頸壺Ａは口縁部を欠く。内部には土がつまっており、黒色土器Ａの細片が含まれていた。人骨の出土はみられない。時期：８期。所見：遺構の形状と須恵器長頸壺Ａが遺構中央に据えられていることからみて、墓址、あるいは祭祀的な性格をもつ遺構と判断した。

**ＳＫ１６４**　　位置：住居址南群，SB26･SK168を切る。　図版14

規模・形状：200×190cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは20cmを測る。覆土は単一層であり、明瞭なブロック構造はみられないが、下限付近に酸化鉄の沈着等はみられず、一気に埋没したものと解釈される。




第35図　北方遺跡　古代墓址

出土遺物：北壁際で底面から2cmほど浮いた状態で、土師器の杯AⅡが25点、椀が1点、ⅢAが3点出土している。6枚の杯AⅡが重ねられ、その上に杯AⅡ1枚が逆位で重なっており、これらが横位の状態で核となっている。これら7枚の杯AⅡをとりまくように他の杯AⅡが重ねられ、その上部にはⅢA・杯AⅢが逆位で重ねられ、それを覆うかのように杯AⅡが3枚重ねられている。さらに、一番外側に椀が逆位で重ねられている(第35図)。その様相は、あたかも玉葱やらっきょうの類のようであった。土器自体の作りはいずれも粗雑で、中には底部を薄く削り過ぎて穴があいているものもみられた。また、これらの土器は径約20cm、高さ約15cmの範囲にまとまることから、有機質の容器に入れられて埋納された可能性も考えられる。時期：15期。所見：副葬品として捉えられる土器群の出土、人為埋没と考えられる単一の覆土などから、本址を墓址と判断した。

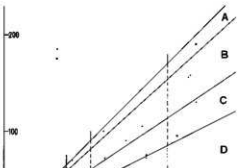
**ＳＫ５８５**　　位置：住居址北群，SB23に切られる　　図版18

検出：SB23の断面及び壁面の精査の際に確認された。SK584との新旧関係は不明。規模・形状：148×75cmの楕円形プランを呈し、深さは20cmを測る。覆土は単一層である。出土遺物：北壁に近いところで、黒色土器A椀と軟質須恵器杯が各1点、ほぼ完形の状態で出土している。両者とも底面からやや浮いた位置からの出土であるが、副葬品の可能性も考えられる。その他、土師器甕・須恵器甕の小片が出土している。時期：8期。所見：副葬品の可能性のある遺物の出土、土坑の平面形、単一の覆土から、本址を墓址と判断した。

オ　土坑

分類：本遺跡で検出された古代の土坑は以下のように分類される。

本遺跡では、Ⅰ群の土坑は検出されなかった。また、以下のような属性をもつ土坑がみられる。




第36図　北方遺跡　古代土坑長軸と短軸の関係

Ⅰ群：方形を基本形とする土坑
Ⅱ群：円形を基本形とする土坑
Ⅲ群：不整形な土坑

A類：長短軸比
　1：1～10：9
B類：長短軸比
　10：9～3：2
C類：長短軸比
　3：2～2：1
D類：長短軸比
　2：1～

1種：長軸　65cm未満
2種：長軸　65～90cm
3種：長軸　90～170cm
4種：長軸　170～250cm
5種：長軸　250cm以上

| | | Ⅱ |
|---|---|---|
| A | 1 | 1 |
| | 2 | 1 |
| 小　計 | | 2 |
| B | 1 | 1 |
| | 3 | 3 |
| | 4 | 2 |
| 小　計 | | 6 |
| C | 4 | 1 |
| D | 3 | 1 |
| 計 | | 10 |

| | |
|---|---|
| Ⅲ | 3 |
| 総計 | 10 |

第7表　北片遺跡　古代土坑形態分類

焼土堆積を伴う土坑：SK579（Ⅱ群C類3種）

組石を伴う土坑：SK72（Ⅱ群C類4種）、SK623（Ⅱ群B類4種）

時期：出土遺物、遺構の切り合い関係から、住居址と同じように8期と15期の土坑がある。8期の土坑が8割以上を占め、Ⅲ群の土坑はみな8期の所産である。

(ｱ)　Ⅱ群の土坑

分布：住居址北群に主として分布し、いずれも住居址の周囲に構築されている。住居址南群に分布するSB83（8期）、SK569（15期）は、それぞれの時期の住居址からやや離れて構築されている。

**ＳＫ７２**（Ⅱ群C類4種）　　位置：住居址北群　　図版17

規模・形状：200×130cmの南北に長い楕円形プランを呈し、深さは15cmを測る。底面は焼土堆積と炭化物

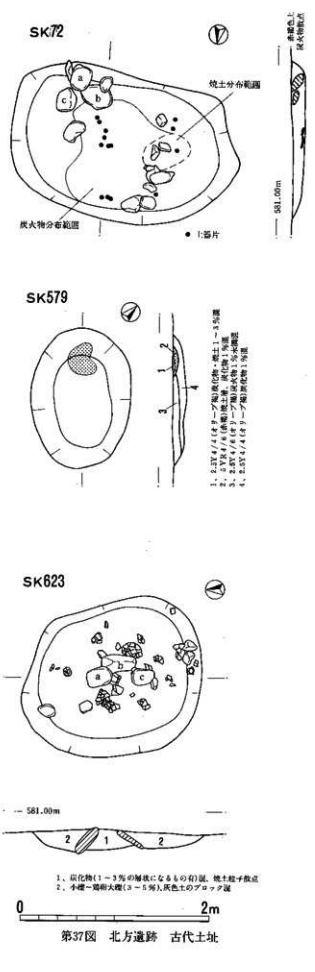
集中がみられる平坦な面であり、南東部には住居址の石組カマドに類似した組石が据えられている。覆土の堆積状況：単一層であり、組石の状況や散乱する他の小児頭大等の礫の出土から、組石を破壊した後、一気に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物：底面中央部から、羽釜片がおよそ１個体分出土しており（図版48）、本址に伴うものと考えられる。他に、土製支脚が１点と土師器杯の小片が出土している。時期：15期。所見：組石ｂ・ｃは両者の間に空間があいていたことを示唆するかのように、いずれも外側に傾斜しており、組石ａには焼痕が一面に認められた。前者はカマド袖石、後者はカマド天井石と同様な役目を果たしていたと考えられる。このような組石の状況、ほぼ１個体分の羽釜片及び土製支脚の出土、底面の焼土堆積・炭化物集中などから、本址は屋外カマドとでもいうべき調理施設であったと考えられる。

**ＳＫ５７９**（Ⅱ群Ｂ類３種）　位置：住居址北群　図版17

規模・形状：144×105cmの楕円形プランを呈し、深さは14cmを測る。覆土の堆積状況：覆土は４層に分層され、各層とも炭化物を混入する。また、焼土堆積（２層）が北部にみられるなど、火に関わりをもつ土坑である。出土遺物：図示しうるものはないが、土師器杯・軟質須恵器杯・須恵器甕の破片が出土している。時期：８期。

**ＳＫ６２３**（Ⅱ群Ｂ類４種）　位置：住居址北群　図版17

検出：ＩＤ層上面で、住居址の石組カマドと思われるような石が一部露出しており、土師器甕を中心とした土器片が、その周囲に円形の広がりをもって分布する部分が検出された。住居址を想定し、石を中心に十字にトレンチを入れ断面精査を行ったが、床・壁等はみられず、円形の範囲外からは遺物の出土もなかった。規模・形状：194×156cmの楕円形プランを呈し、深さは20cmを測る。中央部に住居址の石組カマドに類似した組石が据えられている。組石は人頭大の偏平な礫3点からなる。覆土の堆積状況：組石の設置されている部分とその周囲とに分層される。後者は前者に比べ、小豆大の礫の混入が多く、灰色土がブロック状に混入し、人為堆積の感が強い。したがって、２層部分は掘り方であった可能性も考えられる。出土遺物：図示し得る




第37図　北方遺跡　古代土址

ものは少ないが、8期の土器様相を示す土器片が出土している。食器と煮炊具の割合は13：9で、煮炊具の占める割合が非常に高いことが注目される。時期：8期。所見：組石の状況から、SK72と同様に、組石a・cがカマド袖石、組石bがカマド天井石あるいは燃焼部奥壁の役割を果たしていたと考えられる。また、出土土器の中で煮炊具の占める割合が非常に高いことも合わせて、本址は屋外カマドとでもいうべき屋外の調理施設であったと考えられる。

(イ) Ⅲ群の土坑

分布：住居址南群に2基、北群に1基分布し、いずれも8期に属する。SK619を除き該期の住居址から離れた位置に分布する。

**SK619**　　位置：住居址南群，SB25・32に切られる　　図版14

検出：SB25・32に大部分が切られているため全容はつかめない。南北380cm、東西210cm以上の不整形なプランを呈するが、ある程度方形を意識していたと思われる。深さは50cmを測り、底面は平坦である。竪穴状の遺構として捉えられる。覆土は単一層である。出土遺物：器種不明ではあるが、黒色土器A・灰釉陶器の小片が出土している。時期：8期。所見：規模、深さからいっても竪穴住居址と遜色がなく、底面が平坦であることから、居住機能を備えた遺構といえるだろう。

カ　水田址

**SL1**　　位置：調査区北部　　第38図

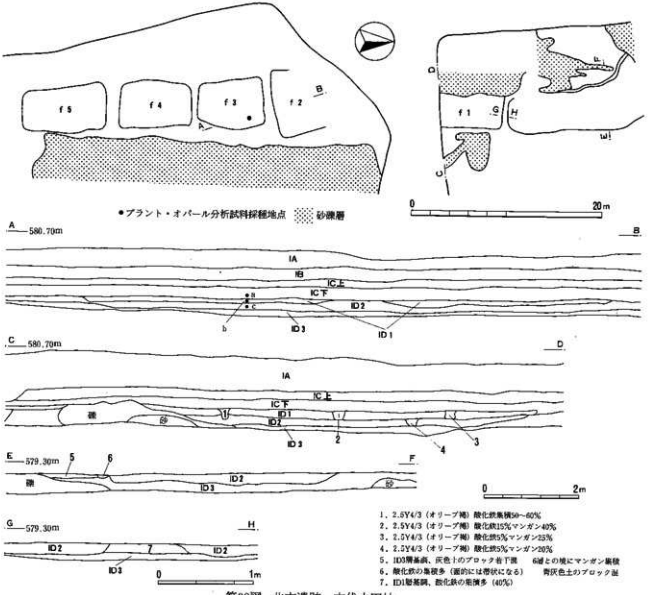
検出：トレンチでID層上部に逆グライ化した土壌が観察された。3層に細分でき、ID1層上部は灰色化土層、ID1層下部は鉄斑がわずかに沈積する灰色化土層、ID2層は酸化鉄・マンガン等の集積層である(第38図)。なお、ID1層とID2層とは土壌化の差異により明瞭に区分でき、土質もID1層が粘土質であるのに対してID2層は砂質であり、識別は容易である。また、ID2層には「大理石文様」は認められなかった。断面でID1層下部の高まりが認められ、この高まりの頂部にはID1層上部が欠如する。この部分をアゼと推定し、面的な調査を行った。東西方向に走る約5mほどの帯状のID1層下部を検出し（第38図)、断面形態と総合判断してアゼと認定した。水田土壌とアゼの確認に加え、古環境研究所(埼玉県大宮市)に依頼して、プラントオパール分析を行った。結果は第8表のとおりである。ID1層より1,500～2,900個／ccと少量のイネのプラントオパールが検出されている。少量であった原因として、ID1層のみにプラントオパールが検出されていること、下位のID2層に「大理石文様」が認められないことから、上位層からの落ち込みや他所からの地表水による混入は難しいと考えられるので、稲作期間が短かったか、稲わらが外へ持ち出されたことが予想されている(古環境研究所)。検出された水田遺構はアゼ4、田面5から構成され(第38図)、それぞれI－1～4、f－1～5とする。

検出層位・時期：ID層上部上面で検出した。上位のIC上部層とIC下部層の上限付近にも逆グライ化した土壌が認められたが、断面及び平面でアゼの存在が確認されなかったため、水田址とは認定しなかった。本址の営まれた時期は、ID層上面が本遺跡南部の古代の住居址群の切り込み面に連続し、ともにIC層に覆われることから、本遺跡の古代集落と同時期またはそれ以前と推定される。

№1地点

| 試料名 | イネ | キビ族 | ヨシ属 | タケ亜科 | ウシクサ族 |
|---|---|---|---|---|---|
| a | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| b | 1,435 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| c | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 試料名 | イネ | キビ族 | ヨシ属 | タケ亜科 | ウシクサ族 |
| b-1 | 2,931 | 0 | 0 | 2,931 | 0 |
| b-2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| b-3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| b-4 | 0 | 0 | 0 | 1,460 | 0 |
| b-5 | 1,461 | 0 | 0 | 1,461 | 0 |
| b-6 | 2,840 | 0 | 0 | 1,420 | 0 |
| b-7 | 2,760 | 0 | 0 | 4,139 | 0 |
| b-8 | 1,478 | 0 | 0 | 2,965 | 0 |

第8表　北方遺跡　SL1　試料1ccあたりのプラントオパール個数




第38図　北方遺跡　古代水田址

地形環境：礫堆西隣の帯状低地に立地する。本遺跡付近の礫堆は軸を南西から北東方向に持つが、本址の位置は礫堆西側の裾部が北西へ突出した基部にあたる。本址の西側は旧河道に沿う砂からなる小範囲の微高地があったものと考えられ、微高地の北部は後にＩＢ層によって切られている。本址はこうした東西の微高地に挟まれた挟小な地点にあり、旧河道の分流跡か氾濫原溝跡を利用したものと思われる。起源がいずれの凹地にせよ、南西方向に連続したと推測され、礫堆の縁に沿って水田が細長く続いていた可能性が充分考えられる。

アゼの規模・走向：各アゼ幅と走向を第９表に示す。それぞれのアゼは、本址の長軸方向（Ｎ２°Ｗ）にほぼ直交する。第　表に示す田面の推定標高から、ｆ－４とｆ－１とでは32cmの落差があり、アゼは各田面に湛水するための水位調整の機能を果たしていたと解釈される。なお、ｆ－１とｆ－

| アゼ | ℓ1 | ℓ2 | ℓ3 | ℓ4 |
|---|---|---|---|---|
| 推定アゼ幅(m) | 0.4～0.6 | 0.9～1.2 | 0.6～0.8 | 1.4 |
| 走向 | N83°W | N84°E | N88°W | N88°W |

第９表　ＳＬ１アゼ幅・走向

| 田面 | f1 | f2 | f3 | f4 | f5 |
|---|---|---|---|---|---|
| 面積(m²) | 22.5以上 | 24.9以上 | 32.4 | 35.3 | 39.6 |
| 標高(m) | 579.19 | 579.37 | 579.39 | 579.42 | 579.51 |
| 形状 | (長方形) | (台形) | 長方形 | 長方形 | 長方形 |

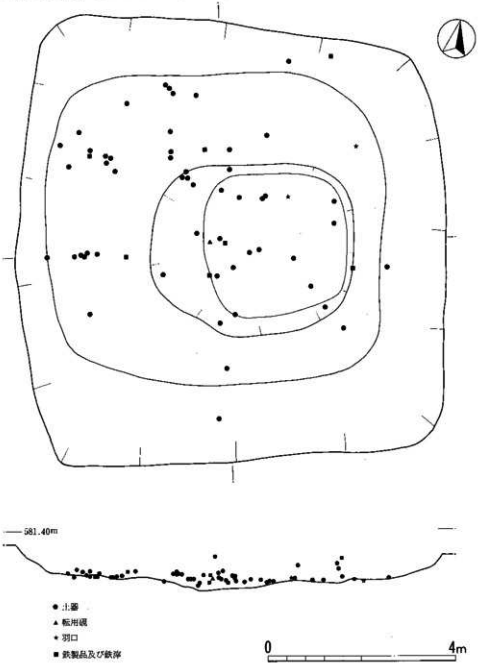
第10表　ＳＬ１田面の面積・標高・形状

２の間には、生活道路があったために調査ができなかったが、落差が約20cmあるため１～２条のアゼの存在が推定される。

田面の規模・形状：田面の推定面積と形状を第　表に示す。形状は旧地形に支配されたと考えられる。面積は80～90㎡に集中することが予想され、何等かの理由による規模の平均化が行われたと思われる。

諸施設：調査では本址に直接係わると判断される溝や水口などの施設は検出されなかった。

所見：水利に関わる諸施設が検出されなかったこと、ＩＤ層は砂壌土からなる透水過良な褐色低地水田土壌（三土　1974）であること、ＩＤ２層には「大理石文様」とグライ化の痕跡が認められず、下層土が停滞水で満たされていたとは考えられず、また、地下水の季節的な上下を利用した潅水方法は想定されないことから、本址の潅水にあたっては、表面流を導入する方法（所謂「田越し」）によって行われていたと考えられる。本遺跡のような地理的条件の中では、「田越し」に最適な氾濫原溝跡などが選択され、そのため、水田の配列も帯状になったものと思われる。

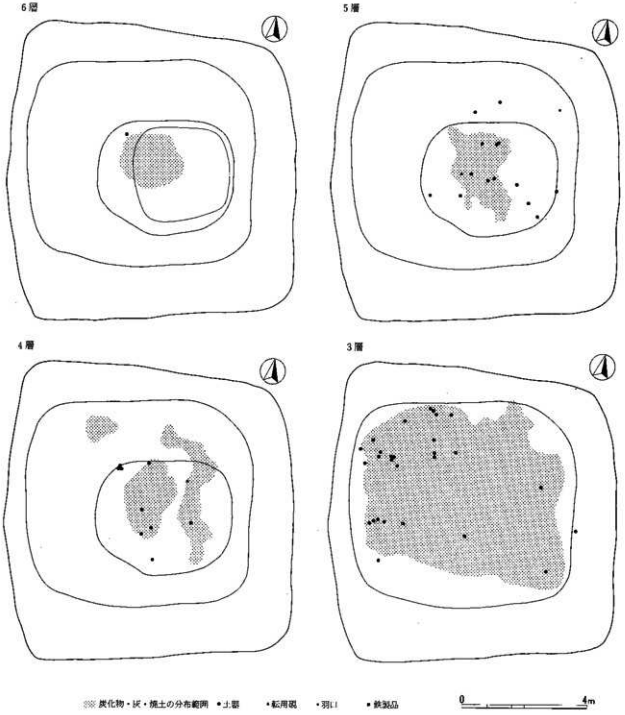



第39図　北方遺跡ＳＩ１

キ　小鍛冶址

**ＳＩ１**　　位置：住居址南群中央部，SB15の覆土上　　図版15

検出：SB15検出の際の断面精査中に、検出面下約40cmのところで炭化物層・灰層が確認された。これらの層は面的な広がりをもち、土器も完形に近いものが数多く出土したことから、使用面(床面)と判断し、SB15の埋没過程の中で形成された遺構と判断した。規模・形状：一辺９ｍの隅丸方形プランを呈し、深さは最深部で0.9ｍを測る。壁は中央からなだらかに立ち上がっており、床面には堅緻な部分等はみられない。これは、SB15に堆積した覆土をそのまま床、壁面に利用していたことを示唆するものだろう。覆土の堆積状況：覆土は６層に分層される。１・２層は混入する礫等に級化構造がみられることから、自然堆積と思わ




第40図　北方遺跡　ＳＩ１層別の遺物出土状況

れる。3層以下は焼土・炭化物・灰を多量に含む層で、それらがそれぞれ面的に広がりをもって分布する層である。それぞれの境界には灰層があり、明確に区分される。灰層の堆積をもって、それぞれの部分の使用の終了を示している。4枚とも焼土・炭化物・灰の量からいって、かなり強い火の使用、あるいは断続的な火の使用があったと考えられる。ただし、明確な焼痕がそれぞれの面で検出されていない。遺物の出土状況：各層からは、完形あるいは完形に近い土器が多く出土し、また、羽口の破片とともに、鉄製品が同一面上から出土している。これは、各面において本址が利用されていたことを物語っている。出土遺物：手斧1点、　具1点、刀子1点、釘3点、不明鉄製品8点、墨書土器4点、転用硯7点、台石2点が出土している。所見：大量の焼土・炭化物・灰が面的な広がりをもって3層以下の各層に分布すること、鉄滓・羽口・鉄製品・台石が出土していることなどから、根拠は薄いが、本址を積極的に小鍛冶址と捉えておきたい。

(2)　中世の遺構

ア　掘立柱建物址

**概観**

分布：中世の遺構の分布には、北から南へと三つのまとまりがみられ、掘立柱建物址はそのうち中部と南部に分布する。中部の2棟は、同様な構造的特徴をもつものであり、南部では、6棟のうち2棟が総柱建物址である。また、同様な規模・形態の土坑（Ⅰ・Ⅱ群の1種が主）が十数基まとまって群をなし、個々の土坑は一定の間隔を保って分布するなどという特徴をもった土坑群（以下小ピット群と称す）が検出されている。それらは、掘立柱建物址のような整然とした柱穴配置とはほどとおいものの、何等かの建造物を構成していた可能性が非常に高い。こういった小ピット群が南部では11ケ所みられた（第41図A～K）。

時期：時期を判断するような遺物が出土した掘立柱建物址は少なく、覆土の分類などから、中世1期と2期に大きく二分される。中部の掘立柱建物址は中世の2期のみである。

規模・形状：中世1・2期とも規模には大小がみられ、中世2期では総柱建物址がみられない。

柱穴：残存する柱痕跡は、いずれも径18～25cmの円形である。掘り方の平面形はほとんどが円形で、一部方形を意識したものもみられた。

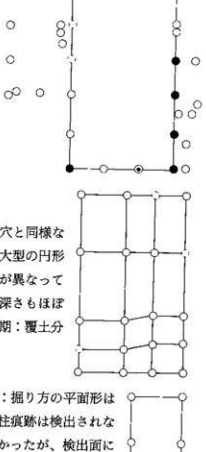
遺物：遺物の出土はほとんどみられなかった。

第41図　北方遺跡　中世掘立柱建物址及び小ピット群分布図（1：1500）

**ＳＴ１**　　位置：南部北端　　図版28

規模・形状：2間×2間の総柱建物址。東西方向に長辺をもつことから東西棟と考えられる。周囲に本址の柱穴と同様な規模・覆土をもつピット群がある。柱穴：柱痕跡は、いずれも掘り方底面に達するものはなかった。掘り方の断面形はいずれも鍋底状であり、深さもほぼ一定しているが、平面形はまちまちである。ただし、どれも方形を意識しているかのようである。出土遺物：なし。時期：覆土分類などから中世1期。

**ＳＴ２**　　位置：中部北端　　図版30



規模・形状：７間×３間の南北棟。本址西側、東側の一部に本址の柱穴と同様な規模・覆土をもつピット群がある。柱穴：柱間は、梁行は1.8m一定としているが、桁行は南から1.8、2.1、1.8、1.8、2.1、2.1、0.8mというように揃っていない点、本址の特徴と捉えられ、さらに、北端の0.8mという柱間は他の２分の１以下であり、特記される。同様な例としてＳＴ６がある。柱痕跡は掘り方底面に達するものはない。P28では、非常に保存状態は悪いが、柱材(スギ　Cryptomeria japonica D.Don)の一部が残存していた。掘り方の平面形は、規模の差異はみられるものの、いずれも円形である。深さにはばらつきがみられ、概して南半部のもの、四隅のものが深い。断面形は円筒形である。出土遺物：なし。時期：覆土分類などから中世２期。

**ＳＴ３**　　位置：南部北半　　図版28

規模・形状：４間×３間の南北棟。本址の周囲及びプラン内に本址の柱穴と同様な規模・覆土をもつピット群がある。また、プラン内に覆土は異なるが、大型の円形土坑が２基存在する。柱穴：桁行の柱間が東２列と西側２列とでは長さが異なっており、注目される。掘り方の平面形はいずれも円形を基本としており、深さもほぼ一定している。柱根・柱痕跡は検出されなかった。出土遺物：なし。時期：覆土分類などから中世１期。

**ＳＴ４**　　位置：南部北半　　図版28

規模・形状：２間×１間で、北西方向に主軸をもつ建物址である。柱穴：掘り方の平面形はいずれも円形、断面形は円筒形を呈し、P7のみが他に比べ深い。柱根・柱痕跡は検出されなかった。遺物の出土状況：柱穴内からの遺物の出土はまったくみられなかったが、検出面において、プラン内及び周囲から古代を中心とした遺物が出土している。時期：覆土分類などから中世１期。

**ＳＴ５**　　位置：南部北半　　図版24

規模・形状：北西隅の柱穴が検出されなかったが、２間×１間の南北棟と考えられる。周囲に本址の柱穴と同規模のピットが検出されたが、覆土が本址とまったく異なることから分離することができた。柱穴：梁行は2.1mと一定だが、桁行は西側では北1.2m（推定）、南1.5mであるのに対し、東側では北1.5m、南1.2mと相反している。これが本址の特徴となろう。同じようなことはＳＴ６でもみられた。掘り形はみな円形で、深さも一定している。柱根・柱痕跡は検出されなかった。出土遺物：なし。時期：覆土分類などから中世２期。

**ＳＴ６**　　位置：中部　　図版30

規模・形状：３間×２間の東西棟。南東側に本址と同様な規模・覆土をもつピット群がある。柱穴：柱間は、梁行では1.6mと一定だが、桁行では西端部が0.5mであり、ＳＴ２の北端部同様、他の柱間に比べて２分の１以下になっている。また、ＳＴ５でみられたように、北西と南東、北東と南西の柱間の長さが同一である。これらの点は本址の大きな特徴であり、したがって、ＳＴ２.５との関連性が想起される。残存する柱痕跡は、いずれも掘り方底面に達するものはなかった。掘り方の平面形はみな円形であるが、深さは北側桁行西端と西側梁行中央が断面形鍋底状で浅いほかは、いずれも円筒形で深い。出土遺物：なし。時期：覆土分類などから中世２期。

**ＳＴ７**　　位置：南部南半　　図版21

規模・形状：２間×２間の総柱建物址。東西方向に長軸をもつことから、東西棟と考えられる。プラン内に土坑が４基分布している。その内SK492・543は本址との新旧関係は明らかでないが、SK540・541については覆土分類から本址より新しい時期のものと考えられる。柱穴：掘り方はいずれも平面形が楕円形で、断面形は鍋底状を呈する。深さもほぼ一定している。柱根・柱痕跡は検出されなかった。出土遺物：なし。時期：覆土分類などから中世２期。

**ＳＴ８・９・１０**　　位置：南部南半　　図版22

規模・形状：いずれも１間×１間の掘立柱建物址である。三棟は柱穴こそ重複しないが、プランがそれぞれ重複しあっている。また、これらの柱穴と同様な規模・覆土をもつピット群がプラン内及び周囲に分布する。南方にはSA１・２が構築されており、これら柵址も三棟の柱穴と同様な規模・覆土であった。柱穴：柱間はST８が1.8m×2.1m、ST９が1.8m×1.8m、ST10が1.5m×2.1mである。掘り方の平面形はいずれも円形であるが、断面形については、ST８－P2,ST10－P2が円筒形で深い他は、すべてすり鉢状で、深さもほぼ一定して浅い。柱根・柱痕跡は三棟とも検出されなかった。遺物の出土状況：ST８－P2,ST９－P1より中世２期の陶磁器（図版55－20・23）が出土している。特に、ST８－P2は大型の破片が数多く出土しており、その状況から、柱を抜き取った後、一気に投げ込まれた感が強い。また、プラン内に穿たれているSK606・608からも同時期の陶磁器片が出土しており、これらは、SA1・2を含めて接合関係がみられる。新旧関係：三棟は直接の切り合い関係はないが、ST10－P1,SK606,SK608の切り合いと遺物の接合関係から、ST10が最も新しいと考えられる。ST８とST９については、遺物の接合関係もあり、不明確ではあるが、ST10のプランが長方形である点、ST９は遺物も少なくSK608をはじめ接合関係が少ないという２点から、ST９→ST８という新旧関係が推測される。時期：出土遺物、覆土分類などから中世２期。

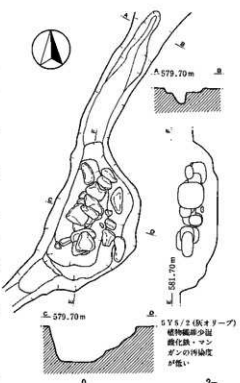
### イ　溝址

**ＳＤ１**　　位置：北部北端，SK１を切る　　図版31

規模・形状：長さ約23m、幅0.35～0.5mで、北東から南西方向（N42°E）に直線的に走る。深さは検出面から0.1mにも満たないが、Ｖトレンチ断面でみると0.4mに達する。北東端部に自然礫の多数投入された落ち込み部を伴う。落ち込み部は2.1×1.5mの東側にふくらむ南北に長い半月形を呈している。深さは約0.6mで、西壁がほぼ垂直であるが、東壁は段をもって形成されている。礫は検出面から面まで重なり合って出土した。覆土は溝部、落ち込み部とも単層である。なお、西側は旧河道が広がっている。時期：遺物の出土がなく明らかでないが、遺構の切り合い関係、覆土の分類から中世２期以降の所産と考えられる。所見：旧河道と平行して構築されていること、水の流れ・滞水の痕跡が明確であることから、何らかの水利施設であったのではなかろうか。

**ＳＤ４**　　位置：南部中央部，SK545を切る　　図版25

規模・形状：長さ15.6m,幅0.6～0.7mで、ほぼ南北（N8°W）に直線的に走る。深さは0.05～0.1m。断面形は鍋底状を呈する。底面のレ

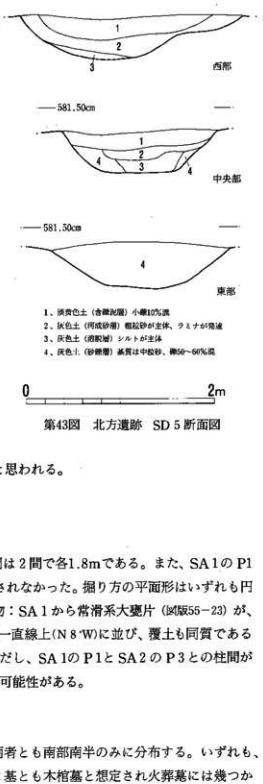



第42図　北方遺跡　SD１

ベルは南に高く北に低い。覆土は、砂質の単層である。遺物の出土状況：遺物は少なく、すべて破片の状態で、散漫に出土した。古瀬戸折縁深皿片（図版55－17）、内耳鍋片（図版55－11）が出土している。時期：出土遺物、覆土の分類から中世2期と考えられる。所見：覆土が砂質であることから、水が流れていた可能性が非常に高い。重複しているSK545の覆土も砂であり、両者は水路と砂溜め施設といったような関係があったかもしれない。埋没状況は流水等に起因する自然堆積と考えられる。

**ＳＤ５**　　位置：南部南半　　図版21

規模・形状：長さ27.4m、幅2～2.8mで、わずかに蛇行しながら、ほぼ東西（N75°E）に走る。西側は調査区外に伸びる。深さは約0.4m。断面形は基本的に鍋底状を呈するが、西半部の北壁はテラス状の平坦部をもつ。覆土は場所によりその堆積状況が異なっている。テラスのある西半部では3層ないし4層に分層され、水の流れ、あるいは滞水があったことを示す灰色化した土層が最下層に堆積している。それに対し東半部は単層である。中央部では、東半部の土層が西半部の灰色化した最下層によって切られている。底面のレベルは西に低く東に高い。時期：遺物の出土がなく明らかでないが、覆土の分類から中世以降の所産であると考えられる。西半部には水の流れ・滞水の痕跡が明確であり、東半部とは使用目的が異なっていた可能性も考えられよう。



第43図　北方遺跡　SD５断面図

**ＳＤ６**　　位置：南部南半，SK514に切られる
図版23

規模・形状：長さ約10m、幅1～1.3mで、ほぼ南北（N5°E）に直線的に走る。南北両端部では溝の痕跡が不明瞭となる。深さは0.2m。覆土は上下2層に分層される。時期：出土遺物が全くないため明らかでないが、遺構の切り合い関係、覆土の分類から中世の所産と考えられる。所見：水が流れていた形跡が認められないことから、土地の区画などに関わるものと思われる。

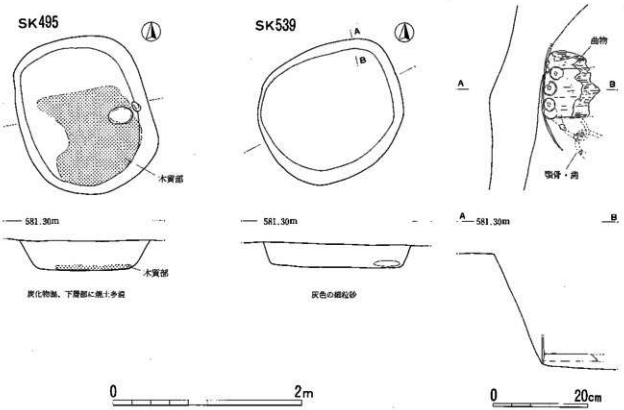
ウ　掘址

**ＳＡ１，２**　　位置：南部南東隅　　図版22

規模・形状：SA１は柱間が4間で各1.8mを測る。SA２の柱間は2間で各1.8mである。また、SA１のP1とSA２のP3は2.1mの間隔をもつ。柱痕跡等は両者とも検出されなかった。掘り方の平面形はいずれも円形を基本としており、また、断面形もほぼ同形態である。遺物：SA１から常滑系大甕片（図版55－23）が、SA２のP2から常滑系の甕片が出土している。所見：両者は同一直線上(N８°W)に並び、覆土も同質であることから、同時期、同一目的の遺構であったと考えられる。ただし、SA１のP1とSA２のP3との柱間が2.1mと他に比べ若干広く、この部分が空間としてあいていた可能性がある。

エ　墓址

本遺跡では、土葬墓2基、火葬墓9基が検出されている。両者とも南部南半のみに分布する。いずれも、出土遺物や覆土分類等から中世2期の所産である。土葬墓は2基とも木棺墓と想定され火葬墓には幾つか




第44図　北方遺跡　中世土葬墓

のバラエティーがみられる。また、火葬墓は検出面で焼痕、焼土堆積、炭化物などが壁に沿ってめぐっており、検出時にそれとわかるものであった。

(ｱ)　土葬墓

**ＳＫ４９５**　　位置：南部南端　　図版20

規模・形状：170×138cmの楕円形プランを呈し、深さは30cmを測る。底面南半（南北約80cm）に木質部が面的に広がり、その東端部に長径25cmの河原石が出土している。覆土は単一層である。出土遺物：底面に広がる木質部は、保存状態が極めて悪く、取り上げは不能であった。板なのか敷物なのかも判別不能であった。所見：広範囲にわたる木質部の遺存と単一の覆土及び土坑の平面形態から、本址を墓址と想定した。

**ＳＫ５３９**　　位置：南部中央　　図版23

規模・形状：153×135cmの楕円形プランを呈し、深さは25cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は単一層である。出土遺物：北東隅から曲物と、その内部に上・下顎骨及び歯と銭貨が６点出土している。曲物は、底板・側板の一部が遺存している。両者とも保存状態は非常に悪い。推定される底径は39cmである。底板は２枚遺存し、うち保存状態のよいもので最大長10cm、幅10cm、厚さ1.5cmを測る。側板は最大長18cm、最大高４cm、厚さ約0.4cmで、内面に縦平行線のケビキが 1.5cm間隔で入れられている。材質はネズコ（Thuja standishii CARR）である。上・下顎骨の出土状況から、上顎骨を含む頭骨が転落し、その上に下顎骨が反転して重なったことが読み取れる。したがって、埋葬姿勢が座位、あるいは改葬であったことが推定される。また、銭貨は底板に密着するように出土している。所見：曲物の中から人骨（上・下顎骨）及び歯と６点の銭貨が出土していることから、本址を木棺墓と捉えた。

(ｲ)　火葬墓

**ＳＫ２２１**　　位置：南部南半　　図版23

規模・形状：107×70cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは14cmを測る。炭化物が壁に沿って分布するほか、土坑中央部には多量の焼骨片を含む炭化物の集中部がある。同様の規模・形状をもつものに SK273があるが、SK273の東・西壁上端部には焼痕が認められ、炭化物は南壁に沿って集中している。出土遺物：銭貨が1点、炭化物集中部と同レベルから出土している。焼骨片は骨粉状態のものが多く、部位のわかるものとして頭骨がある。その他、大腿骨、手指骨とみられるものが散見される。所見：焼痕・焼土堆積等はみられない。ただ、同様の形態をもつ SK273（深さ26cm）には壁上端部に焼痕がみられ、火葬施設としても機能していたことが想定されることから、本址で火が焚かれなかったとは言い切れない。また、焼骨片、炭化物の集中する範囲が限られていることから、他所で火葬した後に、有機質の容器に収納し、埋納された可能性も考えられる。いずれにせよ、本址は墓としての機能をもつ施設であったといえるだろう。

**ＳＫ２２５**　　位置：南部南半　　図版24

規模・形状：143×100cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは18cmを測る。壁は垂直に近い傾斜をもって立ち上がる。底面には南西隅を除く三隅に小児頭大の礫が、垂直方向に最大径をもつように据えられている。礫は上面が平で、被熱の痕跡は明確でない。同様の規模・形状をもつものに SK577があるが、SK577では北部のみに礫が配され、礫の東側に顕著に焼痕がみられた。出土遺物：上層からは先の尖った棒状の銅製品が垂直の状態で出土している。下層からは銭貨が6点出土している。焼骨片は上層を中心に、下層からも出土している。部位のわかるものに、頭骨・脊椎骨・大腿骨・脛骨がある。そのうち、大腿骨は鑑定の結果、「骨体の一部に粗線がやや強く発達する傾向もみられるが、男性骨とは断定し難い」という所見を得た。所見：壁に焼痕がみられること、大形の炭化材や焼土が集中することから、坑内で火がたかれたことは明らかである。さらに、底部に配された礫を利用し、燃焼面を上位に上げ、坑底との間隙をつくっていたことが考えられ、燃焼に際して通気の配慮が施設の構造面にまで及んでいたことが想定される。したがって、本址は火葬施設と捉えることができる。

**ＳＫ５４３**　　位置：南部南半　　図版21

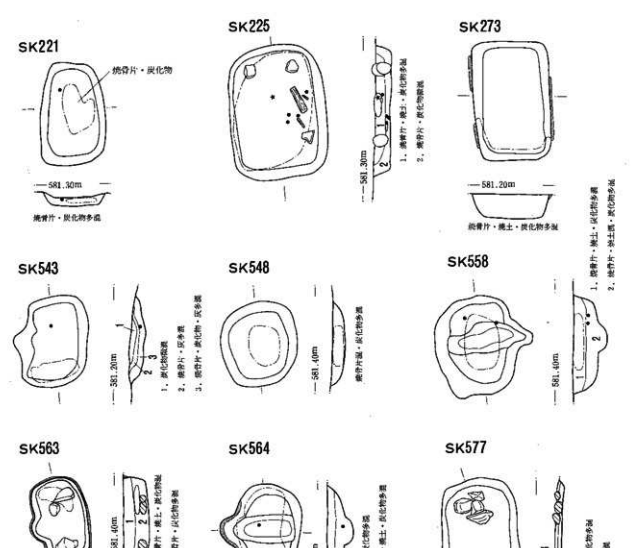
規模・形状：96×66cmの南北に長い長方形プランを呈し、西壁中央部に半円形の張り出し部を伴う。深さは15cmを測る。東・西壁上端部に焼痕が認められる。出土遺物：焼土・焼骨片を含む最下層直上から、多数の焼骨大形破片とともに銭貨が1点出土している。所見：壁面に焼痕がみられ、覆土には焼土が多量に含まれ、最下層には炭化物と灰で構成される土層が堆積していることから、坑内で火が焚かれたことは明らかである。また、炭化物・灰の集中部直上より、銭貨と大形の焼骨片が多数出土し、それらは上層にはほとんどみられないという状況である。したがって、本址は火葬施設であるとともに、拾骨の有無にかかわらず墓としての機能を有する施設であったと考えられる。

**ＳＫ５４８**　　位置：南部南半　　図版20

規模・形状：88×80cmの南北にやや長い楕円形プランを呈し、深さは14cmを測る。炭化物が42×32cmの範囲で検出面から坑底まで密集する。出土遺物：焼骨片以外出土していない。焼骨片は骨粉に近い状態のものがほとんどであり、いずれも炭化物密集部からの出土である。所見：焼痕・焼土分布がみられないことから、坑内で火がたかれたとは言い難い。炭化物とともに焼骨片が出土していることから、他の場所で火葬した後、炭化物ごとさらって本址に埋納したものと考えられる。炭化物の密集する範囲が限られることから、有機質の容器に収納した可能性も考えられよう。したがって、本址は火葬骨を埋納した墓と捉えられる。

**ＳＫ５６３**　　位置：南部南半　　図版20

規模・形状：90×60cmの南北に長い隅丸長方形プランを呈し、西壁のほぼ中央に半円形の張り出し部を伴う。深さは26cmを測る。四周の壁の上端部には焼痕が認められた。また、底面からやや浮いた状態で、北




第45図　北方遺跡　中世火葬墓

側に2個、南側に1個、小児頭大の礫が出土している。出土遺物：焼骨以外は出土していない。焼骨は少量で、微細な骨片のみであるが、部位のわかるものとして、頭骨・上腕骨・橈骨などがある。これらは2層を中心として出土している。所見：壁面に焼痕がみられること、焼土を多量に含む炭化物の集中部があることから、坑内で火が焚かれたことは明らかである。さらに、礫が張り出し部の延長上ではなく、その部分をいかすかのように南北に配されており、何等かの手立てと共に燃焼面を上位に上げ、坑底との間隙をつくる意図があったと考えられ、燃焼に際して通気の配慮がなされていたことが想定される。また、焼骨片が少量で、出土層位がほぼ限定され、その上位に土層を一枚かぶることと合わせて、本址は火葬施設であり、拾骨後も墓と同様な意義をもつ施設であったと考えられる。

**ＳＫ５６４**　　位置：南部南半　　図版20

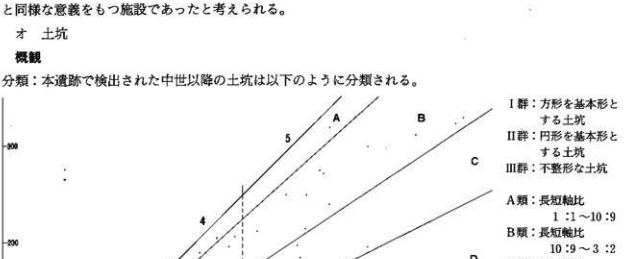
規模・形状：100×72cmの南北に長い楕円形プランを呈し、西壁中央部に半円形の張り出し部を伴う。底部中央は東西方向に溝状に掘り凹められており、その西壁は張り出し部へ向けてなだらかに立ち上がってい

る。深さは、溝状の掘り込み部までが53cm、底面までが35cmを測る。また、西壁の大部分が張り出し部を中心として、壁上端部に焼痕が認められる。同様な規模・形状をもつものにSK558がある。出土遺物：炭化物集中部の下位から、多数の焼骨片とともに銭貨が3点出土している。所見：壁面に焼痕がみられること、焼土を多量に含んだ炭化物集中部があることから、坑内で火が焚かれたことは明らかである。さらに、張り出し部へ連なる溝状の掘り込みがあることから、燃焼に際して通気の配慮が施設の構造にまで及んでいたことが想定される。また、炭化物集中部より下位からは、多量の焼骨片と銭貨が出土し、それらは上層にはほとんどみられないという状況である。したがって、本址は火葬施設であるとともに、拾骨後も墓と同様な意義をもつ施設であったと考えられる。

オ　土坑

**概観**

分類：本遺跡で検出された中世以降の土坑は以下のように分類される。




第46図　北方遺跡　中世土坑長軸と短軸の関係

| | A | | | | | 小 | B | | | | | 小 | C | | | | | 小 | D | 小 | 総 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 計 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 計 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 計 | 4 | 計 | 計 |
| Ⅰ | 31 | 2 | 2 | 0 | 1 | 36 | 5 | 1 | 12 | 5 | 5 | 28 | 0 | 1 | 2 | 1 | 4 | 8 | 0 | 0 | 72 |
| Ⅱ | 242 | 24 | 12 | 4 | 0 | 282 | 148 | 28 | 20 | 10 | 7 | 213 | 3 | 4 | 12 | 2 | 2 | 23 | 4 | 4 | 522 |
| Ⅲ | 273 | 26 | 14 | 4 | 1 | 318 | 153 | 29 | 32 | 15 | 12 | 241 | 3 | 5 | 14 | 3 | 6 | 31 | 4 | 4 | 594 |

第11表　北方遺跡　中近世土坑形態分類

本遺跡では、Ⅰ・Ⅱ群ともD類の土坑が極めて少ない点、Ⅲ群の土坑がみられない点などが特徴となる。また、以下のような属性をもつ土坑がみられる。

集石を伴う土坑：SK 75（Ⅰ群B類2種）、359（Ⅰ群B類3種）、77・573（Ⅰ群B類4種）、13（Ⅰ群B類5種）、18・223・417（Ⅱ群A類3種）、101（Ⅱ群A類4種）、76（Ⅱ群B類2種）、424・595（Ⅱ群B類3種）、123・466・513（Ⅱ群B類4種）、67（Ⅱ群C類5種）

敷石を伴う土坑：SK 574（Ⅰ群C類3種）、170・455・478（Ⅰ群C類5種）、481（Ⅱ群C類3種）

焼土堆積・焼痕を伴う土坑：SK 605（Ⅰ群B類5種）

土器・陶磁器・銭貨等を伴う大形の土坑：SK 1（Ⅰ群A類5種）、2・13・14（Ⅰ群B類5種）、560（Ⅱ群B類5種）

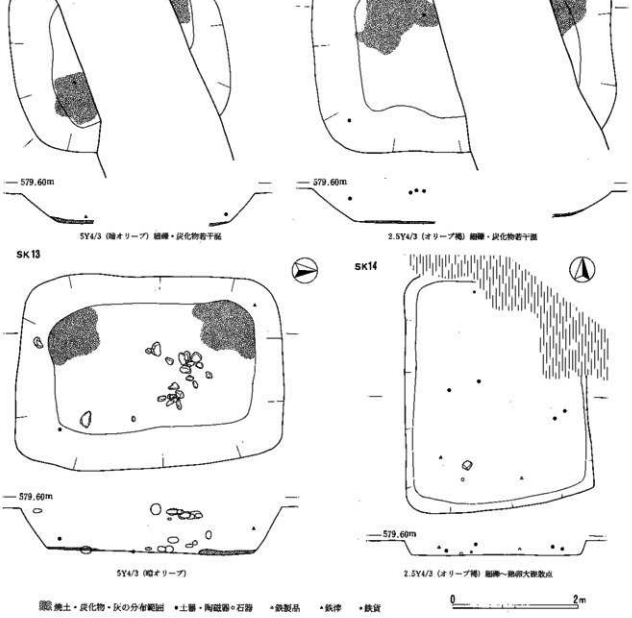
時期：遺構の時期を判断するような遺物が出土した土坑は極めて少なく、覆土分類、遺構の切り合い関係、時期判定された遺構等との位置関係などから、帰属時期を判断していった。それによると、中世１・２期と近世の土坑（SK 181～185）がある。中世１期に位置づけられる土坑は、小ピット群を形成する１・２種の土坑が中心となり、中世２期では３～５種の土坑が中心となる。

(ｲ)　Ⅰ群の土坑

分布：５種が北部、南部南半に群在し、３・４種がSD４の北東部を中心として中・南部に分布している。１・２種はⅡ群のⅠ・２種とともに群在し、小ピット群を形成するものが多い。

**ＳＫ１３**（Ⅰ群Ｂ類５種）　　位置：北部　　図版31

規模・形状：ＩＣ上層いて検出され、検出面では430×312 cmの隅丸長方形プランを呈する。深さは66 cm

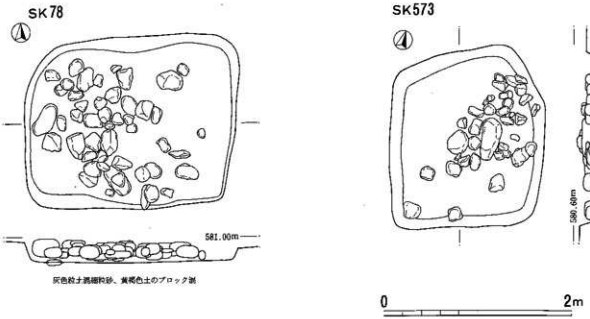



第47図　北方遺跡　中世土坑

を測る。底面は平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。底面の北西・南西隅には、それぞれ炭化物を含む灰層が堆積している。遺物の出土状況：覆土は単層で、上層部に大形の礫が集中する。陶磁器2点（図版55－18）は、いずれも底面から10cm程浮いたところから出土している。類例：SK 1・2・14とSK 605がある。SK 1はⅠ群A類5種であるが、SK 2と同様に底面のコーナー部に炭化物・焼土を含む灰層が堆積しており、その上面から鉄滓が出土している。SK 14は三者に比べ、非常に浅いこと、壁が急傾斜であること、灰層がないことなど、様相を異にし、出土遺物も、陶磁器、銭貨、鉄製品と豊富である。所見：SK 1・2・13が灰層、鉄滓などの状況から工房址的な性格を、SK 14は構造と出土遺物から居住といった機能を推定できようか。時期：中世2期。

**ＳＫ７８**（Ⅰ群B類4種）　　位置：南部北端　　図版29

規模・形状：224×176cmの隅丸長方形プランを呈する。深さは20cmを測る。底面からやや浮いた位置から検出面にかけて、集石を伴う。礫は自然礫（巨～中礫）がほとんどで、完形礫が主体を占める。時期：中世2期。類例：Ⅰ群B類4種には、SK 165・220・464とSK 573があり、前者は南部南半、後者は中部北端に分布する。また、SK 220・464以外は集石を伴う。



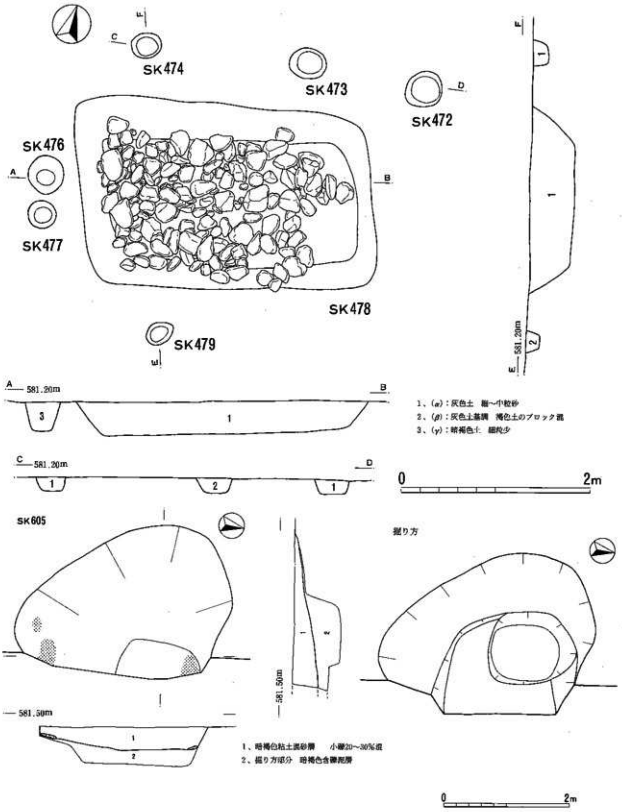

第48図　北方遺跡　中世土坑

**ＳＫ４７８**（Ⅰ群C類5種）　　位置：南部南半　　図版21

規模・形状：307×198cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは32cmを測る。底面のほぼ全面に敷石が施されている。礫は、自然礫（巨礫～中礫）が主体を占め、ほとんどが破砕礫の状態となっている。所見：本址の周囲にA類1種の土坑（SK 472～477,479,480）が分布しており、整然とした配置はみられないが、本址を中心として上屋がかけられていた可能性が指摘できる（第49図）。時期：中世2期。類例：Ⅰ群C類5種には、SK 170・455・597があり、いずれも南部南半に分布する。SK 597以外は、敷石の範囲こそ差はみられるものの、みな敷石を伴っている。

**ＳＫ６０５**（Ⅰ群B類5種）　　位置：南部南半　　図版21

規模・形状：東部が破壊されており明らかでないが、340×240cmの隅丸長方形プランを呈していたことが推定される。深さは40cmを測る。北東壁際から底面にかけてと南壁に焼痕、焼土・灰の堆積層がみられた。また、底面は荒掘り後につくりだされている。出土遺物：北東壁際の灰層から土師器皿（図版55－7）が、南壁付近から縁釉皿（図版55－14）が出土している。なお、縁釉皿は転用硯である。時期：中世2期。




第49図　北方遺跡　SK478・605 実測図

(イ)　II群の土坑

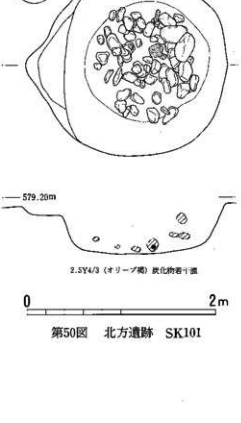
分布：5種が南部のみに分布し、3・4種は北部と南部のSD5からSD6にかけての部分に群在する他、南部全体にわたって分布している。1・2種はI群の1・2種とともに群在し、小ピット群を形成するものが多い。

**ＳＫ１０１**（Ⅱ群Ａ類４種）　位置：北部，ＳＤ１に切られる　図版31

検出：ＩＣ下層にて検出されたが、遺構本来の掘り込み面はＩＣ上層と考えられる。SK１などとともに土坑群を形成していたと思われる。規模・形状：径 210 cmの円形プランを呈し、南側にテラス状の張り出し部を伴う。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は鍋底状を呈する。深さは 50 cmを測る。集石を伴う。遺物出土状況：底面に近いところで、集石内の礫の空白部から漆器が２点出土している。保存状態は悪く、漆部分のみ残存していた。時期：中世２期。類例：Ⅱ群Ａ類４種には、SK５･106･269 がある。

**ＳＫ１３４**（Ⅱ群Ｂ類５種）　位置：南部北半　図版27

規模･形状：334×272 cmの楕円形プランを呈し、深さは 60 cmを測る。断面形はすり鉢状を呈する。覆土は４層に分層され、いずれも基質は砂質土で、大礫を含む。大礫は特に４層と２層に集中する。時期：中世２期。類例：SK 26･70･169･483･545･560 があり、いずれも南部に分布する。SK 560 をのぞいてみな覆土は砂質土で、SK 26･70 は集石を伴う。



第50図　北方遺跡　SK101

カ　水田址

**ＳＬ２**　位置：北部　第51図

検出：トレンチでＩＣ上部層上限より、溶脱層･集積層が観察され(第51図)、溶脱層をＩＣ上部１層、集積層をＩＣ上部２層とした。断面ではアゼ等の識別が困難であったので、これらを平面で確認することを目的にＩＣ上部１層上面で平面精査を行った。酸化鉄による帯状の集積部が調査区の北西隅・東部・南部で認めれ、それぞれトレンチで断面形態を検討した。その結果、帯状の集積部はＩＣ上部２層の高まりであると判断し(第51図)、アゼと認定した。検出された水田遺構はアゼ３、田面２、用水路と推定される溝１から構成され(第51図)、それぞれ ℓ１～３、ｆ１，２、ｄ１とする。なお、ｆ１の北縁とｆ２の西･北縁を画するアゼの存在が予想されるが、ＩＢ層（旧河道による河床礫層）に切られて失われたものと解釈する。

検出層位･時期：ＩＣ上部層上面より検出した。上位のＩＡ層･ＩＢ層上限付近にも明らかな水田土壌が認められたが、水田址以外の遺構との関連追究を調査目的としたため検出しなかった。本址の営まれた時期は、本址が同一面で中世２期の遺物を伴う遺構（SK １･２等）に切られ、下位のＩＤ層上面が本遺跡南部の古代住居址群の切り込み面に連続することから、中世１期から下っても中世２期初頭と推定される。

| アゼ名 | 推定アゼ幅(cm) | 走向(GN) |
|---|---|---|
| ℓ－1 | 50～100 | N33°W |
| ℓ－2 | 30～120 | N10°W |
| ℓ－3 | 30～110 | N69°E |

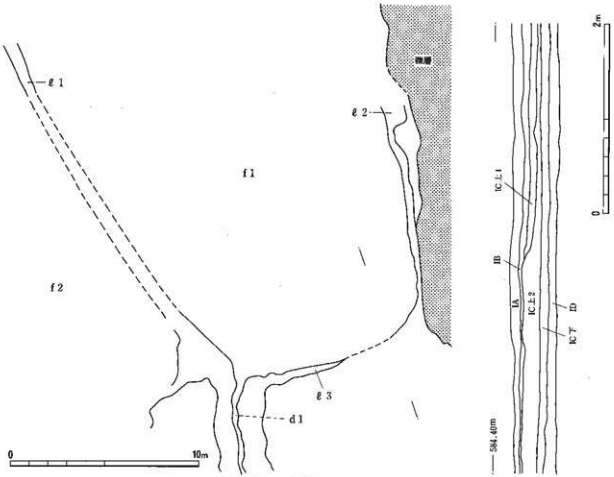
第12表 SL２アゼ幅・走向

地形環境：南側と東側をⅡ層の礫堆に囲まれた低地に立地する。本遺跡付近の礫堆は南西から北東方向に連続し、旧河道は礫堆の軸方向に平行して北東流していたと考えられる。また、ＩＢ層を堆積した旧河道がＩＣ上部層上面を切る以前は、より北西を流れていたと考えられる。これらから、本址が立地する低地は北方及び南西に広がっていた可能性が高く、水田よりも広く展開したことが予想される。

| 田面名 | 面積(㎡) | 標高(m) | 形状 |
|---|---|---|---|
| f－1 | 252以上 | 579.47 | 台形 |
| f－2 | 80以上 | 579.56 | － |

第13表 SL２田面の面積・標高・形状

アゼの規模・走向：各アゼ幅と走向を第12表に示す。ただし、アゼ幅としたのは酸化鉄の集積部の幅であり、正確な値ではない。走向は現水田のアゼがＮ５°




第51図　北方遺跡　中世水田址

E及びN85°Wであるのに対し、全体に15～38°反時計回りに回転しているといえる。ℓ1は一部しか検出されなかったが、西方へやや屈曲していたと推定される。ℓ2は東側のII層礫堆に沿ってほぼ直線的に走り、ℓ3はℓ1にずれて交差したと推定される。

田面の規模・形状：田面の推定面積と形状を第13表に示す。f1は南北に長い台形と想像され、東西に長辺を持つ現水田と好対照である。

諸施設：用水路と考えられるd1が検出されている。幅20～30cm、長さ5m以上で、支線と解釈される。d1はℓ1に沿い、地形が南側の礫堆に向けて高くなっていたことから、北流してf1を直接潤した用水と判断する。

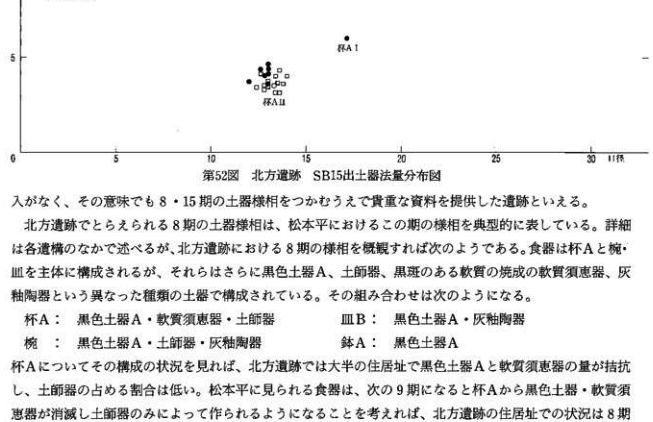
## 2　遺　物

### (1)　古代の遺物

#### ア　土器

**概観**

北方遺跡の古代土器は、大きく8期と15期の2時期にとらえられる。8期はSB1～15など多くの竪穴住居址出土の土器群の様相であり、15期はSB16・17・21・26、SK164などの竪穴住居址や墓址・包含層などに見られる土器群である。後に述べるように、本遺跡が8期と15期の2時期のごく短期間に居住域として利用されたほかは居住域となることがなかったため、土器もその2時期のものに限られ他の時期の混




第52図　北方遺跡　SB15出土器法量分布図

入がなく、その意味でも8・15期の土器様相をつかむうえで貴重な資料を提供した遺跡といえる。

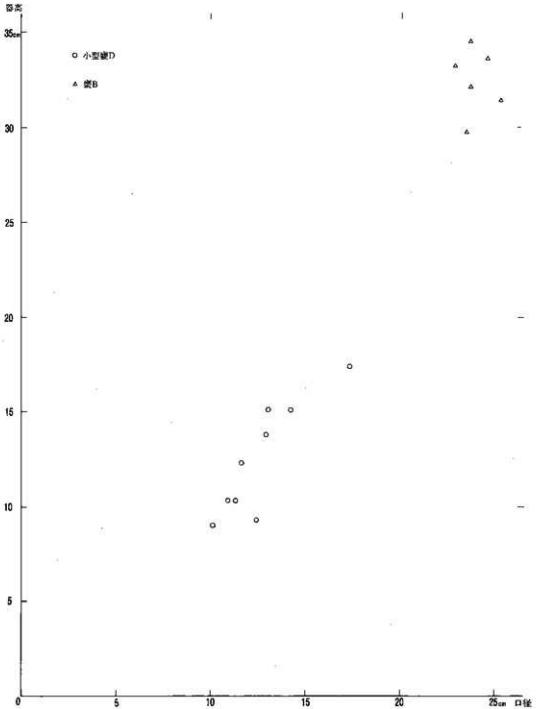
北方遺跡でとらえられる8期の土器様相は、松本平におけるこの期の様相を典型的に表している。詳細は各遺構のなかで述べるが、北方遺跡における8期の様相を概観すれば次のようである。食器は杯Aと椀・皿を主体に構成されるが、それらはさらに黒色土器A、土師器、黒斑のある軟質の焼成の軟質須恵器、灰釉陶器という異なった種類の土器で構成されている。その組み合わせは次のようになる。

杯A：　黒色土器A・軟質須恵器・土師器　　皿B：　黒色土器A・灰釉陶器

椀　：　黒色土器A・土師器・灰釉陶器　　鉢A：　黒色土器A

杯Aについてその構成の状況を見れば、北方遺跡では大半の住居址で黒色土器Aと軟質須恵器の量が拮抗し、土師器の占める割合は低い。松本平に見られる食器は、次の9期になると杯Aから黒色土器・軟質須恵器が消滅し土師器のみによって作られるようになることを考えれば、北方遺跡の住居址での状況は8期のなかでも短い時期の土器群としてとらえられよう。なお、杯Aは黒色土器Aでは2法量杯A I（口径15.8～17cm・器高6～6.3cm）・杯A II（口径12～14.3cm・器高3.3cm）、土師器・軟質須恵器では1法量（口径12.1～14.5cm・器高3.3～4.5cm）のみである。(第52図) 灰釉陶器は東濃産の光ケ丘1号窯式が搬入されている。緑釉陶器が1片包含層から出土しておりこの時期に属するものと思われる。大形の食器である鉢A・盤は、数は多くないが竪穴住居址に普遍的に存在する。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせで構成され、稀に甑Bがある。甕Bは体部外面にタテハケ調整を施す長胴の甕でこの時期口径23～25cm、器高31～35cm、底径9.5～10.5cmの法量を示し全体に背の低いずんぐりしたプロポーションとなる。口縁部は外反が弱く、直線的に立ち上がり端面を面取りするものが多い。また胴部外面上半をヨコナデし、底部周辺をヘラ削りするのが一般的となる。小型甕Dはロクロ調整で明確な法量規制は見られないものの、小形のものから中形のものまで法量に幅がある。(第52図)貯蔵具は須恵器と灰釉陶器で構成される。大形貯蔵具である甕は須恵器、小形の貯蔵具である長頸壺を中心とした壺類は、須恵器と灰釉陶器の両者によって構成される。灰釉陶器の小瓶は比較的多くの住居址から出土しており、そのほかに平瓶・浄瓶などがある。

15期の資料は、SK 164を除いて良好なセット関係を示す資料に恵まれない。総体的に食器は土師器・灰釉陶器・中国製輸入陶磁器で構成される。土師器は杯A II・A III、皿A I・A II、椀で構成され、主体となる杯A IIは口径8.5～9.5cm、器高1.5～2.4cmのうちに分布する。灰釉陶器は量がきわめて少なく、輸入陶磁器では白磁・青白磁がある。北方遺跡出土の中国製白磁は、包含層出土遺物を含めて総破片数46片である。器種別では椀42片、皿4片がある。このうち椀は森田勉氏の分類（横田・森田　1978）に従えば、II類6片・IV類7片・V類7片・VIII類7片・不明その他15片となる。皿のなかにはVIII類椀に伴う有台皿1片を含む。また、青白磁の合子が1点ある。煮炊具は羽釜があるが量はきわめて少ない。貯蔵具の状況は




第53図　北方遺跡　8期の土師器甕B・小型甕Dの法量分布

明らかでない。

(ア)　各遺構出土の土器

**SB1**（図版32）

杯Aの構成は土師器8、黒色土器A 50、軟質須恵器52個体で土師器が少なく、ほかに須恵器が1点ある。黒色土器Aは杯・椀ともに内面のヘラ磨きが粗く、ヘラ磨きの間にロクロ撫で痕が観察できるもの(1・4・6）がある。灰釉陶器耳皿9は底面に糸切り痕をそのまま残し、胎土は赤褐色を呈する。煮炊具は甕Bと小形甕Dで構成されるが甕Bは図示できない。白磁椀V類(12)は住居址検出面での出土であり、15期の遺物の混入であろう。8期の土器様相である。

**ＳＢ２**（図版 32）

杯Ａの構成は土師器８、黒色土器Ａ 20、軟質須恵器 21 個体である。土師器杯Ａは図示できないが、黒色土器ＡはⅡ（１～３）とⅠ(4)があり、１のように体部が強く内湾するもと、直線的に開くもの (2) など多様な形態がある。８の灰釉陶器椀は灰釉刷毛塗り。土師器盤Ａ (9) は焼成後底部から再調整をしている。土師器小型甕Ｄ (11) は底部糸切りの後、指ナデを施す。須恵器甕Ｄは大形で肩部に二段の凸帯を巡らし、小さくつまんだ四耳を付し、頸部には７条１単位の櫛描波状文を２段に施している。８期の土器様相である。

**ＳＢ３**（図版 33）

杯Ａの構成は土師器８、黒色土器Ａ 31、軟質須恵器 79 個体で、軟質須恵器が圧倒的に多い。灰釉陶器椀 (18・19) は体部中程まで回転ヘラ削りを施し、ハケ塗りで施釉する。８期の土器様相を示す。

**ＳＢ４**（図版 33・34、ＰＬ23、第14表）

食器は土師器、黒色土器Ａ、軟質須恵器、灰釉陶器で構成される。構成の内容は付表のようで、杯Ａについてみれば黒色土器Ａと軟質須恵器の量はほぼ拮抗している。黒色土器Ａ杯Ａは２法量をもつ。３～６が杯ＡⅡ、７～９が杯ＡⅠで７のように杯の体部を強く張るものがある。土師器は両者の約半数である。椀は黒色土器Ａが最も多く次いで灰釉陶器、一番少ないのが土師器である。土師器・黒色土器Ａともに体部は直線的に開く形態である。灰釉陶器はいずれもハケ塗りである。煮炊具は甕Ｂ（24～26）・小型甕Ｄ（19～23）の二者で構成され量的には甕Ｂが多い。甕Ｂは口径 22 cm前後、器高 31 cm前後の１法量なのに対し、小型甕Ｄは口径 10～11.5 cm（19～21）・17.5 cm (22)・22.5 cm (23) の法量の異なる三者がある。甕Ｂは縦方向にハケ調整を施した後、体部上半に横方向のナデと底部周辺のヘラ削りが顕著である。８期の土器様相である。

食器

| 種類 | 器種 | 個体数 | 量・重 | 個体数比 | | 高台径 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 杯ＡⅡ | 19 | 890 | 27 20% | 132個体 83% | 1 |
| | 椀 | 8 | 200 | | | 2 |
| | 小型 | | 1,050 | | | |
| 黒色土器Ａ | 杯ＡⅠ | 4 | 640 | 52 39% | | 7～9 |
| | 杯ＡⅡ | 30 | 2,279 | | | 3～6 |
| | 椀 | 18 | 2,125 | | | 10～13 |
| | 不明 | | 1,040 | | | |
| 須恵器 | 杯ＢⅣ | 1 | | 1 1% | | |
| 軟質須恵器 | 杯Ａ | 42 | 3,870 | 42 32% | | 14～16 |
| 灰釉陶器 | 椀 | 8 | 335 | 10 8% | | 17・18 |
| | 耳皿Ａ | 2 | 25 | | | |

煮炊具

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 甕Ｂ | 8 | 11,085 | 15個体 10% | 24～26 |
| | 小型甕Ｄ | 7 | 2,250 | | 19～23 |

貯蔵具

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 長頸壺Ａ | 1 | 300 | 11個体 7% | |
| | 甕Ａ | 5 | 2,000 | | |
| | 甕Ｄ | 1 | 1,000 | | |
| 灰釉陶器 | 小瓶 | 1 | 5 | | |
| | 長頸壺 | 3 | 100 | | |

第14表　北方遺跡　ＳＢ４出土器の構成

**ＳＢ５**（図版 34）

杯Ａの構成は土師器11、黒色土器Ａ21、軟質須恵器 14 個体である。灰釉陶器椀 (13) は、体部下半をヘラ削りし施釉方法不明。14 は白磁椀Ⅳ類の口縁部片であるが、検出面出土で 15 期に属する遺物の混入であろう。18 は甑Ｂの底部で、底径 19.7 cmを測る。体部に縦方向のハケ目を施し、端部をヨコナデする。19 は灰釉陶器小瓶で底面に回転糸切り痕を残す。８期の土器様相である。

**ＳＢ６**（図版 35）

杯Ａの構成は土師器７、黒色土器Ａ 13、軟質須恵器 32 個体で、軟質須恵器が最も多い。煮炊具は甕Ｂ (21)・小型甕Ｄ (20)・甑 (22) がある。貯蔵具は須恵器長頸壺Ａ・甕、灰釉陶器小瓶・長頸壺がある。図示できなかったが、須恵器甕片のなかに外面をハケ目調整したものがあり、土師器と須恵器の製作技法の交流という意味から注意される。８期に属する土器様相である。

**ＳＢ７**（図版 35・36、ＰＬ24、第15表）

杯Ａの構成は土師器２、黒色土器Ａ２、軟質須恵器

食器

| 種類 | 器種 | 個体数 | 量・重 | 個体数比 | | 高台径 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 杯ＡⅡ | 2 | | 2 10% | 21個体 62% | 1 |
| 黒色土器Ａ | 杯ＡⅡ | 2 | 165 | 7 33% | | 2 |
| | 椀 | 4 | 320 | | | 4 |
| | 鉢Ａ | 1 | 100 | | | |
| 黒色土器Ｂ | 耳皿Ｂ | 1 | 52 | 1 5% | | 3 |
| 軟質須恵器 | 杯Ａ | 10 | 894 | 10 47% | | 5～12 |
| 白磁 | Ⅳ類椀 | 1 | 25 | 1 5% | | |

煮炊具

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 甕Ｂ | 7 | 2,205 | 10個体 29% | 17・18 |
| | 小型甕Ｄ | 3 | 230 | | 16 |

貯蔵具

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 灰釉陶器 | 小瓶 | 3 | 648 | 3個体 9% | 13～15 |

第15表　北方遺跡　ＳＢ７出土土器の構成

10 個体である。食器のなかでは黒色土器Ｂの耳皿が注意される。ロクロで調整した後、底部をヘラ削りし高台を貼り付け、さらに、耳を折って内面と外面に粗いヘラ磨きを施し全体に黒色処理をしている。貯蔵具は灰釉陶器小瓶（13・15）と小形長頸壺(14)のみである。灰釉陶器小瓶は３点とも口縁部を欠くのみで半ば完形である。いずれも東濃産光ケ丘１号窯式である。白磁椀Ⅳ類片が１片あるが15期の遺物の混入であろう。８期の土器様相である。

食器

| 種類 | 器種 | 個体数 | 重量 | 個体数比 | | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 杯AⅡ | 3 | 551 | 3 9% | 33個体 68% | |
| 黒色土器A | 杯AⅡ | 5 | 550 | 13 39% | | 1 |
| | 椀 | 7 | 779 | | | 2~4 |
| | 鉢 A | 1 | 55 | | | |
| 須恵器 | 杯B蓋 | 1 | 20 | 1 3% | | |
| 軟質須恵器 | 杯 A | 14 | 1,003 | 14 42% | | 5~7 |
| 灰釉陶器 | 椀 | 2 | 135 | 2 6% | | 8・9 |
| 煮炊具 | | | | | | |
| 土師器 | 甕 B | 6 | 5,300 | 11個体 22% | | 12~15 |
| | 小型甕D | 5 | 705 | | | 10・11 |
| 貯蔵具 | | | | | | |
| 須恵器 | 壺 A | 3 | 495 | 5個体 10% | | |
| | 長頸壺A | 1 | 53 | | | |
| 灰釉陶器 | 長頸壺 | 1 | 13 | | | |

第16表　北方遺跡　ＳＢ８出土土器の構成

**ＳＢ９**　（図版 36）

杯Ａの構成は土師器３、黒色土器Ａ５、軟質須恵器 14 個体である。灰釉陶器椀(9)は体部外面の削りが体部中程までおよび、施釉方法は刷毛塗りである。８期に属する。

**ＳＢ１０**　（図版 37）

杯Ａの構成は土師器１、黒色土器Ａ６、軟質須恵器 11 個体である。黒色土器Ａ椀（1・2）は 4.5 cmと器高が低く体部も直線的である。３の黒色土器鉢Ａは片口を付ける。白磁椀Ⅳ類(9)と青白磁合子(10)があるが、いずれも 15 期の遺物の混入である。８期の土器様相である。

**ＳＢ１１**　（図版 37・38、ＰＬ25・26、第17表）

遺物量は多く、特に甕Ｂが多い。杯Ａの構成は土師器６、黒色土器Ａ 21、軟質須恵器 21 個体である。個体数比では黒色土器Ａと軟質須恵器が同数であるが、重量では黒色土器Ａが大きくうわまわる。13 は黒色土器杯ＡⅠであるが体部が強く張る形態である。灰釉陶器(22~25)はいずれも底部が体部にかけてヘラ削りし、25 の椀を除き施釉はハケ塗りである。25 のみ漬掛け。煮炊具は甕Ｂが多く、21 個体を識別できた。器高 32~33 cm、口径 21~24 cm、底径はいずれも 10 cmを越える。いずれも口縁が直線的に立ち、端部を面取りするものが多い。また、底部外周を手持ちヘラ削りする。器壁は胴部の最大径部で５ mm~７ mmとやや厚めである。38・39 は須恵器甕の底部であり、39 は体部に縦方向のハケ目を施し、底部外周に手持ちヘラ削りを施す手法は土師器甕Ｂの手法に共通する。SB６の須恵器甕同様注意を要する。８期の土器様相である。

食器

| 種類 | 器種 | 個体数 | 重量 | 個体数比 | | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 杯AⅡ | 6 | 360 | 10 13% | 73個体 63% | 1・2 |
| | 椀 | 3 | 180 | | | 3 |
| | 鉢 A | 1 | 55 | | | |
| | 不明 | * | 210 | | | |
| 黒色土器A | 杯AⅠ | 1 | 260 | 37 50% | | 13 |
| | 杯AⅡ | 20 | 1,370 | | | 4~12 |
| | 椀 | 16 | 1,290 | | | 14~18 |
| | 不明 | | 720 | | | |
| 軟質須恵器 | 杯 A | 21 | 1,180 | 21 28% | | 19~21 |
| 灰釉陶器 | 椀 | 3 | 190 | 7 9% | | 24・25 |
| | 皿 | 4 | 285 | | | 22・23 |
| 煮炊具 | | | | | | |
| 土師器 | 甕 B | 21 | 13,600 | 25個体 22% | | 27~38 |
| | 小型甕D | 4 | 290 | | | 26 |
| 貯蔵具 | | | | | | |
| 須恵器 | 長頸壺A | 1 | 530 | 9個体 8% | | 37 |
| | 壺 A | 5 | 3,120 | | | |
| | 壺 D | 2 | 470 | | | |
| 灰釉陶器 | 長頸壺 | 1 | 15 | | | |

第17表　北方遺跡　ＳＢ11出土土器の構成

**ＳＢ１２**　（図版 39）

土器は細片が多く図示できるものは少ない。杯Ａの構成は土師器 10、黒色土器Ａ 37、軟質須恵器 19 個体である。８の灰釉陶器耳皿は折り返したひだの４か所を工具で押さえるもので、底部は糸切り後、ヘラ削りする。８期の土器様相である。

**ＳＢ１３**　（図版 39、ＰＬ26）

杯Aの構成は土師器5、黒色土器A20、軟質須恵器21個体である。灰釉陶器椀は4個体図示できた。いずれも底部切り離し後、回転ヘラ削りするがヘラ削りの範囲は比較的狭い。施釉は全て刷毛塗り。15は須恵器短頸壺と思われる。8期の土器様相である。

**SB14**　（図版39・40、PL27、第18表）

土器のなかで煮炊具土師器甕Bが多く、SB11の遺物の状況に類似する。土師器甕Bの口縁部の形態には、16・19のように直線的に口頸部を立ち上がらせ端部を面取りするものと、15・17・18のように口縁部を比較的強く外反させ、端部を丸くおさめるものの2者がある。杯Aの構成は土師器5、黒色土器A9、軟質須恵器17個体である。8期の土器様相である。

**SB15**　（図版40～42、PL28・29、第19表）

調査された遺構のなかで、土器の出土量が最も多い住居址である。遺物はカマド脇の小ピットP6から3～7・15・17・18・20・21・25～33・66がまとまって出土した。

覆土とP6の両者を合わせた杯Aの構成は、土師器12、黒色土器A59、軟質須恵器115個体で、軟質須恵器が圧倒的に多く、土師器が少ない構成である。図示できたものも土師器では1・2のみであった。黒色土器Aは杯AⅠ・Ⅱ、椀、皿B、鉢Aの全ての器種がある。椀は口径14～16cm、器高4.7～5.8cmのもの(18～24)が多いが17はやや小形である。いずれも体部の張りは弱く直線的に開き、高台は断面三角形で外にふんばる形態が多い。杯、椀ともに内面のヘラ磨きは粗く、ヘラ磨きの間にロクロ撫での痕跡が観察できるものが多い。皿Bは器高3.4cmでやや深い。軟質須恵器は口径11～14cm、器高3.1～4cmの1法量。31のように見込に凹みをもつものは稀で、底部から体部にかけてコテ状の工具を当てている可能性が強い。灰釉陶器は椀と皿がある。椀は口径11～18cm、器高3.5～5.5cmの間で法量にばらつきがある。三日月高台、口縁端部を玉縁状におさめる形態で、底部から体部にかけて回転ヘラ削り、施釉方法は61が漬掛けの他はすべて刷毛塗りである。皿も口径13.5～17.5cmと法量にばらつきがあるが、製作技法や形態上の特徴は椀と同様である。61が大原2号窯式、ほかは光ケ丘1号窯式である。土師器盤は6個体識別できたがそのうち3個体を図示した。体部は直線的に浅く開き口縁端面は凹めるように面取りする。脚台に穿たれた透かしは楕円形で、64では4方向、外から中にむかって棒状の器具を突き刺している。黒色土器A鉢Aは10個体確認できる。図示したも

食器

| 種類 | 器種 | 個体数 | 重量 | 個体数比 | | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 杯AII | 5 | 150 | 7 13% | 52個体 63% | 1 |
| | 椀 | 1 | 20 | | | |
| | 盤A | 1 | 20 | | | |
| | 不明 | | 155 | | | |
| 黒色土器A | 杯AI | 1 | 85 | 25 48% | | 3 |
| | 杯AII | 8 | 285 | | | 2 |
| | 椀 | 15 | 570 | | | 4 |
| | 鉢A | 1 | 40 | | | 5 |
| 軟質須恵器 | 杯A | 17 | 800 | 17 33% | | 6～10 |
| 灰釉陶器 | 椀 | 3 | 175 | 3 6% | | 11・12 |
| | 不明 | | 360 | | | |

煮炊具

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 甕B | 11 | 8,110 | 16個体 20% | | 14～19 |
| | 小型甕D | 5 | 220 | | | 13 |

貯蔵具

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 壺 | 2 | 90 | 14個体 17% | | |
| | 甕A | 9 | 605 | | | |
| 灰釉陶器 | 小瓶 | 1 | 95 | | | 20 |
| | 長頸壺 | 2 | 40 | | | |

第18表　北方遺跡　SB14出土土器の構成

食器

| 種類 | 器種 | 個体数 | 重量 | 個体数比 | | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 杯AII | 12 | 390 | 19 6% | 311個体 94% | 1 |
| | 椀 | 1 | 95 | | | 2 |
| | 盤A | 6 | 2,175 | | | 63～65 |
| | 不明 | | 430 | | | |
| 黒色土器A | 杯AI | 3 | 385 | 145 46% | | 13・16 |
| | 杯AII | 56 | 2,490 | | | 6～14 |
| | 椀 | 76 | 3,250 | | | 17～24 |
| | 皿B | 1 | 60 | | | 25 |
| | 鉢A | 9 | 2,220 | | | 66～68 |
| | 不明 | | 5,180 | | | |
| 須恵器 | 杯AII | 3 | 85 | 3 1% | | |
| 軟質須恵器 | 杯A | 115 | 7,060 | 115 37% | | 26～49 |
| | 椀 | 15 | 985 | | | 50～55 |
| | 皿 | 10 | 740 | 27 9% | | 56～61 |
| | 耳皿A | 2 | 10 | | | |
| | 不明 | | 390 | | | |
| 白磁 | IV類椀 | 1 | 10 | 2 1% | | |
| | V類椀 | 1 | 3 | | | |

煮炊具

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 甕B | 6 | 3,895 | 10個体 3% | | 71 |
| | 小型甕D | 4 | 510 | | | 69・70 |

貯蔵具

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器 | 角張壺A | 3 | 125 | 105個体 3% | | 72 |
| | 短頸壺A | 1 | 15 | | | |
| | 甕A | 3 | 3,410 | | | |
| 灰釉陶器 | 長頸壺 | 3 | 1,000 | | | 73～75 |

第19表　北方遺跡　SB15出土土器の構成

のは3個体であるが口径18.6～27.4cmと法量に幅があり、形態は杯Aの相似形である。片口のもの(67)、焼成後底部に穿孔したもの(68)がある。煮炊具は土師器甕B・小型甕Dの2種、貯蔵具は須恵器短頸壺A・長頸壺A・甕、灰釉陶器長頸壺で構成される。白磁椀Ⅳ類・Ⅴ類の2片があるが後世15期の混入であろう。8期の土器様相である。

**SB16**（図版42）

土師器杯A、黒色土器A杯A、椀、白磁椀Ⅱ類、土師器甕B、須恵器甕の小片が1片ずつあるに過ぎない。図示できるものは(1)の土師器杯のみである。土器の量が少なく不安定ではあるが、土師器杯Aと白磁椀が15期、その他が8期に当たる。8期の遺物は混入であろう。

**SB17**（図版42）

SB16と同様遺物は少なく、土師器杯、黒色土器杯、椀、白磁椀Ⅱ類、灰釉陶器椀・長頸壺、土師器甕B、須恵器甕の小片があるのみである。8期と15期の遺物が混在する。

**SB18**（図版42）

遺物は少ないが、土器の構成は本遺跡における8期の住居址の一般的なあり方を示している。杯Aの構成は黒色土器A5、須恵器2、軟質須恵器5個体である。他に須恵器杯蓋Bが1点ある。7の土師器甕Bは口縁部内面のハケ目を波状に施している。8期の土器様相である。

**SB19**（図版42）

土器は小片で量も少ない。黒色土器A杯・椀、須恵器杯A、軟質須恵器杯A、灰釉陶器椀など8期の遺物と土師器杯AⅡ(1)など15期の遺物が混在している。

**SB20**（図版43）

杯Aの構成は土師器13、黒色土器A25、須恵器2、軟質須恵器15個体である。土師器盤A(16)は脚台の透かしを長方形に切っている。灰釉陶器(15)は漬掛け。8期の土器である。

**SB21**（図版43）

土器は小片で少ない。土師杯A、白磁椀・皿の小片のみである。1は土師器盤Bとしたが盤Aと考えるべきかもしれない。白磁椀は2個体あり、Ⅳ類あるいはⅤ類と考えられる椀の体部破片である。15期に属する土器様相である。

**SB22**（図版43）

遺物は多くないが、構成は他の8期の住居址に類似する。杯Aの構成は土師器3、黒色土器A16、軟質須恵器25個体である。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dがあるが図示できない。8期の土器様相である。

**SB23**（図版43）

杯Aの構成は土師器4、黒色土器A16、軟質須恵器21個体である。煮炊具は土師器甕B(19・20)・甕C・小型甕B(18)・小型甕D(17)がある。小型甕Bは類例が少なく、SB27・SB28にみられるのみである。18は口縁端部を面取し、内側を逆時計回りのハケで強く押さえる。8期の土器群である。

**SB24**（図版44）

杯Aの構成は土師器4、黒色土器A10、軟質須恵器20個体である。灰釉陶器（12・13）はいずれも刷毛塗り。煮炊具は甕B・小型甕Dの二者がある。14は口径21.5cmと大形で、体部以下を欠くため器形の全容は明らかでないが、胴部下半をヘラ削りする甕である可能性もある。

**SB26**（図版44、PL30）

土師器杯AⅡ（1～4）、杯AⅢ（6・7）・盤BⅡ(5)、灰釉陶器椀(15)、灰釉陶器広口瓶(17)などの15期の土器と、土師器杯AⅡ（8・9）、黒色土器杯AⅡ（10～12）・椀(13)、灰釉陶器椀(14)、甕B(16)等8期の土器の2時期の土器が混在している。

**ＳＢ２７**（図版45）

遺物は少なく、食器は黒色土器Ａと軟質須恵器のみである。杯Ａの構成は黒色土器Ａ４、軟質須恵器３個体である。土師器は15期の遺物の混入であろう。土師器小型甕Ｂ(5)はSB23のものに類似するが、内面全体に横方向のハケを施している。

**ＳＢ２８**（図版45、ＰＬ30、第20表）

遺物は比較的少ない。杯Ａの構成は土師器３、黒色土器Ａ３、軟質須恵器４個体である。龍泉窯系の青磁碗があるが後世の混入である。煮炊具のあり方は他とやや異なり、土師器甕の内面を横方向にハケ撫でする技法が多用される。これは、甕Ｂ(12)・小型甕Ｂ(9～11)の両者に共通しているが８期では非常に少ない技法である。(10)は底面と底部外周を手持ちヘラ削りする。貯蔵具では(13)の灰釉陶器平瓶があるのみである。底部から剥部にかけての広い範囲を回転ヘラ削りし、天井部には把手を貼付する。黒味がかった粗い灰色の胎土で釉調は黄味の強い黄緑色、猿投窯産の黒笹14号窯式にあたる。８期の土器様相である。

食器

| 種類 | 器種 | 個体数 | 出量 | 個体数比 | | 図版No. |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 杯AII | 3 | 290 | 3 21% | 14個体 63% | 1～3 |
| | 不明 | | 210 | | | |
| 黒色土器A | 杯AI | 1 | 90 | 6 43% | | 4 |
| | 杯AII | 2 | 235 | | | 5 |
| | 椀 | 3 | 370 | | | 6 |
| 軟質須恵器 | 杯A | 4 | 330 | 4 29% | | 7・8 |
| 灰釉陶器 | 椀 | 1 | 2 | 1 7% | | |

煮炊具

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器 | 甕B | 1 | 1,040 | 7個体 32% | | 12 |
| | 甕C | 1 | 15 | | | |
| | 小型甕B | 5 | 2,030 | | | 9～11 |

貯蔵具

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 灰釉陶器 | 平瓶 | 1 | 150 | 1個体 5% | | 13 |

第20表　北方遺跡　ＳＢ28出土土器の構成

**ＳＢ２９**（図版45）

杯Ａの構成は土師器４、黒色土器Ａ８、軟質須恵器９個体である。８・９は土師器小型甕Ｄ、13は灰釉陶器長頸壺である。８期の土器である。

**ＳＢ３０**（図版46、ＰＬ33）

SB３の建て替えと考えられ、接合する遺物が多い。杯Ａの構成は土師器２、黒色土師器16、軟質須恵器39個体である。煮炊具は土師器小型甕Ｄが多く18・19は大形である。22は甑Ｂと考えられ、底部端面は面取りしている。須恵器貯蔵具は短頸壺Ａ(23)・甕Ｂ(24)などがある。８期の土器群である。

**ＳＢ３１**（図版47）

全体に遺物が少ないが土師器甕Ｂ・小型甕Ｄの量が目につく。８期の土器様相である。

**ＳＢ３２**（図版47、ＰＬ31）

土器は多い。杯Ａの構成は土師器４、黒色土器Ａ９、須恵器１、軟質須恵器11個体である。灰釉陶器は椀と段皿があるが、いずれも光ケ丘１号窯式で、15は口径26.5㎝・器高8.6㎝を計る大形で内外面ともハケ塗りを施す。土師器皿(1)、白磁椀、羽釜は15期の遺物の混入であろう。８期の土器が主体を占める。

**ＳＥ１**（図版49）

黒色土器Ａを主体として土師器、軟質須恵器で構成される食器は８期他の住居址と同様である。ちなみに、杯Ａの比は土師器１個体、黒色土器Ａ21個体、軟質須恵器26個体と軟質須恵器が最も多い。灰釉陶器はすべてハケ塗り施釉である。

**Ｓ１１**（図版49）

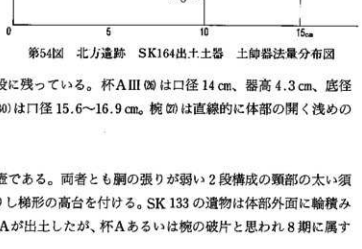
SB15の廃絶・埋没途上で、鍛冶施設として利用されたと思われる遺構の遺物である。土器全体の構成は８期の住居址のそれと大差ない。杯Ａの構成で見ると土師器36個体、黒色土器Ａ50個体、軟質須恵器42個体となり、SB15に比して土師器の比率がかなり高くなっていることが分かる。９は環状のつまみを付す須恵器の蓋で、低い天井部に短く立ち上がる口縁部は端部を丸くおさめる。器壁は厚く重い感じを受ける。内面は硯として利用されている。灰釉陶器（18～26・37）は光ケ丘１号窯式。34・35の白磁は15期の遺物と考えられる。34は白磁椀Ⅳ類、35は白磁椀Ⅷ類に伴う高台付の皿である。15期の混入を除けば、８期に属

する土器様相である。

**ＳＫ１６４**　(図版48、ＰＬ32)

土師器の食器のみで構成される墓の副葬品である。

土師器杯ＡⅡ25個体、杯ＡⅢ1個体、皿ＡⅠ13個体、椀1個体が墓の隅から固まって出土した。杯ＡⅡ(1～25)は口径8.3～9.5㎝、器高1.3～2.3㎝である。器高は低く小皿のような印象を受ける。底部から一度に口縁部までロクロで挽き出し、ロクロ目は2段に残っている。杯ＡⅢ(26)は口径14㎝、器高4.3㎝、底径7㎝と口径に比し底径が大きい。皿ＡⅠ(28～30)は口径15.6～16.9㎝。椀(27)は直線的に体部の開く浅めのもので高台は三角形で外に強く開く。



第54図　北方遺跡　SK164出土土器　土師器法量分布図

**ＳＫ１３３・１３６**　(図版48、ＰＬ31)

いずれも頸部から上を欠くが完形の須恵器壺である。両者とも胴の張りが弱い2段構成の頸部の太い須恵器長頸壺Ａである。体部下半を回転ヘラ削りし梯形の高台を付ける。SK 133の遺物は体部外面に輪積み成形痕が残る。SK 136の内部からは黒色土器Ａが出土したが、杯Ａあるいは椀の破片と思われ8期に属する土器である。

**ＳＫ５８５**

黒色土器Ａ杯Ａ(2)、軟質須恵器杯Ａ(1)、土師器甕Ｂ、須恵器甕Ｂが出土している。

**ＳＫ７２**　(図版48、ＰＬ33)

羽釜Ｂ(1)が出土した。残存が少なく鍔がいくつ付くかは不明。口縁部でやや内湾する器形で端部を面取りする。15期に属する遺物であろう。

**ＳＫ７３**　(図版48)

屋外の煮炊施設と考えられる遺構で、遺物は少なく小破片の出土である。黒色土器Ａ杯Ａ(1)、軟質須恵器杯Ａ(2)、土師器甕Ｂ(3)が図示できた。8期の土器群である。

**ＳＫ５３３**　(図版48)

白磁椀Ⅷ類。わずかに緑灰色を帯びた透明釉が厚く施釉される。

**ＳＫ５６９**　(図版48)

白磁椀Ⅱ類。黄味の強い透明釉には貫入が入る。体部外面下半は施釉されない。内面見込に段を有する。

(イ)　包含層遺物　(図版48、ＰＬ33・34)

包含層遺物は、8期の遺物を中心に15期の遺物を含んでいる。ここでは主要なものについて記す。1～4は土師器杯ＡⅡで、口径8～9.3㎝、器高も2㎝を切る法量で15期の遺物である。3には口縁部に炭化物が付着し燈明皿として使用されている。5は灰釉陶器浄瓶の口の部分で8期に属する遺物であろう。6～12は中国製白磁で、6は白磁皿、7・8は白磁椀Ⅱ類、9はⅣ類、10・11はⅤ類、12はⅧ類である。13は緑釉陶器椀で、胎土は硬い須恵質の焼きで灰白色を呈し、器表は全面にヘラ磨きを施す。釉は薄い緑色の発色をする。

イ　文字関係資料　(図版50・51、付表6・7、ＰＬ34)

本遺跡出土の古代の文字関係資料には墨書土器、刻書土器、転用硯がある。

(ア)　墨書土器（1～29）

第55図　北方遺跡　墨書文字集成(1：2)

総数29点を数える。出土地点や個別の特徴については付表6に示したので、ここでは簡単に概観しておく。

墨書の対象となった土器の種類は、黒色土器A 18点、灰釉陶器7点、土師器、軟質須恵器各2点に分類される。墨書土器を出土した遺構の時期が8期として捉えられるので、いずれも当該時期の資料とみてよいだろう。黒色土器Aと灰釉陶器への墨書が集中する傾向は、住居址出土の土器構成の比率との関連が高いと考えられるが、これらの中で、出土量の多い軟質須恵器に墨書される例が希少な点や、逆に、出土量の少ない灰釉陶器に多い点は、土器の色調の関係から墨書の効果を狙った、意図的な選択と言えるかもしれない。だが、食器の用途とも関連した問題でもあり、即断はできない。

次に、墨書の部位別の傾向をみてみると、黒色土器A 18点のうち、体部に施されるものが16点、底部が2点である。特に、口縁部が上位に当たるように墨書する、正位が13点と多い。灰釉陶器は釉に墨がのらないことから底部に書かれる。土師器や軟質須恵器を加え、本遺跡の墨書土器の大半は体部に書かれる例がほとんどで、誰の目にも止まるような効果を上げる配慮があったと考えられる。

続いて墨書文字についてみてみる。判読できた文字は『青』、『田』、『栗』の三字がある。特に、前二者はそれぞれ9点、7点と出土点数の半数にあたり、使用頻度の高い文字として注目できる(第55図)。『青』は土師器、黒色土器A、軟質須恵器、灰釉陶器の多器種を対象に墨書されるのに対し、『田』は松本市教委調査地区から出土した遺物に、軟質須恵器に墨書された2点の出土例があったほかは、いずれも黒色土器Aのみに書かれ、文字のもつ役割の違いを反映している可能性もある。『青』は5・21のグループと『月』の部分が外側へ跳ねるように書く、15・16・22～24の二種類に分類でき、複数の書き手を推定することができる。一方、『田』も字体そのものに明瞭な差は認められないが、「田」の書き方に7とそれ以外に二種類が認められるので、これも何人かの書き手を想定してよいだろう。二者の文字の意味の解釈はかなり難しいが、集団の紐帯を維持するための記号としての役割を果たした可能性が強い。『栗』は同一文字を同一個体に二文字を墨書する例で、SB 8出土の1点がある。大きな文字を正位に配し、文字に慣れた書き手に

よる墨書と思われる。このほかの墨書土器のうち、SB 4から出土した4は『貞』と判読できる可能性があるが、不鮮明であるため確定はできなかった。

(イ)　刻書土器（30・31）

刻書土器とは、土器焼成後に先端のとがった工具を使用して文字などを線刻したものをさし、土器焼成前に篦書きされる、いわゆる「ヘラ記号」とは区別する。

本遺跡出土の刻書土器は図示した2点がある。

31はSB 32から出土した軟質須恵器で、底部に近い体部に釘状工具を使用して線刻されている。文字の判読は難しいが、墨書土器にもみられた『田』を意識したと思われる。また、30はSB 11から出土したもので、黒色土器Aの杯体部に、かなり無造作に刻書している。おそらく、最初から文字を記すためではないと思われる。刻字は2㎜弱の幅でかなり浅く、口縁部から底部にかけて施される。なお、松本市教委で調査したSB 18からは、灰釉陶器の内側底面に『大井』と判読できる刻書があることが報告されており（松本市教委 1988）、焼成前、あるいは、焼成後の刻字なのかは不明であるが、いずれにせよ、遺跡の性格を語る資料として30とともに注目される資料である。

(ウ)　転用硯（32～42）

転用硯とは、土器や陶器が本来もつ属性を失い、硯として転用されたものをさす。分類や定義の詳細については総論で述べるが、筆揃えや墨溜めに使用したとみられる痕跡を残すものは、硯との区別が明確でないため、これも含めて広義の転用硯として扱うこととした。

転用硯は11点を数える。このうち、確実に転用硯として認定できるのは33・37・40の3点である。33・40は灰釉陶器の底面外、内側を硯面としており、磨滅の痕跡が鮮明である。37・40はSI 1からの出土であるが、SB 15を切る遺構であることから、本来は住居址に帰属すると予想される。37は須恵器杯蓋Bの内面を転用しており、当該時期のなかでは珍しい資料である。内面にはわずかに墨痕が残り、かなり磨滅し、光沢も認められる。転用硯の可能性が強いと判断した資料に32・34～36・38・39・41・42がある。墨痕が不鮮明であるが、磨滅の痕跡がわずかに観察されたことを根拠としている。42が遺構外の遺物であるほかは、8期に帰属する遺構から出土している。35は須恵器甕の胴部破片内面を転用した資料で全体に磨滅があり、座り良く整形した痕跡も観察される。34は墨書土器の17と同一個体で底部内面を硯に使用し、外側に墨書する類例の少ない資料である。

硯に転用される器は、須恵器と灰釉陶器に限定される。本遺跡の場合は灰釉陶器が圧倒的に多く、器種も椀や皿に集中する。転用部位も灰釉陶器の場合、底面内側を使用する例が多く、32・36・38・39のような体部を打ち欠いて底面だけを整形した例も少なくない。

ウ　金属製品

(ア)　鉄製品（図版52・53　PL35・36）

本遺跡の古代遺構出土の鉄製品は67点を数える。その内訳は、鏃・鏃先2点、鎌4点、刀子14点、斧1点、鉄2点、釘8点、鍬1点、鈸具1点、金具類2点、用途不明品32（うち棒状品22点、板状品5点）である。また、鉄滓は18点出土し、総重量680gを計る。

鉄製品が数多く出土した遺構としてはSI 1の14点が群を抜いており、次いでSB 4・9・15・32から4点ずつ出土している。またSI 1からは鉄滓も4点出土した。以下、器種ごとに記述を進める。

**鏃・鏃先**　2点とも広義のU字形鏃・鏃先である。1はSB 15出土でほぼ完形。刃先端は直接状になる。2はSB 7出土で左耳部を欠く。刃先端はやや尖鋭になる。この2点の刃先端の違いは機能差か、使用頻度による差かであるのかは不明である。

**鎌**　3はほぼ完形で出土した。刃部は大きく湾曲し、着柄部折り返しは背縁と末端の交わるコーナーにあり、着柄角は約45°になる。4・5は、先端部のみの出土で、全体の形状は不明である。なお、小破片のため図示しなかったが、SB 9からも1点出土している。

**刀子**　SB 5・23より各2点、SB 1・2・4・6・8・9・13・20・21・SI 1より各1点出土し、うち8点を図示した（6～13）。刃部は、使用による減りのためか総じて内湾傾向を示す（特に11が顕著）。大きさの点では、やや小形の6、中程度の9～11、大形の12といった3種が見られる。また。12は片刃に近い断面を有し、剃刀（かみそり）の可能性がある。13は茎部破片であるが、木質部が遺存していた。

**斧**　14は、いわゆる有袋鉄斧である。下半部両側縁は錆により欠失しており、刃長はさらに長くなると考えられる。

**鋏**　15・16の2点が出土した。15は下端を欠くが、握鋏と考えられる。16は破片のため全体形状がわからないが、片刃であることから鋏と認定した。

**釘**　SI 1から3点、SB 2・9・12・32・SK 17から各1点出土した。すべて鍛造の角釘である。遺存度の良好な3点を図示した（17～19）。3点とも頭部は叩いて作り出している。

**錐**　SB 7より出土した1点のみである（20）。身部は腐食が著しく、正確な形状をとどめないが、幅広であったことは残存部からも推定できる。

**鈴具**　21はSI 1より出土した完形品である。外枠を一体につくり、刺金軸をはめこんでいる。帯との連結部には孔が2個あいている。鋳造品である。

**金具類**　SB 19・SI 1より1点ずつ出土した（22・23）。22は断面円形、23は断面方形の鉄棒をリング状に膨らみをもたせて折り返している。両者ともに下半分を欠き全体の形状は不明だが、掛金具の受壺などが想定できる。

**用途不明品**　棒状品22点は、断面形で3種に分れる。断面ほぼ正方形のI類が13点で、SI 1から3点、SB 4から2点、SB 1・2・9・30、SD 2、SK 17・569・622から各1点出土している。32・35・36を図示したが、36は全長14cm以上を測り、鏃茎部等の製品の一部というよりは別の機能を考えたほうが良いであろう。断面円形のII類は2点で、SB 32、SI 1から各1点出土している。27図示したが、紡錘車の軸であろうか。断面長方形のIII類は7点、SB 32、SI 1から各2点、SB 3・12・15から各1点出土している。30・31・33・34の4点を図示した。

板状品5点は、すべて破片であるが鋳造品である。SB 5・12・15・26、SI 1から各1点出土し、28・29の2点を図示した。

その他に24、環状を呈する25、コイル状の26がある。さらに形態不明の小破片がSB 15・23より各1点出土している。

**鉄滓**　SI 1より4点、SB 20より3点、SB 32より2点、SB 2・12・14・19・23・25、SD 2、SK 619・623から各1点出土した。PL 36に13点掲載した。

エ　石製品（図版53・54　PL 36）

本遺跡の古代石製品は、砥石と8点、台石4点の計12点であった。以下、器種ごとに見ていく。

**砥石**　SB 11より2点、SB 4・5・19・23・24、SI 1より各1点出土し、うち6点を図示した（1～6）。粒子の粗密によって3種に分けられる。I類は、砂岩製で目が粗いもので、5・6がこれに属す。両者とも下半部を欠損する。上端の整形は、5が側面を丸く整形しているのに対し。6は粗く打ち割ったままである。作業面は5・6ともに4面である。II類は凝灰岩を用い、中程度の目の粗さをもち、1～3がこれに属す。作業面は4面であるが、2・3のように1コーナーが丸味を帯びるものがある。図示でき

なかった2点も本類に属す（SB 19・23出土）。Ⅲ類は4の1点のみであるが、絹雲母片岩を用いた硬質のものである。仕上げ砥であろうか、作業面は表裏2面である。

**台石**　7は節理面にそって扁平に割れた砂岩を用いている。全面とも磨耗が著しい。また、表面は被熱により中央部分は赤灰色に、その周辺部分半分は灰赤色に変色している。平坦な形状をもつため台石としたが他の機能も想定される。8は砂岩製のものである。被熱が著しく、暗赤褐色を呈し、もろく壊れやすい。SB 15からはこの8と同類の台石がさらに2点出土している。

オ　土製品（図版54　PL36）

土錘1点、支脚1点、羽口4点が出土した。1は紡錘形をした管状土錘で、重量4.2 gを計り、完形品である。2は支脚で、上半部を欠く。3～5は羽口である。図示しなかったがこの他にSB 9からも1点小破片が出土している。

カ　漆　器

SE 1から漆器が1点出土している。円筒形の箱のようなもので、木質部は腐り、その上に塗った黒漆が残っている。底部と体部を接合した部分が残存しており、体部は一枚板を曲げ物にしてつくっている。底径は13.6 cm、体部は残存している高さで2.7 cmをはかる。蓋の可能性もある。

(2)　中世の遺物

ア　土器・陶磁器（図版55－1～24・付表8・PL37）

**概観**

中世の土器・陶磁器は、包含層をはじめ掘立柱建物址、櫃址、溝址、土坑から出土している。古瀬戸系陶器（22点）の、天目茶碗・卸皿・縁釉皿・折縁深皿・直縁大皿・四耳壺、大窯期（1点）の丸碗、常滑系の甕（31点）・捏鉢（4点）・三筋壺（3点）・山茶碗（3点）・土師器皿（3点）・内耳鍋（69点）・土師質擂鉢（1点）、また輸入陶磁器（10点）として青磁の碗・皿がある。時期的には中世の全体にわたり、全域に散在している。これに引き続く17世紀から18世紀の遺物はほとんどみられず、19世紀になってわずかに出土し、SK 181から19世紀前半に属す陶磁器が出土している。

(ア)　土　器

a．在地系土器（5～12）

**皿**　遺構ではSK 456・605から出土したものがあり、遺構外ではN－34区から出土している。N－34区のもの(5)は、手捏ね成形のA 1類で指オサエ痕が顕著に残る。SK 456のもの(6)は、体部外面の上方をくびれさせながらナデを一周入れて、口縁部が分厚く外反するような形としている。また、内側に向いた口縁部をヨコナデし、平坦面を作出している。ⅠA 3類に属す。SK 605のもの(7)は、燈明皿として使われ、口縁部には炭化物が付着し、色調が黒っぽくなっている。外形は底より垂直に近い形で立ち上がり、内面は底部と体部の境に特に強いナデを入れている。ⅡB類に含まれる。

**内耳鍋**　いずれも遺構から出土し、遺構外からの出土はない。8～12に図示したが、完全に法量を復元できるものはなく、また、口縁部形態を知れるものも少ないため、時期を決定することは難しい。SK 605から出土した12は、体部から「く」状に屈折して口縁部に至るもので、Ⅰ類に分類される。また、SK 560から出土した8は、ⅡC類に分類でき、図示できなかったもののなかにも同形態の破片が確認されている。

b．産地不明の土器

**土師質擂鉢**　SK 1から土師質の擂鉢が出土している。類例が乏しく、その系統・分布・時期について詳

らかではない。

(イ) 陶　器

a．古瀬戸系陶器（13～20）

**天目茶碗**　13は SK 14より出土している。体部はやや丸みを帯び、口唇部はくびれる。茶色を呈する鉄釉が掛かり、高台近くには鉄化粧を施す。15世紀と考えられる。

**御皿**　15は SK 427から出土している。底部片で、卸目の磨滅が著しく進み、また、体部外面の調整は粗雑な感がある。底径の大きさから中期様式以降の時期であろう。

**緑釉皿**　14は SK 605から出土している。硯として使用されたらしく、内面には墨が多く付着し、特に底面は磨滅が著しく滑らかな面となっている。灰釉が掛かり、緑色の釉調となる。15世紀に属す。

**折縁深皿・直縁大皿**　折縁深皿が SK 2・5・13(18)、SK 560(19)、SD 4(17)より、直縁大皿が SK 576(16)より出土している。また、折縁となるか直縁となるか不明な体部片が SK 575より出土している。18は同一個体の破片が接合しており、灰釉の掛かった乳白色のもので、全体に釉が剝げて斑状に汚くなっている。三足となり、口縁部の形態から15世紀前半と考えられる。19は小片のため法量は不明。透明感のある緑色を呈する灰釉が掛かる。口縁部の外への折れは既に顕著ではなくなり、15世紀後半の様相をもつ。17は脚部の有無は不明で、体部外面上半に濃い緑色となる灰釉が掛かり、ほかは露胎となる。底部外面中央あたりに回転糸切り痕を若干残している。15世紀代の所産であろう。16は口径18.0cmとやや小さめであり、内面は炭化物が付着している。灰釉が黄味がかる白濁色となる。15世紀代であろう。

**四耳壺**　ST 8・P 2と ST 9・P 1が接合(20)し、また、SK 606出土の体部破片も同一個体と思われる。緑色を呈する灰釉を刷毛塗りするが、残存が悪く釉は剝落している。13世紀に属するものであろう。

b．大窯製品

丸碗が SB 5で確認されている。遺構は古代に属すことから混入したものである。透明感のある灰釉を施し、貫入が多くみられる。

c．東海系無釉陶器（21・23）

**山茶碗**　21は器壁が厚く、付高台は太め、体部に丸みがあることから、12世紀後葉の浅間窯下1号窯式に比定される。内面は全面が滑らかとなっている。ほかに N-Y 12区より明和1号窯式前後の破片がある。

**常滑系甕**　23は SA 1、SK 606・608・619、ST 8の P 2から出土したものである。口縁部から肩部にかけて自然釉が掛かり、焼成は良好で、全体に口径が広く器高が低い寸詰まりな形となる。中津川窯産であり、Ⅳ類に分類される。また、SA 2、SK 606、ST 8の P 2からも同一個体の破片が出土しており、図示できなかったが、肩部にタタキ目がみられ、23と比べて口縁部から肩部に掛かる自然釉が厚く、濃い緑色を呈している。また、体部の素地の色調は同じであるが、光沢を帯びている点が相違する。そのほかの破片は形態・時期など詳細をつかむことはできない。

**三筋壺**　図示することはできなかったが、S I 1と包含層から検出されている。前者は赤灰色の粗雑な胎土で、後者は淡青灰色の精緻なものである。

(ウ) 磁　器

a．青磁（1～4）

**碗**　C・F・I・J類が確認されている。劃花文をもつC類が SB 28、SK 321にみられ、1に図示した。口唇部直下内外面に沈線を施し、草花文を付している。住居址出土のものは混入であろう。F類は SK 464(2)から出土し、間弁をもつ鎬蓮弁文を見ることができる。ほかに 0－38区より検出された。I類は遺構外に確認され、また、J類は SB 1に混入して検出された。J類は上半に雷文をもち、その下に幅広の蓮弁文がヘラ描きされる。雷文は便化が進み、時計周りに2回転する単位文が圏線により連続しているよ

うである。15世紀前葉と考えたい。

**杯**　4はSK 606出土の龍泉窯系青磁の杯で、下位で屈曲して立ち上がり、口縁部を外反させて平坦面を作っている。

イ　金属製品

(ア)　鉄製品（図版56　PL38）

本遺跡で中世遺構から出土した鉄製品は18点を数える。その内訳は刀子2点、釘7点、用途不明品9点（棒状品5点、板状品2点を含む）であった。また、鉄滓は4点出土している。遺構別の出土状況は、SK 514で5点、SK 560で5点、SK 560で3点、他は1点ずつの出土である。以下、機種ごとに記述を行なう。

**刀子**　37はほぼ完形品で、全長29.5cmを計る大形のもので、刀子というよりは短刀といったほうが良いかもしれない。刀身には片側だけであるが幅広の樋が1条走る。茎部は中程が欠落しており、目釘孔があった可能性がある。他にSK 382から破片が1点出土している。

**釘**　SK 14・455・464・514・552・560・605より欠く1点出土している。38は鍛造の角釘である。他の図示しなかった6点も鍛造の角釘である。

**用途不明品**　棒状品の5点は、39のように断面がほぼ正方形になるものである。SK 514から2点SK 223・560・575から各1点出土した。板状品2点は鍛造品である。SK 553・560から各1点出土した。
その他にSK 514から2点、用途不明品の鉄片が出土した。

**鉄滓**　SK 125から2点、SK 1・13から各1点出土した。写真図版のみの掲載であるが(PL38)、SK 1出土のものは椀形鉄滓である。

(イ)　銅製品（図版56　PL38）

中世遺構出土の銅製品は、銭貨が23点、棒状品が1点であった。なお、銭貨のうち1点は遺構外出土のものであるが、北宋銭であるためここで扱う。判読可能の銭貨は13点で、北宋銭10点と、明銭3点であった。個々の銭貨については遺構別に第21表に示し、比較的遺存状態の良かった6点を図示した(45～50)。51は円形の断面をもつ、全長13.5cmを測る棒状品である。下端は尖っている。用途は不明である。

| 遺構名 | 銭貨名 | 初鋳年 | 国名 | 書体 | 図No. |
|---|---|---|---|---|---|
| SK 14 | 紹聖元寶 | 1094 | 北宋 | 真書 | |
| SK 221 | 洪武通寶 | 1368 | 明 | | 49 |
| SK 225 | 紹聖元寶<br>洪武通寶<br>洪武通寶<br>不　明<br>不　明<br>不　明 | 1094<br>1368<br>1368 | 北宋<br>明<br>明 | 真書 | 50 |
| SK 538 | 不　明 | | | | |
| SK 539 | 祥符通寶<br>元豊通寶<br>元祐通寶<br>元祐通寶<br>不　明<br>不　明 | 1010<br>1078<br>1086<br>1086 | 北宋<br>北宋<br>北宋<br>北宋 | 真書<br>真書<br>真書 | 45<br>48 |
| SK 543 | 不　明 | | | | |
| SK 558 | 皇宋通寶<br>熙寧元寶<br>聖宋元寶<br>不　明 | 1039<br>1068<br>1101 | 北宋<br>北宋<br>北宋 | 真書<br>真書<br>真書 | 47 |
| SK 563 | 治平通寶 | 1064 | 北宋 | 真書 | 46 |
| SK 564 | 不　明<br>不　明<br>不　明 | | | | |
| SK 605 | 不　明 | | | | |
| 遺構外 | 景德元寶 | 1004 | 北宋 | | |

初鋳年は、松原典明 1983「古銭一覧表」『日本考古学小辞典』ニュー・サイエンス社による。

第21表　北方遺跡　銭貨一覧

ウ　石製品（図版56　ＰＬ38）

中世遺構出土の石製品は、砥石が２点、（SK481・560）、凹石が２点（SK14・101）であった。９は流紋岩製の砥石で粒子の粗密は中程度である。10・11は凹で、ともに安山岩製である。表裏の凹部は皿状に整形されているが、用途は不明である。

(ｴ) 漆　器

SK101から漆椀が出土している。体部下半が残存し、上半から口縁部は認められない。木質部は完全に腐り、その形状に従って漆皮膜が残っている。土圧によって平たくつぶれ、底部と体部の区別をつけることはできない。黒漆を塗ったあと、内面に朱漆で文様を描いているようである。外面は、遺存状況が悪く朱漆による文様は不明である。漆皿の可能性も十分考えられる。

(3)　遺構外の遺物

ア　金属製品

(ｱ) 鉄製品（図版56　ＰＬ38）

遺構外から43点の鉄製品が出土している。その内訳は、刀子５点、釘６点、鏃２点、燧鉄（ひうちがね）１点、用途不明品29点（うち棒状品が20点、板状品が４点）である。また、鉄滓は８点出土した。５点を図示したが、40・41は燧鉄、43・44は用途不明である。

(ｲ) 銅製品（ＰＬ38）

和鏡の破片（縁部分のみ）と思われるのが１点出土している（52、写真図版のみ掲載）。推定直径は約9.5cm、厚さ0.2cm、縁高は0.5cmで、縁はやや内傾ぎみに立ち上がる。

イ　土製品（図版56　ＰＬ38）

平瓦の破片が１点出土している（6）。凹面は布目痕、凹面は叩き痕が観察される。また、側縁には沈線が１状走る。破片のため全体形状は確かではないが、布目の走行方向から推定すると、台形状を呈する。

## 第４節　成果と課題

### １　竪穴住居址の変遷

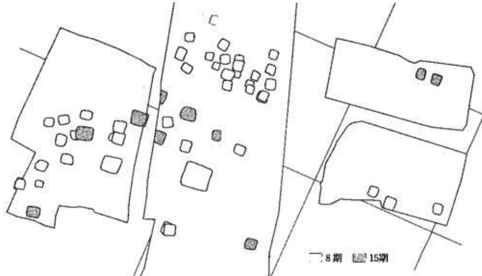
今回検出された古代の竪穴住居址は８・15期に属するもののみであり、８期27軒、15期５軒である。松本市教委調査分を合わせると８期43軒，15期10軒となり、やはり８・15期以外の住居址は検出されていない。したがって、本遺跡では長期にわたる集落の変遷といったものは捉えることはできない。ただし、８期の集落の中でも住居址の切り合い、位置関係から、最低３段階の変遷が考えられることから、ここでは、一時期の集落の中での住居址等の変遷を、カマドの構造など住居址の諸属性を要素として、捉えてみようと思う。その際、松本市教委調査分も加えて検討してみたい。

(1)　８期の集落

ア　集落の立地

当時の梓川の本流は、現在の樽木川付近（松本インターチェンジ付近）にあり、本集落のある島内地区は、中小河川が幾重にも交錯する網状流地帯であったと想定される。そのことは、遺跡の分布状況や松本イン

ターチェンジ付近及び島内遺跡群での礫層中にみられる礫の大きさ・礫層の分布などからも裏付けられるだろう。８期の集落は、そうした網状流の中の比較的安定した微高地上を居住域として占地し、それに伴う生産域は小河川の流れが十分に活用できる適地を選択している。




第56図　北方遺跡　古代住居址分布図

イ　遺構の分布

住居址の分布から、視覚的に四つのブロックに分けることができる（第57図）。

Ａ群：超大型の住居址とカマドをもたない住居址を主とした数軒の小型の住居址とで構成される一群。

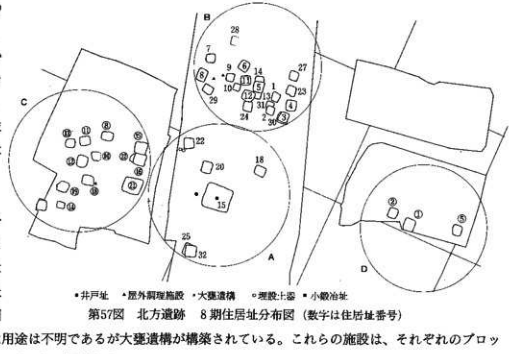
Ｂ群：中ないし小型の住居址が極めて密集し、かつ、直線的な配置をもってそれらが並ぶ一群。

Ｃ群：中ないし小型の住居址が集中し、かつ、直線的な配置をもってそれらが並ぶ一群。ただし、住居址の密集の度合いはＢ群ほどではない。

Ｄ群：中ないし小型の住居址が散漫に分布する一群。

これらは、一定の遺構空白域を挟み、Ａ群を中核とするかのような位置関係を保っている。また、住居址の直線的な並びや遺構の空白域は帯状を呈しており、道を想定させる。

その他の遺構の分布をみてみると、Ａ群には井戸あるいは貯水施設と小鍛冶址が、Ｂ群には屋外調理施設が、Ｃ群には用途は不明であるが大甕遺構が構築されている。これらの施設は、それぞれのブロックの中で核となっていたことが予想される。




第57図　北方遺跡　８期住居址分布図（数字は住居址番号）

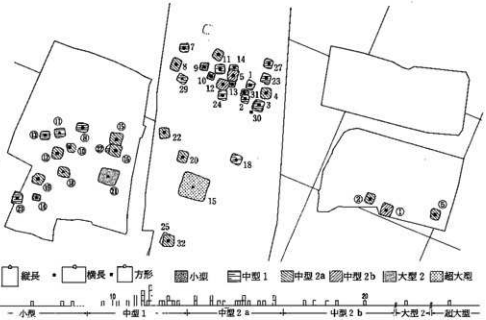
ウ　住居址

本集落の住居址は、カマドをもつものともたないものとに大きく二分される。カマドをもたない住居址

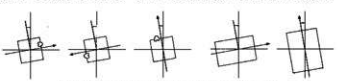
については、平面形も長方形プランを呈するものが多く、納屋・倉庫などといった小規模な掘立柱建物址のもつ機能を有していたとも考えられる。本集落には掘立柱建物址を伴わないことからも、その可能性は強いといえるだろう。ただし、遺物の出土状況やその他の属性は、カマドをもつ住居址と何等かわるものではない。

(ｳ)　規模・平面形

超大型・中型・小型などの規模の類型に加え、カマドを上にした時の縦長・横長・方形の要素を重ねた。カマドをもたない住居址については、本遺跡の住居址のほとんどが東あるいは西カマドなので、東・西にカマドがあるものとして、縦長・横長・方形とした（第58図）。住居址の分布をみると、平面形では、カマドをもつ住居址のうち、縦長の住居址はA・B・C群にそれぞれ1軒ずつみられ、横長の住居址はB群に2軒、C群に1軒みられる。その他はいずれも方形の住居址である。カマドをもたない住居址では縦長の住居址がA群に1軒、C群に3軒みられ、横長の住居址はA・B群にそれぞれ1軒分布する。方形の住居址は各ブロックにみられ、その占める割合は、カマドをもつ住居址同様最も多い。

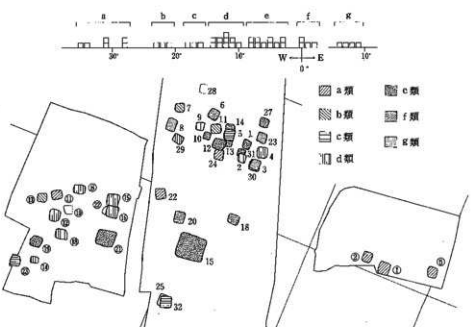


第58図　北方遺跡　8期住居址の規模・平面形


第59図　北方遺跡　住居址の主軸模式図

(ｲ)　主軸

カマドを通る軸とそれに直交する軸、これは棟方向は異なるかもしれないが、同じ方位感覚（集落内規制）によって建てられているものと解釈した。したがって、第59図に示した模式図は、すべて同一の主軸方向と解釈する。その結果、N0°を中心に、西へ35°から東へ9°までの範囲に



第60図　北方遺跡　8期住居址の主軸

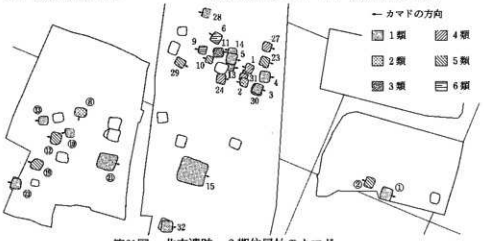
分布し、7細分が可能である(第60図)。住居址の主軸を7細分でみると、a類は各住居址群にみられ、D群はいずれもa類の住居址で構成されている。c・e類の住居址はA・B・C群に、b・d類の住居址はB・C群にみられる。また、f類の住居址はA・B群に、g類の住居址はB群のみに分布している。

(ｳ) カマド

石組カマドと粘土カマドに大きく二分され、さらに、その位置、燃焼部が壁から外に張り出すか否かによって以下のように分類した。

1類：石組カマド－中央－燃焼部張り出さない
2類：石組カマド－端－燃焼部張り出さない
3類：石組カマド－端－燃焼部張り出す
4類：粘土カマド－中央－燃焼部張り出さない
5類：粘土カマド－中央－燃焼部張り出す
6類：粘土カマド－端－燃焼部張り出す

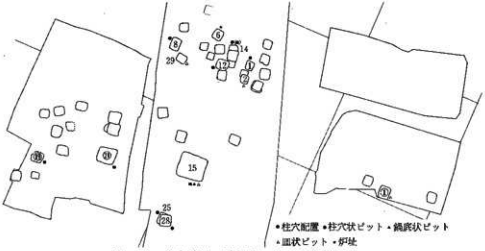
カマドをもつ住居址の分布をみると、1類はA・B・C・D群に、2類はB・C群に、3・4・6類はB群に、5類はB・C・D群にそれぞれみられる。



第61図　北方遺跡　8期住居址のカマド

(ｴ) 諸施設

本集落内では、住居址内にピットを伴うものが数多く検出されているが、柱穴配置をもつ住居址はSB15の1軒のみで、他に、SB14で柱穴と思われるものが1基検出されているほかは、いずれも用途不明のピットである。それらのピットを断面形で分類すると、柱穴状のもの、鍋底状のもの、皿状のものの三者に分けられる(第62図)。諸施設を伴う住居址の分布をみると、柱穴状のピットをもつ住居址はA・B・C群に、鍋底状のピットをもつ住居址はA・C群に、皿状のピットをもつ住居址はA・B群にそれぞれみられる。また、火床を床面中央に伴う住居址(SB 6)が1軒B群に分布する。

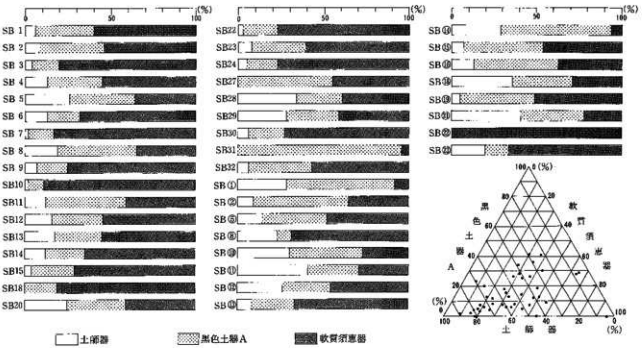


第62図　北方遺跡　諸施設のある8期住居址

エ　出土遺物

(ｱ) 土器(第63・64図)

本集落の住居址から出土する土器には、土師器，黒色土器A・B，須恵器，軟質須恵器，灰釉陶器があり、このような土器組成は、8期の様相として捉えられる。食器では土師器の占める割合が少なく、8期

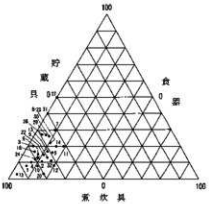



第63図　北方遺跡　8期住居址出土の杯AⅡ重量比

の中でも前半に位置づけられる。また、軟質須恵器の量が豊富な点は、本集落の特徴の一つといえるだろう。

(イ)　文字関係資料（第65図）

本遺跡では、「青」・「田」の文字が銘記された墨書土器が複数の住居址から出土している(第65図)。これらの同一文字は、同時期に書かれ、使用されたものと考えられる。また、文字からは複数の書き手が存在していたことが窺える。なお、「青」・「田」の墨書土器が両方とも出土しているのはSB15・32（「田」は刻書）で、「青」の墨書土器が出土しているのはカマドを東壁にもつ住居址、「田」の墨書土器が出土しているのはカマドを西壁にもつ住居址である。一方、硯は転用硯の形をとり、11点出土している。




第64図　北方遺跡　8期住居址出土の食器・煮炊具・貯蔵具の構成（個体数比）

(ウ)　土器の接合関係（第66図）

土器片が遺構間で接合するということは、それぞれの遺構が同時期に開口していたことを示しており、その時点では遺構自体の機能もすでに失っている場合が多いと考えられる。また、土器自体も本来の機能を失ったために各所に分散しているといえよう。したがって、接合関係がみられる遺構は、比較的近い時期に遺構の機

第65図　北方遺跡　文字関係資料を出土した8期の住居址

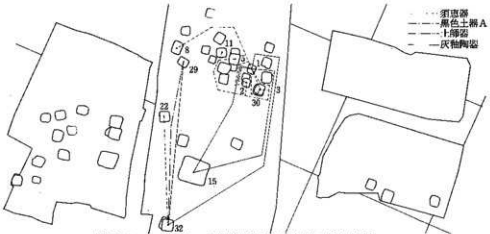
能が停止したものとみてよいと考えられる。今回呈示した資料は、灰釉陶器と比較的接合が容易な特徴的な遺物の接合関係で、時間的な制約もあって十分なものとはいえない。

(ニ)　金属製品・石製品

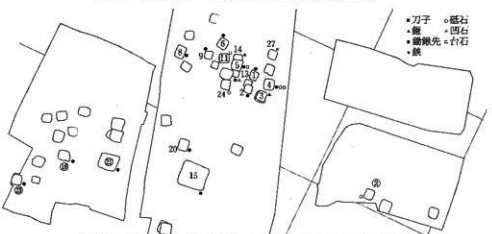
本遺跡からは、鋤鍬先・鎌・砥石など農耕具として捉えられるものや、刀子・鋏など広義の工具として捉えられるもの、羽口・鉄滓などの工房に関わるものが出土している。

(オ)　覆土内の集石

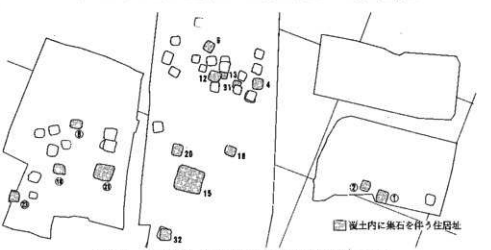
本遺跡では、覆土内に集石を伴う住居址が数多く検出されている(第68図)。これらの集石は床面に近いレベルに集まっており、構成礫は拳大～人頭大礫で、カマド袖石も含まれている。これら集石の性格や背景などは即断できない。ただし、現象としては住居址廃絶後、時間をそれほどおかずに集石が形成されたと捉えられる。



第66図　北方遺跡　8期住居址出土土器の接合関係



第67図　北方遺跡　金属製品・石製品を出土した8期の住居址



第68図　北方遺跡　覆土内に集石を伴う8期の住居址

オ　住居址の分類

これまで住居址の諸属性について述べてきたが、それぞれがバラエティーに富み、一律には分類し難い。ここでは構造的側面を中心として住居址の分類をしてみたい。基準とするものは、カマドの位置とカマド燃焼部の位置である。カマドの位置は住居内の空間利用に関わり、また、燃焼部の位置は壁構造に関わると考えられるからである。さらに、カマドをもつ住居址については、それが石組か粘土かによって細分し、

住居址の平面形を一要素として加え、住居址を分類する。

Ⅰ－ａ－１（中央－石組－縦長）：SB15・㉑
Ⅰ－ａ－２（中央－石組－横長）：SB ５
Ⅰ－ａ－３（中央－石組－方形）：SB ３・４・14・30・31・32・①・⑩・⑬・㉓　　SB28はⅠ－ａ
Ⅰ－ｂ－２（中央－粘土－横長）：SB13
Ⅰ－ｂ－３（中央－粘土－方形）：SB １・27・24
Ⅱ－ｂ－１（中央・燃焼部張り出し－粘土－縦長）：SB29
Ⅱ－ｂ－３（中央・燃焼部張り出し－粘土－方形）：SB10・23・②・⑫
Ⅲ－ａ－２（端－石組－横長）：SB⑧
Ⅲ－ａ－３（端－石組－方形）：SB ２
Ⅳ－ａ－３（端・燃焼部張り出し－石組－方形）：SB11
Ⅳ－ｂ－３（端・燃焼部張り出し－粘土－方形）：SB ６・９・⑲
Ⅴ－１（カマドなし－縦長）：SB18・⑪・⑭・⑱
Ⅴ－２（カマドなし－横長）：SB ８・20
Ⅴ－３（カマドなし－方形）：SB ７・12・22・⑮・⑯

カ　住居址の変遷

前項の住居址分類をもとに、諸属性を加えながら住居址等の動きを捉えてみようと思う。その際に、一時期にこの地に忽然と集落が現われ、消失するという状況から、最初から最後まで集落の形態を整えていたという前提に立つ。したがって、大形住居＋複数の小形住居という関係は、終始保たれていたと考えられる。

そうした目で大形住居址をみると、SB15廃絶後すぐにＳＩ１として利用され、SB15はSB㉑に規模を縮小し、移り変わったとみる。ただし、SB15は他の住居址に比べ、長期に渡って存続し得る構造的特質をもつことから、SB㉑と併存していた可能性もあり、その場合の動きは権威などの交代といった内的側面の移動と捉えられよう。両者はともに中央に石組カマドをもち、平面形も縦長の住居址である。また、住居址の主軸も同様である。

小形の住居址に目を転じてみると、B群では、住居址の切りあいと密集の度合いから、２ないし３段階の動きが読み取れる。また、東壁カマド・西壁カマドの住居址のグループとカマドのない住居址のグループがある。最も住居址が密集するSB ５・11～14・24の部分で住居を建てるには、住居の変遷を３段階想定しないと不可能である。SB13・24は中央に粘土カマドをもち、SB ５・13は中央にカマドをもつ方形の住居址である。このグループの中で、SB14のみが西壁カマドで、煙道部を地山にトンネル状に掘り込んで作られている住居址で、類例として、粘土カマドではあるが唯一SB31がある。SB31は、西壁にカマドをもつSB １・２に切られている。同じ西壁にカマドをもつSB ６とSB14は、主軸を同じくし、SB ６はSB11と燃焼部を含めたカマドの位置・住居址の規模・平面形が同様である。また、SB12はカマドをもたない住居址で、主軸はSB １・２と同様である。以上のことから、周辺の住居址を含めて、このグループでの住居址の動きは、SB13・24・31→SB １・２・６・12・14→SB ５・11と読み取れる。

キ　集落の変遷

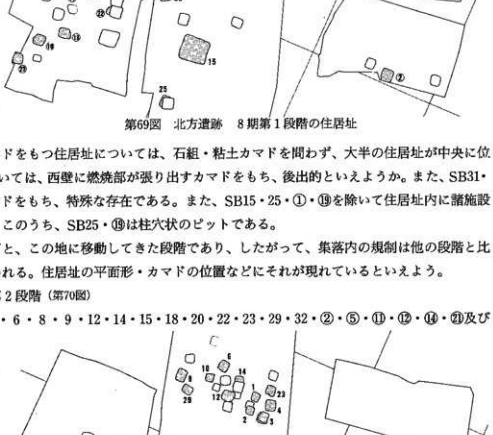
前項までの資料に基づき、８期の集落の変遷を捉えてみようと思う。本来ならば、資料呈示に留めるべきところであるが、遺跡を調査したものとして、ある程度方向性が見いだせればと思い、敢て試みた。た

たき台となれば幸いである。

(ア)　8期北方集落第1段階（第69図）

SB10・13・15・22・24・25・27・30・31・①・⑧・⑪・⑱・⑲・㉒・㉓及びSE 1・SK584・585が相当する。

住居址の主軸は、a・c・d・e類のものがあり、規模では超大型・小型・中型1・中型2aの住居址がある。竪穴の平面形では、ほとんどの住居址が方形であるが、SB13・⑧は横長で、SB15・⑪・⑱は縦長である。カマドをもつ住居址については、石組・粘土カマドを問わず、大半の住居址が中央に位置する。SB10・⑲については、西壁に燃焼部が張り出すカマドをもち、後出的といえようか。また、SB31・⑧は北壁・南壁にカマドをもち、特殊な存在である。また、SB15・25・①・⑲を除いて住居址内に諸施設を伴う住居址はない。このうち、SB25・⑲は柱穴状のピットである。



第69図　北方遺跡　8期第1段階の住居址

他の土地から集落ごと、この地に移動してきた段階であり、したがって、集落内の規制は他の段階と比べても強かったと思われる。住居址の平面形・カマドの位置などにそれが現れているといえよう。

(イ)　8期北方集落第2段階（第70図）

SB 1・2・3・4・6・8・9・12・14・15・18・20・22・23・29・32・②・⑤・⑪・⑫・⑭・㉑及びSE 1・SK73・SK623・大甕遺構が相当する。

住居址の主軸は、a・d・e・f・g類のものがあり、規模では超大型・小型・中型1・中型2a・中型2b・大型IIの住居址がある。竪穴の平面形では、大半が方形の住居址であるが、カマドをもつ縦長の住居址がSB15以外にも出現する。カマドをもつ住居址については、石組・粘土カマドが半々で、燃焼部が壁外に張り出すものとそうでないものの比率もほぼ同数である。カマドの位置については、端にくるものが、中央に位置するものの半数近くある。また、諸施設を伴う住居址が半数存在する。

第70図　北方遺跡　8期第2段階の住居址

集落の最盛期であり、住居址の主軸・住居内の空間利用など、多様性に富んだものが出現する。集落内規制の弛緩の現われか。またこの段階で、カマドをもたない住居址が数多く出現し、それに呼応するかのように屋外調理施設が出現したと想定する。「背」・「囘」の墨書土器を出土した住居址もこの時期から集落

の最終段階まで存続したものと思われる。

(ウ)　8期北方集落第3段階（第71図）

SB 3・4・5・7・11・15・28・32・⑩・⑬・⑭・⑮・㉑及びSI 1・大甕遺構が相当する。

住居址の主軸は、2類b・c・d・e・f類のものがあり、規模では超大型・小型・中型Ⅰ・中型Ⅱa・中型Ⅱb・大型Ⅱの住居址がある。竪穴の平面形では、大半が方形の住居址である。カマドをもつ住居址については、すべて石組カマドであり、SB11のみが端に位置し、燃焼部を壁外に張り出すカマドである。諸施設を伴う住居址は減少する。

第71図　北方遺跡　8期第3段階の住居址

集落の最終段階であるが、住居址数は減少しながらも、前段階の多様性をひきついでいる。その反面、カマドがすべて石組になるなど、再び統一への方向性が見いだせる。この段階、あるいは前段階で、集落の中心となっていたSB15が廃絶し、SI 1として再利用され、集落の中心はSB㉑にと移行する。それに伴って、集落の中心がC群へと移動する。これ以後、この地では、15期を迎えるまで、生活の痕跡は途絶える。

(2)　15期の集落

集落周辺の環境は、8期とそれほど変化があったとは考えられず、中小河川が幾重にも交錯する網状流地帯であったと想定される。8期から200年以上経た後も、同じ場所が居住域として選択されている点、興味深い。それだけ、この地で生活を営むには、自然環境の制約が大きかったのだろう。

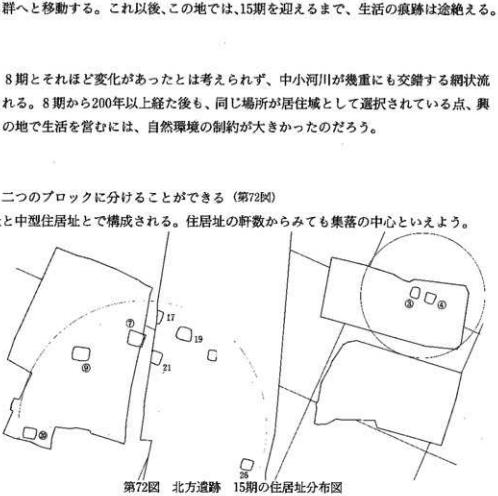
ア　遺構の分布

住居址の分布から、二つのブロックに分けることができる（第72図）

A群：大型住居址と中型住居址とで構成される。住居址の軒数からみても集落の中心といえよう。

B群：中型住居址で構成される。

A群は、住居址が弧状に分布しており、住居址に囲まれた部分では、遺物の出土も多くみられる（第73図）。また、住居址群の北側には、8期と同様な屋外調理施設が、南東端には墓址



第72図　北方遺跡　15期の住居址分布図

が検出されている。

イ　住居址

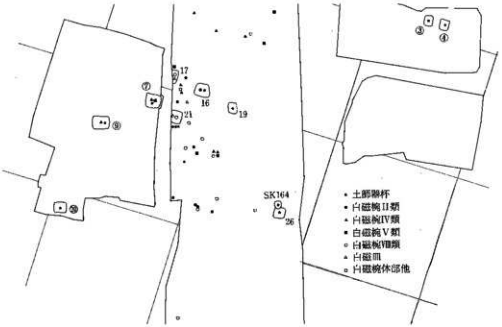
8期の集落と同様に、カマドをもつ住居址ともたない住居址とがある。したがって、前項で行った分析視点と同様な視点で、15期の各住居址についてみることとする。

(ア)　規模・平面形

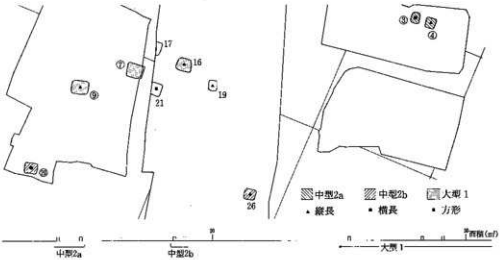
大型・中型などの規模の類型にくわえ、カマドを上にした時の縦長・横長・方形の要素を重ねた。A群ではB群にみられる中型2aの住居址を除いて各規模・平面形の住居址が分布している。規模では、大型1の住居址が優勢を占める。また、カマドをもたない住居址が1軒検出されている。B群では中型2aで横長・方形の住居址が1軒ずつ分布している（第74図）。

(イ)　主軸

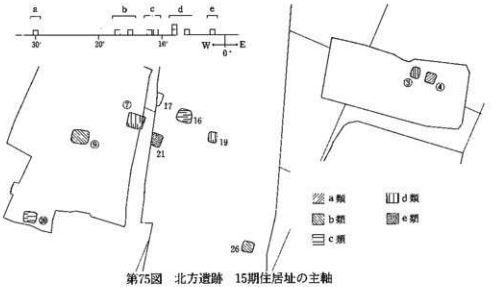
集中の度合いは散漫であるが、5細分される。東に傾く住居址は検出されていない。a類の住居址はB群のみにみられるのに対して、b・c・e類の住居址はA群のみに分布する。d類の住居址は両群ともに分布する。（第75




第73図　北方遺跡　土師器杯・白磁　出土分布図




第74図　北方遺跡　15期住居址の規模・平面形




第75図　北方遺跡　15期住居址の主軸

図)。

(ウ)　カマド

カマドは、ほとんどが石組カマドであり、SB④を除いていずれも壁の端に位置する。燃焼部が壁から張り出す住居址が半数ある。また、東壁にカマドをもつものが大半である(第76図)。

(エ)　諸施設

SB26にしっかりとした柱穴配置がみられるほか、多くの住居址でピットがみられる(第77図)。

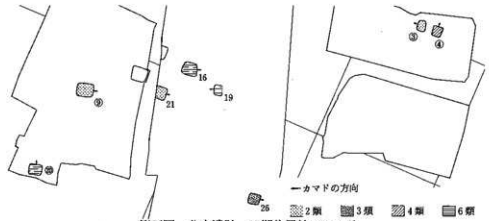
ウ　出土遺物

(ア)　土器

本集落の住居址から出土する土器は、土師器・白磁を中心であり、このような土器組成は、15期の様相として捉えられる。また、8期の様相を示す土器群が混入する。いずれにしても、極端に出土遺物が少なく、このことが、15期の住居址の特徴と捉えられる。

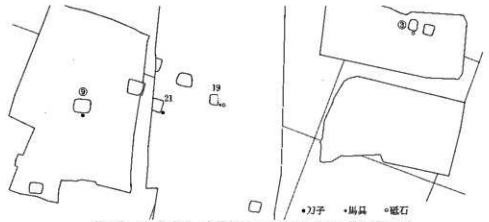
(イ)　金属製品

本遺跡では土器と同様に、土器以外の遺物の出土も少ない(第78図)。

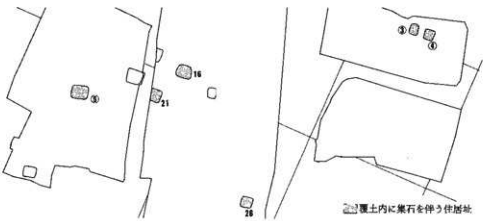


第76図　北方遺跡　15期住居址のカマド

第77図　北方遺跡　諸施設を伴う15期の住居址



第78図　北方遺跡　金属製品・石製品を伴う15期の住居址



第79図　北方遺跡　覆土内に集石を伴う15期の住居址

(ｳ) 覆土内の集石

8期の集落でみられたものと同様な状況で集石が半数近くの住居址でみられる（第79図）。

エ　住居址の分類

8期の集落で行った住居址の分類に即して、15期の住居址を分類すると以下のようになる。

Ⅰ－ａ－１（中央－石組－縦長）：SB④
Ⅲ－ａ－１（端－石組－縦長）：SB⑨
Ⅲ－ａ－２（端－石組－横長）：SB③
Ⅲ－ａ－３（端－石組－方形）：SB21
Ⅳ－ａ－１（端・燃焼部張り出し－石組－縦長）：SB26
Ⅳ－ａ－２（端・燃焼部張り出し－石組－横長）：SB⑳
Ⅳ－ａ－３（端・燃焼部張り出し－石組－方形）：SB16
Ⅳ－ｂ－２（端・燃焼部張り出し－粘土－横長）：SB19
Ⅴ－１（カマドなし－縦長）：SB⑦
不明：SB17

大別すると、燃焼部が壁外に張り出さない住居址と、燃焼部が張り出すカマドをもつ住居址、カマドをもたない住居址という3グループになる。これらが、時期の差を表すものかどうかは不明といわざるを得ない。ただし、SB26がSK164に切られていることから、15期の集落は最低2段階に分けられそうである。そうした場合、SB26が属するグループが古段階で、その他が新段階という可能性が考えられよう。また、SB19では出土土器の様相から、15期のなかでも古い様相を示している。さらに、柱穴配置をもつSB26の建築様式といったものが、SB④へと受け継がれたという想定が成り立つ可能性もあり、少ないながらも、状況証拠は幾つかあげられる。何分、土器の様相からみれば、一時期にくくられてしまう集落の中での資料操作であり、8期の集落で試みたように、多様性を如何に考慮するかによって、導き出されるものは違ってくる。ここでは、可能性の指摘だけに留めておきたい。

これまで述べてきたように、本遺跡の古代集落は継続期間も短く、前後の連続性がまったくみられないという特徴をもつ。また、大形住居址と小形住居址のセット、突然出現し消失する集落というように、時代性が大きく反映している集落といえる。このような集落の分析にあたっては、土器様相からの時期区分等にも限界がみられ、住居址の構造的側面といった諸属性に重きをおくほかはない。そこで問題となるのは、住居址自体がもつ多様性をどう捉え、類型化していくかである。類型化された住居址群については、等質なグループが同時存在か、また、等質のグループの中で段階区分を検討し、それぞれが他のグループとセット関係をもち、同時存在と捉えるかといった問題がある。今回は後者の立場をとり、検討を加えたが、こうした集落の分析に対して、資料の限界性と課題を呈示することができたと思われる。したがって、今後に残された課題は数多く、関連諸学からのアプローチも必要不可欠なことはいうまでもない。また、住居址伴出遺物の把握や型式学的検討、遺構間の接合関係などが十分に検討できるように、調査段階での問題意識、それを遂行するだけの時間的余裕を確保することなどを、至極当然のことではあるが痛切に感じた。

## 第5節　小　結

本遺跡は、調査主体・年度は異なるが、三回の調査によって古代・中世とも集落のほぼ全域が調査されたことになる。古代は8・15期の集落が、中世では不明な部分は多いが1・2期の集落が検出されている。

今回の調査区では8期に属する遺構は、27軒の住居址とSD2、SE1、SI1、SK・72・133・136・168・584・585・619・623があり、15期に属する遺構としては、5軒の住居址とSK73・164がある。また、時期

は限定できないが、古代に属する遺構として、SK17・SL１がある。前節では住居址の変遷を、資料呈示を中心に検討を試みたが、土器群の様相から導き出された集落の時期はそれぞれ１時期で、前後の連続性がみられず、その意味において単純な集落址といえる。しかし、住居址個々の属性は複雑かつ多岐にわたり、それぞれの関連性や個々の現象など、さらに資料の分析・操作が必要なことはいうまでもない。また、当埋文センターによって調査が実施された、松本平南西部から連綿と続く古代集落の在り方・推移から逸脱するものではなく、むしろ凝縮された形で、本集落は形成されていると考えられる。さらに、本遺跡が立地するような地形環境においては、特に、一遺跡の分析に終始することなく、周辺遺跡の動向や内容も考慮していく必要がある。

中世の遺構群については、全体を通して触れることがなかったが、今回の調査区では、１期に属する遺構にはST １・３・４、小ピット群Ａ～Ｇがあり、２期に属する遺構としてはST ２・５・６・７・８・９・10、SA １・２、SD ４・５・６、SL １と、事実記載の項で述べた墓址・土坑などがある。また、時期は限定できないが、中世に属する遺構として、数多くの土坑がある。遺跡全体をみると、１期には、ST １・３で代表されるような掘立柱建物址を中心に、小ピット群Ａ～Ｇや松本市教委によって調査された２軒の竪穴住居址などがある。２期では、ST ２・６や松本市教委によって調査されたST ２・３などの長方形プランを呈する掘立柱建物址群と南部の墓址群、北部の大形土坑群がある。これらの遺構群はその形態・構造などに共通する点が多く、個々の遺構群はほぼ同時期に営まれたものと考えられる。したがって、１・２期には掘立柱建物で構成された集落が営まれていたと考えられ、さらに、２期については墓域と生産域が集落の周縁にあったことが想定される。しかしながら、中世１・２期といっても、その時間幅は長く、遺構伴出遺物が極めて少ないため、遺構の時期の特定については不明な部分が多い。それぞれの遺構群の関係を解明することも含め、今後に残された課題は数多いといえる。

島内遺跡群では、はやくから古代集落の存在が指摘されてきたが、ここにきてようやく、地形環境の復元とともに各遺跡の内容や松本平の中での位置づけが明らかになりつつある。そうした研究の流れに、今回の調査成果が生かされ、資料が活用されることを期待して、結びとかえたい。

# 第4章　上手木戸遺跡

## 第1節　調査の概要

### 1　遺跡の概観

本遺跡は南安曇郡豊科町高家中曽根地籍ほかに所在する。遺跡の範囲は、現中曽根集落を含む水田地帯であり、中央道の豊科インターチェンジとなったところである。

遺跡は、古梓川扇状地の扇央部、網状流にかこまれた中洲上に位置し、標高は545～555mである。中央道にかかる部分は遺跡の東縁部にあたる。また、本遺跡は中央道長野線豊科地区遺跡分布調査の結果、認定された遺跡であるが、表面採集資料などの考古学的な調査所見ではなく、その地形環境が直接の要因となっている。

豊科町は、犀川左岸に広がる古梓川扇状地と犀川右岸の山間部（芥子望主山地、長峰山地）からなる。遺跡の分布は梓川扇状地に多くみられるが、そのほとんどが遺物散布地（縄文時代～平安時代）という程度のもので、遺跡としての情報量は限られている。それに対し、上川手地区（犀川と山地に挟まれた段丘部）の町田遺跡は、弥生時代中期～後期の遺跡で、その時期と立地条件が特徴的であり、出土遺物とともに従来から注目されている。また、芥子望主山地の東山古窯址群は、奈良～平安時代の窯址群として知られ、そこで生産される須恵器は、器種も多彩であり、松本市岡田から北へと続く一連の窯址群の須恵器とともに、松本平の在地系須恵器の大部分を占めている。その他、中世～近世の城館跡が広範囲にわたり、数多くみられるのも豊科町の特徴の一つであろう。山間部には中世の山城（海野氏）が、古梓川扇状地には細萱氏、丸山氏、武田氏関係の館跡の空堀・土塁等が確認されている。

本遺跡でも中世～近世の遺構が数多く検出された。豊科町内では、平野部での発掘調査は今回の調査が初めてであり、その方法や成果が注目されるものとなった。

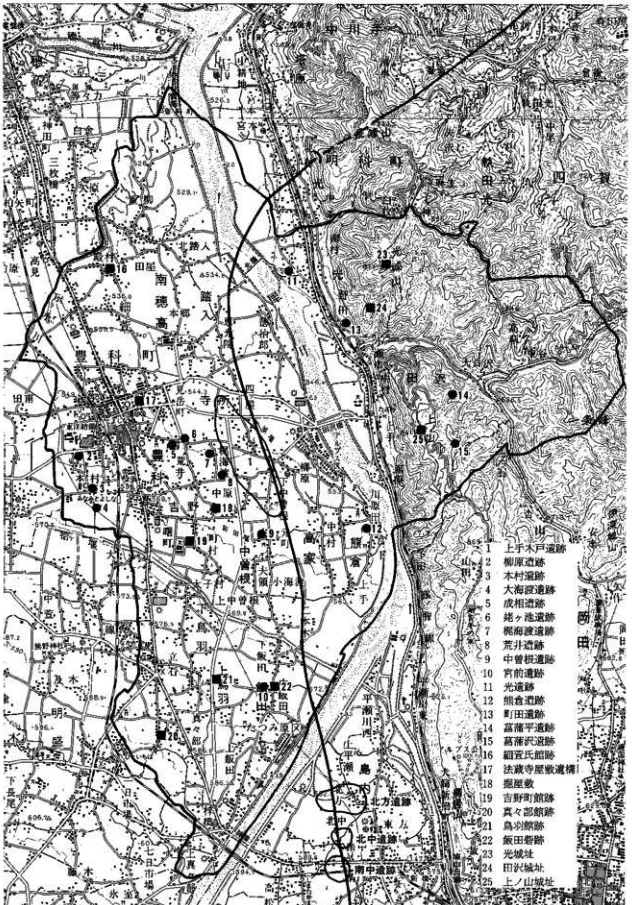
### 2　調査の概要

本遺跡は、中央道にかかる調査対象面積だけでも35,400m²と広大であり、さらに、遺跡の内容が全く不明であったため、確認調査を経て本調査へ移行するというかたちをとった。

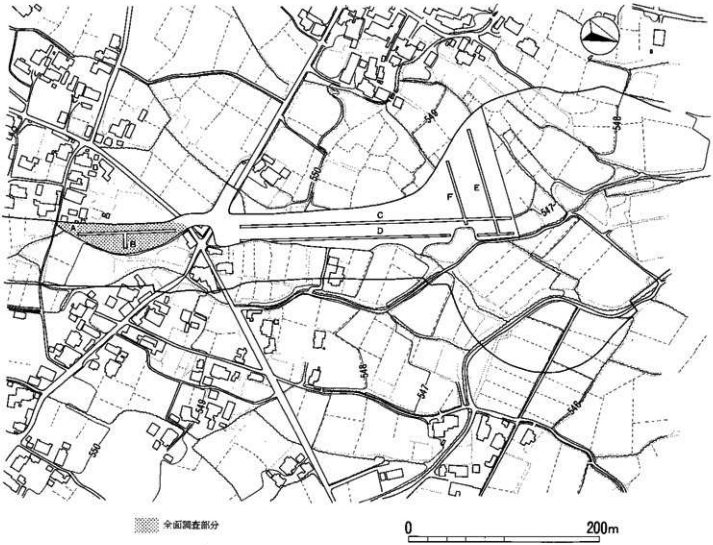
確認調査は、調査研究員4名で、昭和61年3月11日から28日まで行った。遺跡の広がり、性格及び土層の堆積状況を把握する目的で、幅1.5mのトレンチを延べ800mにわたって設定し調査を行った（第82図）。

A地点の土層堆積状況は、基底の礫層（II層）のすぐ上が現耕土（IA層）となっている。B地点では部分的にII層上面に自然流路、あるいは河川の氾濫の痕跡がみられるが、基本的にはA地点と同様の土層堆積である。C地点は前2地点とは異なっている。II層の上に砂層（ID層）、含礫泥層（IC層）が堆積しており、AトレンチからはIC層を切り込む落ち込み（のちにSK222）と溝状の遺構が検出された。ただし、時期を決定付けるような遺物の出土はなかった。

A・B両地点については、遺構の存在する可能性はないと考えられ、また、遺物の出土もまったくなかったことから、確認調査段階のトレンチ調査をもって調査終了、C地点については、範囲を広げ本格的な調査をする必要があるという判断を下した。




第80図　豊科町内遺跡分布図




第81図　上手木戸遺跡　発掘範囲及びトレンチ配置図

本調査は、Ｃ地点2,000m²を対象として、昭和61年８月４日から９月10日まで、調査研究員３名が中心となって実施した。

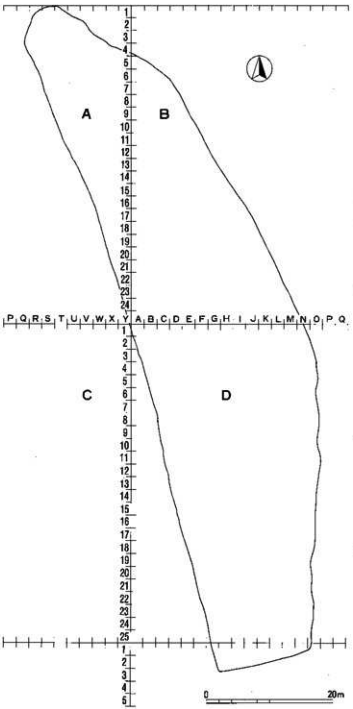
主な調査課題として、遺跡の性格、特質の解明と古環境及び地形形成過程の復元を掲げ、開始した。重機による表土除去後、ＩＣ層上面、即ちＡトレンチでの遺構検出面まで手掘りによって掘り下げ、遺構検出を行った。

調査の結果、調査区南部に中世２期、調査区北部に近世という２時期の居住域が検出された。さらに、近世では調査区北端部で生産域も検出された。検出された遺構は以下のとおりである。

中世２期：竪穴住居址３軒、溝址１条、土坑173基

近　　世：掘立柱建物址２棟、溝址２条、土坑55基、畑址１ヶ所、集石（SX）１ヶ所

測量は、工事用センター杭STA322＋20を基準に、STA322＋20　W30を結んだ線上から座標北を求め、これを基準として50m区画の大地区Ａ～Ｄを設定した。STA322＋20の座標値はＸ＝32449.049　Ｙ＝-51170.553である。標高は前述した基準杭頭の550.622mを使用した。遺構の実測、遺物の取り上げは、8×8ｍ及び８×２ｍの中地区を基本とした。遺構の実測は遣り方測量を用い、遺物の取り上げは遺構毎、層位毎に取り上げた。畠址、包含層から出土した遺物は、先の中地区ごと、層位ごとに取り上げた。




第82図　上手木戸遺跡　グリット配置図

9月8日　豊科町立豊科東小学校6年生見学会。

9月9日　調査終了。撤収準備。

9月10日　資材撤収。図面整理、写真整理を開始する。

整理作業は、昭和62年1月12日より、図面、写真、所見などの整理が開始されたが、北中遺跡の整理作業と並行するなど断続的に行われた。この間、昭和60年度調査分の概要を『財長野県埋蔵文化財センター年報』2に、昭和60,61年度調査分の概要を『同年報』3、『長野県埋蔵文化財ニュース』№19にそれぞれ報告した。報告書に向けての図版作成、原稿執筆などを含めた本格的な整理とまとめは、昭和62年5月から行い、本報告に至った。

## 3　調査の経過

**昭和60年度**

3月11日　現地視察。現況写真の撮影。

3月12日　C地点にトレンチ設定。重機による掘り下げ(Aトレンチ)。

3月13日　B・C地点にトレンチ設定。重機による掘り下げ(D,Bトレンチ)。Aトレンチの精査。

3月17日　A地点にトレンチ設定。重機による掘り下げ(C・E・Fトレンチ)。

3月18日　断面精査、土層観察、図面作成。

3月25日　確認調査終了。

3月　年報2の原稿執筆。

**昭和61年度**

8月5日　調査区設定（C地点）。重機による表土剥ぎ。

8月7日　作業員が調査に参加し、遺構検出開始。SD1検出される。

8月12日　SB1検出、覆土中より内耳鍋が出土。

8月19日　SK・SN・ST が検出される。グリット設定。

8月26日　遺構調査開始。

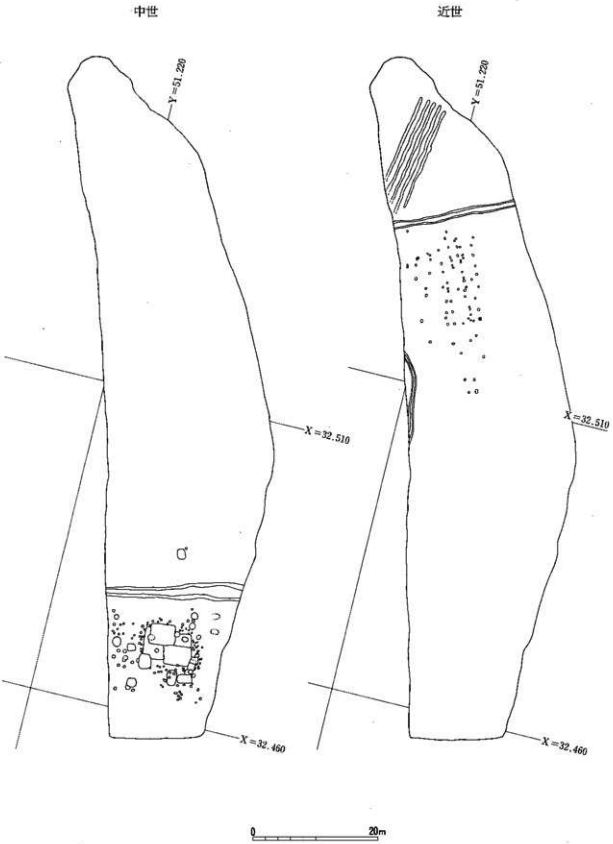
9月4日　豊科町立豊科南小学校6年生見学会。

9月5日　航空測量を実施。

2月　年報3の原稿執筆。

**昭和62年度**

5月　報告書に向けての所見整理、図版作成、原稿執筆。




第83図　上手木戸遺跡　中・近世遺構分布図

# 第２節　基本層序と微地形

## １　基本層序

**ＩＢ層**　灰オリーブ色含礫泥層。上手木戸遺跡に見られる土層の最上位にあり、本遺跡が立地する段丘上を被覆する。層厚は40～140cmで、下面に凹凸を持ちながら北東へ厚く堆積する。

小礫を塊状に含み、シルト～細砂を基質とする。

上部は全面にわたって耕土化され、上面(現地地面）は人為による３つの平坦面が形成されている。

**ＩＣ層**　褐色含礫泥層。ＩＤ層またはII層の全面をおおい、層厚は40～150cmである。層相から上部層・下部層に区分する。下部層は小礫を塊状に含み、細砂の基質から成る泥流性の堆積物である。全体にほぼ一様の厚さで北東へ緩く傾斜して堆積するが、南部では、著しく層厚が増す部分が見られる。

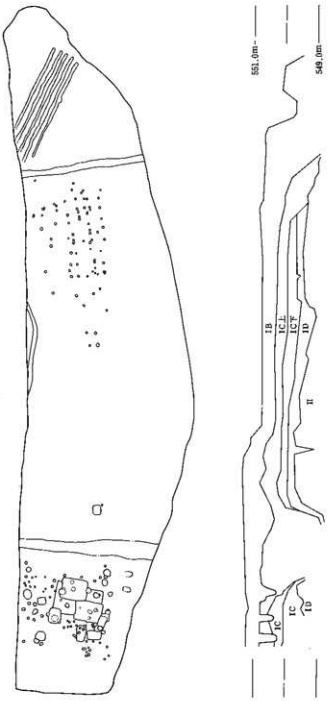
上部層は淘汰良好の流路内堆積物で、北端部で観察される。上位より砂礫層・含礫泥層・シルト層・砂層が互層し、全体として北東へ傾斜しながら上位層が下位層にオフラップしている。

ＩＢ層上面の水田化に伴い本層はマンガンが集積し、褐色を呈する。また、ＩＢ層との境界付近にはしばしば地下水脈の上限と推定される盤層が観察される。

**ＩＤ層**　褐～オリーブ褐色砂礫層・II層の全面を被覆し、層厚は40～60cmで南西へやや厚く堆積する。

全体として礫を含まない細砂から成るが、側方に粒度が中砂～シルト大に不規則に変化する。垂直的には下限に粘土層を挟むことが多いが、この存在が堆積環境の遷移の中での画期を示すか否かは不明である。

上面には細長い凹地が複数認められる。この内規模の大きいものは北部と南部にあり、北部のものはＩＢ層の堆積により、南部のものはＩ

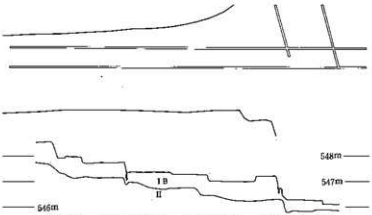



第84図　上手木戸遺跡　土層概念図

C層の堆積により完全に埋積されている。発掘所見では得られなかったので明らかではないが、おそらく上面離水後の分流の一つか、氾濫原溝的な性格を持つ凹地形と思われる。

**II層**　礫層。本遺跡の基底を構成し、上面は波状の凹凸を持つ。

円磨された大～巨礫から成り、基質は中～粗砂である。礫種は主として飛騨山脈に産する古生層起源のもので、梓川によって運搬されたと推定される。礫は顕著な配列を示さず、河成砂のレンズ状の堆積を不規則に挟む。上面は礫堆による波状の凹凸を持ち、頂部の高さはほぼ一定している。凹部のうち浅いものはＩＤ層によって埋積され、深いものはより上位層によって埋積されている。



第85図　上手木戸遺跡　土層概念図　　確認調査部分

## 2　遺構切込面の微地形

遺構切込面は、検出所見から現耕作土（ＩＢ２層上面）が近世、ＩＣ層上面が中世末頃と推定される。

本遺跡は、現在南西から北北東方向に屈曲する2本の旧河道によって東西の側方を開析され、北北東から南南西方向に伸びる紡錘形微高地の北側東縁に立地する。II層とＩＤ層はともに流路内堆積物であり、礫堆の軸方向が南西から北東、ＩＤ層上面の溝状凹地の方向が南南西から北北東と推定されることから、これらを堆積した河川の運搬能力が衰える中で、南西から北北東方向に屈曲する複数の分流が生じ、これらの分流に挟まれた微高地が現地形の根幹を成したものと思われる。また、北端部でＩＤ層・ＩＣ下部層を欠如し、ＩＣ上部層が北東へ傾斜して堆積している事実は、ＩＣ下部層上面の時期までは東側を流量のある河川が流れ、その後この河川が退いていった経過を物語っている。

したがって、中世末頃の本遺跡は東端で北北東に向かって流れる河川に面しており、この河川が後退する過程で、住居址が微高地上に立地していたと考えられる。河川が退く末期頃の水面高度を、ＩＣ上部層の砂礫層最高位付近と想定すると、住居址が検出された地点の比高は１ｍほどしかなく、ひとたび洪水に見舞われれば被害を受けたであろうことが予想される。ＩＣ下部層堆積直後であればより比高が小さく、増水に対してさえ不安定であったろう。

この不安定な環境を物語るように、全面をＩＢ層がおおっている。ＩＢ層の流走経路や流体の密度は明らかではないが、堆積状況から推定すると東側の河川の氾濫によるものでなく、流流が上流から微高地西側の河川に沿って流下し、北北東方向に屈曲せずにほぼ直線的に微高地北部を乗り越え、堆積物をシート状に本遺跡周辺に残した可能性が高い。この結果、西側の河川は埋積され、一帯の自然流は東側の河川(中曽根川）に集中したと解釈される。中曽根川は近世初頭以後次第に衰弱して用水に変化するが（小穴1987)、この安定した段階で本遺跡北東部に掘立柱建物址や畑址が立地する。

# 第３節　遺構と遺物

## 1　遺構

### (1)　中世の遺構

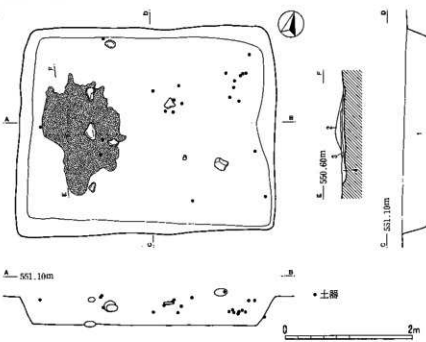
ア　竪穴住居址

**ＳＢ１**　　位置：南部　　図版58

検出：Ⅲ層上面にて、炭化粒をわずかに含み、溶脱により幾分淡色化した粗粒砂質土の落ち込みが検出された。SB2・SK243と接し、SB3・SK235を切り、SK50～56・171～178・236に切られる。規模・形状：4.25×2.95mの東西に長い長方形プランを呈し、深さは0.18mを測る。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。周囲に土坑群が巡っており、上屋を支えていた柱穴が竪穴外にあった可能性が強い。床：ほぼ平坦であるが、東半部の中央部がやや高まる。地山の砂質土を床面とし、堅緻な部分等は検出されなかった。また、焼土・炭化物及び灰などの分布もみられず、住居内で火が使用されたか否か疑問視される。出土遺物：覆土中より内耳鍋片が２点出土している。時期：遺構の切り合い関係及び出土遺物などから、中世2期と判断した。

**ＳＢ２**　　位置：南部　　図版58

検出：Ⅲ層上面にて、内耳鍋片、小豆～鶏卵大の亜円礫を一様に含む細粒砂質土の落ち込みを検出。SB１と接し、SB３・SK243を切り、SK70・253に切られる。規模・形状：3.68×2.92mの東西に長い長方形プランを呈し、深さは0.60mを測る。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。周囲に土坑群が巡っており、上屋を支えていた柱穴が竪穴外にあった可能性が強い。床：ほぼ平坦であり、地山の砂礫層を床面とするが、西半部では礫間を充塡するように貼床がなされており、東半部では砂質土を敲き締め堅緻な床面にしている。炉：西側中央部に東西1.2m、南北1.8mの範囲で床面に灰が堆積している(最大厚0.09m)。灰層内には、炭化物が薄い層をなして何枚も含まれており、被熱の痕跡が面的に確認される礫が灰層内及び周辺部から出土している。明確な火床部は見い出せなかったが、この部分を炉址と判断した。出土遺物：内耳鍋片が覆土内、床面から多量に出土している(第92図９～11)。時期：遺構の切り合い関係及び出土遺物などから、中世２期と判断した。

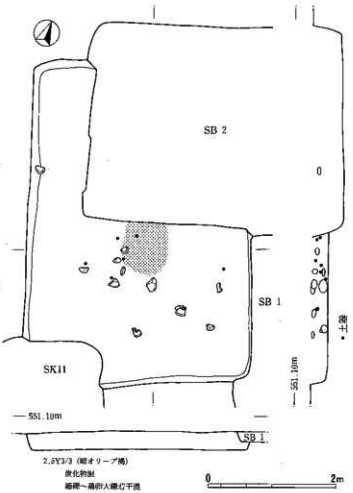



第86図　上手木戸遺跡　SB 2

**ＳＢ３**　　位置：南部　　図版58

検出：Ⅲ層上面にて、周囲に比し暗色で、小豆～鶏卵大の礫を少量含む細粒砂質土の落ち込みを検出。SB１・２、SK11に切られる。規模・形状：4.90×3.40mの南北に長い長方形プランを呈し、深さは0.24mを測

る。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。周囲に土坑群が巡っており、上屋を支えていた柱穴が竪穴外にあった可能性が強い。床：地山の砂礫層を床面としている。ほぼ平坦であるが、北部に深く南部に浅い傾向がある。炉：床面のほぼ中央部に東西0.70m、南北0.65m以上の範囲で炭化物を多量に含む灰が堆積している。周囲に、被熱の痕跡が認められる拳～小児頭大の礫が分布する。明確な火床部は見い出せなかったが、この部分を炉址と判断した。出土遺物：内耳鍋片が数点床面から出土したほか、覆土中から青磁碗片（ＰＬ42-13）、銭貨が１点出土している。時期：遺構の切り合い関係及び出土遺物などから、中世２期と判断した。




第87図　上手木戸遺跡　SB 3

イ　溝址

**ＳＤ２**　　位置：南部　　図版58

検出：ＩＣ層上面にて、東西方向に走る溝状の落ち込みを検出。落ち込み内には内耳鍋片が散布し、また、中央部は縁辺部に比べ粗い砂が分布し、水の流れを想定させた。規模・形状：長さ22m、幅1.5～2.7mで、ほぼ東西（N77°E）に、現地形の傾斜と直交するように直線的に走る。東・西端とも調査区外に延びる。深さは0.3～0.5mで西に高く東に低い。断面形は、西ほど底面の幅が狭く（V字状）、東に寄るほど底面が広くなる（U字状）。覆土の堆積状況：３層に分層され、下層の下限付近では酸化鉄の集積がみられ、中層は砂の粒土が小さいことから滞水によって形成されたものと考えられる。上層は平面的には幅が狭いが粗粒砂であり、流水の影響によって堆積した土層と考えられる。出土遺物：中・下層を中心に、底面・検出面などから内耳鍋片が多数出土している（第92図12）。他に、土師器皿が１点出土している。時期：出土遺物から、中世２期と判断した。

ウ　土坑

**概観**

分類：本遺跡で検出された中世の土坑は以下のように分類される。

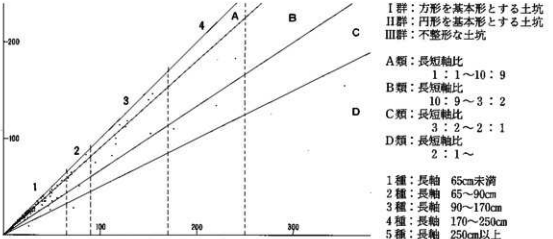
本遺跡では、Ⅱ群の土坑が圧倒的に多く、９割強を占める。その中でも長軸65cm以下の土坑が約８割を占めている。それに対しⅠ群の土坑は、長軸90cm以上の土坑が半数以上を占めている。また、以下のような属性をもつ土坑がみられる。

集石を伴う土坑：SK11（Ⅰ群Ｂ類４種）、SK73（Ⅱ群Ｂ類２種）、SK251・253（Ⅱ群Ｂ類３種）、SK252（Ⅱ群Ａ類３種）

灰層を伴う土坑：SK１（Ⅰ群Ｂ類１種）

分布：南部のみに分布し、とくに竪穴住居址群の周囲に集中する。

時期：出土遺物、遺構検出面、覆土などから、すべて中世２期の所産と考えられる。




第88図　上手木戸遺跡　中世土坑長軸と短軸の関係

| | A | | | 小計 | B | | | | 小計 | C | | | 小計 | D | | | 小計 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | | 1 | 2 | 3 | 4 | | 1 | 2 | 4 | | 1 | 2 | 5 | | |
| Ⅰ | － | － | 1 | 1 | 5 | － | 2 | 1 | 8 | － | － | 2 | 2 | － | － | 1 | 1 | 12 |
| Ⅱ | 66 | 2 | 3 | 71 | 66 | 6 | 4 | － | 76 | 4 | 1 | － | 5 | 1 | 1 | － | 2 | 154 |
| 計 | 66 | 2 | 4 | 72 | 71 | 6 | 6 | 1 | 84 | 4 | 1 | 2 | 7 | 1 | 1 | 1 | 3 | 166 |

| Ⅲ群 | 総計 |
|---|---|
| 1 | 173 |
| 不明 6 | |

第22表　上手木戸遺跡　中世土坑形態分類

(ア)　Ⅰ群の土坑

**ＳＫ７８**（Ⅰ群Ｂ類３種）　　位置：南部　　図版58

規模・形状：152×105cmの隅丸長方形プランを呈し、深さは40cmを測る。底面は平坦で、断面形は鍋底状を呈する。覆土は炭化物や拳大の礫を含む単一土層であり、遺物の出土はみられなかった。時期：覆土の状況、遺構検出面などから、中世２期の所産と判断した。所見：SD ２によって南側の住居址群とは画されること、単一の覆土、土坑の平面形態などから、墓址であった可能性がある。

**ＳＫ２４２**（Ⅰ群Ｃ類３種）　　位置：南部　　図版58

検出：ＩＣ層上面にて検出。SK45・47に切られる。規模・形状：220×134cmの長方形プランを呈し、深さは35cmを測る。底面は平坦で、断面形態はタライ状を呈する。覆土は炭化物をごく少量含む単一の土層である。出土遺物：内耳鍋片が覆土中から数点出土している。所見：周囲に小土坑（Ⅱ群）が一定の間隔をもって巡ることから、掘立柱建物址等の付属施設であった可能性がある。

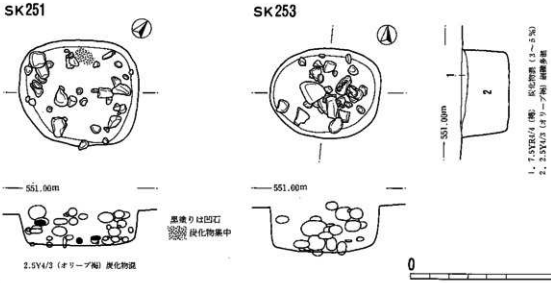
**ＳＫ２４３**（不明＝Ⅰ群５種）　　位置：南部　　図版58

検出：ＩＣ層上面にて検出。SB１と接し、SB２・SK70に切られる。規模・形状：残存する平面形は長軸が270cm以上で、短軸194cmの長方形を呈する。底面の中央部から北壁及び隣接するSB２に向かって緩やかな傾斜をもって一段低くなっている。底面までの深さは16cm、最深部で28cmを測る。覆土は炭化物をごく少量含む単一の土層であるが、北壁付近（落ち込み部）では粘土粒子の混入が多くみられる。出土遺物：底面から土師器Ⅲが２点（第92図－３・４）、覆土中から内耳鍋片が２点出土している。所見：SB２との切り合いは、土層の色調と小礫の含有率が若干異なることから判断されたもので、微妙なところである。また、落ち込み部には粘土粒子の混入が多くみられる点はSB２の覆土に近く、落ち込み部がSB２に向かって傾斜していること、本址の南壁とSB２の南壁が揃うことなどから、本址はSB２の付属施設であった可能性がある。

(イ)　Ⅱ群の土坑

**ＳＫ２５３**（Ⅱ群Ｂ類３種）　　位置：南部　　図版58

検出：SB ２・３の覆土上で土層の色調、炭化物・礫の混入の度合いの違いなどから容易に検出された。規模・形状：116×94cmの楕円形プランを呈し、深さは50cmを測る。底面は平坦で、断面形態は鍋底状を呈す



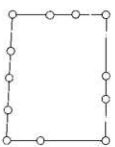

第89図　上手木戸遺跡　中世土坑

る。覆土は2層に分層され、上層には炭化物が多量に含まれ、下層部では拳～小児頭大の河原石が投げ込まれたかのように出土している。出土遺物：内耳鍋片が下層部から出土している。類例：SK251,SK73(II群B類2種)、SK252（II群A類3種）がある。いずれも、拳～小児頭大の河原石が投入された状態で出土し、覆土に炭化物・内耳鍋片を伴い、断面形も鍋底状を呈す。

(2)　近世の遺構

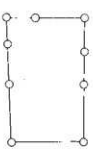
ア　掘立柱建物址

**ST1**　　位置：中部　　図版59



規模・形状：4×3間の南北棟。プラン内及び本址の西側、南側に本址の柱穴と同一の規模・覆土をもつピット群がある。柱穴：桁行方向の柱間は不揃いで、とくにP6とP7、P12とP13の柱間が狭い。また、P11とP12の間には柱穴は検出されなかった。梁行方向の柱間はP9とP10の間が狭いのを除いて、ほぼ等間隔といえる。掘り方は、桁行の東側が西側に比べ平面形も大きく、深さも若干深い。柱根、柱痕跡は検出されなかった。時期：遺構検出面と覆土から、近世の所産と判断した。

**ST2**　　位置：中部　　図版59



検出：ST 1の検出に伴って周辺のIB2層上面を精査したところ、ST 1の柱穴と同一の規模・覆土をもつピットが67基検出された。発掘調査の段階では、しっかりとした柱穴配置等が見い出されず、これらを小ピット群として扱った。整理の段階に至り、柱筋の通ったものを選び、建物址を想定したのが本址である。規模・形状：規模からいえば4×3間の南北棟となるが、実際に検出されている柱穴の柱間では3×2間の南北棟である。柱穴：桁行方向・梁行方向とも、対応する柱間は揃っている。掘り方の平面形にはバラエティーがみられ、ST 1に比べ規格性に乏しいといえる。柱痕跡・柱根は検出されなかった。時期：遺構検出面、覆土などから、近世の所産と判断した。

イ　溝址

**SD1**　　位置：北部　　図版60

検出：ＩＢ２層上面にて、青灰色土を多量に含む部分を検出。規模・形状：長さ19m、幅１～1.3mで、南西から北東方向（N65°E）に直線的に走る。東・西端とも調査区外に延びる。深さは0.24～0.33mで、中央部がやや深いが概して西に高く東に低い。なお、現地形は北に向かって傾斜している。覆土は青灰色土を多量に含む単一層であり、遺物の出土はみられなかった。時期：検出面や覆土の状況などから、近世以降の所産と判断した。

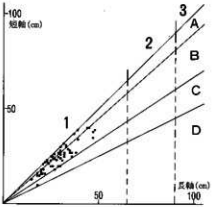
**ＳＤ３**　　位置：中部　　図版60

検出：ＩＣ層上面にて、青灰色土を多量に含む部分を検出。規模・形状：長さ約13m、幅0.3～0.5mで、調査区内ではほぼ南北（N12°W）に走るが、現地形の傾斜に沿うようにして調査区内へ湾入する形状を呈する。深さは0.1～0.2mで、南に高く北に低い。断面形は鍋底状である。覆土は青灰色土のブロックを多量に含む単一層であり、遺物の出土はみられなかった。時期：覆土の状況などから、近世以降の所産と判断した。所見：旧耕地の縁辺に平行してあることから、耕作上必要な溝であったことも考えられる。

ウ　土　坑

**概観**

分類：本遺跡で検出された近世以降の土坑は以下のように分類される。




Ⅰ群：方形を基本形とする土坑
Ⅱ群：円形を基本形とする土坑
Ⅲ群：不整形な土坑

A類：長短軸比
　1：1～10：9
B類：長短軸比
　10：9～3：2
C類：長短軸比
　3：2～3：1
D類：長短軸比
　2：1～

1種：長軸　65cm未満
2種：長軸　65～90cm
3種：長軸　90～170cm
4種：長軸　170～250cm
5種：長軸　250cm以上

第90図　上手木戸遺跡　近世土坑　長軸と短軸の関係

本遺跡では、Ⅱ群の土坑が圧倒的に多い。Ⅰ、Ⅱ群とも１種のみで、いずれも長軸が50cm以下であり、Ⅲ群の１基も最長部が50cm以下という小規模な土坑である。

分布：いずれも、中部のＳＴ１・２周辺及びプラン内に集中する。また、一定の間隔を保って分布するものや直線的に並ぶものなどがある。

時期：出土遺物は一切みられなかったが、遺構検出面、覆土などから、近世以降の所産と考えられる。

所見：近接するＳＴ１・２の柱穴と同様な規模・形状・覆土を有しており、その分布状況から、何等かの構造物を支えていた柱穴、あるいは、掘立柱建物の付属施設やそれらを補助する柱穴であった可能性がある。

エ　畠址

**ＳＮ１**　　位置：北部　　図版60

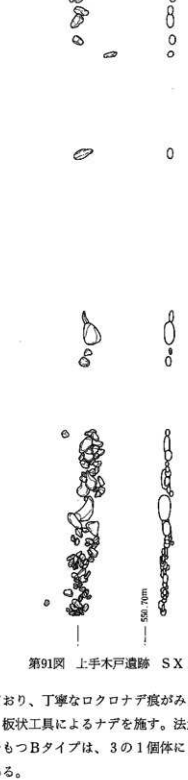
検出：ＩＢ２層上面にて、東西５m、南北19mの範囲内に、一定の間隔をおいてほぼ南北に走る溝状の落ち込みが５条検出された。断面精査の結果、粗粒砂上に土壌化した土が凹部にも凸部にも確認され、畠址と判断した。規模・形状：畝幅は50～70cmで、平行してほぼ南北（N10°E）に走る。畝間は、検出面で幅が30～60cm、深さ12～15cmである。南に高く北に低い傾向が窺える。畝・畝間とも交差する部分はなかった。

出土遺物：畝間から銭貨（寛永通寶）が１点出土している。時期：検出面・出土遺物などから、近世以降の所産と判断した。

オ　その他の遺構

**ＳＸ１**　　位置：中部　　図版59

検出：ＩＢ２層上面にて、10～20cm程の河原石が約７ｍにわたって、ほぼ一直線に分布しているのが検出された。規模・形状：南北約７ｍにわたって、鶏卵～小児頭大の礫がほぼ一直線に並び（N21°W）、礫は三つの集中部にわかれる。北部は比較的大きさのそろった礫（拳大）が分布しており、中部では小児頭大の礫を中心として周囲に拳大の礫が数点分布する。南部は数点の小児頭大礫の周囲に鶏卵～拳大の礫が一部積み重なった状態で分布している。また、小児頭大の礫はいずれも、平坦面を上に向けて分布している。時期：遺構検出面、周囲の遺構などから、近世以降の所産と判断した。所見：断面精査により、礫が分布する部分は周囲と土層が若干異なっていることが確認されたが、平面的には落ち込みのプランが確認されなかった。列石部を使用する過程で、周囲と土質が異なったものと解釈した。また、本址の主軸方向とＳＴ１・２の主軸方向（N25°W）が類似することから、何等かの関係が予想される。



第91図　上手木戸遺跡　ＳＸ１

## ２　遺　構

### (1)　中世の遺物

ア　土器・陶磁器（第92図１～12　第10表　ＰＬ42）

**概観**

中世の土器・陶磁器は、包含層をはじめ、竪穴住居址、土坑、溝址から出土している。中世陶器は大窯期の丸皿１点、東海系の捏鉢１点、在地系のものとして内耳鍋258点、土師器皿35点、輸入陶磁器では青磁碗が１点出土している。点数が示すように内耳鍋が中心を占め、時期的には15世紀から16世紀に位置付く。分布は遺構のある調査区南端に集中する。

(ｱ)　土　器

ａ　在地系土器（２～12）

**皿**　８個体が出土し、５個体を図示した。いずれもロクロを使用しており、丁寧なロクロナデ痕がみられる。２・３は左回転のロクロを使用している。また、６は糸切り後、板状工具によるナデを施す。法量は、口径10cm、底径６cmを越えるＡタイプが多く、それ以下の計測値をもつＢタイプは、３の１個体にとどまる。３は口縁部にススが付着し、燈明皿として使用されたようである。

**内耳鍋**　小片で、分類できないものが多いが、Ｉ類・ⅡＡ類を除く３形態を分類できた。

ⅡＢ類：８・９・12は、SK241・SB２・SD２からの出土で、ほかにSK236出土の破片が本類の可能性がある。図示した３点はそれぞれ様相が異なり、９は口縁部が内湾し、その内面の調整は、幅広で先端に丸みのある工具を使ってナデくぼめている。ほかは口縁部が外反し、内面の調整は幅の狭い工具でナデている。

SB ２・SD ２では、ⅡＢ類とともにⅡＣ類が伴出している。

ⅡＣ類：SB ２から出土した２個体を図示した。ほかに SB ２からは１個体あり、また SK ３・73・SD ２からも抽出できそうであるが、破片が小さいため確定はできない。10は口縁部が内湾し、11は口縁部のナデ調整が強く、断面が波状になる。口唇部下の調整幅が広く、従って口縁部帯が広くとられている。調整はⅡＢ類の８に似る。11には補修孔がある。また、SB ２と SK73出土の体部破片が接合している。

Ⅲ類：SK ３から出土した７は、明瞭なナデを一周入れて、そこから外へ強く屈折させている。法量は小さく、焼き締まって硬質になっている。ほかに SK57からも出土している。

(ｲ) 陶　器

ａ　大窯期の製品（１）

SK ３より皿が１点出土している。16世紀の所産であり、ムラのある白色の灰釉が掛かる。

(ｳ) 磁　器

ａ　青磁（ＰＬ42－13）

SB ３より青磁の碗が出土している。鎬蓮弁文を細長く削り出すもので間弁がみえる。Ｆ類に分類され、13世紀中葉に比定できると思われる。伴出した内耳鍋の時期とは合致しない。

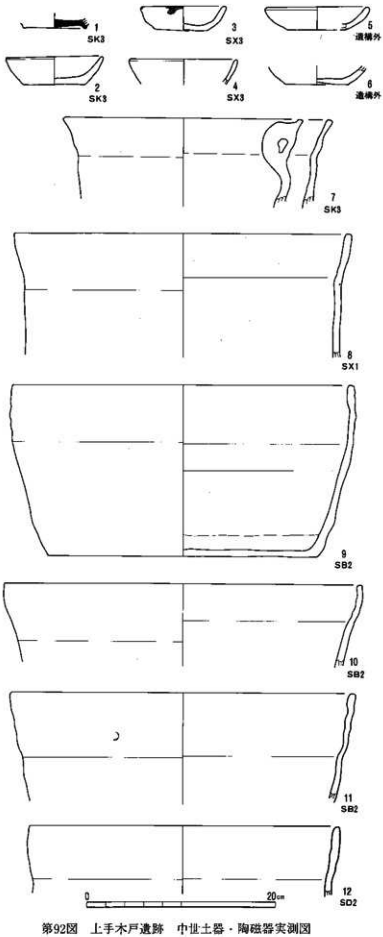
イ　金属製品

(ｱ) 鉄製品（第93図　ＰＬ43）

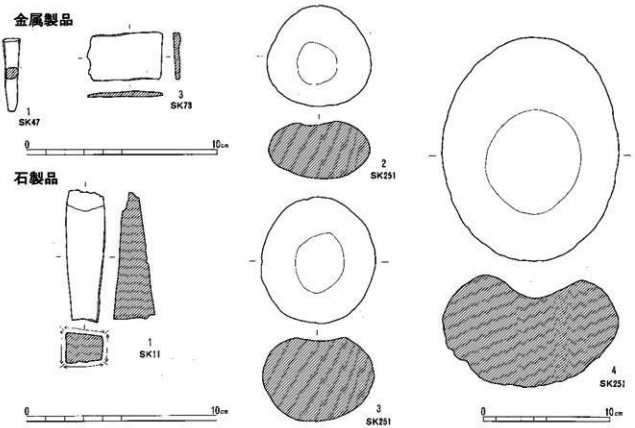
釘２点と、板状品１点が出土した。１は SK70から出土した鍛造の角釘であるが、頭部を欠く（２は写真図版のみ掲載）。３は鍛造の板状品で、用途は不明である。

(ｲ) 銅製品（ＰＬ43）

銭貨２点と、銅線１点が出土した。銭貨はともに SB ３から出土した北宋銭で




第92図　上手木戸遺跡　中世土器・陶磁器実測図




第93図　上手木戸遺跡　中世金属製品・石製品実測図

「咸平元寶（初鋳年998年）」と「政和通寶（初鋳年1111年）」であった。SK236からは直径1㎜の銅線が出土した。

ウ　石製品（第93図　PL43）

凝灰岩製の砥石1点と、SK251の覆土から3点の凹石が出土した。凹石は安山岩製で、片面だけに凹部をもつタイプである。北中遺跡で同様のものが出土している。（P29参照）。

(2)　近世の遺物

ア　土器・陶磁器（第10表）

SK46・236から18世紀以降の灰釉系の丸碗と磁器の碗が出土した。これらは混入であり、そのほかはすべて包含層から出土している。いずれも小破片で図示はできなかった。17世紀に属するものとして、いわゆる志野織部の長石釉の皿と、連房Ⅰ期の鉄釉の丸碗が出土している。また18世紀以降のものとして、御深井釉の碗が2点出土しているほかは、19世紀（近世末）から20世紀（近代前半）に属するものが21点確認された。磁器が多く、碗8点、皿6点、そのほかは陶器の碗4点（鉄釉2・灰釉2）、香炉（灰釉）1点、擂鉢（鉄釉）1点、蓋と思われるもの1点が出土している。分布は発掘域の全体に散らばっている。

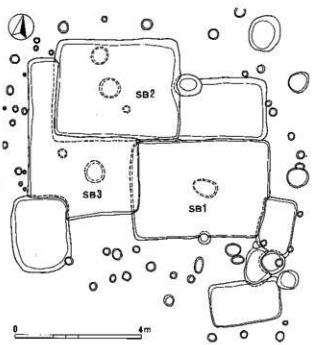
イ　金属製品（PL43）

SN 1から、「寛永通寶」が1点出土したのみである。細字であることから新寛永（1668年以降に鋳造）と考えられる。

# 第4節　成果と課題

## 1　中世の竪穴住居址について

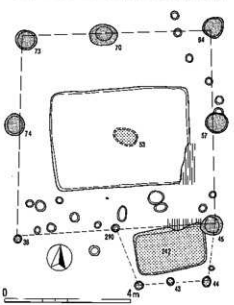
本遺跡で竪穴住居址と認定したものは、地面を掘り凹め、底を平坦につくりだし、数人の人間が起居することが可能な面積を確保していること，3軒のうち2軒には炉と思われる部分、あるいは据えカマドを設置したと想定される部分が検出されていること，四周の壁が垂直に近い角度で立ち上がっていること，煮沸形態の土器が出土していることなどの諸条件をもっている。また、周囲には、いずれも小土坑群が巡っており、上屋を支えていた柱が竪穴外にあったことが想定される。以下各住居址について、上屋の存在、即ち柱穴の配置について検討してみたい。



第94図　上手木戸遺跡　竪穴住居址周辺遺構分布図

(1)　SB1

周囲の土坑群の中から、柱筋の通るSK38・45・57・64・70・73・74・210を本址の壁外柱穴と想定した（第95図）。これらの土坑のうち、SK73・74はSB2・3を切っており、本址との新旧関係は問題ない。また、SK38・210を除いて平面形・規模・深さともほぼ一定している。本址は、これらのほぼ中央に位置し、東西方向に長軸をもつ。したがって、本址は2間×2間の東西棟であったと考えられ、柱間は桁行が2.4～3.4m、梁行2.7～3.6mとなる。また、SK242と南辺に並ぶSK33・43・44を張り出し部（出入り口か）と想定することもできる。一方、本址の中央部を、壁外柱穴と想定した小土坑群と同様な規模・形状をもつSK53が切っており、位置的には壁外柱穴のほぼ中央に相当することから、竪穴部を含まない総柱建物址を想起させる。いずれにしても、これらの小土坑群が掘立柱建物址の柱穴として機能していたことが想定され、本址についても、他の住居址に比べ、掘り込みが浅いことなどから、総柱建物址であったとしても、土間などとして建物に付属した施設であったと考えたい。



第95図　上手木戸遺跡　SB1

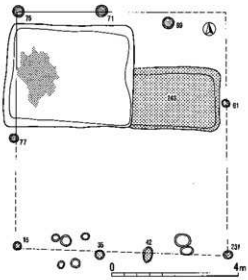
(2)　SB2

本址北辺に並ぶSK69・71・75を基本に、その延長上にある小土坑の幾つかを本址の壁外柱穴と想定した（第96図）。これらの土坑は、平面形・規模・深さともほぼ一定しており、規模については、SB1で想定した壁外柱穴に比べ半分以下である。本址は東西方向に長軸をもち、北辺に並ぶ土坑からも、建物は東西棟であったと考えられる。また、SK243と本址の切り合い関係は明確でなく、本址に伴う施設とするならば、南東部の土坑（破線部）を壁外柱穴とした大規模な建物址が想定される。そうした場合、本址は西壁際に炉

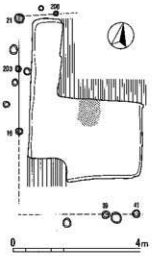
址を伴うことから、建物の北西隅に位置する台所・土間といった施設になる。

(3)　ＳＢ３

本址西辺及び北辺に並ぶ小土坑を本址の壁外柱穴と想定した（第97図）。これらの土坑は、平面形・規模・深さともほぼ一定しており、規模については、SB 2で想定された壁外柱穴よりもさらに小規模である。本址は南北方向に長軸をもち、想定した壁外柱穴もそれに伴うため、建物は南北棟であったと考えられ、柱間は桁行1.6～２m、梁行1.2mとなる。本址は、炉を床面のほぼ中央に伴い、建築面積の中で竪穴部の占める割合が最も高い建物といえるだろう。




第96図　上手木戸遺跡　SB 2




第97図　上手木戸遺跡　SB 3

(4)　ＳＢ３からＳＢ１へ

３軒の住居址の新旧関係は、住居址同士の切りあいからSB 3→SB 2→SB 1 となる。それにあわせ、先に述べた建物の構造等を比較すると、竪穴部は大から小へ、建物は小から大へといった相関性が見いだせる。即ち、建築面積の中で竪穴部の占める割合が、時期を経るにつれて低くなっていく傾向がみられる。この要因として、生活様式や居住人員の変化などがあげられるが、とくに、SB 3→SB 2の動きでは、棟方向の変革がみられ、集落構造との関わり等も見逃せない。また、炉の位置も、床面中央から壁際、消滅という流れが見いだせる。これについては、屋内の空間をより有効に利用することを追求した結果と考えられる。

以上まで述べてきたことは、壁外柱穴の想定を前提としたものであり、今後、さらに分析・検討を加えねばならないことはいうまでもない。また、類例、あるいは同時期の住居・建物の資料の収集・分析を進めていくことも、今後に残された大きな課題の一つである。

## 第5節　小　　結

本遺跡では、中世・近世の居住の痕跡が、それぞれ地点を変えて分布していることが明らかとなった。中世では、竪穴住居址を中心に、大小の土坑群が、近世では、掘立柱建物址が中心となり、あいだに溝址を挟み北に畠址が分布する。それぞれに、周辺では同時期の遺跡・遺構がなく、比較検討などをするには困難な部分が多いが、本書がそれらの発端になれば幸いである。

また、豊科町の平野部には、中世の館跡などが多く残っていることが知られている。そのため、地中に埋もれている歴史資料を掘り起こす発掘調査なくしても、資料はある程度揃っていたと言える。こうした平野部で、初めて本格的な発掘調査がなされたのが上手木戸遺跡である。遺跡調査の端緒となったのは、その地形環境が直接的な要因ということもあって、まだまだ地中に眠る遺跡が数多く残っていることが予想される。したがって、今後、地方史の空白部を埋める作業がますます増加することと思われ、また、庶民生活のレベルでの歴史叙述などが一層望まれるところである。今後の調査研究・資料分析に期待して、結びとかえたい。

# 第5章 結　語

これまで、中央道長野線建設に伴って発掘調査を実施した各遺跡の調査の成果について述べてきた。各遺跡の総括は「小結」に記したとおりである。ここでは、本書を含めて7分冊で完結する中央道長野線にかかる、松本市内・豊科町内の12遺跡から浮き彫りにされる、古代から中世・近世への時代の流れの中に、本書掲載の各遺跡を位置づけ、結語としたい。

1　古代

8期になって、北方遺跡において集落が営まれる。ようやくこの時期になって、古梓川の網状流地帯を流れる中小河川がやや安定し始め、周囲に島状の微高地を形成する。南中・北中遺跡は、完全な離水域とはなっておらず、いまだ地形形成の途上にある。したがって、生活の痕跡は見い出せない。上手木戸遺跡にも同様なことがいえる。

8期の北方集落は、礎石を伴う大形の竪穴住居址と直線的な配置をもつ小形竪穴住居址群が中心となり、集落を構成している。掘立柱建物址は検出されていない。なお、北方遺跡では、9期以降15期に至るまで生活の痕跡は検出されていない。15期の北方集落は、大形の竪穴住居址が中心となり、構成されている。8・15期の集落とも、住居址の分布から集村形態と思われる。また、時期は特定できないが、古代の水田址が、効率的な潅水等を得られる適地を周囲から選択し、形成されている。墓址は両時期とも検出されているが、明確に居住域と画されるような形の墓域は見い出せなかった。

北方集落でみられる集落の推移・諸特徴は、中央道長野線にかかる今回調査された松本平南西部の古代集落とは、地理的にも隔絶された位置にあるものの、時代性という点においては同様である。

2　中世

1期には北方遺跡、2期には北方遺跡をはじめ北中遺跡・上手木戸遺跡で生活の痕跡が検出されている。南中遺跡は、なお生活するには不安定な土地であった。

北方遺跡の1期では、掘立柱建物址を中心に、古代8・15期と同様な位置に居住域が設定されている。掘立柱建物址は、小ピット群で代表されるように柱筋や柱間が不揃いな点が特徴的である。

2期になると、北中遺跡では墓域が形成され、北方遺跡では墓域とともに掘立柱建物址を中心とした集落が営まれている。また、上手木戸遺跡では、竪穴住居址を中心とした集落が営まれている。

北方遺跡の掘立柱建物址は、1期のものと規模・平面形・柱穴配置などの点で異なっている。上手木戸遺跡の竪穴住居址は、壁外に柱穴が想定されるもので、竪穴住居址の系譜上にありながら、掘立柱建物址の建築的要素を取り入れているものと捉えられる。北中・北方遺跡の墓域では、時期差は捉えられないものの、土葬墓・火葬墓が混在している。そのうち、火葬墓は幾つかの類型に分かれることが想定される。また、時期は特定できないが、中世の水田址が北中・北方遺跡から検出されている。これらの水田址は、北方遺跡の古代水田址に比べ、一枚の水田面が十数倍となっており、生産力の拡大が考えられる。

1期と2期では異なる掘立柱建物址の形態や墓址の在り方、また、掘立柱建物址中心の集落には集村化傾向が読み取れるなど、中央道長野線にかかる今回調査された松本平南西部の中世集落と同様な様相を示している。しかし、竪穴住居址を中心とした上手木戸遺跡では散村と捉えられ、松本平南西部の各遺跡の様相とは若干異なったものとなる。

3　近世

北方遺跡では土坑のみの検出に留まるが、北中・上手木戸遺跡では、掘立柱建物址を中心とする集落が

形成されている。ただし、いずれも近世後半以降が中心となる。南中遺跡では、生活の痕跡は検出されておらず、なおも地形形成過程の途上にあったと思われる。

遺物ではとくに、古代8期の土器様相が北方遺跡で、近世の土器・陶磁器については北中遺跡でともに良好な資料を呈示することができた。また、各遺跡で試みた地形形成過程の復元は、当時の人々の自然環境への関わり方に迫りうるもので、今後も範囲を拡大し検討を重ねていくべき問題である。本書の刊行をもって、南中・北中・北方・上手木戸遺跡の調査のすべてを終了する。しかし、報告書刊行は調査の終点であると同時に研究の出発点でもある。今後に残された課題は数多く、考古学分野のみならず多方面からの分析が必要である。また、明らかになるだろう課題を、いかに地域の歴史の再構成に結び付けていくかということ、いかに広く地域の人々に公開するかといった点も、我々の大きな使命の一つである。あらためて、報告書刊行が一通過点にすぎないことを痛感する。最後になったが、御協力、御指導、御援助いただいた関係各位、諸団体に深い感謝の意を表したい。

# 参 考 文 献


小穴　喜一　1987　『土と水から歴史を探る』

斉藤　孝正　1981　「猿投・尾北・美濃窯における灰釉陶器の変遷」　『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』

1988　「中世猿投窯の研究ー編年に関する一考察ー」　『名古屋大学文学部研究論集』ＣＩ史学　34

関　全寿他　1984　『明科町史』

田口　昭二　1982　「美濃の灰釉陶器と緑釉陶器」　『考古学ジャーナル』　211

1983　「美濃窯における白瓷と山茶椀」　『美濃陶磁歴史館報』　II

竹内　常行　1968　「島畑景観の分布について」　『地理学評論』41－4

仲野　泰裕　1985　「長野県出土の近世陶磁－松本市二の丸御殿跡出土陶磁資料を中心として」　『愛知県陶磁資料館　研究紀要』4

1987　「江戸時代中・後期の瀬戸窯ー研究の現状と今後の視点ー」　『江戸遺跡情報連絡会会報』No.10

1988　「江戸時代中・後期の瀬戸窯ー研究の現状と今後の視点ー」　『物質文化』50

前川　要　1984　「猿投窯における灰釉陶器生産末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III

松本市教委　1983　「松本市新村秋葉原遺跡」　『松本市文化財調査報告』No.26

1984　「松本市島内遺跡群」　『松本市文化財調査報告』No.31

1985　「松本市島内遺跡群ー北方遺跡・南中遺跡ー」　『松本市文化財調査報告』No.36

1985　『松本城二の丸御殿跡』

1986　「松本市島内遺跡群ー上平瀬遺跡ー」　『松本市文化財調査報告』No.41

1988　「松本市島内遺跡群ー北方遺跡II・北中遺跡ー」　『松本市文化財調査報告』No.59

松本市・東筑摩郡郷土資料編纂会　1957　『松本市・東筑摩郡誌』　第１～３巻

松本盆地団研グループ　1977　「松本盆地の第四紀地質」　『地質学論集』14

三土　正則　1974　「低地水田土壌の生成的特徴とその土壌分類への意義」　『農業技術研究所報告』Ｂ－25

1978　「水田」　『土壌調査法』

南安曇郡史編纂委員会　1967　『南安曇郡史』

原　明芳　1987　「松本平における平安時代の食膳具」　『信濃』III39－4

藤沢　良祐　1982　「古瀬戸中期様式の成立過程」　『東洋陶磁』第８号

1984　「〝古瀬戸〟概説」　『美濃陶磁歴史館報』III

1986　「瀬戸大窯発掘調査報告書」　「瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要」Ｖ

藤原　宏志　1987　「プラント・オパール分析の現状と課題」　「土壌学と考古学」

藤原宏志・杉山真二　1985　「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)」　『考古学と自然科学』１

横田賢二郎・森田勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」４

若尾　正成　1987　「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」　「美濃の古陶」

## 発掘調査及び執筆等の分担一覧　（五十音順）

1　発掘調査担当及び発掘調査記録の整理とまとめ

南中遺跡　(60年度)　井口慶久　中野亮一
　　(61年度)　青沼博之　小口　徹　中野亮一
北中遺跡　(61年度)　青沼博之　青柳英利　河西克造　黒岩龍也　竹内　稔　西牧尚人　百瀬陽三
　　(62年度)　青沼博之　竹内　稔　西牧尚人　百瀬長秀
北方遺跡　　青沼博之　上田典男　岡村秀雄　小口　徹　豊田伸一　中野亮一　中浜　徹
　　和田文人
上手木戸遺跡(60年度)小林俊一　鈴木道穂　関　全寿　西牧尚人　原　明芳
　　(61年度)青沼博之　伊藤友久　関　全寿　竹内　稔　西牧尚人

2　執筆担当者

市村勝巳　第3章　第3節2(1)イ
上田典男　第1章　第1節、第3節
　　第2章　第1節、第3節1(1)ア～オ、(2)、第4節
　　第3章　第1節、第3節1(1)ア～オ・キ、(2)ア～オ、第4節、第5節
　　第4章　第1節、第3節1、第4節
大竹憲昭　第2章　第3節2(1)イ・ウ、(2)イ・ウ
　　第3章　第3節2(1)ウ・エ、(2)イ・ウ、(3)ア・イ
　　第4章　第3節2(1)イ・ウ、(2)イ・ウ
小口　徹　第1章～第4章　第2節
　　第2章　第3節1(1)カ
　　第3章　第3節1(1)カ、(2)カ
小平和夫　第3章　第3節2(1)ア
野村一寿　第2章　第3節2(1)ア、(2)ア・エ
　　第3章　第3節2(2)ア・エ
　　第4章　第3節2(1)ア、2(2)ア

その他

遺物実測・拓影　市村勝巳　大竹憲昭　小平和夫　小林俊一　野村一寿
遺物写真撮影・現像・焼き付け・遺構写真焼き付け　岡沢秀紀　西山克己
土層総括　小口　徹　関　全寿
石質鑑定　大竹憲昭　小口　徹
金属製品・木製品保存処理　大竹憲昭　小林　上　小松　望
編集　上田典男　宮沢恒之

# 付　　表

付表1　北中遺跡　掘立柱建物址一覧表（近世）

| No. | 位置 | 棟方向 | 規模 | | | 柱間間隔 | | 柱穴掘り方 | | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 桁行×梁行 | 桁行×梁行 | 面積 | 桁行 | 梁行 | 形 | 規模 | 付属施設・遺物等 | No. |
| 01 | 南部 | N 3°E | 4間×3間 | 780cm×510cm | 39.78㎡ | 150～210cm | 152～225cm | 丸 | 20～30cm | 柱痕径10～12cm<br>P8内より土師器甕<br>SK723にきられる | 5 |

付表2　北中遺跡　中・近世土器・陶磁器出土遺構一覧表

| 遺構 | 中・近世出土遺物　（所属時期、掲載図版番号、（ ）内は破片数） | 備考 |
|---|---|---|
| SK　4 | 内耳鍋（6） | |
| 31 | 青磁碗F類（1） | |
| 54 | 古瀬戸天目茶碗15C（2） | |
| 59 | 古瀬戸折縁深皿14C（12）図版8－12 | |
| 67 | 内耳鍋（4） | |
| 69 | 陶器：擂鉢19C（錆釉2） | |
| 71 | 陶器：油壺18C後～（灰釉8）図版11－62 | |
| 106 | 古瀬戸卸皿15C（1）図版8－9、土師器皿Ⅰ類（1） | |
| 108 | 古瀬戸緑釉皿15C、内耳鍋（1） | |
| 110 | 古瀬戸折縁深皿15C（1）、内耳鍋（1） | |
| 113 | 古瀬戸緑釉皿15C（1）、青磁碗H類（1）図版8－14 | |
| 190 | 陶器：碗19C（灰釉1） | |
| 199 | 陶器：鉢19C～(灰釉1) | |
| 200 | 磁器：燭徳利19C後葉～（1） | |
| 201 | 磁器：碗19C後葉～（1）図版11－63 | |
| 216 | 陶器：擂鉢（錆釉3）、鉢（3）図版11－65、丸碗18C後～(灰釉3）図版11－64 | |
| 217 | 陶器：鉢19C（灰釉1）、碗19C～？（鉄釉1） | |
| 231 | 古瀬戸折縁深皿15C？（1）・天目茶碗15C（2）図版8－6、捏鉢（1）<br>常滑系甕（2）、内耳鍋ⅡB類？（4）、近世不明陶器（1） | 捏鉢：SK241と接合<br>天目茶碗：SK231とSK232が接合、<br>内耳鍋：SK231とSK232が接合 |
| 232 | 古瀬戸剣皿14～15C（1）図版8－10・天目茶碗15C(2)図版　－6・緑釉皿15C(1)、常滑系甕(1)、内耳鍋ⅡB類？（20）図版　－3・4、土師器皿Ⅰ（1）・Ⅱ類（1） | |
| 233 | 内耳鍋（1） | |
| 234 | 古瀬戸折縁深皿15C？（1）、青磁碗F類かH類（1）<br>内耳鍋（2）、土師器皿ⅠB類（6）図版8－1・2 | |
| 235 | 古瀬戸天目茶碗15C（2）・茶入15C前（1）図版8－8、内耳鍋Ⅱ類（2） | |
| 241 | 古瀬戸緑釉皿15C（2）、捏鉢（1）、内耳鍋（7）図版8－4、土師器皿（1） | 捏鉢SK231と接合 |
| 242 | 磁器：碗19C（14）図版10－1～6、皿（5）図版10－8・9、徳利20C前（2）、仏飯19C後（2）図版10－18・19、不明20C前？（1）<br>陶器：碗17C図版10－7・18後～19C（鉄釉3・灰釉2）、皿18C～（2）図版10－11<br>燈明皿・受皿18後～19C（灰釉6）図版10－12～17、擂鉢19C～（錆釉2）<br>鉢（錆釉2・灰釉4）図版10－10、蓋（錆釉1・灰釉1）、不明（4）<br>土器・土製品：不明（3）、瓦（1）図版10－20、陶器質の土製品(16)図版10－21～35 | |
| 244 | 陶器：擂鉢19C（錆釉1） | |
| 245 | 磁器：碗19C(3)図版11－36～38、杯(1)図版11－39、皿18～19C(2)図版11－40・41、徳利19C(3)図版11－42<br>陶器：碗（灰釉5）、燈明皿、受皿18後～19C（錆釉7・灰釉6）図版11－44～51、鉢（錆釉1・灰釉12）<br>擂鉢18C後～(鉄釉1・錆釉4)図版11－58、徳利19C（掛分1・鉄釉1）図版11－43、蓋(灰釉1)図版11－54、<br>土鍋19C（錆釉12・鉄釉14・灰釉15）図版11－59～61、汁次19C後～(灰釉1）図版11－55、<br>土瓶18後～19C（錆釉12・灰釉4）図版11－56・57、甕（6）、壺？（1）、不明（11）<br>土器：七輪？（1）図版11－53、火鉢（2）図版11－52、不明（1） | |

付表3　北方道跡竪穴住居址一覧表

| No. | 位置 | 平面形 | 主軸方向 | 規模 | | | | | | | カマド | | | | | | | | | 階段 | | | 時期 | 階段No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 規模の型式 | 主軸×直交軸 m | 床面積 m² | 深さ m | 床標高 m | 位置 | 構造 | 壁への張込 形 | 壁への張込 大きさ | 煙道 平面 | 煙道 長さ m | 煙道 傾き | 煙道口の高さ m | その他 | 柱穴 | 柱間距離 m | その他 | | |
| 1 | 北部 | 隅方 | N84°W | 中1 | 2.75×3.55 | 11.5 | 0.29 | 580.45 | 西壁中央南より | 粘土 | — | — | — | — | — | — | | — | — | 貯蔵穴？ | 8 | 18 |
| 2 | 北部 | 隅方 | N10°W | 中1 | 3.20×3.55 | 11.4 | 0.34 | 580.40 | 西壁南端 | 石組 | 丸（三角） | 1/4 | — | — | — | — | カマド主軸12°南偏 | — | — | 炭化の？（基底のピット） | 8 | 18 |
| 3 | 北部 | 隅方 | N91°E | 中1 | 3.20×3.30 | 10.6 | 0.43 | 580.30 | 東壁中央 | 石組 | 二角 | 1/3 | — | — | — | — | | — | — | 墨のる浮り基底のピット | 8 | 18 |
| 4 | 北部 | 隅方 | N76°E | 中2 | 4.10×4.00 | 16.4 | 0.30 | 580.35 | 東壁中央北より | 石組 | — | — | | | | | | — | — | カマド石にテラス状の高まり | 8 | 18 |
| 5 | 北部 | 隅長1 | N74°E | 中2 | 4.00×4.50 | 18.0 | 0.30 | 580.45 | 東壁中央北より | 石組 | — | — | | | | | | — | — | — | 8 | 18 |
| 6 | 北部 | 隅方 | N82°W | 中2 | 3.90×3.70 | 14.4 | 0.33 | 580.50 | 西壁南端 | 粘土 | 丸 | 2/3か | — | — | — | | | — | — | 炉 | 8 | 18 |
| 7 | 北部 | 隅方 | N67°E | 中1 | 3.40×3.30 | 11.2 | 0.19 | 580.65 | | | | | | | | | | — | — | 北東隅に炭化物の集中 | 8 | 17 |
| 8 | 北部 | 隅長1 | N 6°E | 中2 | 4.5×3.5 | 15.8 | 0.37 | 580.40 | | | | | | | | | | — | — | 貯蔵穴？ | 8 | 17 |
| 9 | 北部 | 隅方 | N10°E | 小 | 2.80×3.00 | 8.4 | 0.19 | 580.70 | 西壁北端 | 粘土 | 丸 | 2/1 | — | — | — | — | 支脚、壁外に位置 | — | — | | 8 | 17 |
| 10 | 北部 | 隅方 | N95°W | 小 | 2.50×2.70 | 6.8 | 0.2 | 580.63 | 西壁中央 | 粘土 | 丸 | 1/3 | — | | — | — | | — | — | | 8 | 17 |
| 11 | 北部 | 隅方 | N68°E | 中1 | 3.70×3.55 | 12.0 | 0.31 | 580.58 | 東壁南端 | 石組 | 丸 | 1/3 | — | | — | — | カマド主軸、30°、物穴の主軸からずれる 支脚石 一石（2？） | — | — | | 8 | 18 |
| 12 | 北部 | 隅方 | N87°E | 中2 | 4.40×4.00 | 17.6 | 0.28 | 580.55 | | | | | | | | | | — | — | 貯蔵穴？ | 8 | 18 |
| 13 | 北部 | 隅長2 | N83°E | 中1 | 3.05×4.05 | 12.4 | 0.43 | 580.35 | 東壁中央 | 石組 | — | — | N83°E | 0.35 | 4.5° | 0.15 | 煙道部に石が敷きされている | — | — | — | 8 | 18 |
| 14 | 北部 | 隅方 | N83°W | 中1 | 3.55×3.25 | 11.5 | 0.42 | 580.45 | 西壁中央 | 石組 | — | | N92°W | 0.95 | 15° | 0.15 | 煙道の一部トンネル状に残る | | | 浅いピットのまわりを石が囲む柱穴？ | 8 | 18 |
| 15 | 南部 | 隅長1 | N82°E | 超 | 8.40×9.80 | 82.3 | 0.95 | 580.20 | 東壁中央 | 石組 | — | — | — | — | — | — | 竪穴内に煙道（長さ、1.60m） | 4 | 3.8 3.8 | 炭又は焼 貯蔵穴 礎石 | 8 | 15 |
| 16 | 南部 | 隅方 | N79°E | 大 | 5.30×4.80 | 25.4 | 0.36 | 580.70 | 東壁北端 | 石組 | 方 | 2/3 | — | — | — | — | カマド主軸、13°、竪穴の主軸よりずれる | — | — | — | 15 | 16 |
| 17 | 南部 | — | N79°E | — | —（1.95以上）×4.7 | — | 0.44 | 580.65 | | | | | | | | | | — | | 貯蔵穴？（基底のピット） | 15 | 16 |
| 18 | 南部 | 隅長1 | N87°E | 中1 | 3.70×3.20 | 12.2 | 0.43 | 580.30 | | | | | | | | | | — | — | — | 8 | 14 |
| 19 | 南部 | 隅長1 | N88°W | 中1 | 3.70×3.10 | 11.5 | 0.16 | 580.65 | 西壁北端 | 粘土 | 丸 | 不明 | | | | | | — | — | 炭化の？（基底のピット） | 15 | 16 |
| 20 | 南部 | 隅長1 | N 6°W | 中2 | 4.20×3.60 | 15.1 | 0.3 | 580.65 | | | | | | | | | | — | — | — | 8 | 15 |
| 21 | 南部 | 隅方か | N88°E | 大 | —（4.35以上）×4.4 | | 0.28 | 580.65 | 東壁北端 | 石組 | | | N88°E | 0.3 | 30° | 0 | | — | — | 貯蔵穴？テラス | 15 | 15 |
| 22 | 南部 | 隅方 | N31°W | 中2 | 4.0×3.80 | 15.2 | 0.2 | 580.85 | | | | | | | | | | — | — | — | 8 | 16 |
| 23 | 北部 | 隅方 | N90°E | 中1 | 3.40×3.60 | 12.2 | 0.27 | 580.30 | 東壁中央南より | 粘土 | 方 | 1/5 | — | | | — | 崩壊か | — | — | 南西隅に南入円都と思われる張出し | 8 | 18 |
| 24 | 北部 | 隅丸 | N62°E | 中1 | 3.30×3.60 | 11.9 | 0.22 | 580.55 | 東壁中央 | 粘土 | 円 | 1/4 | — | — | — | | 煙道立ち上がり部のみ残る、煙道部に石が敷きされている | — | — | — | 8 | 18 |
| 25 | 南部 | 隅丸 | N95°E | | | | 0.47 | | | | | | | | | | | | | 柱穴と思われるピット1 | 8 | 14 |
| 26 | 南部 | 隅長1 | N75°E | 中2 | 4.6×4.1 | 18.9 | 0.2 | 580.20 | 北 東 隅 | 粘土 | 丸 | 1/3 | — | — | — | — | | 4 | 2.62 1.92 | 支柱穴と思われるピット3、基底のピット1 | 15 | 14 |
| 27 | 北部 | 隅方 | N83°E | 中1 | 3.2×3.5 | 11.2 | 0.33 | 580.30 | 東壁中央 | 粘土 | 丸（三角） | 1/3 | N85°E | 0.25 | 10°20° | 0.10 | 煙道、急勾配に立ち上がる、煙道部に石が敷きされている | | — | — | 8 | 19 |
| 28 | 北部 | | | | | | | | 西壁中央 | 石組 | | | | | | | 支脚石にハケ跡（中）がかかぶる | | | | 8 | 19 |
| 29 | 北部 | 隅長1 | N79°E | 中1 | 3.7×2.95 | 10.9 | 0.16 | 580.65 | 東壁北端 | 粘土 | 丸 | 2/1 | N79°E | 0.35 | 13° | 0.15 | 袖付け板と先端に袖石おく | — | — | 炭化の？（基底のピット） | 8 | 17 |
| 30 | 北部 | 隅方 | N84°E | 中1 | 3.60×3.50 | 12.6 | 0.54 | 580.20 | 東壁中央 | 石組 | 三角 | 1/3 | — | — | — | — | | — | — | 東壁際に石組 | 8 | 18 |
| 31 | 北部 | 隅方 | N 3°W | 小 | 2.90×2.75 | 8.0 | 0.40 | 580.20 | 北壁中央南より | 粘土 | — | — | N 6°E | 0.65 以上 | 15° | 0.25 | 煙道の一部トンネル状に残る | — | — | — | 8 | 18 |
| 32 | 南部 | 隅方 | N72°E | 中2 | 4.00×4.10 | 16.4 | 0.5 | 580.60 | 東壁中央やや南 | 石組 | — | — | N72°E | 0.3 | 10° 40° | 0.30 | 煙道、急勾配に立ち上がる | — | — | 柱穴と思われるピット1 | 8 | 14 |

**付表4　北方遺跡　掘立柱建物址一覧表**

| No. | 位置 | 棟方向 | 規模 | | | 柱間間隔 | | 柱穴掘り方 | | 時期 | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 桁行×梁行 | 桁方向×梁方向 | 面積 | 桁行 | 梁行 | 形 | 規模 | | 付属施設・遺物など | No. |
| 1 | 南部 | N83°E | 2×2間 | 350cm | 300cm | 10.5m² | 175cm | 150~153cm | 方円 | 52~57・32cm | 中世1 | 柱穴掘り方は方形を意識していると思われる。 | 28 |
| 2 | 中部 | N 5°W | 6.5×3間 | 1250cm | 540cm | 67.5m² | 160~220cm | 140~210cm | 円 | 11~50・56cm | 中世2 | P28から柱材出土、西側に出入口部？南東部に瓮？ | 30 |
| 3 | 南部 | N 5°W | 4×3間 | 930cm | 570cm | 53.01m² | 130~360cm | 150~240cm | 円 | 21~45・18cm | 中世1 | 3×6間かも？柱穴配置はそろっていないが2本ずつみるとそれぞれ平行である | 28 |
| 4 | 南部 | N49°W | 2×1間 | 520cm | 272cm | 14.14m² | 210~280cm | (225) 272~274cm | 円 | (27) 35~46・40cm | 中世1 | | 28 |
| 5 | 南部 | N 4°E | 2×1間 | 265cm | 210cm | 5.57m² | 125~145cm | 205~210cm | 円 | 23~29・28cm | 中世2 | | 24 |
| 6 | 中部 | N86°E | 2.5×2間 | 510cm | 326cm | 16.63m² | (95) 185~210cm | 162~170cm | 円 | 24~40・32cm | 中世2 | | 30 |
| 7 | 南部 | N81°E | 2×2間 | 363cm | 336cm | 12.20m² | 170~195cm | 155~160cm | 円 | 28~44・15cm | 中世2 | | 21 |
| 8 | 南部 | N 2°W | 1×1間 | 210cm | 180cm | 3.78m² | 同左 | 同左 | 円 | | 中世2 | No.9の建て替え | 22 |
| 9 | 南部 | N10°W | 1×1間 | 180cm | 180cm | 3.24m² | 〃 | 〃 | 円 | | 中世2 | | |
| 10 | 南部 | N 7°W | 1×1間 | 210cm | 150cm | 3.15m² | 〃 | 〃 | 円 | | 中世2 | No.8の建て替え | |

付表 5　北方遺跡　遺構別古代土器一覧表　・数量は、個体識別によって教えた固体数で表わした。・(　) は他の期からの混入の可能性が高いと思われる器種である。

| 遺構番号 | 食器 土師器 杯D・E・F | 杯C | 杯A | 椀 | 皿A・耳皿 | 盤B | 盤A | 高杯 | 鉢・鉢A | 他 | 黒色土器A 杯A | 椀 | 皿A・B | 鉢A | 他 | 黒色土器B 椀・皿 | 須恵器 杯E | 杯A・C・D | 杯B | 杯蓋A・B | 皿A・B | 盤 | 鉢A・B・C | 高杯 | 他 | 瓶敷須恵 杯A | 椀 | 皿 | 陶灰器椀 | 陶器椀 | 輪積造器A 椀・皿 | 椀・皿・他 | 煮炊具 土師器 甕A・D | 甕B・E | 甕C | 甕F | 小型甕A | 小型甕B | 小型甕C | 小型甕D | 羽釜・足釜 | 竈 | 他 | 貯蔵具 須恵器 壺A・B | 壺B(A)・B2・C | 瓶類他 | 小瓶 | 広口瓶 | 陶灰器鉢 | 長頸壺・短頸壺 | 土師B色 | 個体総数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SB 1 | | | 8 | 5 | | | 3 | | | | 50 | 30 | | | | | | 1 | | | | | | | | 52 | 6 | 2 | | | (2) | | 8 | | | | | | 6 | | | | 1 | 6 | | | | | 2 | | 162 |
| SB 2 | | | 8 | 1 | | | 2 | | | | 20 | 15 | | | | | | | | | | | | | | 21 | 5 | 3 | | | | | 8 | | | | | | 2 | | | | 1 | 7 | | | | | | | 96 |
| SB 3 | | | 8 | 2 | | | 2 | | | | 31 | 40 | | 1 | | | | | | | | | | | | 79 | 2 | | | | | | 35 | | | | | | 8 | | | | | 4 | | 1 | | 1 | | | 214 |
| SB 4 | | | 19 | 8 | | | | | | | 34 | 18 | | | | | | | 1 | | | | | | | 42 | 8 | 2 | | | | | 8 | | | | | | 7 | | | | 1 | 6 | | 1 | | 3 | | | 132 |
| SB 5 | | | 11 | 1 | | | | | | | 21 | 15 | | | | | | | | 1 | | | | | | 14 | 6 | 1 | | | (1) | | 11 | | | | | | 4 | | 1 | | | 11 | | 3 | | 1 | | | 102 |
| SB 6 | | | 7 | | | | | | | | 13 | 10 | | 1 | | | | | | | | | | | | 32 | 3 | | | | | | 7 | | | | | | 7 | | 1 | | 2 | 3 | | 2 | | 1 | | | 87 |
| SB 7 | | | 2 | | | | | | | | 2 | 4 | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | 10 | | | | | (1) | | 7 | | | | | | 3 | | | | | | | 3 | | | | | 34 |
| SB 8 | | | 3 | | | | | | | | 5 | 7 | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | 14 | 2 | | | | | | 6 | | | | | | 5 | | | | 1 | 3 | | | | | 1 | | 49 |
| SB 9 | | | 2 | 1 | | | 1 | | | | 6 | 6 | | 3 | | | | | | | | | | | | 11 | 5 | 2 | | | (2) | | 6 | | | | | | 2 | | | | | 6 | | | | | 1 | | 56 |
| SB 10 | | | 1 | | | | 1 | | | | 3 | 3 | | | | | | | | | | | | | | 18 | 1 | 2 | | | | | 1 | | | | | | 2 | | | | | 4 | | | | | | | 36 |
| SB 11 | | | 6 | 3 | | | 1 | | | | 21 | 16 | | | | | | | | | | | | | | 21 | 3 | 4 | | | | | 21 | | | | | | 4 | | | | 1 | 7 | | | | | 1 | | 188 |
| SB 12 | | | 10 | 3 | | | | | | | 37 | 19 | | 1 | | | | | | | | | | | | 19 | 3 | 2 | | | | | 6 | | | | | | 5 | | | | 3 | 13 | | | | | 2 | | 123 |
| SB 13 | | | | | | | | | | | 20 | 8 | | | | | | | | | | | | | | 21 | 5 | | | | | | 5 | | | | | | 4 | | | | 1 | 3 | | | | | 2 | | 74 |
| SB 14 | | | 5 | 1 | | | 1 | | | | 9 | 15 | | 1 | | | | | | | | | | | | 17 | 3 | | | | | | 11 | | | | | | 5 | | | | 2 | 9 | | 1 | | 2 | | | 82 |
| SB 15 | | | 12 | 1 | | | 6 | | | | 59 | 76 | 1 | 9 | | | | 3 | | | | | | | | 115 | 15 | 12 | | | (2) | | 6 | | | | | | 4 | | | | 4 | 3 | | | | | 8 | | 239 |
| SB 16 | | | (1) | | | | | | | | (1) | (1) | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | (1) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 |
| SB 17 | | | 4 | | | | | | | | (1) | (2) | | | | | | | | | | | | | | (2) | 5 | | | | 2 | | (1) | | | | | | | | | | | (6) | | | | | 1 | | 24 |
| SB 18 | | | | | | | | | | | 5 | 3 | | | | | | 2 | 1 | | | | | | | 5 | 1 | 1 | | | | | 3 | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | 23 |
| SB 19 | | | 3 | | | 1 | | | | | (2) | (3) | | | | | | (2) | | | | | | | | (4) | 1 | | | | | | (1) | | | | | | | 1 | | | | (3) | | | | | 1 | | 22 |
| SB 20 | | | 13 | 3 | | | 3 | | | | 25 | 30 | 4 | 3 | | | | 2 | | 1 | | | | | | 15 | 12 | 2 | | | 1 | | 4 | | | | | | | | | | 2 | 4 | | 1 | | 2 | | | 107 |
| SB 21 | | | 1 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 |
| SB 22 | | | 3 | | 1 | | | | | | 16 | 6 | | | | | | | | | | | | | | 25 | 7 | | | | | | 8 | | | | | | 4 | | | | | 5 | | | | | 3 | | 79 |
| SB 23 | | | 4 | 2 | | | 1 | | | | 16 | 9 | | 2 | | | | | | | | | | | | 21 | 5 | 2 | | | | | 11 | 1 | | | | | 8 | | | | 2 | 4 | | 1 | | 3 | | | 92 |
| SB 24 | | | 4 | | | | 3 | | | | 10 | 11 | 1 | 4 | | | | | | | | | | | | 20 | 7 | 1 | | | | | 4 | | | | | | 5 | | | | | 4 | | | | 2 | | | 76 |
| SB 25 | | | 13 | | 1 | 3 | 2 | | | | 4 | 2 | | 1 | | | | | | | | | | | | 2 | 4 | | | | | | 3 | | | | | | 1 | 1 | | | | 1 | | | 1 | | | | 39 |
| SB 27 | | | | | 1 | | | | | | 4 | 2 | | 1 | | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | 5 | | | | | | 6 | | | | | | | | | | | | 22 |
| SB 28 | | | 3 | | | | | | | 1 | 3 | 3 | | | | | | | | | | | | | | 4 | 1 | | | | | | 1 | 1 | | | 5 | | | | | | | | | | | 1 | | | 22 |
| SB 29 | | | 4 | | | | | | | | 8 | 9 | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | 9 | 1 | 1 | | | | | 9 | | | | | | 4 | | | | 1 | 1 | | 1 | | | | | 50 |
| SB 30 | | | 2 | | | | | | | | 16 | 11 | | 1 | | | | | | | | | | | | 39 | 1 | 1 | | | | | 16 | | | | | | 11 | | 1 | | 2 | 8 | | | | | 2 | | 119 |
| SB 31 | | | 2 | | | | | | | | 3 | | | 1 | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | 2 | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | 10 |
| SB 32 | | | 4 | 1 | (1) | | | | | | 9 | 8 | 1 | 1 | | | | 1 | | | | | | | | 11 | 3 | 1 | | | (1) | | 4 | | | | | | 2 | (1) | | | 2 | 2 | | 1 | | 1 | | | 55 |
| SK 72 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 |
| SK 73 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | 2 | | 1 | | | | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 9 |
| SK 133 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | 3 |
| SK 134 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| SK 164 | | | 26 | 1 | 3 | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 32 |
| SK 533 | | | | | | | | | | | 4 | 2 | | | | | | | | | | | | | | 2 | 4 | | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | | 3 | | | | | | | 16 |
| SK 569 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | (1) | | | | | | | | | | | (1) | | | | | | | 3 |
| SK 585 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | 4 | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | 10 |
| SX 1 | | | 8 | | | | 1 | | | | 21 | 16 | | 2 | | | | | | | | | 1 | | | 26 | 8 | 22 | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 9 | | 1 | | 4 | | | 123 |
| SX 5 | | | 36 | 10 | | | 7 | | | | 50 | 68 | | 5 | | 1 | | 3 | 1 | 4 | | | | | | 42 | 23 | | | | 3 | | 2 | | | | | | 2 | | | | 3 | 8 | | 3 | | 3 | | | 286 |

付表6　北方遺跡　墨書・刻書土器一覧表

| 整理番号 | 出土遺構 | 図版実測図番号 | 種類 | 器種 | 部位 | 書き方 | 内・外 | 文字 | 層位 | 遺存状態(%) | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SB 2 | 1 | 黒色土器A | 杯A | 体 | 左横 | 外 | 口 | 覆 | 口 50 | 底 100 | |
| 2 | 〃 | 10 | 灰釉陶器 | 椀A | 底 | — | 〃 | □ | 〃 | 45 | 30 | |
| 3 | 4 | 5 | 黒色土器A | 杯A | 体 | ? | 〃 | □ | 〃 | 80 | 100 | |
| 4 | 〃 | 13 | 黒色土器A | 椀 | 〃 | 正位 | 〃 | □ | 床 | 80 | 100 | 貞か |
| 5 | 5 | 10 | 黒色土器A | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 青 | 〃 | 55 | 100 | |
| 6 | 6 | — | 黒色土器A | 杯または椀 | 〃 | 〃 | 〃 | 刃 | 覆 | 11 | | |
| 7 | 〃 | — | 土師器 | 杯 | 〃 | ? | 〃 | □ | 〃 | | 60 | |
| 8 | 8 | 5 | 黒色土器A | 椀 | 〃 | 正位 | 〃 | 栗・栗 | 〃 | 100 | 100 | |
| 9 | 11 | 25 | 灰釉陶器 | 〃 | 底 | — | 〃 | □ | 床 | | 60 | |
| 10 | 13 | 10 | 灰釉陶器 | 〃 | 〃 | — | 〃 | □ | 覆 | 15 | 100 | |
| 11 | 14 | — | 黒色土器A | 杯または椀 | 体 | 正位 | 〃 | □ | 〃 | | | 円か |
| 12 | 15 | — | 黒色土器A | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 円 | 床 | 25 | | |
| 13 | 〃 | — | 黒色土器A | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 円 | カマド | 10 | | |
| 14 | 〃 | 12 | 黒色土器A | 杯 | 〃 | 〃 | 〃 | □ | P6 | 1 | 47 | 青か |
| 15 | 〃 | 44 | 軟質須恵器 | 杯A | 〃 | 〃 | 〃 | 青 | P6 | 50 | 60 | |
| 16 | 〃 | — | 軟質須恵器 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 青 | 覆 | | 25 | |
| 17 | 〃 | 57 | 灰釉陶器 | 皿 | 底 | — | 〃 | □ | 〃 | 25 | 100 | 転用硯35と同一個体 |
| 18 | 〃 | 5 | 黒色土器A | 杯A | 体 | 正位? | 〃 | □ | P6 | 50 | 95 | |
| 19 | 23 | 9 | 黒色土器A | 椀 | 底 | — | 〃 | 円 | 床 | | 100 | |
| 20 | 28 | 4 | 黒色土器A | 杯A | 体 | 正位 | 〃 | 刃 | カマド | | 100 | |
| 21 | 32 | 3 | 黒色土器A | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 青 | カマド付 | 42 | 100 | |
| 22 | 〃 | — | 黒色土器A | ? | 〃 | 〃 | 〃 | 青 | 覆 | 4 | | |
| 23 | 〃 | — | 土師器 | ? | 〃 | 〃 | 〃 | 青 | 〃 | | | |
| 24 | 〃 | 14 | 灰釉陶器 | 椀 | 底 | — | 〃 | 青 | カマド付 | 75 | 100 | |
| 25 | SE 1 | — | 黒色土器A | 椀 | 〃 | — | 〃 | □ | 覆 | | 100 | |
| 26 | SI 1 | — | 黒色土器A | ? | 体 | | 〃 | □ | 〃 | 8 | | |
| 27 | 〃 | — | 灰釉陶器 | 椀 | 底 | — | 〃 | 青 | 〃 | | 50 | |
| 28 | 〃 | — | 灰釉陶器 | 〃 | 〃 | — | 〃 | □ | 〃 | | 20 | |
| 29 | 遺構外 | — | 黒色土器A | ? | 体 | 正位 | 〃 | 円 | 〃 | | | 杯または椀 |
| 30 | SB 11 | — | 黒色土器A | 椀 | 〃 | 刻書 | 〃 | □ | カマド | 80 | 100 | 判読不明 |
| 31 | SB 32 | — | 軟質須恵器 | 杯A | 〃 | 〃 | 〃 | □ | 覆 | | | 円か |

付表7　北方遺跡　転用硯一覧表

| 整理番号 | 出土遺構 | 図版実測図番号 | 種類 | 器種 | 転用部位 | 調整痕 | 層位 | 遺存状態(%) | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 32 | SB 9 | — | 灰釉陶器 | 椀 | 底部内 | あり | 覆 | 口 | 底35 | |
| 33 | SB 14 | 12 | 灰釉陶器 | 椀 | 〃 外 | 〃 | 〃 | | 100 | |
| 34 | SB 15 | 57 | 灰釉陶器 | 皿 | 〃 内 | なし | 〃 | 25 | 100 | 墨書(17)と同一個体 |
| 35 | SB 32 | — | 須恵器 | 甕 | 胴部 〃 | あり | 床下 | | | 磨滅痕弱い |
| 36 | SE 1 | — | 灰釉陶器 | 椀 | 底部 〃 | 〃 | 覆 | | | |
| 37 | SI 1 | 9 | 須恵器 | 蓋 | 〃 〃 | なし | 〃 | 30 | 50 | |
| 38 | 〃 | — | 灰釉陶器 | 椀 | 〃 外 | あり | 〃 | | 70 | 磨滅弱い |
| 39 | 〃 | — | 灰釉陶器 | 椀 | 〃 内 | 〃 | 〃 | | 22 | |
| 40 | 〃 | 27 | 灰釉陶器 | 皿 | 〃 〃 | なし | 〃 | | 100 | |
| 41 | 〃 | — | 灰釉陶器 | 皿 | 〃 〃 | あり? | 〃 | 60 | 10 | |
| 42 | 遺構外 | — | 灰釉陶器 | 椀 | 〃 〃 | なし | | | | |

付表8　北方遺跡　中・近世　土器・陶磁器出土遺構一覧表

| 遺　構 | 中・近世出土遺物（所属時期、掲載図版番号、（　）内は破片数） | 備　考 |
|---|---|---|
| SB　1 | 青磁碗J類（1）図版53－3 | 古代の遺構 |
| 2 | 常滑系甕（1） | 〃 |
| 5 | 大窯期丸碗16C（1） | 〃 |
| 11 | 近世不明（1） | 〃 |
| 14 | 中世不明（1）、陶胎上絵付け碗18C（1） | 〃 |
| 19 | 近世不明（1） | 〃 |
| 28 | 青磁碗C類（1） | 〃 |
| ST　8 | 古瀬戸四耳壺（1）図版53－20、常滑系大甕IV類（24）図版53－23 | 常滑：SA2・ST8・SK606、SA1・ST8・SK606・608・619、四耳壺：ST8・9・SK606と接合 |
| 9 | 古瀬戸四耳壺（1）図版53－20 | |
| SD　4 | 古瀬戸折縁深皿15C（1）図版53－17、内耳鍋（19）図版53－11 | |
| SA　1 | 常滑系大甕IV類（1）図版53－23 | ST8・SK606・608・619 |
| 2 | 常滑系甕（1） | ST8・SK606と接合 |
| SK　1 | 土師質擂鉢（1）図版53－22 | |
| 2 | 古瀬戸折縁深皿15C（1）図版53－18、捏鉢（1） | 折縁深皿は同一個体 |
| 5 | 古瀬戸折縁深皿15C（3）図版53－18 | |
| 13 | 古瀬戸折縁深皿15C（1）図版53－18 | |
| 14 | 古瀬戸天目茶碗15C（3）図版53－13 | |
| 181 | 陶器碗（灰釉2・鉄釉1）・片口鉢（鉄釉1）・擂鉢（錆釉）・徳利（1）・香炉（1）、磁器碗（1）不明（2）以上19C前半 | |
| 321 | 青磁碗C類（1）図版53－1 | |
| 424 | 古瀬戸卸皿14～15C（1）図版53－15 | |
| 456 | 土師器皿ⅠA3類（1）図版53－6 | |
| 462 | 常滑系甕（1） | |
| 464 | 捏鉢（1）、青磁碗F類（1）図版53－2 | |
| 483 | 常滑系甕（1） | |
| 492 | 内耳鍋（1） | |
| 560 | 古瀬戸折縁深皿（1）図版53－19、内耳鍋ⅡC類（3）図版53－8・9 | 白磁碗伴出 |
| 575 | 古瀬戸盤（1）、内耳鍋（22）図版53－10 | |
| 576 | 古瀬戸直縁大皿14C～（1）図版53－16 | |
| 605 | 古瀬戸縁釉皿15C(1)図版53－14、内耳鍋Ⅰ類(14)図版53－12、土師器皿ⅡB類図版53－7 | |
| 606 | 古瀬戸四耳壺（3）図版53－20、常滑系大甕IV類（16）図版53－23<br>青磁杯13C後半～14C中葉（1）図版53－4 | 常滑：SA2・ST8・SK606、SA1・ST8・SK606・608・619、四耳壺ST8・ST9・SK606と各々接合 |
| 608 | 常滑系大甕IV類（1）図版53－23 | |
| 619 | 常滑系大甕IV類（1）図版53－23 | |
| SI　1 | 常滑系甕（1）、三筋壺（2）、中世不明（1） | 古代の遺構 |

付表9　上手木戸遺跡　掘立柱建物址一覧表（近世）

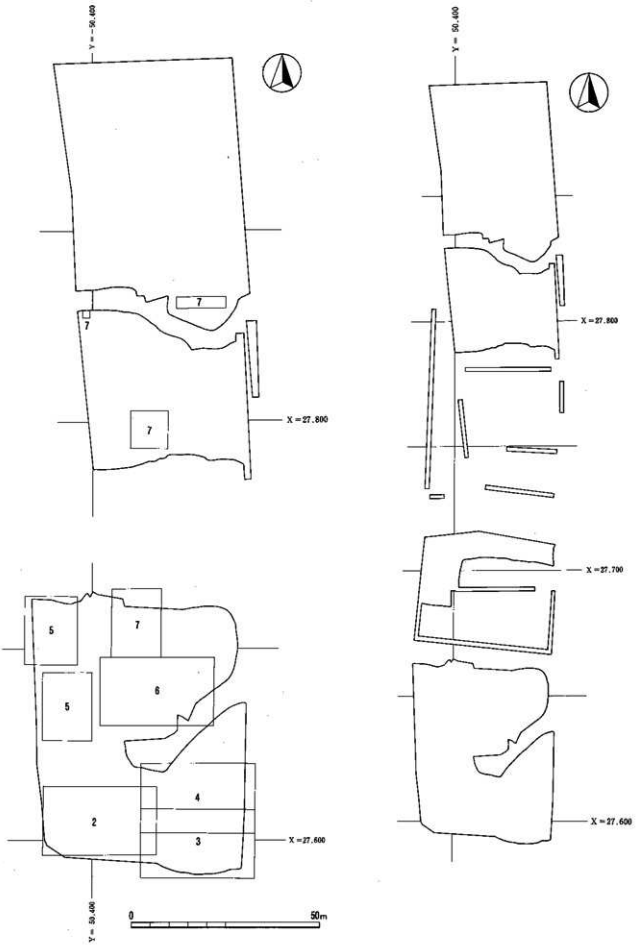
| No. | 位置 | 棟方向 | 規模 | | | 柱間間隔 | | 柱穴掘り方 | | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 桁行×梁行 | 桁行×梁行 | 面積 | 桁行 | 梁行 | 形 | 規模 | 付属設備・遺物等 | No. |
| 01 | 中部 | N25°E | 4間×3間 | 660cm×510cm | 33.66m² | 126～220cm | 130～200cm | 丸 | 120～30cm | | 59 |
| 02 | 中部 | N10°E | 3間×不明 | 562cm×不明cm | 不明 | 200～162cm | 195～184cm | 丸 | 40～42cm 30cm | | 59 |

付表10　上手木戸遺跡　中・近世土器・陶磁器出土遺構一覧表

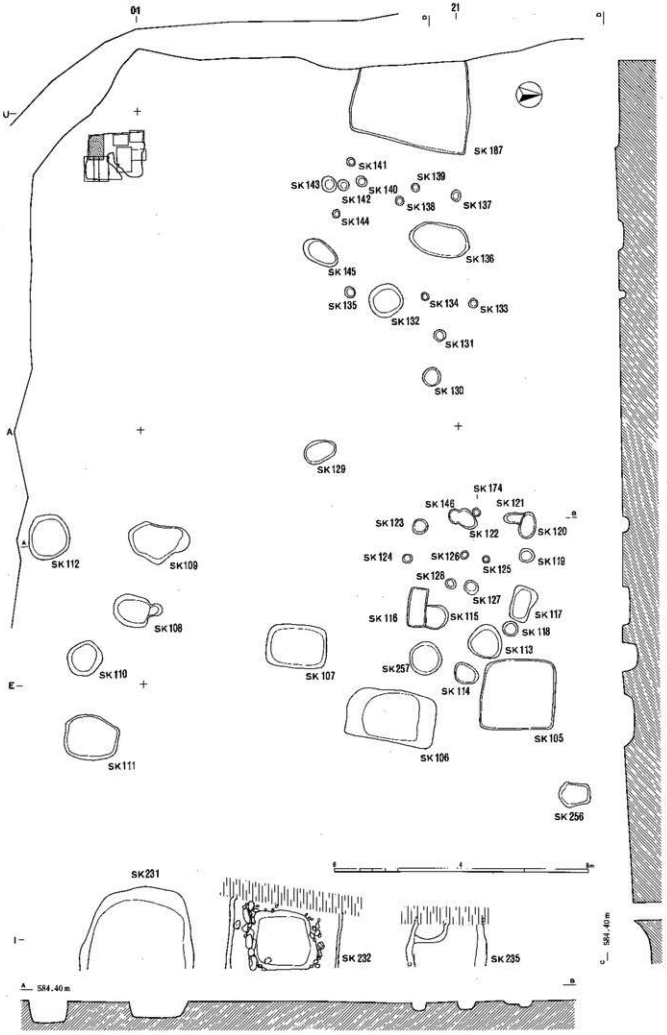
| 遺構 | 中・近世出土遺物（所属時期・掲載図版番号・（ ）内は破片数） | | |
|---|---|---|---|
| SB　1 | 内耳鍋（2） | SK　77 | 内耳鍋（1） |
| 2 | 内耳鍋（56）IIC・B類－第　図9・10・11 | 215 | 内耳鍋（1） |
| 3 | 内耳鍋（7）、青磁碗F類（1） | 228 | 内耳鍋（1） |
| 4 | 内耳鍋（4） | 230 | 内耳鍋（1） |
| SK　3 | 内耳鍋（10）III類－第　図7・IIC？類<br>土師器皿IIA類（21）－第　図2<br>大窯期皿16C（1）－第　図1 | 232 | 内耳鍋（2） |
| | | 236 | 内耳鍋IIB類？（4）近世磁器碗19C～（1） |
| 11 | 内耳鍋（4） | SX　1 | 内耳鍋IIB類（12）－第　図8 |
| 12 | 内耳鍋（1） | 2 | 内耳鍋（15） |
| 46 | 内耳鍋（1）、近世陶器碗18C後～（灰釉1） | 3 | 内耳鍋（2）<br>土師器皿IIA・B類－第　図3・4 |
| 48 | 内耳鍋（1） | | |
| 57 | 内耳鍋III類？（2） | SM　1 | 内耳鍋（2） |
| 70 | 内耳鍋（2） | 2 | 内耳鍋（7） |
| 71 | 内耳鍋（2） | 3 | 内耳鍋（1） |
| 73 | 内耳鍋IIC類？（12）土師器皿II類（1） | SD　2 | 内耳鍋IIC類？・IIB類(41)－第　図12土師器皿II類(2) |

# 図　　版

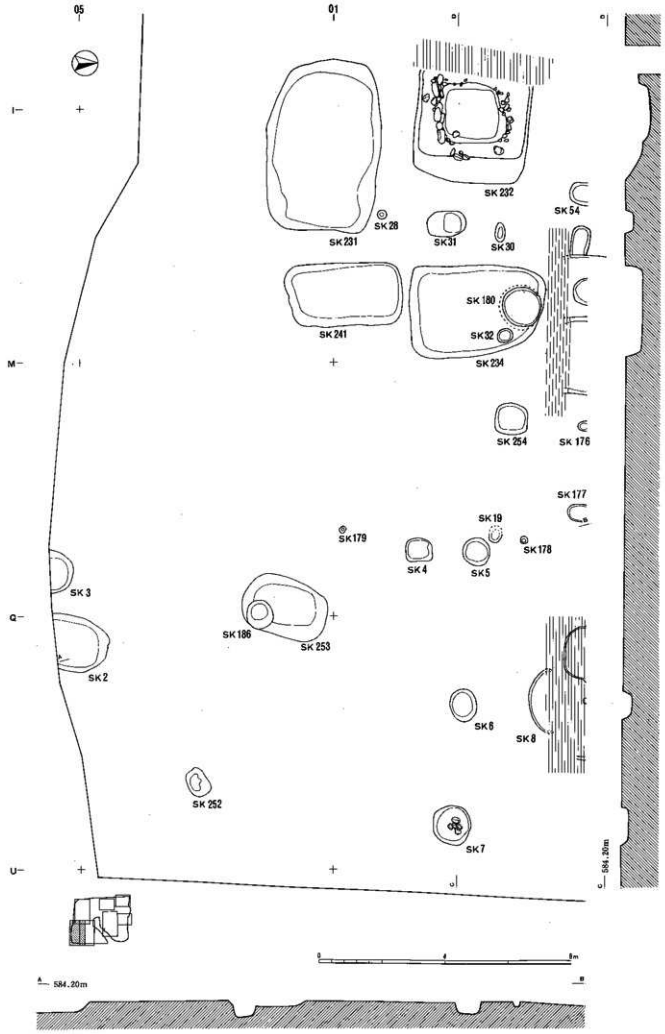
北中遺跡遺構割付図　**図版 1**



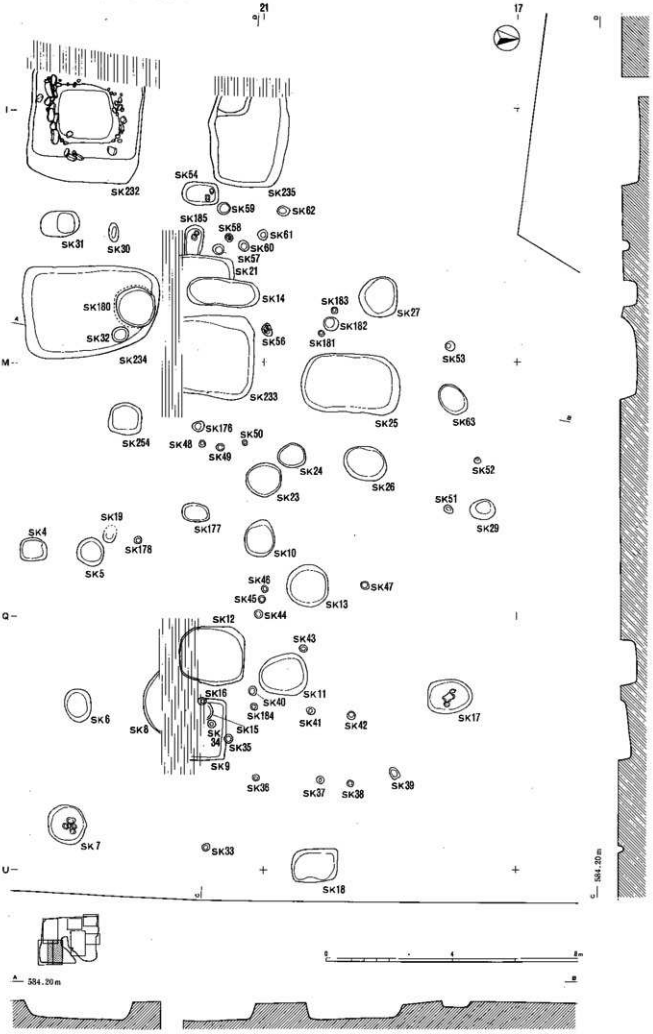
**図版 2　北中遺跡遺構図**

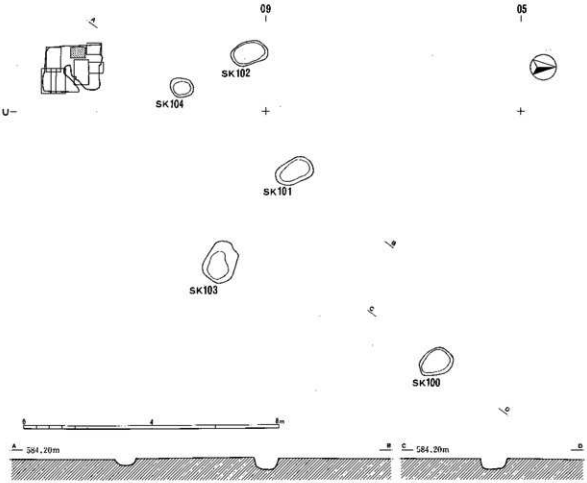

01
21
U
A
E
I
SK187
SK141
SK139
SK143
SK140
SK142
SK138
SK137
SK144
SK136
SK145
SK135
SK134
SK133
SK132
SK131
SK130
SK129
SK174
SK146
SK121
SK123
SK122
SK120
SK124
SK126
SK125
SK119
SK128
SK127
SK116
SK115
SK117
SK118
SK113
SK112
SK109
SK108
SK110
SK107
SK257
SK114
SK105
SK106
SK111
SK256
SK231
SK232
SK235
584.40m
584.40m

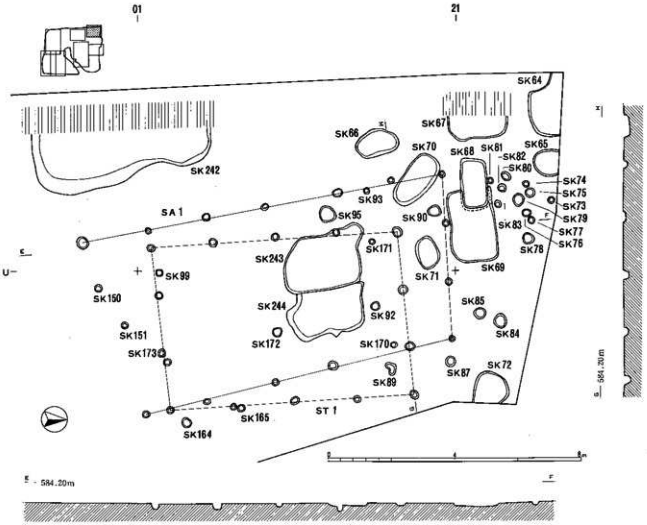
北中遺跡遺構図　図版 3


05
01
I
M
Q
U
SK 232
SK 54
SK 28
SK 231
SK 31
SK 30
SK 180
SK 241
SK 32
SK 234
SK 254
SK 176
SK 177
SK 19
SK 179
SK 178
SK 4
SK 5
SK 3
SK 186
SK 253
SK 2
SK 6
SK 8
SK 252
SK 7
584.20m
584.20m
0
4
8m

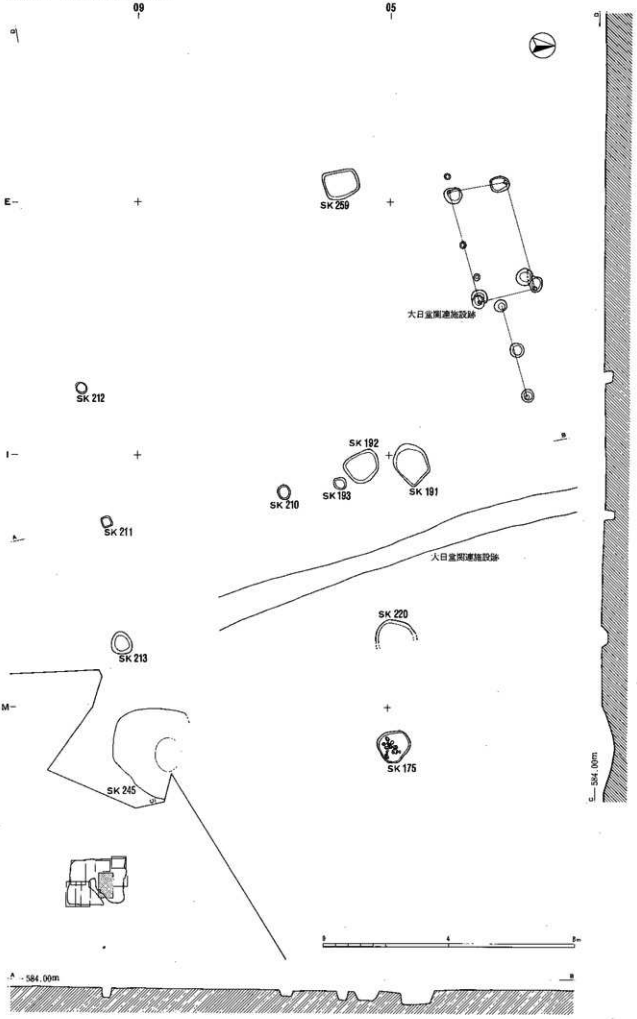
**図版 4　北中遺跡遺構図**

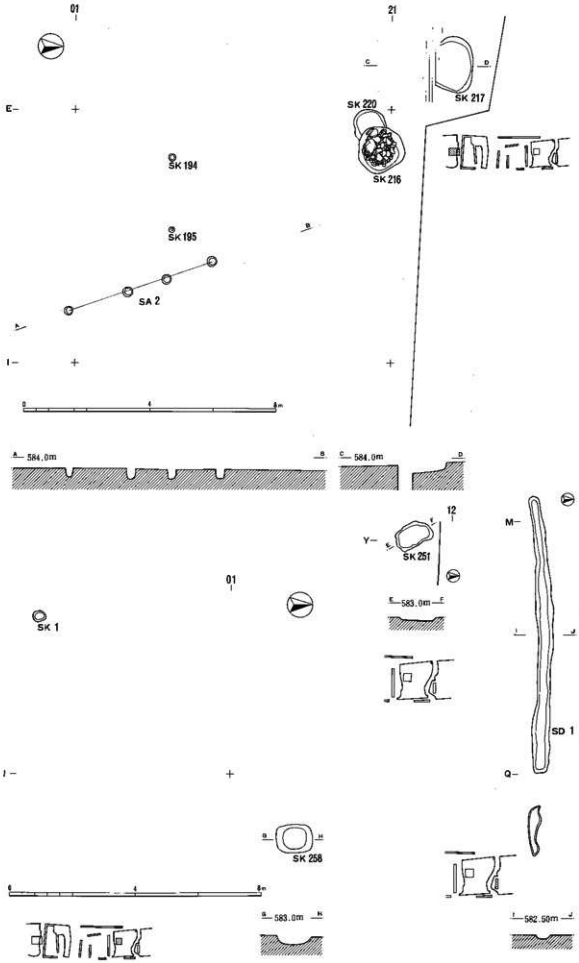

21
17
SK232
SK235
SK54
SK59
SK62
SK185
SK58
SK61
SK60
SK57
SK21
SK31
SK30
SK14
SK183
SK27
SK180
SK182
SK32
SK56
SK181
SK234
SK53
SK233
SK25
SK63
SK176
SK50
SK254
SK48
SK49
SK24
SK26
SK52
SK23
SK51
SK29
SK19
SK177
SK4
SK178
SK10
SK5
SK46
SK47
SK45
SK13
SK44
SK12
SK43
SK16
SK11
SK40
SK6
SK184
SK41
SK42
SK17
SK8
SK15
SK34
SK35
SK9
SK36
SK37
SK38
SK39
SK7
SK33
SK18
584.20m


09
05
SK102
SK104
SK101
SK103
SK100
584.20m
584.20m


01
21
SK64
SK67
SK66
SK70
SK68
SK61
SK65
SK82
SK80
SK74
SK75
SK73
SK79
SK77
SK76
SK78
SK83
SK69
SK242
SA 1
SK93
SK95
SK90
SK171
SK243
SK71
SK99
SK150
SK244
SK92
SK85
SK84
SK151
SK172
SK170
SK173
SK87
SK72
SK89
ST 1
SK165
SK164
584.20m
584.20m

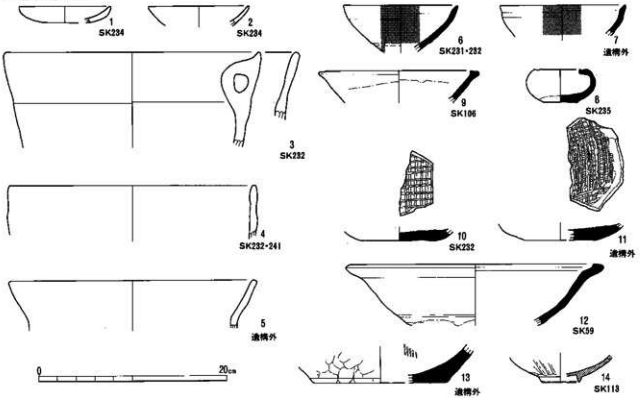
**図版 6　北中遺跡遺構図**


09
05
E
I
M
SK 259
大日堂関連施設跡
SK 212
SK 192
SK 193
SK 191
SK 210
SK 211
大日堂関連施設跡
SK 220
SK 213
SK 175
SK 245
584.00m
584.00m

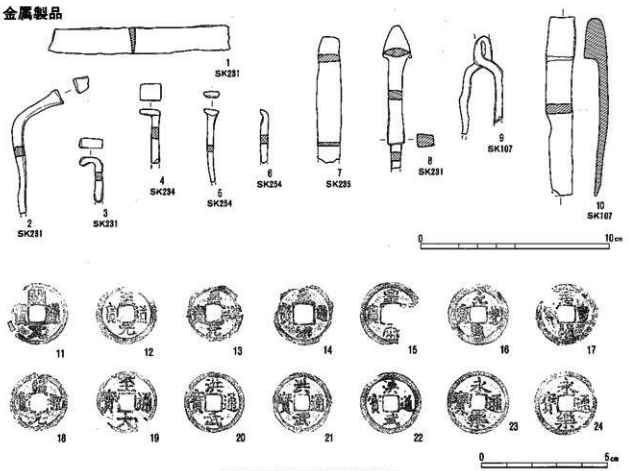

01
21
E
I
SK 194
SK 195
SA 2
SK 220
SK 216
SK 217
584.0m
584.0m
12
Y
SK 251
583.0m
M
SD 1
Q
01
SK 1
SK 258
583.0m
582.50m

図版 8　北中遺跡

土器・陶磁器

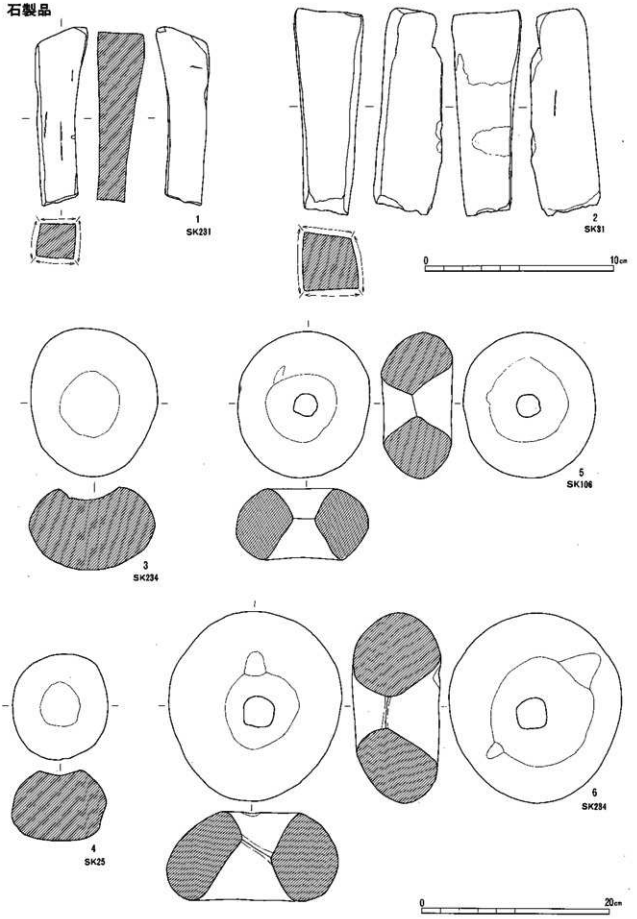



金属製品

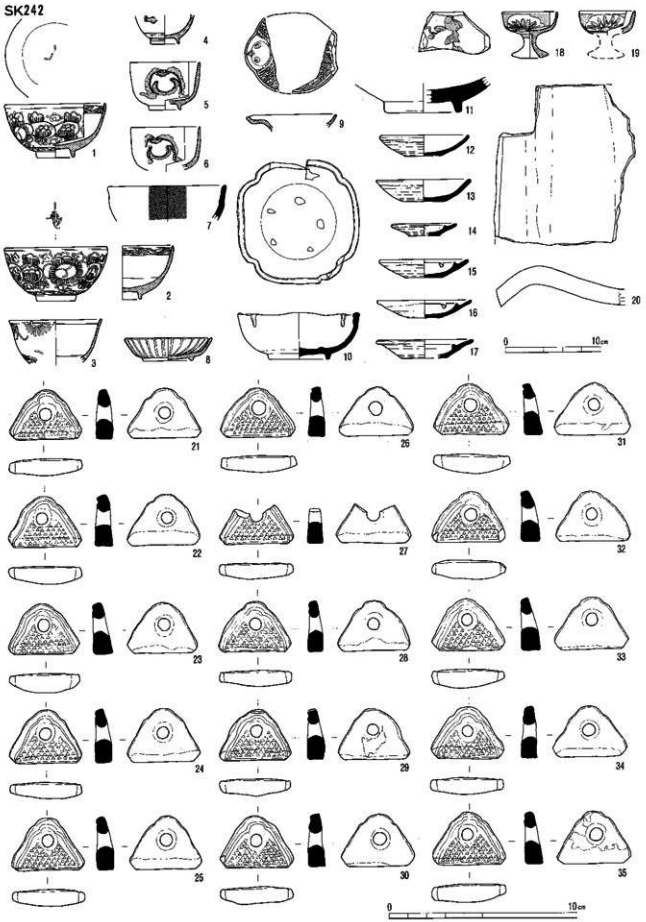



中世土器・陶磁器・金属製品実測図

石製品

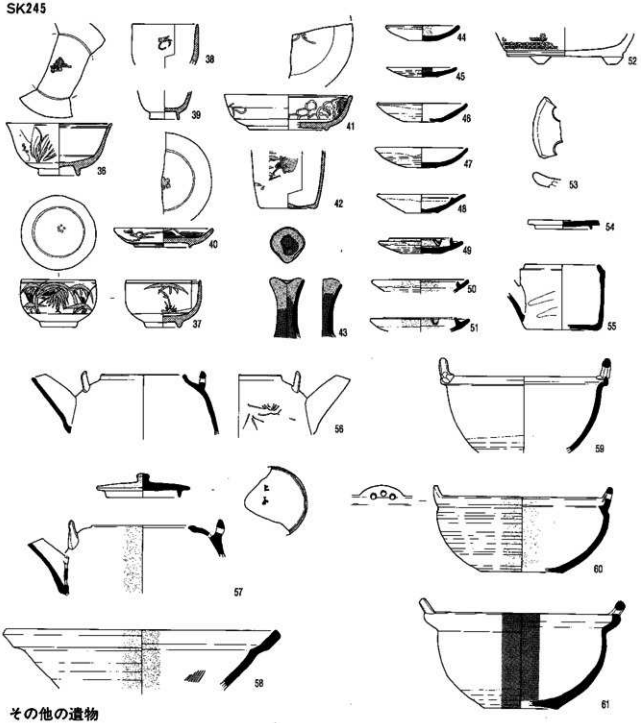



中世石製品実測図

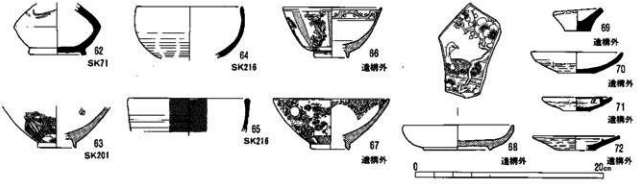



近世土器・陶磁器実測図

SK245

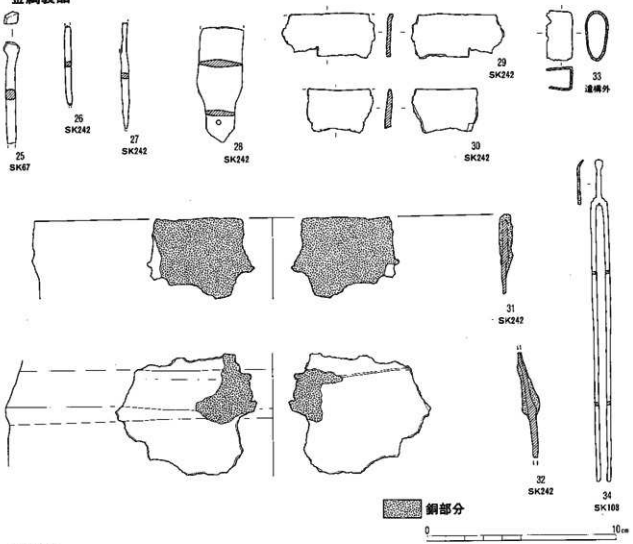



その他の遺物

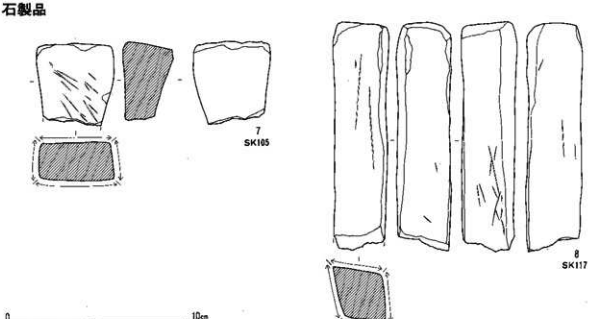



近世土器・陶磁器実測図

## 金属製品

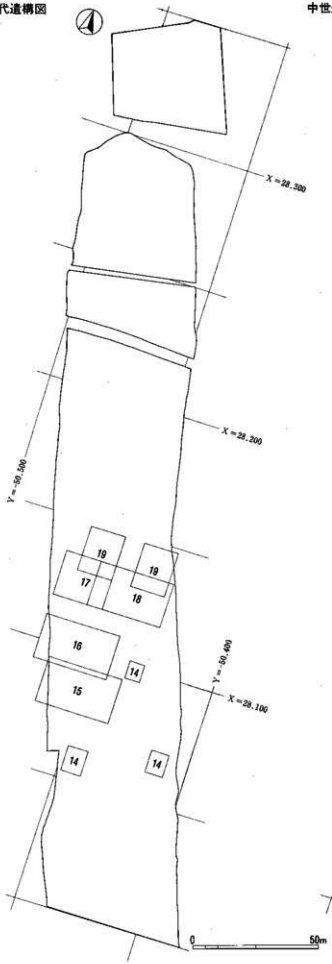



## 石製品

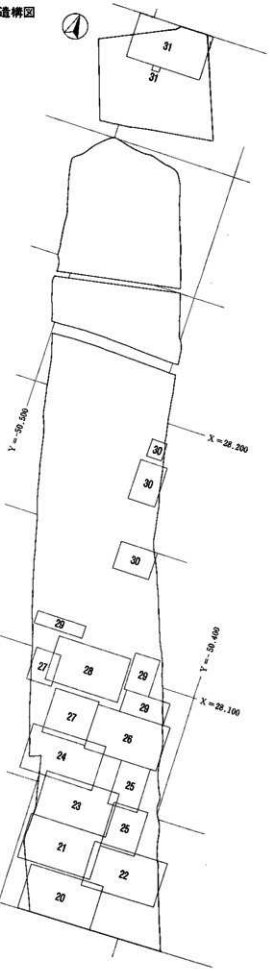



近世金属製品・石製品実測図

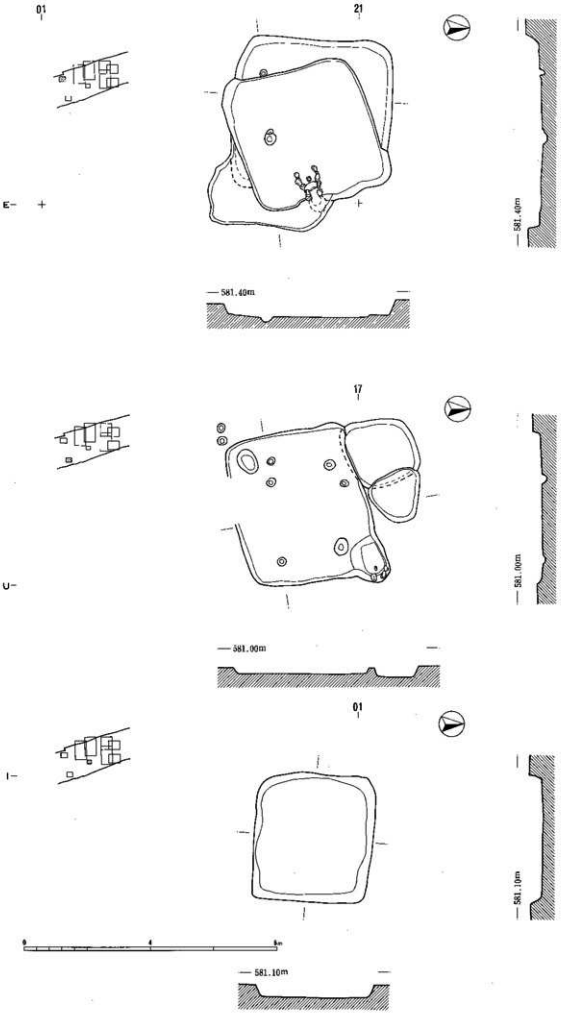
古代遺構図


X=28.300
X=28.200
Y=-50.500
Y=-50.400
X=28.100
19
19
17
18
16
14
15
14
14
0
50m

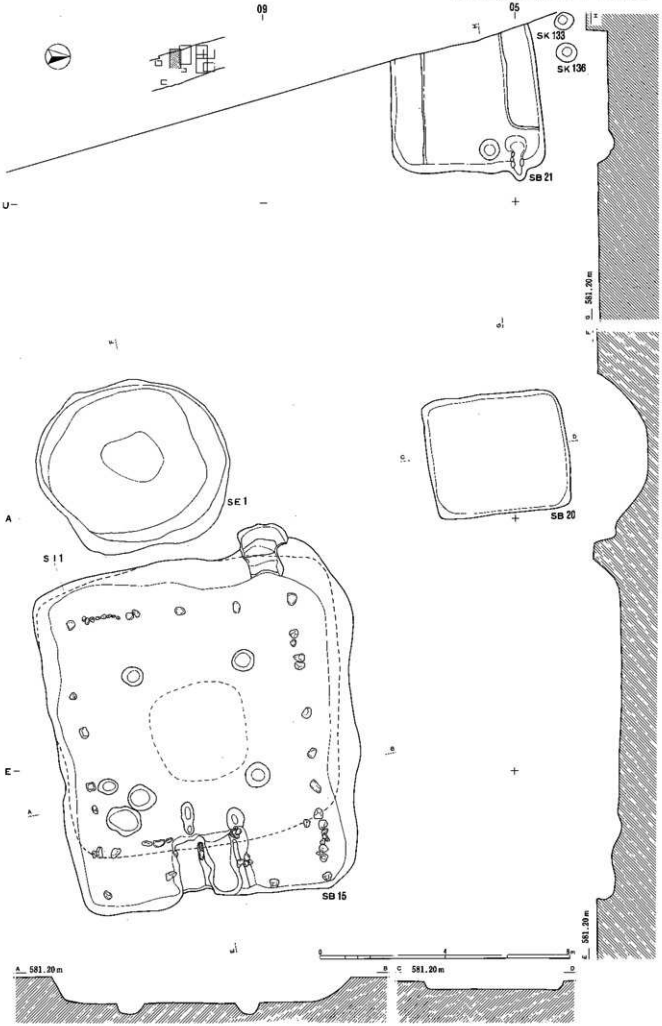
中世遺構図


31
31
Y=-50.500
X=28.300
30
30
30
29
27
28
29
29
27
26
24
25
23
25
21
22
20
Y=-50.400
X=28.100

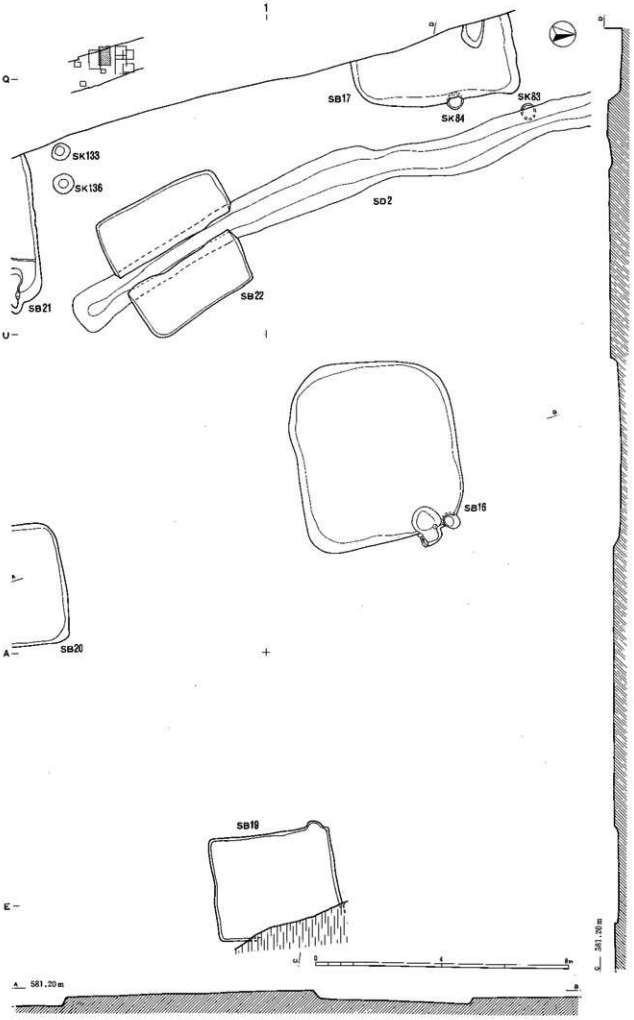
**図版14　北方遺跡古代遺構図**

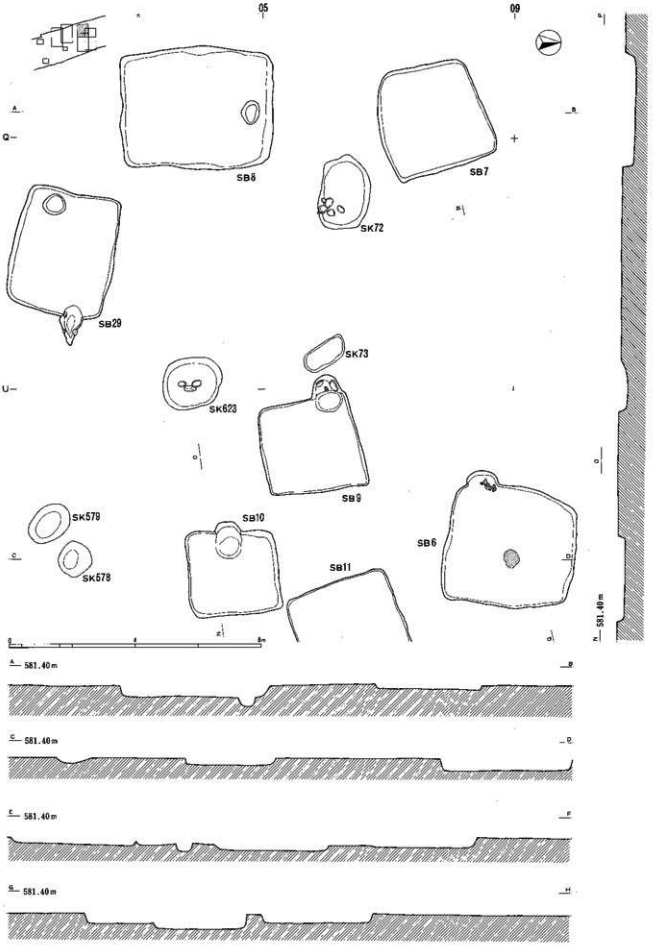


北方遺跡古代遺構図　図版15

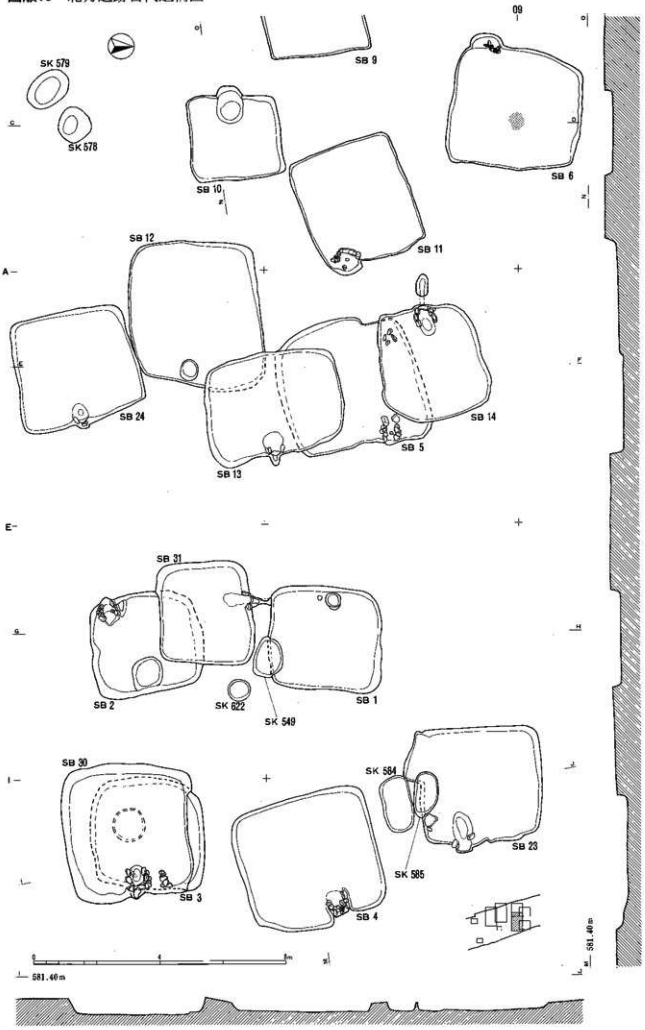


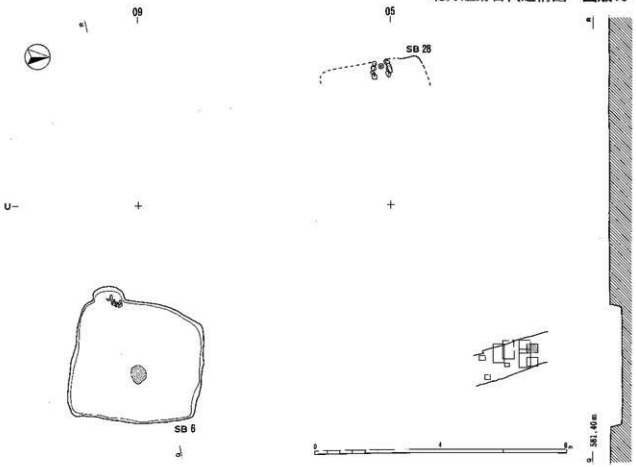
図版16　北方遺跡古代遺構図

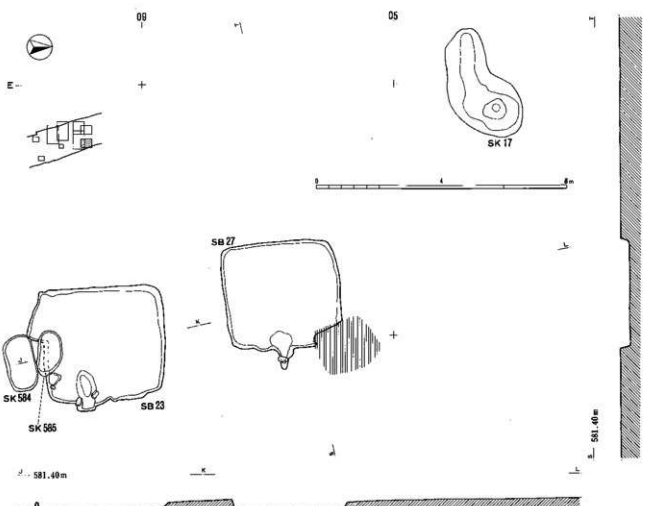



05
09
SB8
SB7
SK72
SB29
SK73
SK623
SB9
SK579
SK578
SB10
SB11
SB6
581.40m
581.40m
581.40m
581.40m

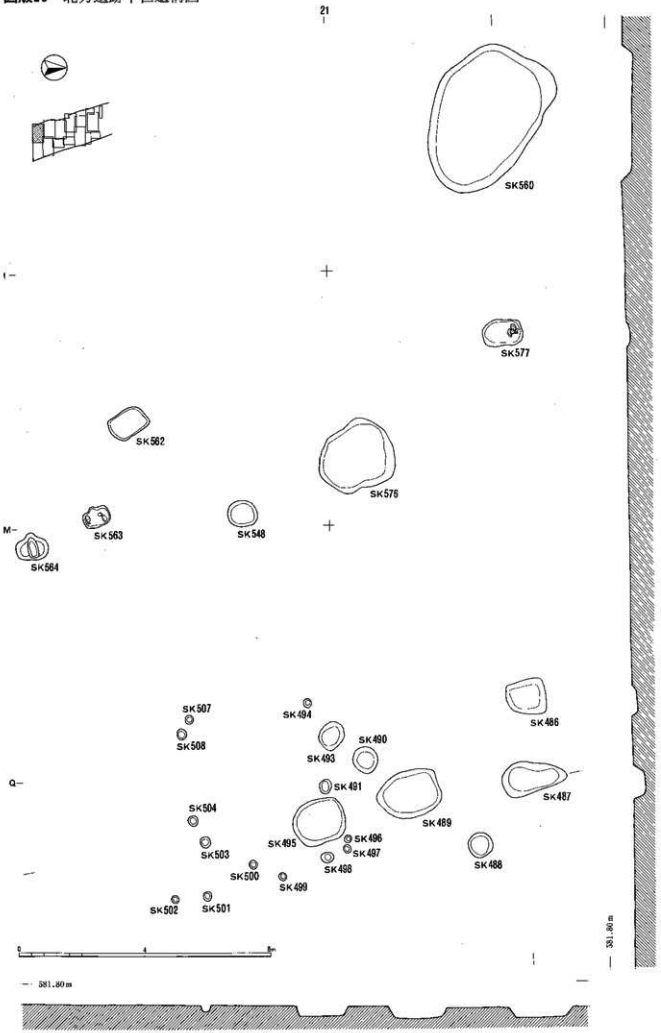
**図版18　北方遺跡古代遺構図**



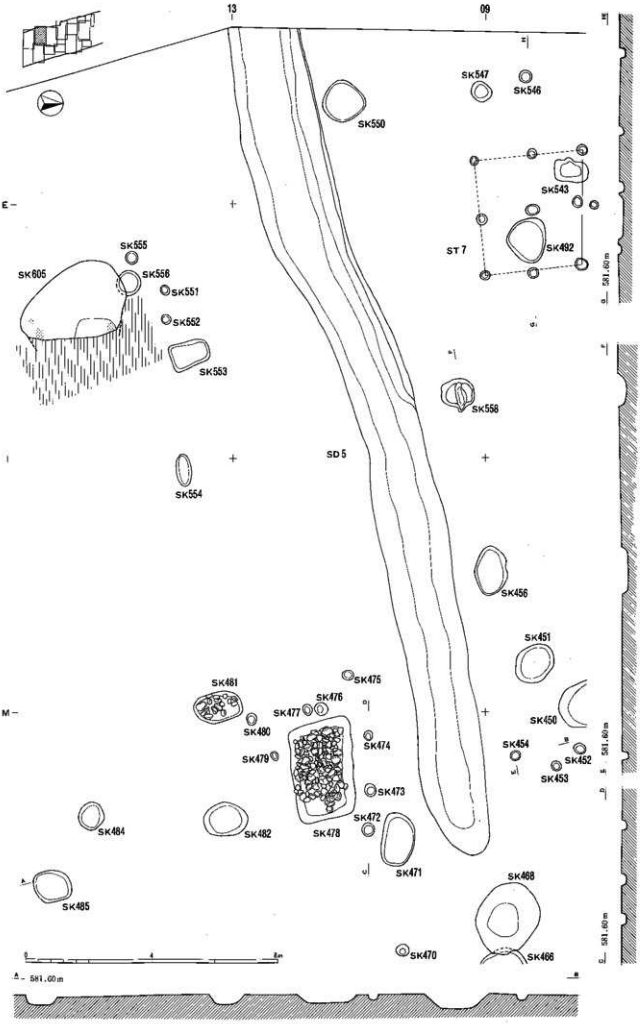

09
05
SB 26
SB 6
581.40m


09
05
SK 17
SB 27
SK 584
SK 585
SB 23
581.40m
581.40m

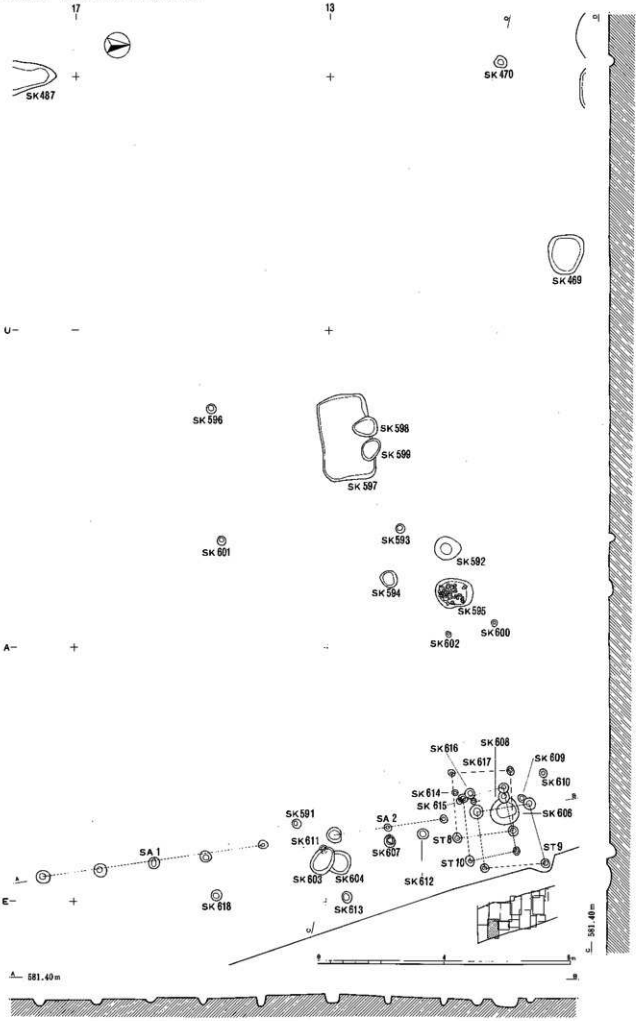
**図版20**　北方遺跡中世遺構図



北方遺跡中世遺構図　図版21

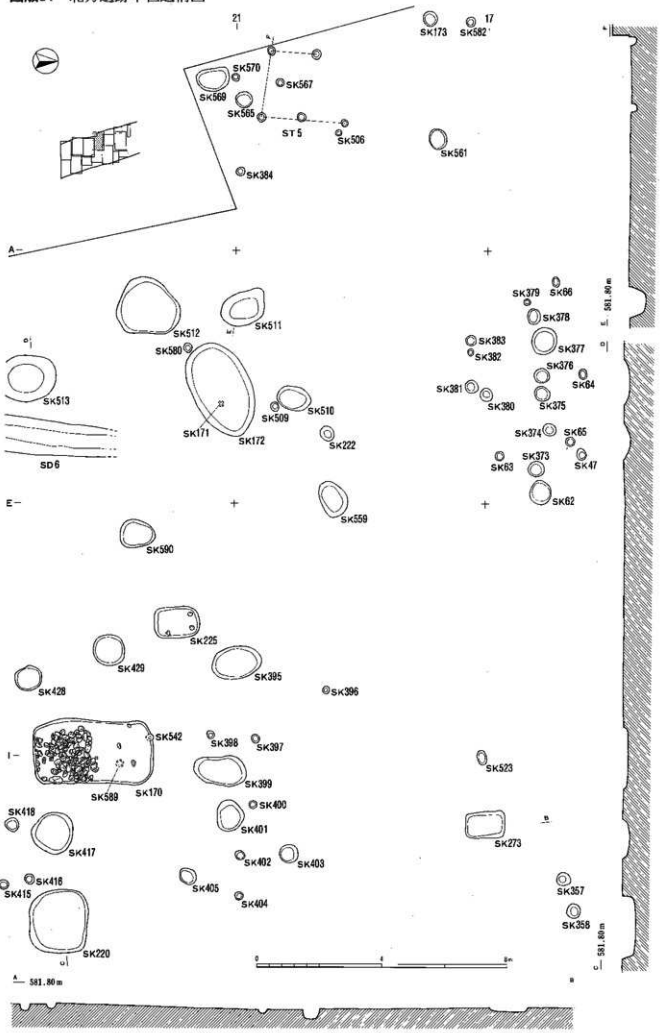


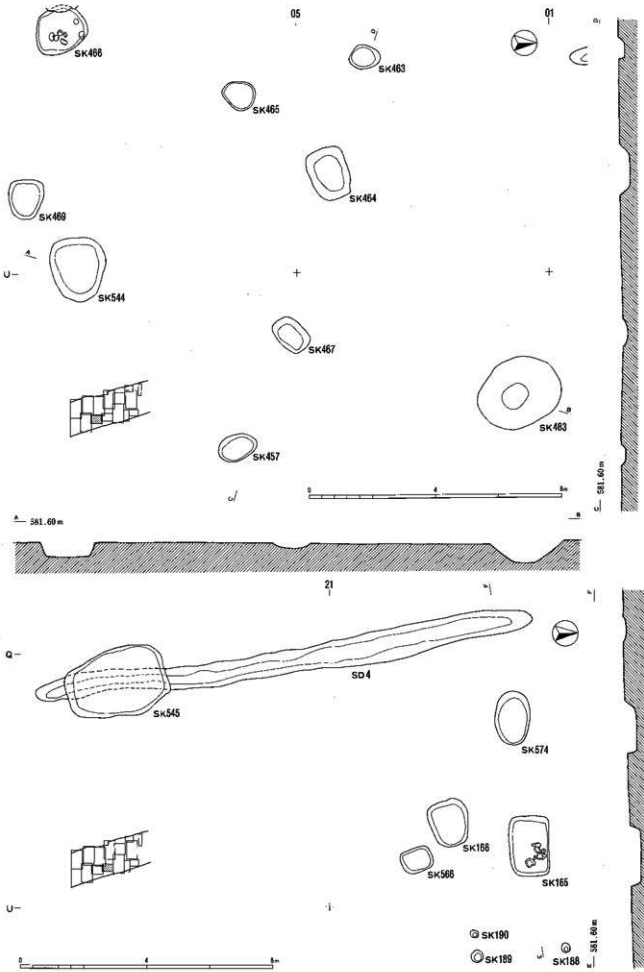
**図版22　北方遺跡中世遺構図**



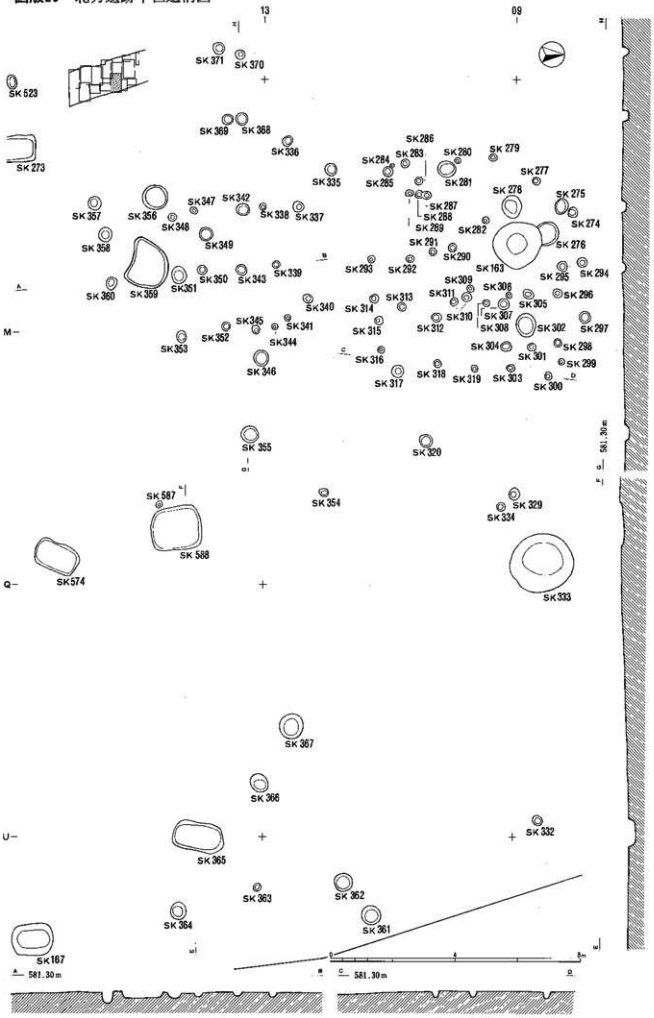
北方遺跡中世遺構図　図版23

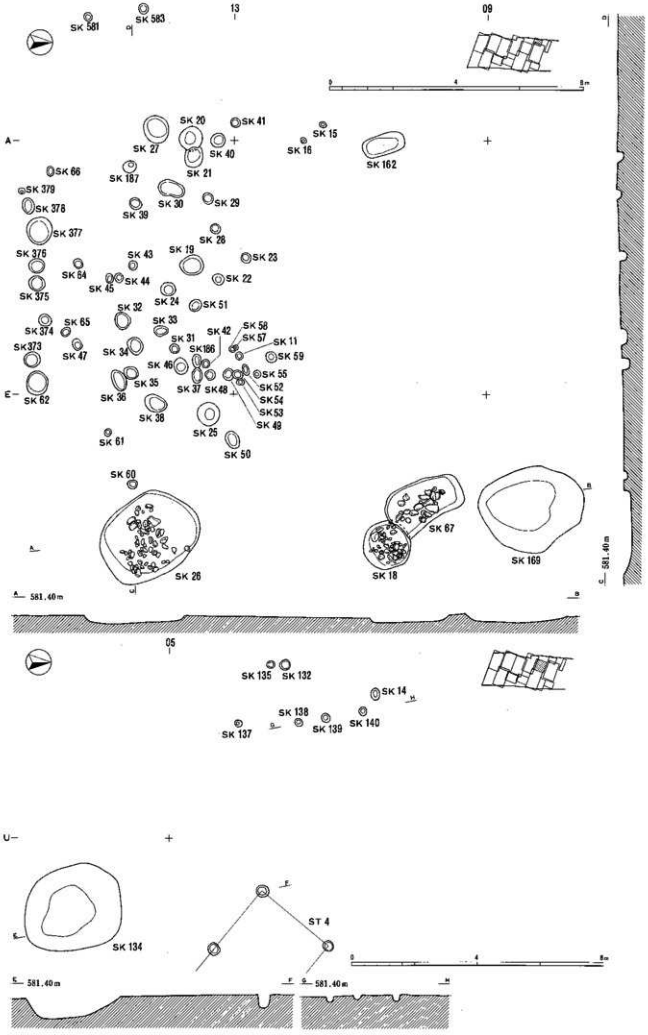
**図版24　北方遺跡中世遺構図**



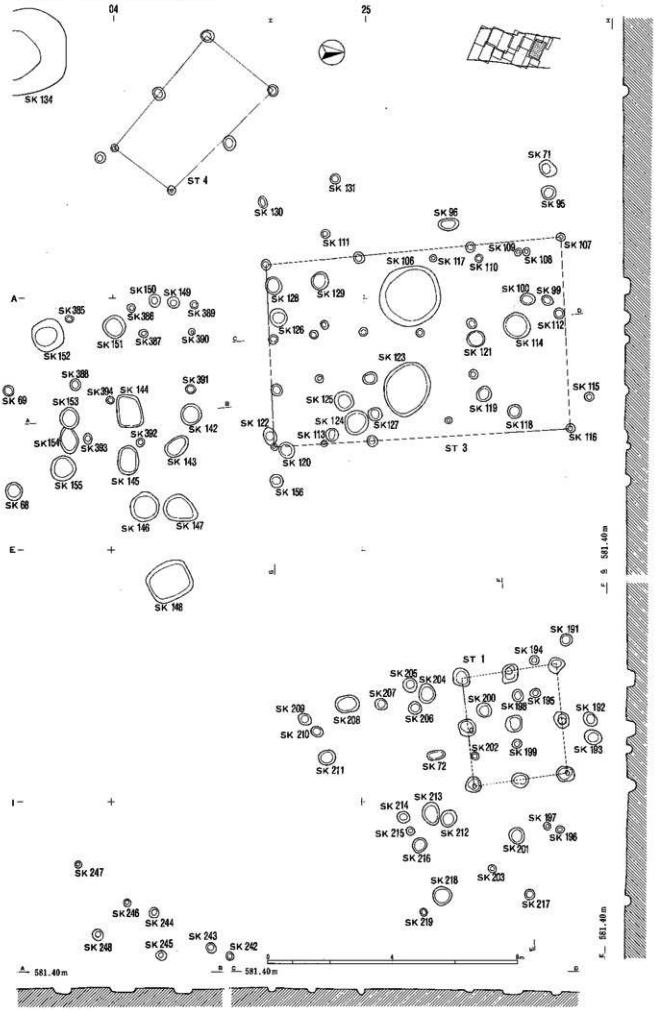

05
01
SK466
SK463
SK465
SK464
SK469
SK544
SK467
SK483
SK457
581.60m
21
SD4
SK545
SK574
SK166
SK566
SK165
SK190
SK189
SK188

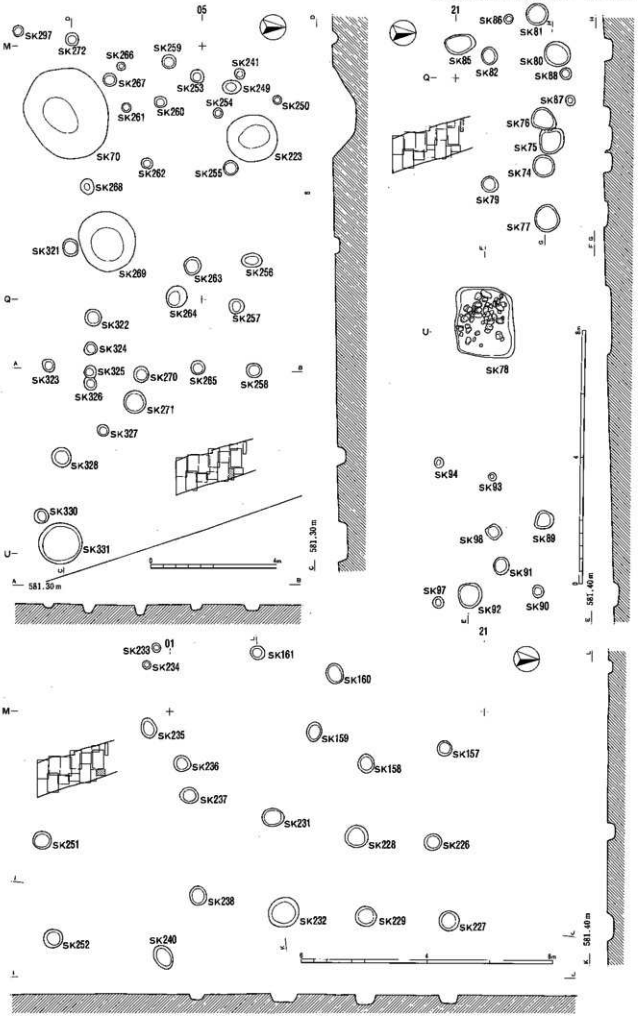
**図版26　北方遺跡中世遺構図**



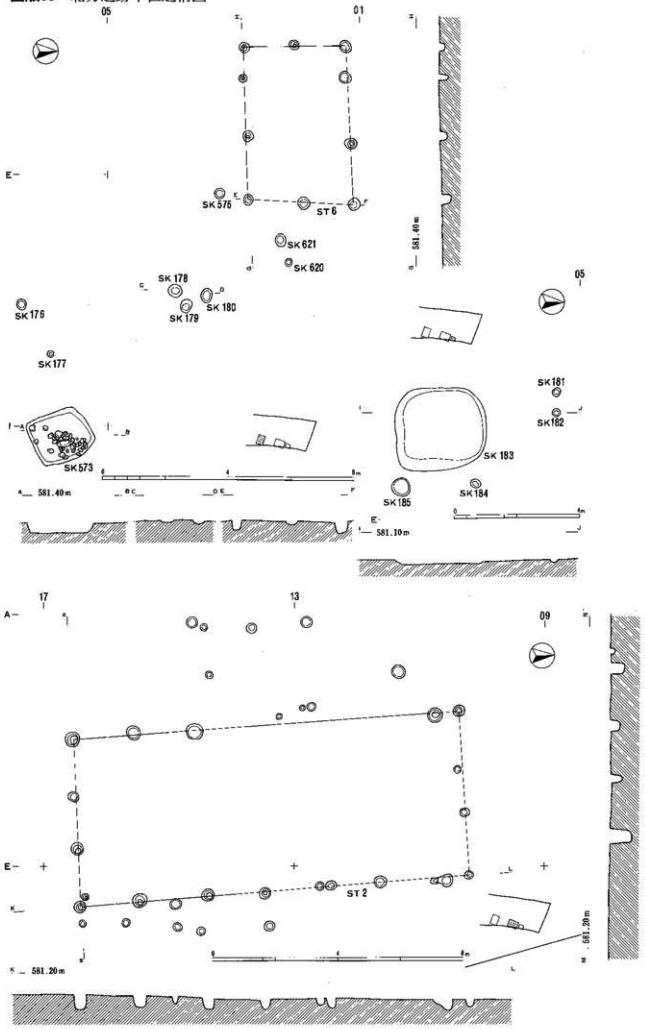

SK 581
SK 583
13
09
SK 20
SK 41
SK 15
SK 16
SK 162
SK 27
SK 40
SK 21
SK 66
SK 187
SK 379
SK 378
SK 30
SK 29
SK 39
SK 377
SK 26
SK 375
SK 43
SK 19
SK 23
SK 54
SK 44
SK 22
SK 45
SK 375
SK 24
SK 51
SK 32
SK 374
SK 65
SK 33
SK 42
SK 58
SK 57
SK 11
SK 373
SK 47
SK 31
SK 166
SK 34
SK 59
SK 46
SK 55
SK 35
SK 37
SK 48
SK 52
SK 62
SK 36
SK 54
SK 53
SK 38
SK 49
SK 25
SK 61
SK 50
SK 60
SK 67
SK 18
SK 169
SK 26
581.40m
05
SK 135
SK 132
SK 14
SK 138
SK 137
SK 139
SK 140
SK 134
ST 4
581.40m

**図版28　北方遺跡中世遺構図**

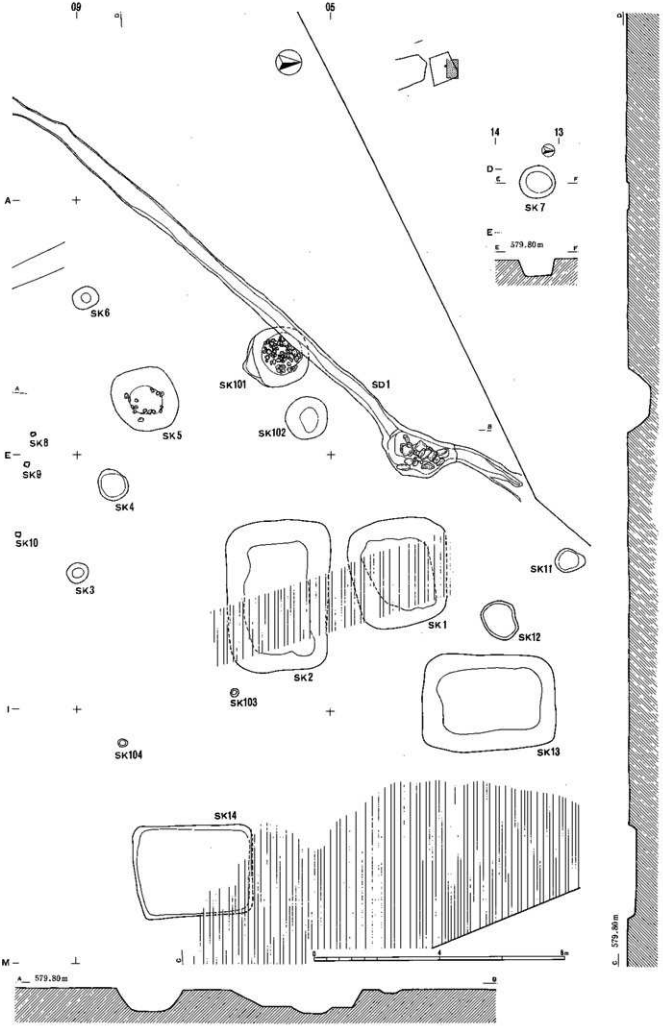


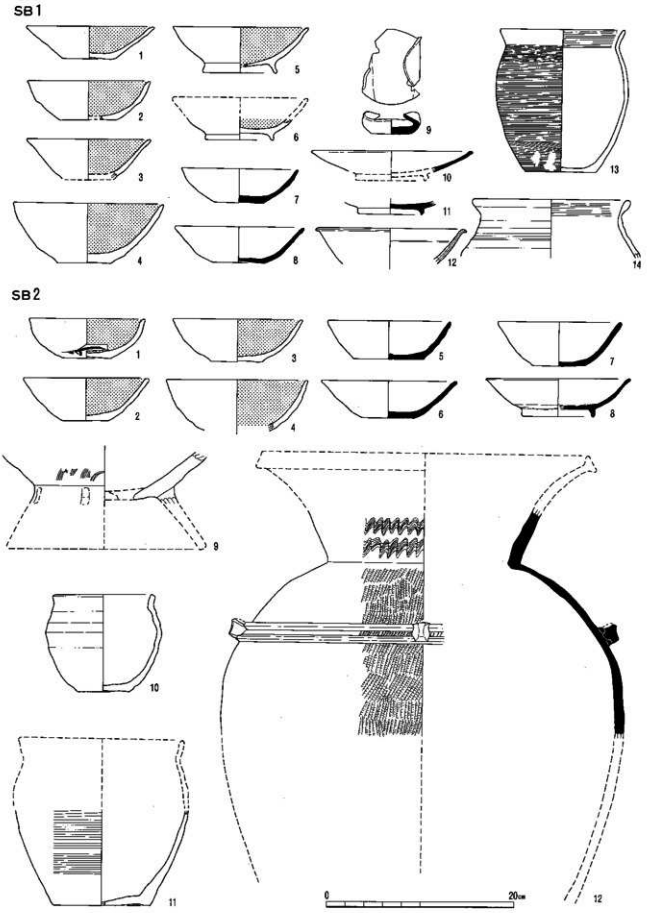

05
21
01
SK297
SK272
SK266
SK259
SK241
SK267
SK253
SK249
SK254
SK250
SK261
SK260
SK70
SK223
SK262
SK255
SK268
SK321
SK269
SK263
SK256
SK264
SK257
SK322
SK324
SK323
SK325
SK270
SK265
SK258
SK326
SK271
SK327
SK328
SK330
SK331
581.30m
SK86
SK81
SK85
SK82
SK80
SK88
SK87
SK76
SK75
SK74
SK79
SK77
SK78
SK94
SK93
SK98
SK89
SK91
SK97
SK92
SK90
581.40m
SK233
SK234
SK161
SK160
SK235
SK159
SK157
SK236
SK158
SK237
SK231
SK251
SK228
SK226
SK238
SK232
SK229
SK227
SK252
SK240
M−
Q−
U−

**図版30　北方遺跡中世遺構図**



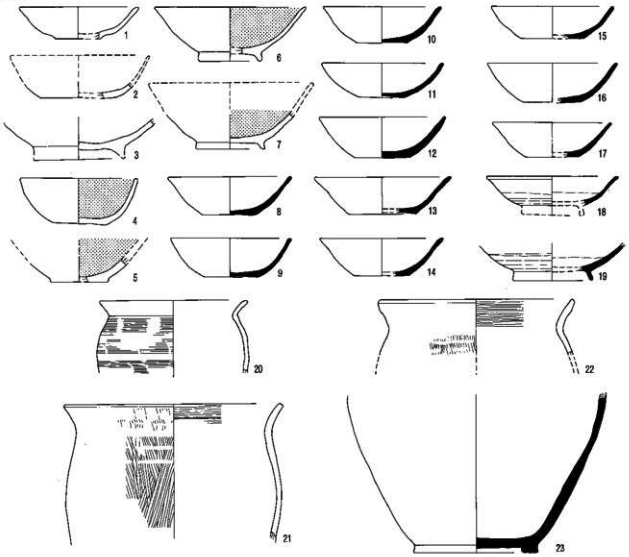
北方遺跡中世遺構図　**図版31**



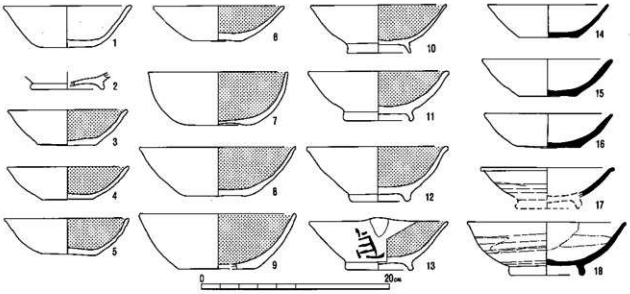



古代土器実測図（S B1･2）

SB3

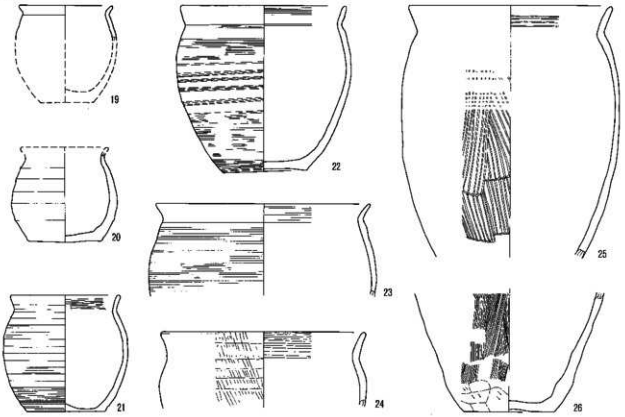


SB4

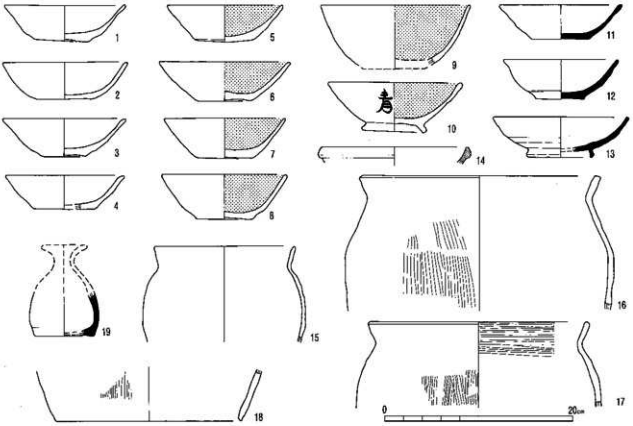



古代土器実測図（SB3・4）

SB4

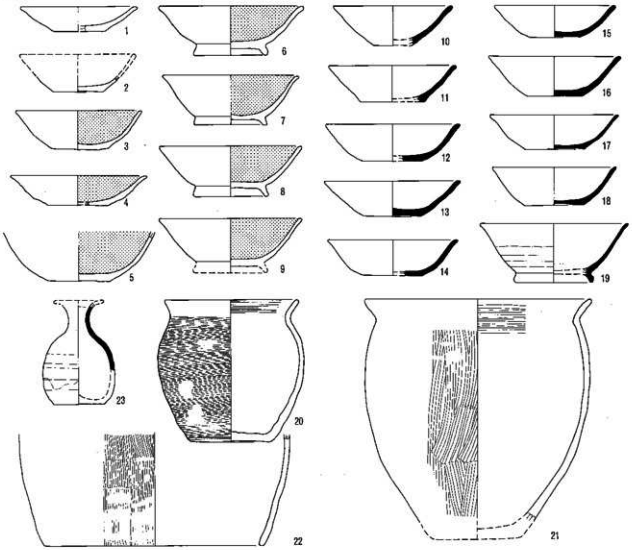



SB5

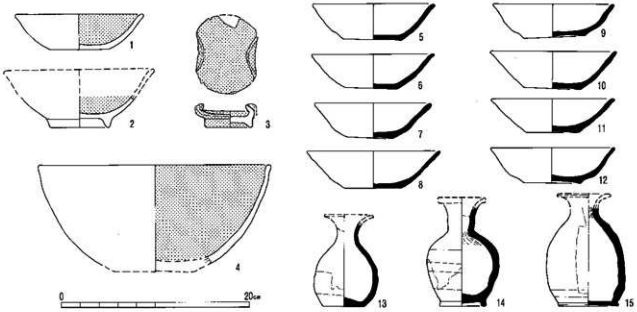



古代土器実測図（SB4-5）

SB6

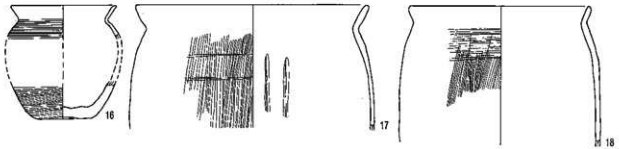



SB7

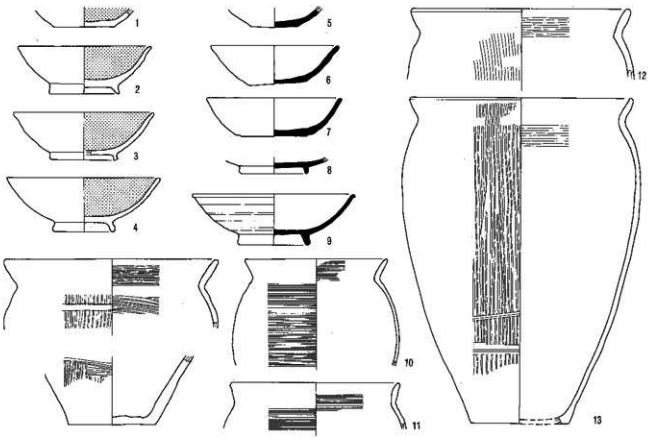



古代土器実測図（S B6･7）

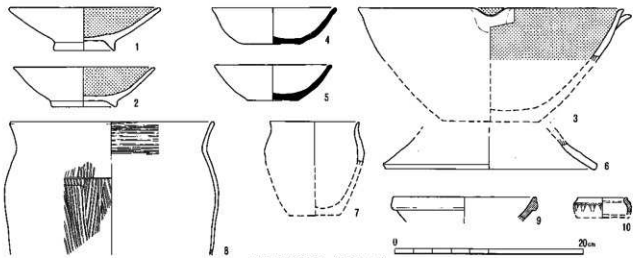
SB7




SB8

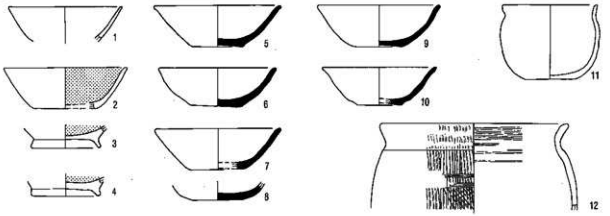



SB9

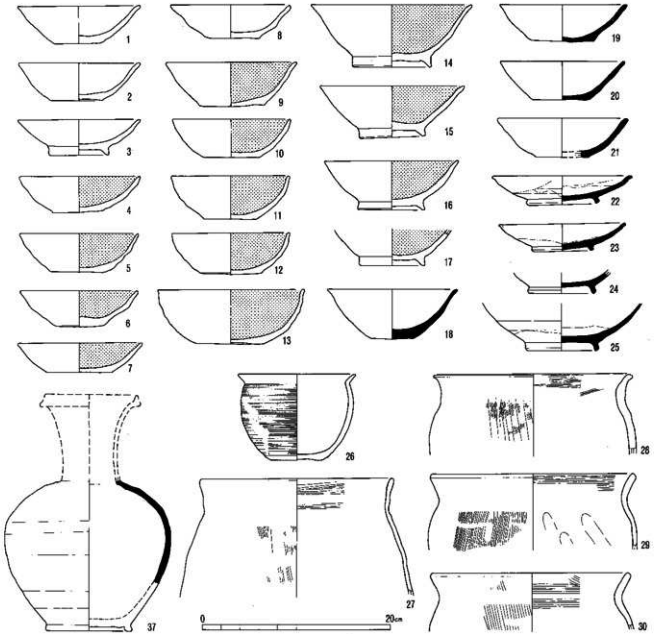



古代土器実測図（ＳＢ7～9）

SB10

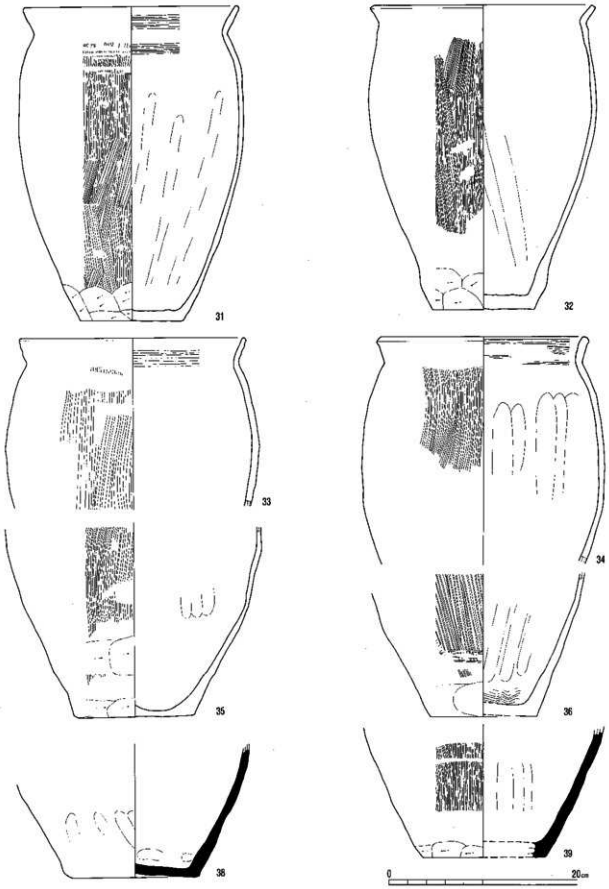



SB11



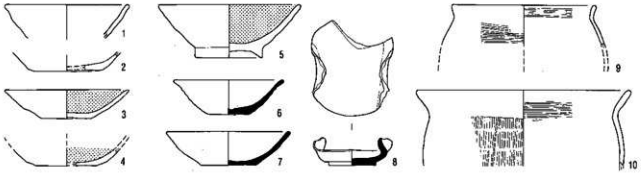

古代土器実測図（SB10・11）

SB11

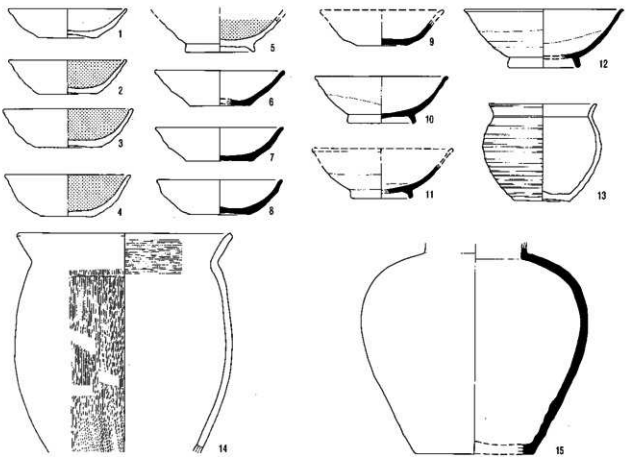



古代土器実測図（SB11）

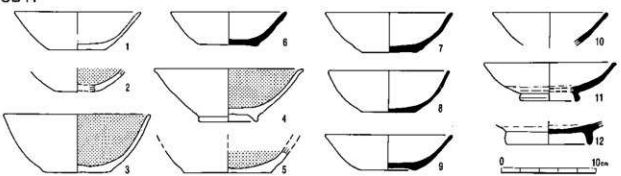
SB12




SB13

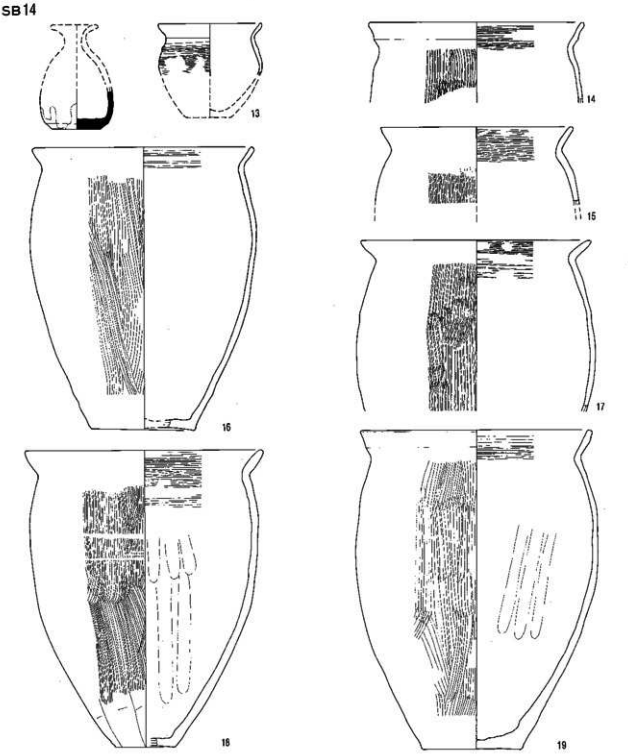



SB14

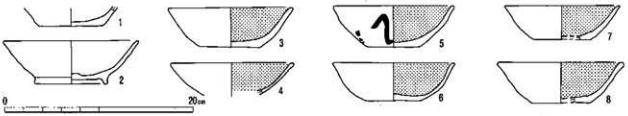



古代土器実測図（ＳＢ12～14）

SB14

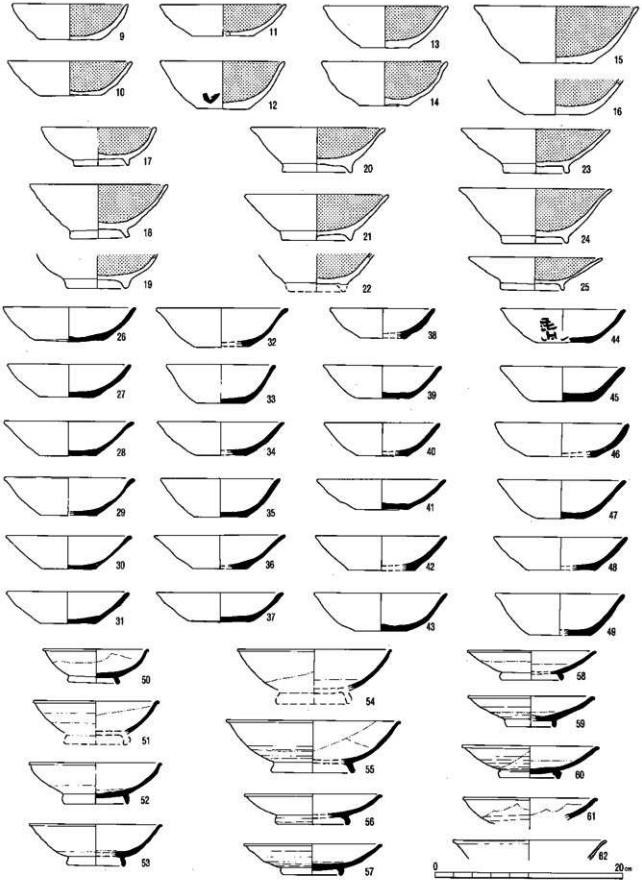



SB15

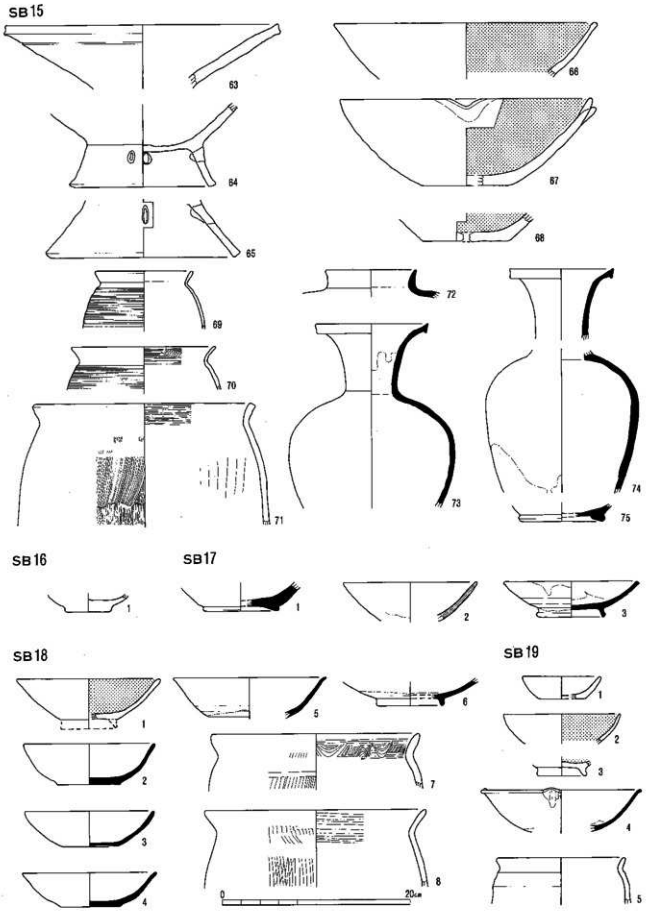



古代土器実測図（S B14・15）

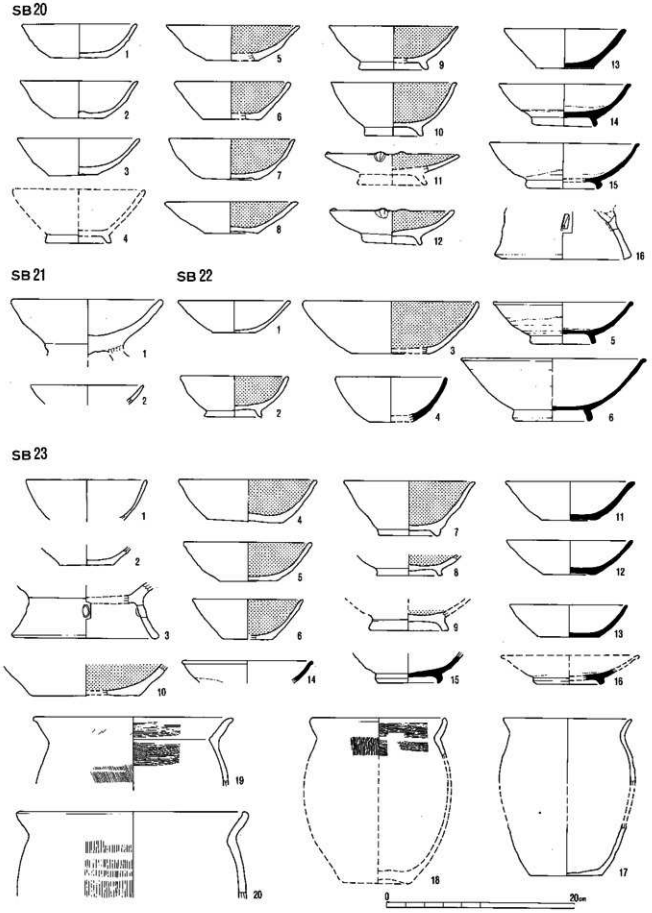
SB15




古代土器実測図（ＳＢ15）

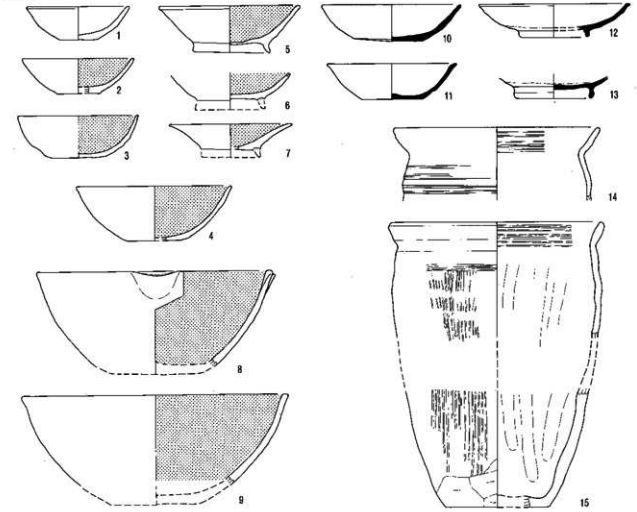



古代土器実測図（ＳＢ15～19）

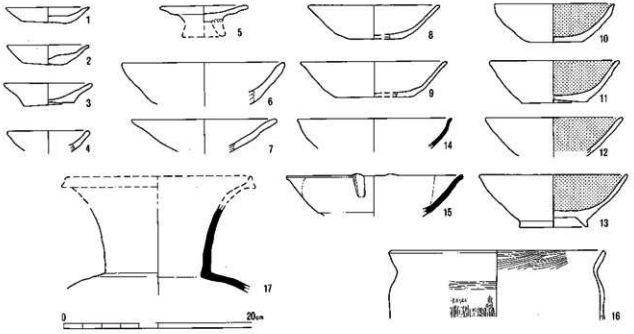



古代土器実測図（ＳＢ20～23）

SB 24

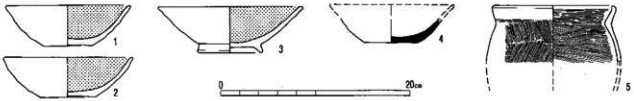



SB 26

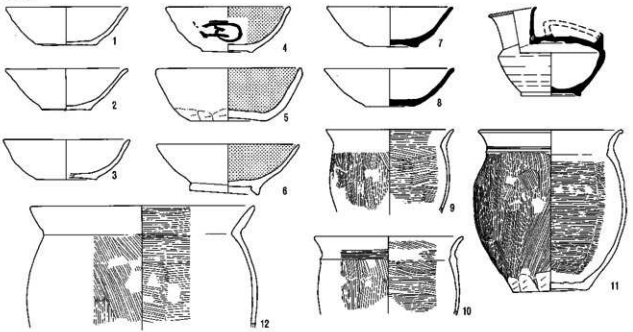



古代土器実測図（S B24～26）

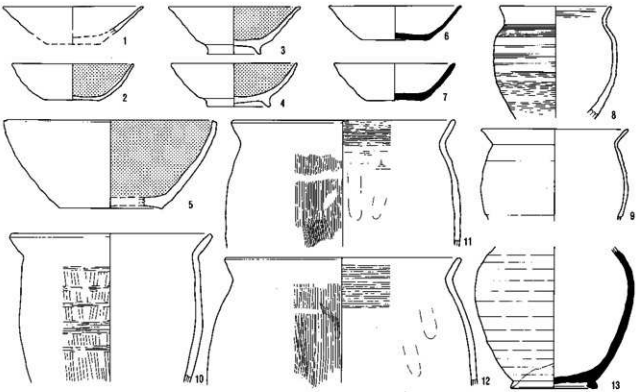
SB27




SB28

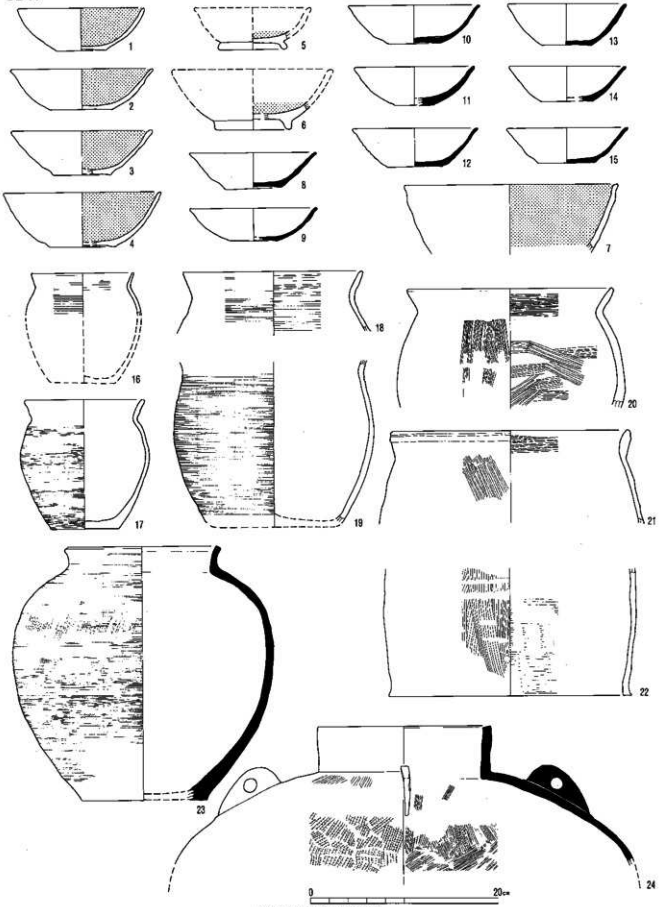



SB29

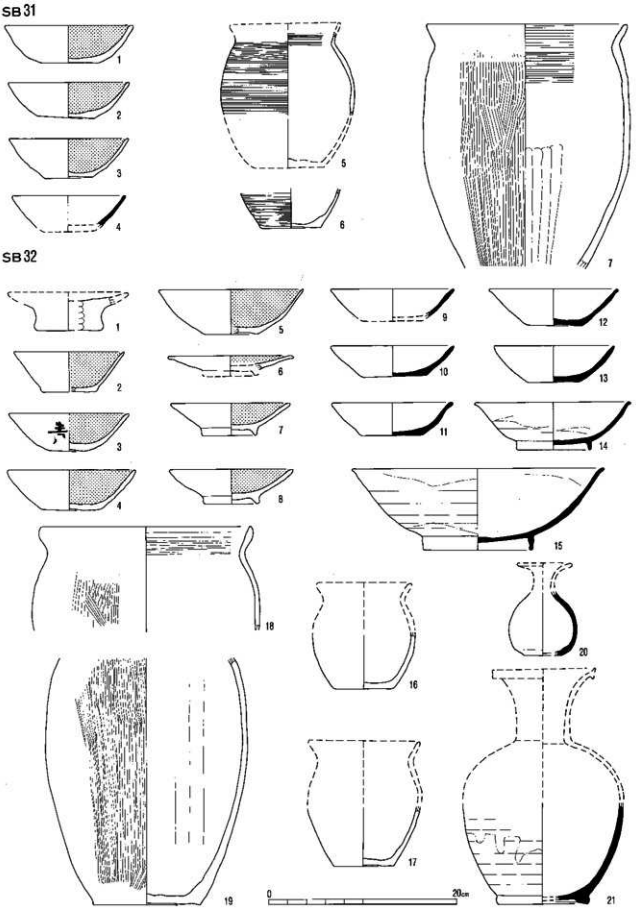



古代土器実測図（ＳＢ27～29）

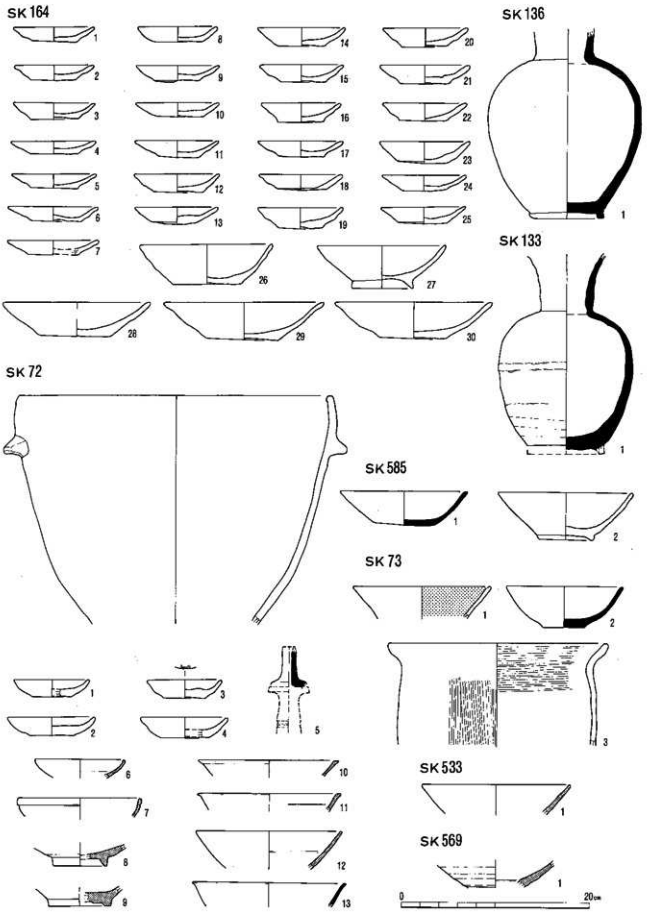
SB30



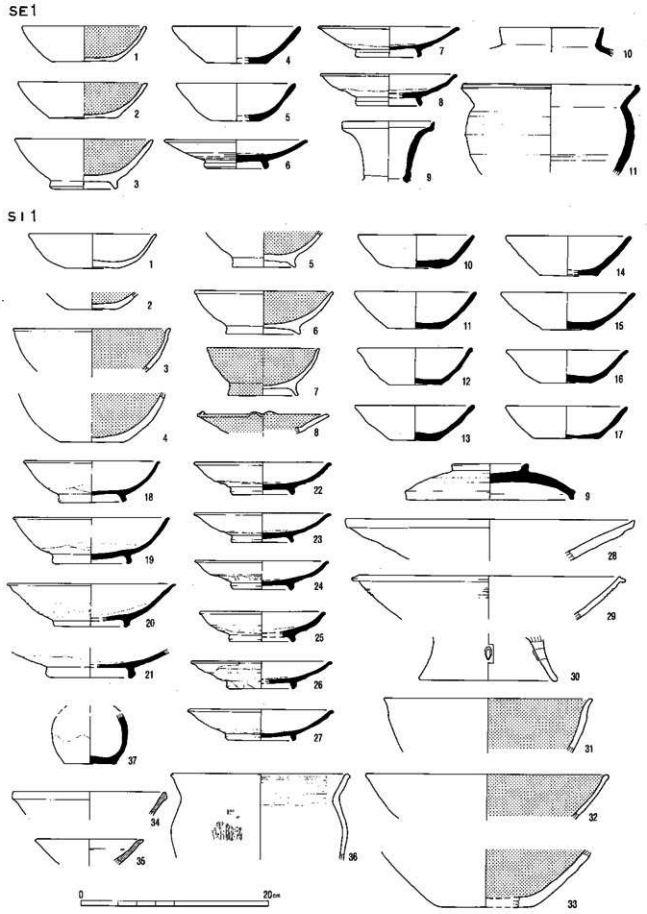

古代土器実測図（ＳＢ30）



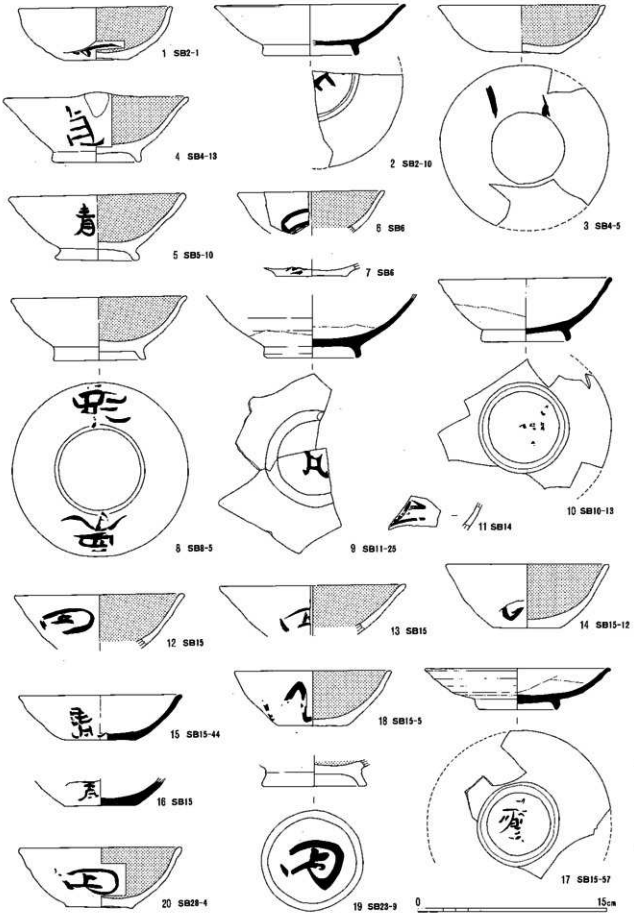

古代土器実測図（SB31・32）



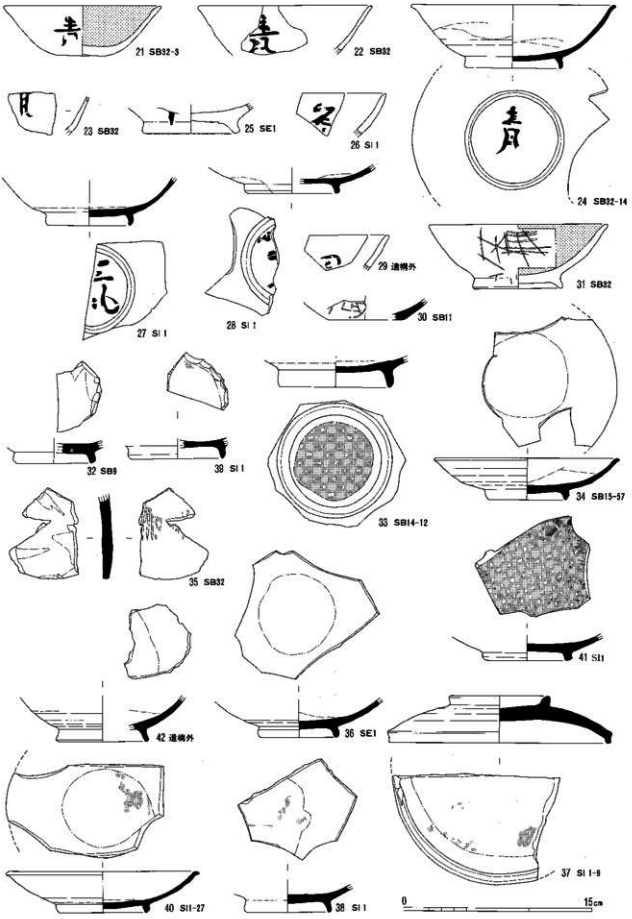

古代土器実測図（ＳＫ72･73･133･136･164･533･569･585･包含層）




古代土器実測図（ＳＥ1･ＳＩ1）

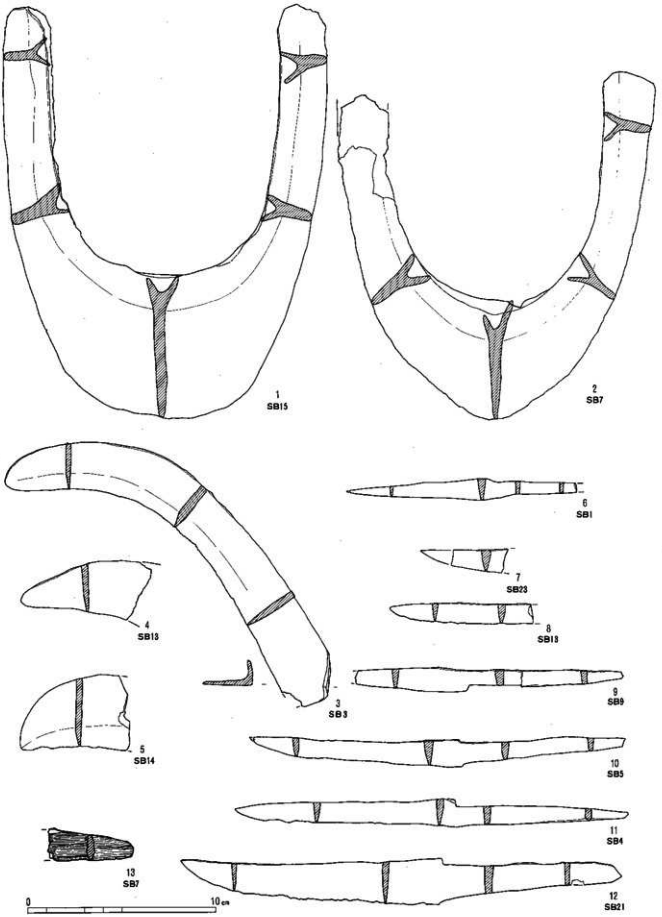

1 SB2-1
2 SB2-10
3 SB4-5
4 SB4-13
5 SB5-10
6 SB6
7 SB6
8 SB8-5
9 SB11-25
10 SB10-13
11 SB14
12 SB15
13 SB15
14 SB15-12
15 SB15-44
16 SB15
17 SB15-57
18 SB15-5
19 SB23-9
20 SB28-4
0
15cm

古代文字関係資料


21 SB32-3
22 SB32
23 SB32
25 SE1
26 SI1
24 SB32-14
27 SI1
28 SI1
29 遺構外
30 SB11
31 SB32
32 SB9
39 SI1
33 SB14-12
34 SB15-57
35 SB32
41 SI1
42 遺構外
36 SE1
40 SI1-27
38 SI1
37 SI1-9
0
15cm

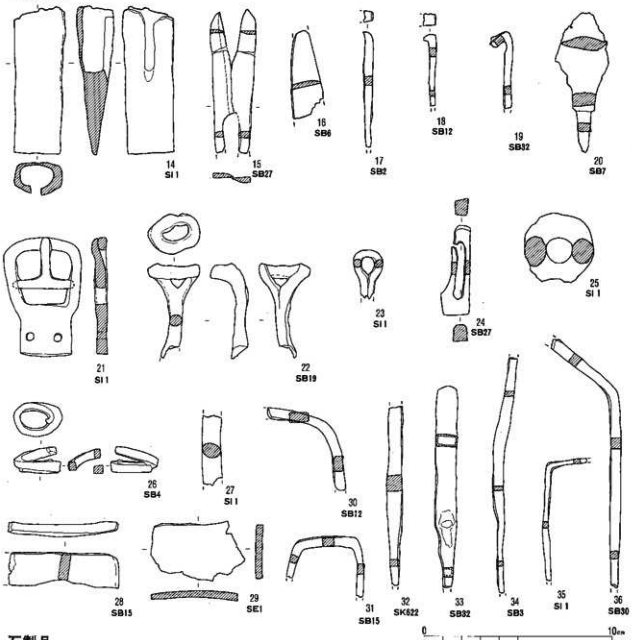
古代文字関係資料

**図版52　北方遺跡**

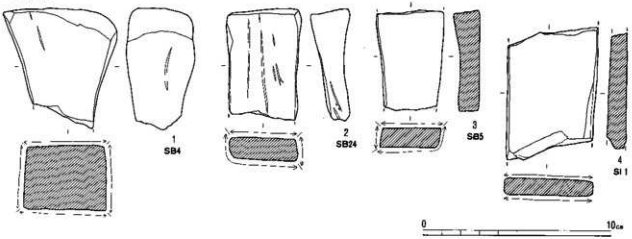



古代金属製品実測図

金属製品

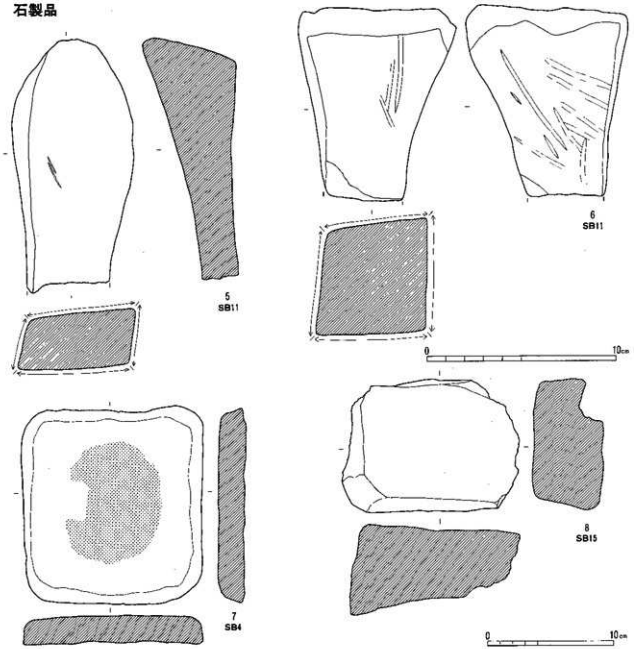



石製品

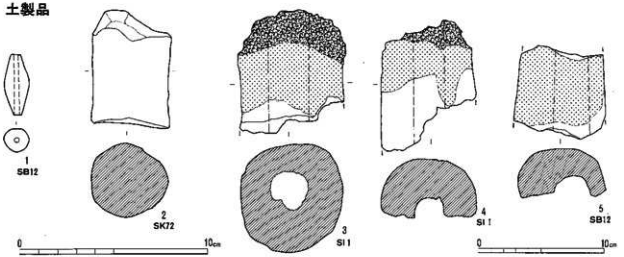



古代金属製品・石製品実測図

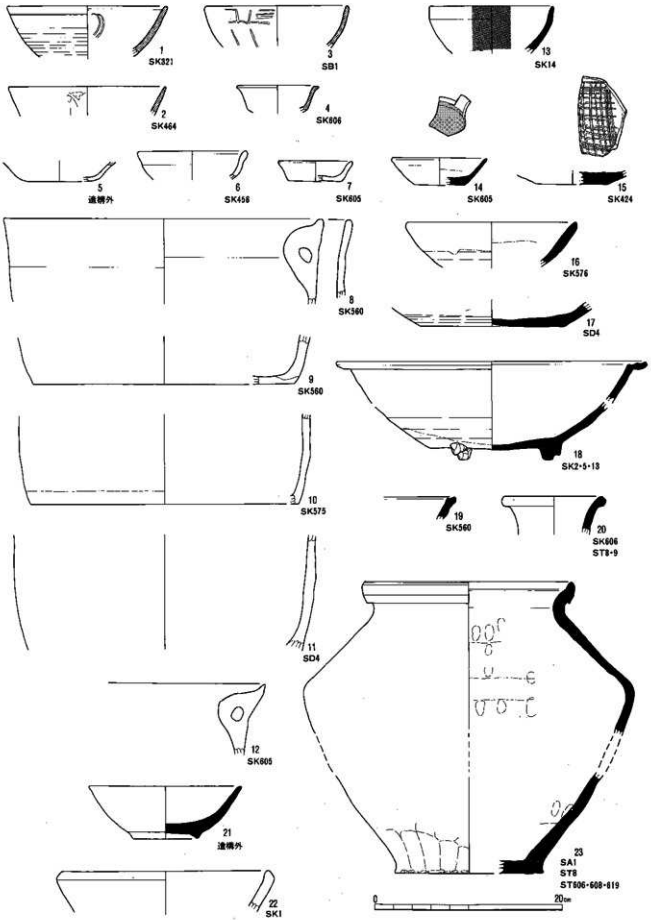
## 石製品




## 土製品

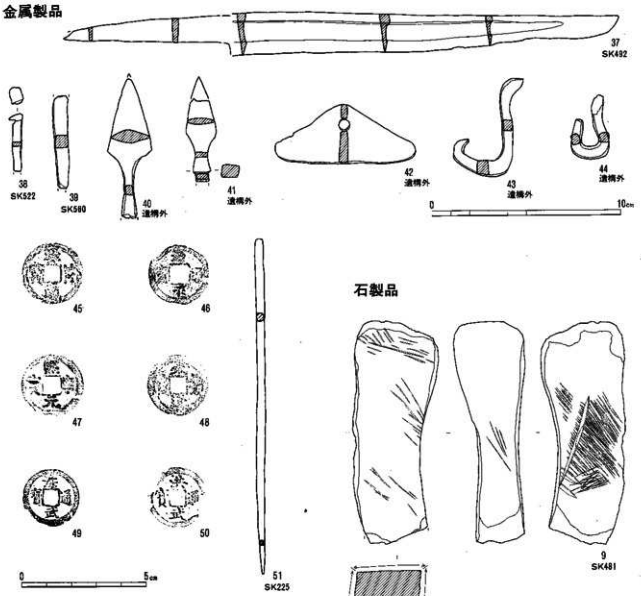



古代石製品・土製品実測図

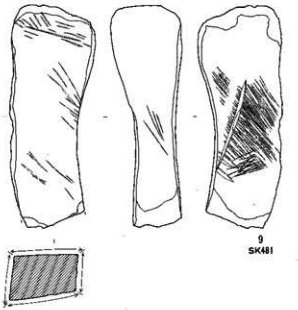

1
SK321
3
SB1
13
SK14
2
SK464
4
SK606
5
遺構外
6
SK458
7
SK605
14
SK605
15
SK424
16
SK376
8
SK560
17
SD4
9
SK560
18
SK2・5・13
10
SK575
19
SK560
20
SK606
ST3・9
11
SD4
12
SK605
21
遺構外
22
SK1
23
SA1
ST8
ST506・608・619
0
20cm

中世土器・陶磁器実測図

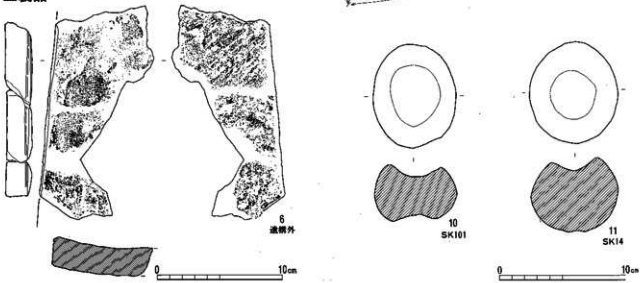
金属製品



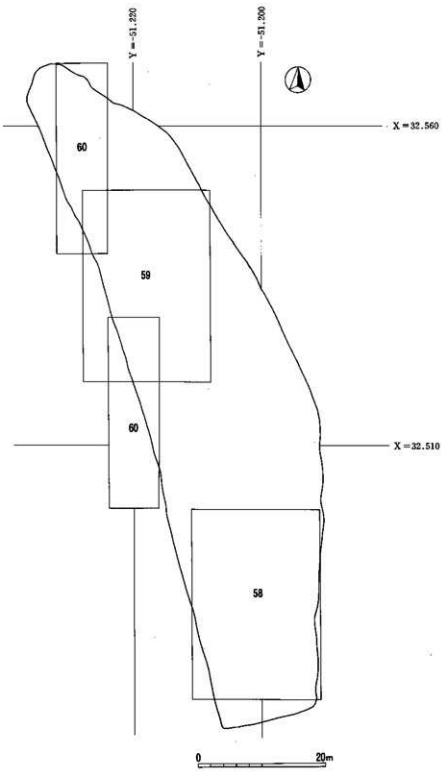

石製品



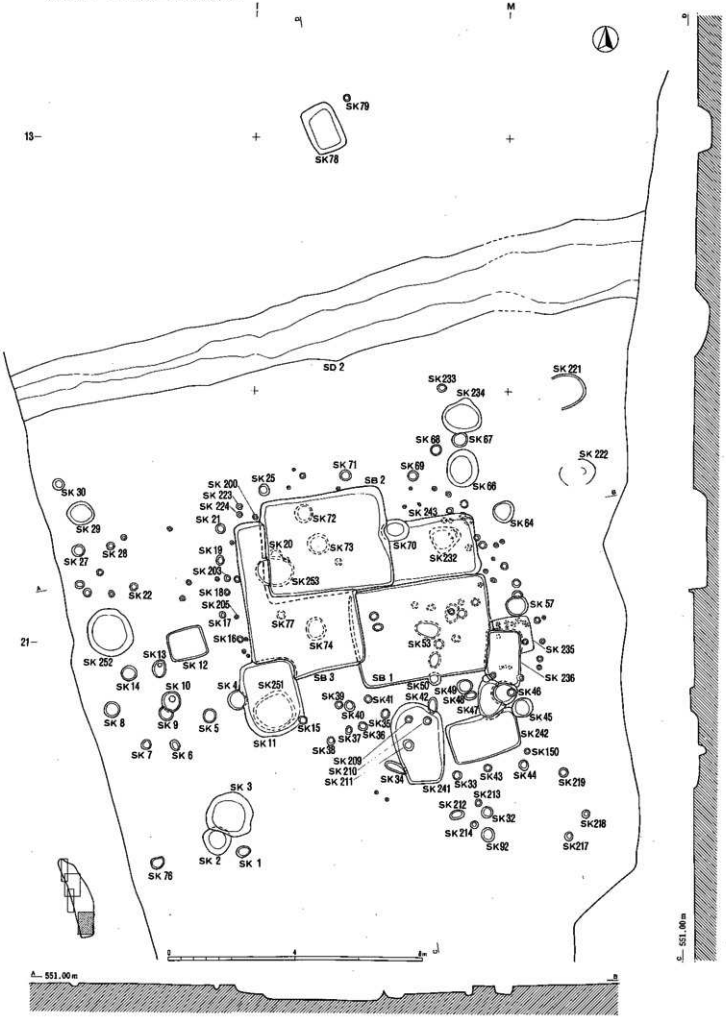

土製品



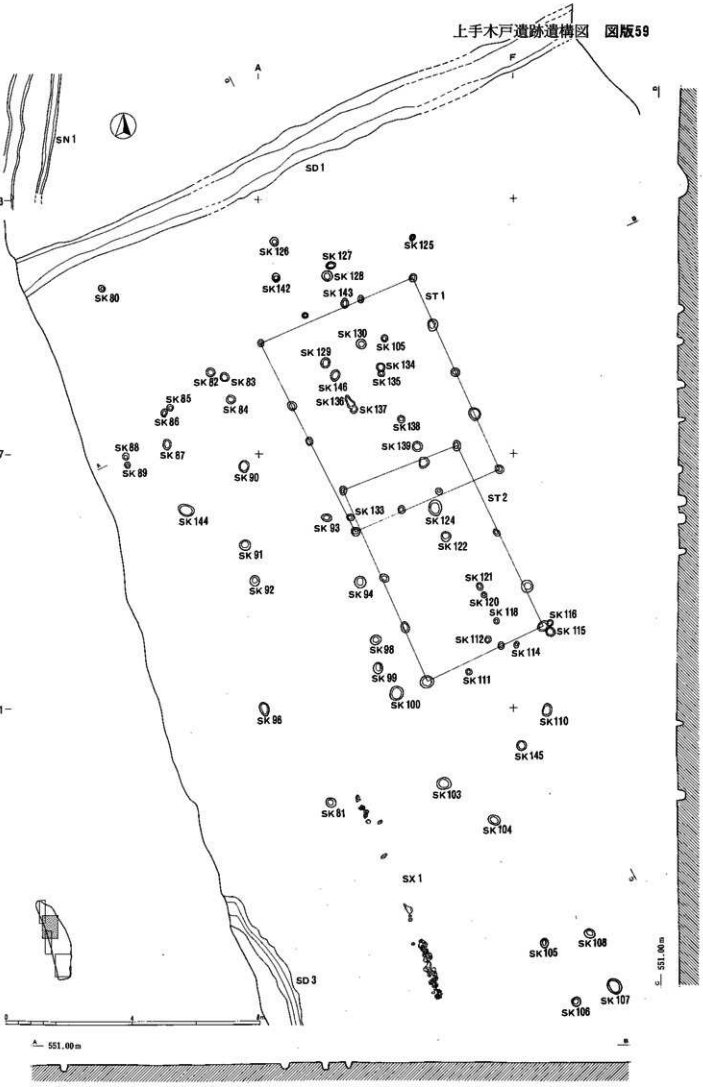

中世及び遺構外金属製品・石製品・土製品実測図


Y=-51,220
Y=-51,200
X=32,560
X=32,510
60
59
60
58
0
20m

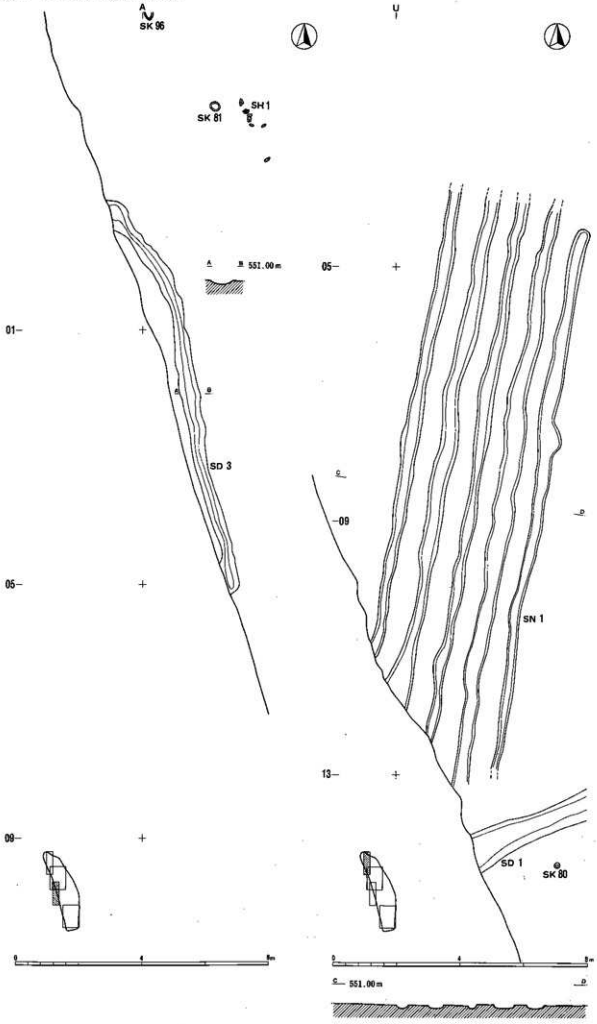
**図版58　上手木戸遺跡遺構図**



上手木戸遺跡遺構図　図版59



図版60　上手木戸遺跡遺構図



# 写　真　図　版

（P　　L）

1：南中遺跡
2：北中遺跡
3：北方遺跡
4：高松遺跡
5：上平瀬遺跡
6：平瀬遺跡
7：上手木戸遺跡

PL 2　南中遺跡

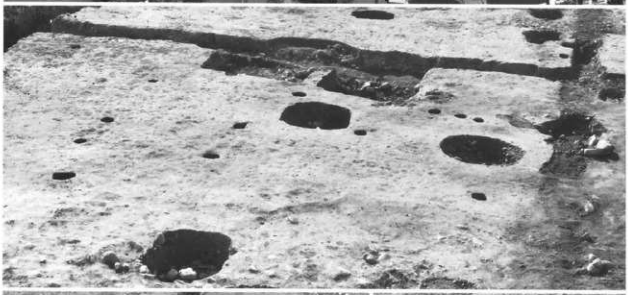
国道147号線
以北近景

ＪＲ大糸線
以南近景

左：14トレンチ
断面
右：３トレンチ

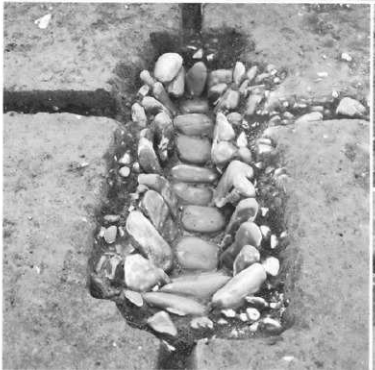
遺跡近景

中世小ピット群



SK255

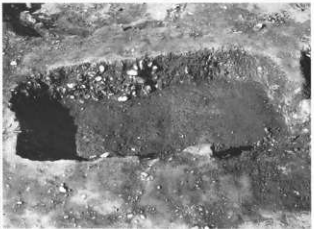
左：南西から
右上：検出面
右下：北西から



左：SK257
右：SK254

左：SK258
右：SK251

南部南半中世大形
土坑群



左：SK231
右：SK241

左：SK232
右：SK107

左：SK110
右：SK59

左：SK18
右：SK54

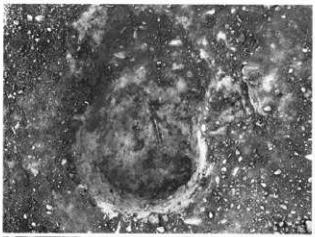
中世水田址
（SL 1）

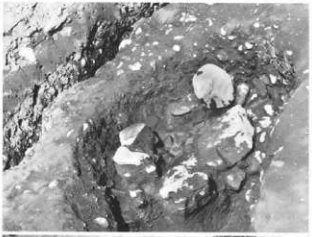
左：SA 2
右：南部北半中央部
土坑群
(大日堂関連施設含む)

ST 1，SA 1

近世小ピット群
(南部南半西端部)

左：SK103
右：SK216

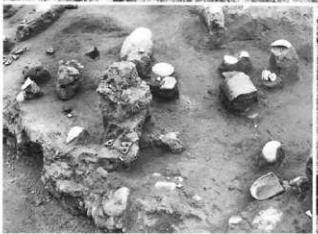


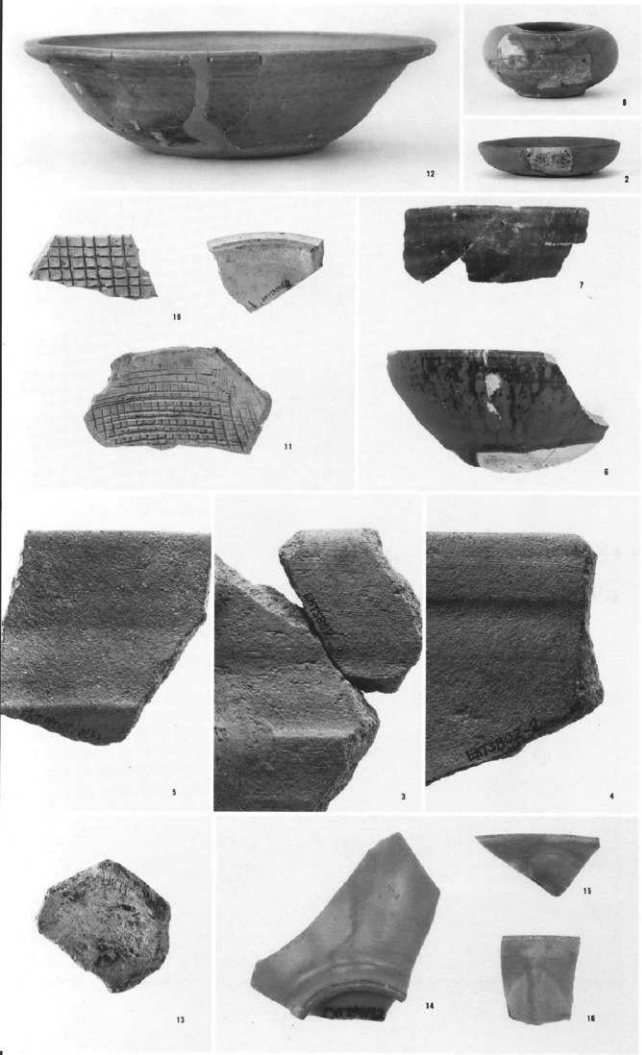


左：SK23
右：SK68，69

SK242

左：SK242遺物
出土状況
右：SK245遺物
出土状況





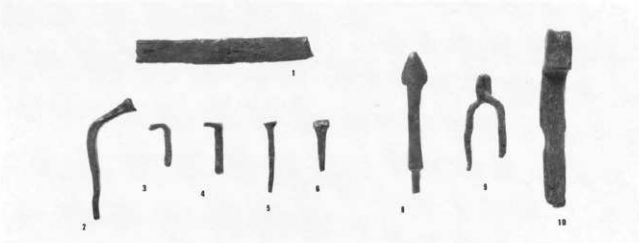

中世土器・陶磁器
12：SK59　折縁深皿
8：SK235　茶入
2：SK234　土師器皿

10：SK232　卸皿
9：SK106　卸皿
11：遺構外　卸皿
7：遺構外 天目茶碗
6：SK231-232
天目茶碗

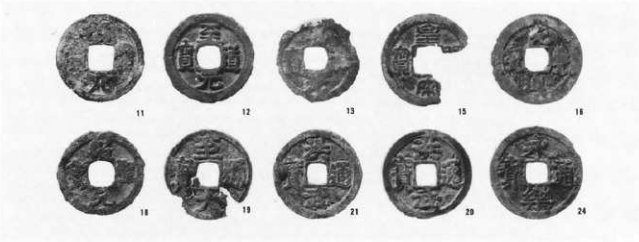
5：遺構外　内耳鍋
3：SK232　内耳鍋
4：SK232・241
内耳鍋

13：遺構外　須恵質
擂鉢
14：SK113　青磁碗
15：遺構外　青磁碗
16：SK31　青磁碗
14～16（1：1）

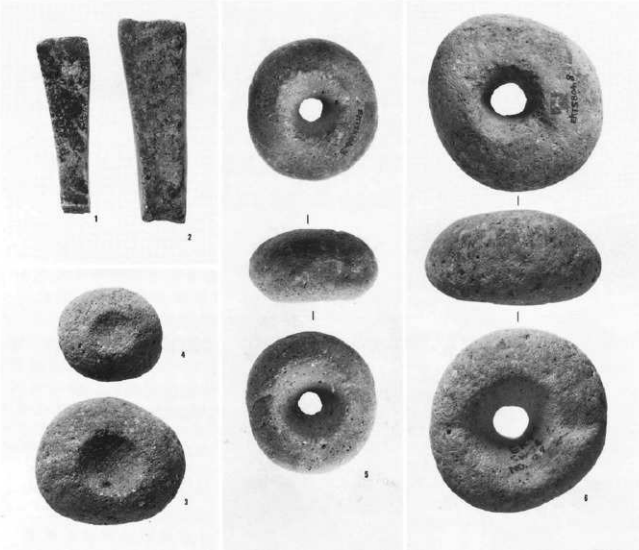
中世金属製品
1～10鉄製品

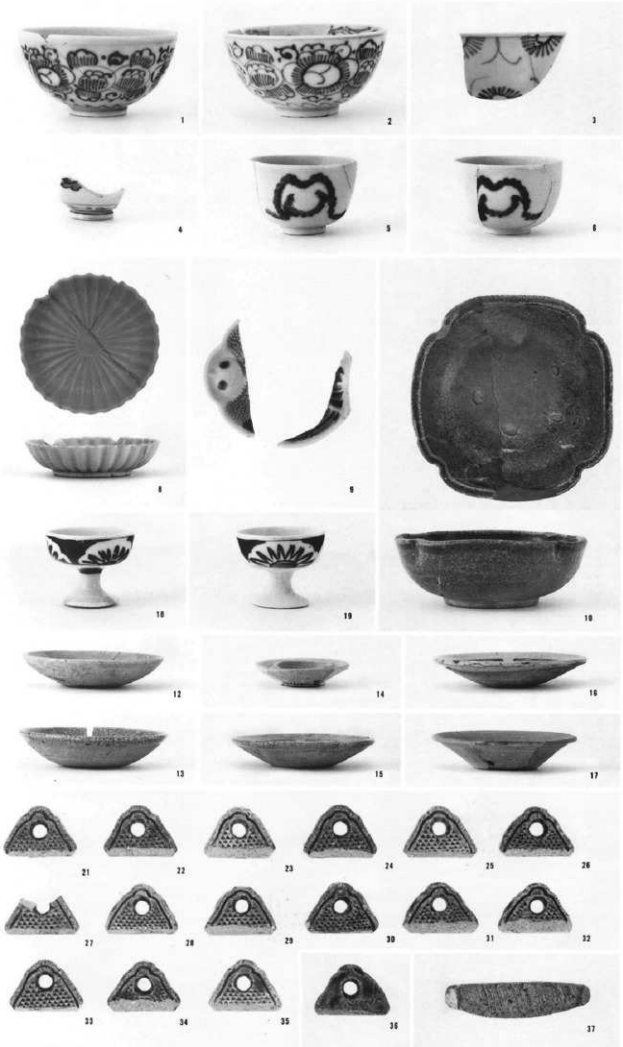


11～24銅製品
(1：1)



中世石製品
1・2 (1：2)
3～6 (1：4)






近世土器・陶磁器
SK242出土遺物
1～3：碗

4：杯
5・6：茶碗

8：菊皿
9：皿
10：鉢
18・19：仏飯具

12～17：燈火具

21～37：土製品
36は30の裏面
37は22の底面

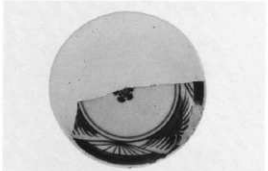
18・19（1：2）
37（1：1）

近世土器・
陶磁器
SK245出土遺物

36：碗
37：茶碗
40・41：皿
44～49：燈火具
52：火鉢
56・57：土瓶
59～61：土鍋

36

37


40

41

44

46

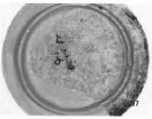
47

48

49

52

57



57

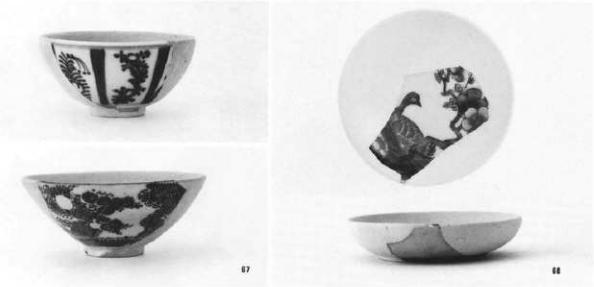
56

59

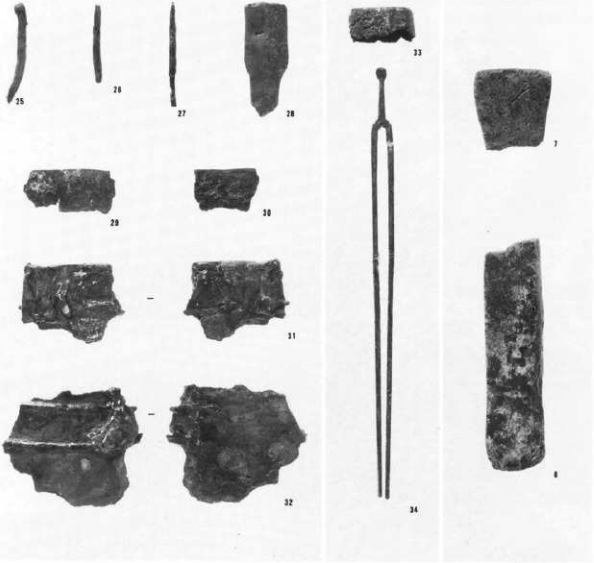
60

61

62：SK71　油壺
69～72：遺構外　燈俱




66：NR 1　碗
67：遺構外　碗
68：遺構外　皿




左：近世鉄製品
中：近世及び
　　遺構外銅製品
　　（2：3）
右：近世石製品